

EMA CASTLE SITE

# 江馬氏城館跡 II

—下館跡門前地区と庭園の調査—

神岡町教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

1996年3月



卷首図版1 調査地域航空写真（上が北、1995年撮影）



卷首図版2 圓池滝口付近発掘後写真（北西から）

EMA CASTLE SITE  
**江馬氏城館跡 II**

—下館跡門前地区と庭園の調査—

神岡町教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

1996年3月

## 序

岐阜県の北玄間に位置する神岡町は、今、かつての鉱山町のイメージから地下空間利用による壮大な宇宙の謎に挑む「宇宙から星の便りのとどく町」に、また昨年大きな薬研堀がほぼ全面発掘され注目を集めた江馬氏下館跡の調査による「戦国のロマンあふれる町」に生まれ変わろうとしています。宇宙科学の最先端と中世の史跡発掘はロマンを求める町起こしの起爆剤として大きな価値を持つものです。

昨年の館の三方を取り囲む堀の調査に続き、今年度の調査では館正面にあたる西堀の館外側（門前地区）約1,200m<sup>2</sup>と、館内部の庭園跡園池のトレンチ調査（園池地区）約140m<sup>2</sup>の調査を行いました。

門前地区では多くの柱穴が検出され、掘立柱建物や柵列が建ち並ぶことが確認されました。西堀外側の門前で館に直接関係する施設・建物が確認されたことから、過去のトレンチ調査で柱穴・土坑が確認されている南・北堀の外側にも同様の建物等の広がりが予想され、今後の調査が一層楽しみなものになりました。また建物には馬屋と考えられるものがあり、高原郷のみならず北飛驒を馬で駆けめぐったであろう江馬氏等の中世地方豪族の勇姿を彷彿とさせます。

園池は館を囲む三方の堀が掘られたのとほぼ同時期に構築されていたようです。また、今年度の調査では後世の攪乱を受けていない景石の確認も行われ、遺跡の整備公園化に向けての成果も上がりつつあります。

このような江馬氏城館跡の整備に向けての発掘調査が、地元の皆様のご理解を頂き、文化庁・岐阜県教育委員会・富山大学考古学研究室をはじめ関連する各種専門分野諸機関の皆様のご指導・ご尽力を賜りつつ、着実に進展することはまことに心強く、喜ばしい限りです。

おわりに、発掘調査とまとめの報告書作成にご尽力頂いた関係の皆様、また一連の作業を銳意行って頂きました富山大学考古学研究室に深甚の感謝とお礼を申し上げます。また更に今後の史跡整備にお力添えを賜りますようお願い致します。

平成8年3月

神岡町教育長 堀本 昌義

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県神岡町教育委員会が平成7年度に国庫補助事業として実施した神岡町人字殿所在国指定史跡江馬氏城館跡下館跡発掘調査報告書である。
- 2 調査に際しては、文化庁記念物課、岐阜県教育委員会文化課、および江馬氏城館跡発掘調査整備委員会の指導協力を得て、神岡町が富山大学人文学部考古学研究室（代表：宇野隆夫教授）に委託して調査を実施した。
- 3 遺物の復原・実測、図面の整理・製図は調査参加者全員が協力して行った。
- 4 本文は宇野隆夫（富山大学人文学部教授）、中田書矢、芳賀真理子、石井淳平、井手口恵美、海道雅子、工藤直子、小林香織、田中慎太郎、田中幸生、中島義人、中谷正和、半井晶子、藤田良子、古屋聰洋、松木茂、宮崎順一郎、向井裕知、本村徹、山崎雅恵（富山大学人文学部考古学研究室学生）、大平愛子（神岡町教育委員会学芸員）が分担して執筆し、宇野が記述内容の統一をはかった。また江馬氏の文献的考察について小島道裕氏（国立歴史民俗博物館歴史研究部助教授）、考古地磁気年代測定について廣岡公夫氏（富山大学理学部教授）、遺跡探査について酒井英男氏（富山大学理学部助教授）、花粉分析について辻誠一郎氏（国立歴史民俗博物館助教授）、漆器塗膜分析について四柳嘉章氏（漆器文化財科学研究所所長）にお願いした。なお執筆分担は日次に記し、必要な場合は文末にも付した。編集は宇野隆夫と大平愛子が行った。
- 5 参考文献は本文末にまとめた。遺物番号は実測図と写真とを統一した。
- 6 地区割は、国土地標（X=35878.577, Y=13064.049）を原点として設定した。水準はT.P.である。
- 7 本書の作成に際して、坂井秀弥（文化庁記念物課）、石井進（国立歴史民俗博物館長）小野正敏（国立歴史民俗博物館考古研究部助教授）、大熊厚志（岐阜県教育委員会文化課主任）、都竹清隆（神岡町社会福祉協議会事務局長）、若田俊一（神岡町文化財審議会会長）をはじめとする方々からご協力および貴重なご教示を得た。調査に際しては、渡辺哲男（大字殿区長）、潤口英夫（江馬遺跡保存会長）、堀進、田中幸一、吉中公男、川上定義、沖野好夫、宮前稔、保木薫、清水邦宏、川上真人、新家康孝、新家久雄、中田康孝、沖野寛、岩垣達藏、伊勢米蔵（殿地区地権者）をはじめとする地元の方々にご協力戴いた。神岡鉱業株式会社から給水について便宜を計って戴いた。記して厚く感謝申し上げる。
- 8 出土遺物・記録書類は、神岡町教育委員会で保管・公開している。

## 目 次

	頁
<b>第1章 調査の概要</b>	1
1 研究に至る経緯と目的	大平愛子 1
2 下館跡の現状	大平愛子 3
3 調査の経過と調査組織	石井淳平 3
<b>第2章 遺跡の立地と歴史的環境</b>	7
1 遺跡の立地	7
2 歴史的環境	11
3 中世の街道と高原郷・江馬氏	13
4 周辺の属城跡	16
<b>第3章 発掘調査の成果</b>	18
1 調査前の知見	大平愛子 18
2 調査の方法	石井淳平 20
3 門前地区の調査成果	22
(a) 居位	田中慎太郎・宮崎順一郎 22
(b) 遺構	海道雅子・工藤直了・小林香織・中谷正和・藤田良子 古屋聰洋・中島義人・田中慎太郎・宮崎順一郎 22
(c) 遺物	井手口恵美・田中幸生・本村徹・山崎雅恵 32
(d) 小結	宇野隆夫・大平愛子 37
4 園池地区の調査成果	38
(a) 池	向井裕知・芳賀万里子 39
(b) 関連施設	芳賀万里子 45
(c) 遺物	平井晶子 46
(d) 小結	中田書矢・宇野隆夫・大平愛子 49
<b>第4章 考察</b>	52
1 門前地区	52
(a) 遺構配置の変遷	田中慎太郎・古屋聰洋・中田書矢 52
(b) 建物	中谷正和・海道雅子 58
(c) 井戸	中島義人 64

2 園池地区 .....	69
(a) 石材の利用 .....	松本 茂 ..... 69
(b) 武家館の庭園遺構 .....	大平愛子 ..... 74
3 遺物の考察 .....	中田喜矢 ..... 86
4 江馬氏下館と江馬氏—文献資料による考察— .....	小島道裕 ..... 96
5 結 語 .....	宇野隆夫・大平愛子 ..... 104
付章 自然科学的調査の成果 .....	109
1 江馬城館跡の焼土および池底堆積物の考古地磁気測定 広岡公夫・水上裕美・川浪英子 ..... 109	
2 江馬氏城館跡下館跡出土漆器の塗膜分析 .....	四柳嘉章 ..... 129
3 江馬氏下館遺跡における電磁気探査と放射温度計探査 酒井英男・上田純子・上坂麻子・宇野隆夫・田中保士 ..... 135	
4 江馬氏下館の園池堆積物から得られた古環境資料、木炭の樹種 辻誠一郎・藤根 久・吉川昌伸・村田泰輔 ..... 147	
参考文献 .....	158
別 表 .....	165
ENGLISH SUMMARY .....	187

## 図版目次

	関連頁
卷首図版 1 調査地域航空写真	1995年富山大学考古学研究室撮影 ..... 7 ~ 17
卷首図版 2 園池淹口付近発掘後写真(北西から)	宇野撮影 ..... 44
図版 1 調査地域航空写真(1993年撮影)	7 ~ 44
図版 2 調査地域空中写真	1995年富山大学考古学研究室撮影 ..... 22 ~ 32
図版 3 江馬氏下館跡	
1 神岡町遠景写真(北から)	18 ~ 20
2 調査地区遠景写真: 1978年度調査時(西から)	18 ~ 20
図版 4 調査地区周辺の地形と発掘区位図	
1 調査地区地形図	古屋製図 ..... 18 ~ 21
図版 5 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(1)	
1 門前地区発掘後全景写真(調査地区北部, 東南から) ..	宇野撮影 ..... 22 ~ 32
2 門前地区発掘後全景写真(調査地区中央部, 東から) ..	宇野撮影 ..... 22 ~ 32
図版 6 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(2)	
1 門前地区発掘後全景写真(調査地区南部, 東北から) ..	宇野撮影 ..... 22 ~ 32
2 園池地区発掘後全景写真(西から)	宇野撮影 ..... 38 ~ 46
図版 7 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(3)	
1 門前地区南部建物検出写真(西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
2 門前地区北部建物写真(東南から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
図版 8 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(4)	
1 門前地区中央部建物写真(東から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
2 門前地区南部建物写真(東北から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
図版 9 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(5)	
1 SP524半截断面写真(SB01, 西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
2 SP536半截断面写真(SB01, 西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
3 SP542半截断面写真(SB01, 南から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
4 SP575半截断面写真(SB01, 南から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
5 SP582半截断面写真(SB01, 西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
6 SP798半截断面写真(西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
7 SP155半截断面写真(西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27
8 SP157半截断面写真(西から)	宇野撮影 ..... 22 ~ 27

- 図版10 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(6)
- 1 SP169半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 2 SP843半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 3 SP322半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 4 SP419半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 5 SP420半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 6 SP427半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 7 SP457半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 8 SP463半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
- 図版11 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(7)
- 1 SP504半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 2 SP505半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 3 SP511半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 4 SP604半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 5 SP617半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 6 SP618半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 7 SP619半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
  - 8 SP640半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 22~27
- 図版12 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(8)
- 1 龜SX01検出写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 28~30
  - 2 龜SX01発掘後写真(北から) ..... 宇野撮影 ..... 28~30
- 図版13 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(9)
- 1 井戸半截断面写真 ..... 宇野撮影 ..... 27~28
- 図版14 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(10)
- 1 SK02半截断面写真(南西から) ..... 宇野撮影 ..... 30
  - 2 SK24半截断面写真(南から) ..... 宇野撮影 ..... 30
- 図版15 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(11)
- 1 SK59・SK60半截断面写真(南から) ..... 宇野撮影 ..... 31
  - 2 SK38半截断面写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 30
- 図版16 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構(12)
- 1 SK25半截断面写真(北から) ..... 宇野撮影 ..... 30
  - 2 SK77完掘状態写真(東から) ..... 宇野撮影 ..... 31

- 図版17 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構03
- 1 門前地区南壁層位写真(東寄り、北から) ..... 宇野撮影 ..... 22
  - 2 門前地区西壁層位写真(南寄り、東から) ..... 宇野撮影 ..... 22
- 図版18 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構04
- 1 門前地区西壁層位写真(中央部、東から) ..... 宇野撮影 ..... 22
  - 2 門前地区西壁層位写真(北寄り、東から) ..... 宇野撮影 ..... 22
- 図版19 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構05
- 1 門前地区北壁層位写真(西寄り、南から) ..... 宇野撮影 ..... 22
  - 2 門前地区北壁層位写真(東寄り、南から) ..... 宇野撮影 ..... 22
- 図版20 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構06
- 1 門前地区西壁層位写真(北寄り、東から) ..... 宇野撮影 ..... 22
  - 2 門前地区西壁層位写真(南寄り、東から) ..... 宇野撮影 ..... 22
- 図版21 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構07
- 1 園池地区E区全景写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区E区淹口写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版22 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構08
- 1 園池地区E区汀線写真(北西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区E区汀線羽口出土状態写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版23 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構09
- 1 園池地区E区景石写真(東寄り、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区E区景石写真(中央部、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版24 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構10
- 1 園池地区E区景石写真(西寄り、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区E区景石写真(東寄り、南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版25 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構11
- 1 園池地区E区景石写真(中央部、南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区E区景石写真(西寄り、南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版26 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構12
- 1 園池地区E区-6T北壁層位写真(東寄り、南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区E区-6T北壁層位写真(西寄り、南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版27 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構13
- 1 園池地区W区全景写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区W区中島写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46

- 図版28 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構24
- 1 園池地区W区中島写真(東から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区W区汀線写真(東から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版29 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構25
- 1 園池地区W区根石写真(南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区W区-1T南壁層位写真(中島部分、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版30 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構26
- 1 園池地区W区-1T南壁層位写真(東寄り、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区W区-1T南壁層位写真(中央部、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版31 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構27
- 1 園池地区W区-1T南壁層位写真(池肩部、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区W区-1T南壁層位写真(西寄り、北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版32 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構28
- 1 園池地区N区全景写真(北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区N区中島写真(北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版33 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構29
- 1 園池地区N区汀線写真(南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区N区根石写真(西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版34 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構30
- 1 園池地区N区東壁層位写真(汀線、西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区N区-2T東壁層位写真(南寄り、西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版35 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構31
- 1 園池地区S区全景写真(北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区S区全景写真(南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版36 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構32
- 1 園池地区S区汀線写真(北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区S区-4T東壁層位写真(北寄り、西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版37 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構33
- 1 園池地区S区-4T東壁層位・景石掘形写真(中央部、西から) 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区S区-5T東壁層位写真(汀線、西から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版38 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構34
- 1 園池地区S区-5T西壁層位写真(土塁南寄り部分、東から) 宇野撮影 ..... 38~46
  - 2 園池地区S区-5T西壁層位写真(土塁北寄り部分、東から) 宇野撮影 ..... 38~46

- 図版39 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構39  
1 園池地区拡張区-8T西壁層位写真(東南から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46  
2 園池地区拡張区-8T西壁層位写真(東北から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版40 江馬氏下館跡1995年度調査地区遺構39  
1 園池地区拡張区-7T西壁層位写真(東から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46  
2 園池地区拡張区石縞写真(東から) ..... 宇野撮影 ..... 38~46
- 図版41 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(1)  
1 門前地区遺構平面図 ..... 中谷製図 ..... 22~32
- 図版42 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(2)  
1 北壁土層断面図 ..... 田中慎製図 ..... 22  
2 南壁土層断面図 ..... 田中慎製図 ..... 22
- 図版43 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(3)  
1 東壁土層断面図 ..... 宮崎製図 ..... 22
- 図版44 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(4)  
1 西壁土層断面図 ..... 宮崎製図 ..... 22
- 図版45 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(5)  
1 建物・横列実測図(1) ..... 上藤製図 ..... 22~27
- 図版46 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(6)  
1 建物・横列実測図(2) ..... 小林製図 ..... 22~27
- 図版47 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(7)  
1 建物・横列実測図(3) ..... 海道製図 ..... 22~27
- 図版48 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(8)  
1 建物・横列実測図(4) ..... 藤田製図 ..... 22~27
- 図版49 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(9)  
1 井戸・土坑実測図(1) ..... 山崎製図 ..... 27~31
- 図版50 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(10)  
1 井戸・土坑実測図(2) ..... 中島製図 ..... 27~31
- 図版51 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(11)  
1 井戸・土坑実測図(3) ..... 中島製図 ..... 27~31
- 図版52 江馬氏下館跡1995年度調査門前地区遺構実測図(12)  
1 井戸・土坑実測図(4) ..... 中島製図 ..... 27~31
- 図版53 江馬氏下館跡1995年度調査園池地区遺構実測図(1)  
1 園池地区遺構平面図 ..... 松本製図 ..... 38~46

- 図版54 江馬氏下館跡1995年度調査園池地区遺構実測図(2)  
1 園池地区土層断面図(1) ..... 松木製図 38~46
- 図版55 江馬氏下館跡1995年度調査園池地区遺構実測図(3)  
1 園池地区土層断面図(2) ..... 向井製図 38~46
- 図版56 江馬氏下館跡1995年度調査園池地区遺構実測図(4)  
1 E区東部(濠口)平面図・立面図 ..... 芳賀製図 38~46
- 図版57 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物実測図(1) ..... 井手口製図 32~37
- 図版58 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物実測図(2) ..... 田中幸製図 32~37
- 図版59 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物実測図(3) ..... 本村製図 32~37
- 図版60 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物実測図(4) ..... 山崎製図 32~37
- 図版61 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物実測図(5) ..... 平井製図 32~37
- 図版62 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物写真(1) ..... 宇野撮影 32~37
- 図版63 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物写真(2) ..... 宇野撮影 32~37
- 図版64 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物写真(3) ..... 宇野撮影 32~37
- 図版65 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物写真(4) ..... 宇野撮影 32~37
- 図版66 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物写真(5) ..... 宇野撮影 32~37
- 図版67 江馬氏下館跡1995年度調査出土遺物写真(6) ..... 宇野撮影 46~48

## 別 表

	頁
別表1 門前地区建物計測表	海道作成 ..... 165
別表2 門前地区構列計測表	海道作成 ..... 165
別表3 門前地区井戸計測表	藤田作成 ..... 166
別表4 門前地区窓計測表	工藤作成 ..... 167
別表5 門前地区土塙計測表	芳賀・山崎作成 ..... 167
別表6 門前地区不明造構計測表	小林作成 ..... 170
別表7 門前地区溝計測表	小林作成 ..... 170
別表8 門前地区柱穴計測表	田中幸・向井作成 ..... 171
別表9 園池地区地表面上の主要な景石石材観察表	松本作成 ..... 181
別表10 園池地区トレンチ内検出の景石・礫・石材観察表	松本作成 ..... 181
別表11 門前地区出土遺物計測表	田中幸作成 ..... 184
別表12 園池地区出土遺物計測表	田中幸作成 ..... 186

## 挿図目次

	頁
第1図 調査参加者写真(門前地区、東から)	5
第2図 門前地区建物(左:馬屋SB04、右:総柱建物SB01、南東から)	5
第3図 富山大学理学部チームによる考古地磁気資料採取風景(門前地区、北東から)	6
第4図 江馬氏下館跡と周辺の属城跡・遺跡	大平作成 ..... 8
第5図 江馬氏下館跡付近絵図(江戸末~明治初年)	10
第6図 江馬氏下館跡付近絵図トレス図(江戸末~明治初年)	10
第7図 江馬氏下館跡付近地籍図(明治21年)	11
第8図 中・近世の吉城郡の交通路	大平作成 ..... 15
第9図 門前地区SX01の遺物出土状況	山崎作成 ..... 29
第10図 園池地区的トレンチ設定図	平井作成 ..... 38
第11図 園池地区的土層堆積図	平井作成 ..... 40
第12図 園池地区的景石配置図(1)	芳賀作成 ..... 42
第13図 園池地区的景石配置図(2)	平井作成 ..... 43

第14図	江馬氏庭園1978年度調査出土遺物実測図	平井作成	50
第15図	門前地区出土遺物散布図	大平作成	53
第16図	門前地区建物主軸方位図	藤田作成	54
第17図	堀主軸方位図	藤田作成	54
第18図	遺構変遷図(江馬氏下館Ⅰ期)	小林作成	55
第19図	遺構変遷図(江馬氏下館ⅡA期)	小林作成	56
第20図	遺構変遷図(江馬氏下館ⅡB期)	小林作成	57
第21図	建物・横列の柱穴法量散布図(第1段階)	海道作成	59
第22図	建物・横列の柱穴法量散布図(第2a段階)	海道作成	60
第23図	建物・横列の柱穴法量散布図(第2b段階)	海道作成	61
第24図	門前地区建物段階別面積	中谷作成	62
第25図	門前地区建物段階別占地率	中谷作成	62
第26図	館内部建物段階別面積	中谷作成	63
第27図	館内部建物段階別占地率	中谷作成	63
第28図	井戸分類図	中島作成	65
第29図	井戸法量散布図(1)	工藤作成	66
第30図	井戸法量散布図(2)	小林作成	66
第31図	井戸配置図	山崎作成	68
第32図	岩石別三軸平均径	松本作成	71
第33図	トレンチ内検出の河原転石(10cm以上の個体)	松本作成	71
第34図	トレンチ内検出の河原転石(10cm未満の個体)	松本作成	71
第35図	船津花崗岩大きさ散布図(10cm以上の個体)	松本作成	71
第36図	トレンチ内検出の景石・礫石材別個体数比(10cm未満の個体)	松本作成	71
第37図	園池地区の河原転石(10cm以上の個体)位置図(1)	松本作成	72
第38図	園池地区の河原転石(10cm以上の個体)位置図(2)	平井作成	73
第39図	中世武家館に伴う庭園跡の位置	大平作成	74
第40図	中世武家館に伴う庭園集成(1)	本村作成	75
第41図	中世武家館に伴う庭園集成(2)	本村作成	76
第42図	中世武家館に伴う庭園集成(3)	本村作成	77
第43図	中世武家館に伴う庭園集成(4)	大平作成	78
第44図	中世武家館に伴う庭園集成(5)	大平作成	79
第45図	中世武家館に伴う庭園集成(6)	大平作成	80
第46図	園池規模の比較図	大平作成	82

第47図 園池面積の比較図	大平作成	83
第48図 園池占地指數の比較図	大平作成	83
第49図 地区ブロック毎の種類別食器組成	井出田作成	91
第50図 地区ブロック毎の用途別食器組成	工藤作成	91
第51図 中世遺物の出土散布図(破片数)	中谷作成	93
第52図 上器皿の出土散布図(破片数)	中谷作成	94
第53図 地区ブロック別の出土頻度(1 m <sup>2</sup> あたり)	中田作成	95

## 表 目 次

		頁
第1表 門前地区出土食器の種類器種別組成表	中田作成	32
第2表 門前地区SK73出土食器の種類器種別組成表	田中幸作成	35
第3表 園池地区出土食器の種類器種別組成表	平井作成	48
第4表 井戸計測表	山崎作成	68
第5表 中世武家館に伴う庭園跡集成一覧表	大平作成	81
第6表 江馬氏下館跡出土食器の種類器種別組成表(堀内)	中田作成	88
第7表 江馬氏下館跡出土食器の種類器種別組成表(堀外)	中田作成	89
第8表 江馬氏下館跡出土食器の用途種類別組成表(堀内)	中田作成	90
第9表 江馬氏下館跡出土食器の用途種類別組成表(堀外)	中田作成	90
第10表 調査区毎の出土量一覧表	中田作成	95

## 付 図

付図1 江馬氏下館跡遺構平面図 石井・中谷製図

# 第1章 調査の概要

## 1 調査に至る経緯と目的

岐阜県の北部、旧飛騨国に位置する神岡町を流れる高原川と山田川の川筋には、中世におけるこの地域の豪族が築いたと伝えるいくつかの城跡が点在している。中でも高原川右岸に広がる殿段丘上の神岡町大字殿地区は、古文書・古絵図等に「江馬氏之下館」と記していること、特に字土井ノ内には「五ヶ石（御花石）」と呼ぶ5つの大きな石が残っていることから、地元では古くから、中世高原郷を舞台として活躍した有力武家である江馬氏の館・庭園跡であると言い伝えてきた。

神岡町教育委員会は1973～1977年にかけて、この殿地区一帯において土地改良（基盤整備・客土）工事に先立つ試掘調査を実施した。その結果、これらの伝承を裏付けるかのように庭園跡、南・西の堀跡や建物跡の一部が出土し、特に庭園跡は、故森 薩庭園文化研究所所長により室町時代の庭園として貴重なものであるという評価を受けた。その結果、本遺跡の庭園は1977年に岐阜県史跡「江馬館庭園」の指定を受けた。

1978年には国史跡指定を前提とした国の埋蔵文化財緊急発掘調査補助事業として、遺構規模・館跡規模の四方向からの確認を目的として本格的な調査を実施した。これらの調査によって、当遺跡は中世武家居館跡として全国的に見ても非常に保存状態のよい遺跡であることが明らかとなり、1980年、遺存状態の良い関連の6つの城跡とあわせて「江馬氏城館跡」として国の史跡指定を受けた。

1993年、神岡町教育委員会は江馬氏城館跡を国民共有の文化遺産であるという認識のもとに、保護・保存は言うまでもなく、その歴史的意義をさらに追及するための発掘調査を計画した。さらに遺跡を広く一般に公開・活用することも大切なことであると考え、発掘成果に基づいた整備事業も行うこととした。

この整備事業では、史跡の公有化及び保護・保存を目的に、地元住民の意志を尊重し、さらに科学的な調査研究結果に基づき、将来的には歴史公園としての整備復元を目指している。

これらの事業は、神岡町教育委員会が事務を担当し、その基本構想を事業計画に基づいて実施しつつある。またその過程における発掘調査の指導や助言、整備方法の提言については、それぞれの学識経験者で構成した発掘調査整備委員会・文化庁・岐阜県教育委員会から受けている。発掘調査整備委員会の構成は、下記の通りである。

江馬氏城館跡発掘調査整備委員会

委員長：牛川喜幸（考古学・庭園）	長岡科学技術大学教授
委 員：加藤允彦（造 園）	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター保存工学研究室長
委 員：吉岡泰英（建 美）	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 主任文化財調査員
委 員：宇野隆夫（考 古 学）	富山大学人文学部教授
委 員：洞口英夫（地 元）	江馬遺跡保存会長

発掘調査整備委員会は、下記の実施計画を作成した。

〈基本計画〉

- ・史跡として活用でき、歴史学習が身近にできる環境づくり
- ・親しみやすく休息できる散策空間の整備
- ・文化遺産を保護・保全していくための整備を行う

以上の計画のために以下の項目について今後検討していく。

- (1) 館跡は、史跡として活用できるので、調査結果に基づいて整備復元する。
- (2) 江馬氏城館跡全体を関連づけた施設を整備する。
- (3) 出土遺物を整理し展示するための施設を整備する。
- (4) 歴史学習に親しみやすくするために、散策、休憩の場としての空間を整備する。

発掘調査は神岡町教育委員会が主体となり、発掘調査整備委員会の指導に基づき遺跡の保護・保全に必要な調査や整備に必要な資料を得るために調査を、1994年度から計画的に実施している。

1994年度は富山大学人文学部考古学研究室に委託し、館の三方を囲む堀跡のはば全面の発掘調査を行った。

1995年度は富山大学人文学部考古学研究室に委託し、館の正面と考えられる西堀の外側地区の様相を明らかにするための門前地区の全面調査と、園池の構築年代を明らかにするための園池地区的トレンチ調査を行った。

## 2 下館跡の現状

下館跡保存管理計画では全体を遺跡保存地区として公有化を計画している。面積はおよそ26,000m<sup>2</sup>であり、そのうち約4,000m<sup>2</sup>は公有化を終えている。残り22,000m<sup>2</sup>のうち、道路水路以外の約19,000m<sup>2</sup>はすべて民有地であり、15人の地権者が主に農地（大半は水田）・宅地として利用している。指定地内には4戸の住宅が建っているほか、倉庫など付属建築物や庭木などの樹木がある。指定地内の東側には、史跡を南北に町道が、中央部には同方向に農道が走っている。

なお、指定地内の住宅1戸は95年度国庫補助事業として、住宅の指定地外への移転と土地の買上げを実施している。

（大平愛子）

## 3 調査の経過と調査組織

1995年度、神岡町教育委員会は、国指定史跡江馬氏城館跡整備の史跡整備を目的とした発掘調査を、昨年度に引き継いで富山大学人文学部考古学研究室に委託して実施した。その調査の経過と調査組織は下記の通りである。

7月4日、富山大学にて発掘調査の打ち合せを行い、日程、調査方法等の確認を行った。

7月10日、発掘器材の準備を行った。

7月19日、発掘器材を現地へ搬入し、門前地区、園池地区の2個所の調査区を設けて、地区割を設定し、表土掘削を開始した。門前地区の表土掘削は重機を使用し、重機による掘削が終了した個所から人力で掘り下げ、遺構面の検出に努めた。園池地区は園池の中心を通るようにL字形のトレンチを2本組合わせて、十字形に設定し、人力で遺構面の検出を行った。

7月26日、門前地区、園池地区とともに遺構面検出がほぼ終了した。そして、門前地区では遺構概略図の作成と遺構の半裁を開始した。園池地区では池の汀線、滝口、中島等を確認し、その後はサブトレンチを設定し、断ち割り調査へと移行した。同日、富山大学理学部助教授酒井英男氏を中心とするチームが、遺跡探査また遺跡の解釈情報を得るために、電気探査・磁気探査・光学的温度測定を実施した。

8月3日、国立歴史民俗博物館助教授小島道裕氏来訪。

8月4日、現地で調査成果の記者発表を行った。国立歴史民俗博物館長石井進氏来訪。

8月6日、午後、現地説明会を行った。

8月7日、遺構の完掘が終了し、高所作業車による全景写真撮影およびバルーンによる空中写真撮影を行った。撮影終了後から平面図の作成を開始した。同日、国立歴史民俗博物館助教授小野正敏氏来訪。同日、国立歴史民俗博物館助教授辻誠一朗氏が植物遺体分析

のため、土壤サンプルを採取した。

8月9日、門前地区の平面図作成終了。富山大学理学部教授広岡公夫氏が竈と圍池堆積物の考古地磁気測定のため、測定資料を採取した。

8月10日、文化庁坂井秀弥氏、奈良国立文化財研究所加藤允彦氏来訪。現地視察後、岐阜県教育委員会大熊厚志氏、富山大学人文学部教授宇野隆夫氏が加わり、発掘調査整備小委員会を行った。この日に全ての発掘・現場記録作業を終了し、埋め戻し作業を開始した。同夜、調査終了を祝して、神岡町教育委員会主催による祝賀会を行った。

8月11日、器材の撤出を行い、現場での調査作業の全日程を終了した。 (石井淳平)

#### 江馬氏下館跡1995年度調査組織

調査員：宇野 隆夫（富山大学人文学部教授）

　　：大平 愛子（神岡町教育委員会学芸員）

調査補助員：新本 真之、長谷川 幸志（富山大学大学院人文科学研究科学生）

調査作業員：中田 書欠、石内 詩保、櫻石 純子、岩崎 誉尋、内田亞紀子、

　　大川 進、大平奈央子、景山 和也、近藤 美紀、勾坂 友秋、

　　塙田 明弘、滝 寿美代、坪田 聰子、古沢亜希子、堀内 大介、

　　三林 鍊一、米出 敏子、芳賀万里子、石井 淳平、井手口忠美、

　　海道 雅子、工藤 直子、小林 香織、田中慎太郎、田中 幸生、

　　中島 義人、中谷 正和、平井 晶子、藤田 良子、古屋 聰洋、

　　松本 茂、宮崎順一郎、向井 裕知、本村 徹、山崎 雅恵、

　　浅野 良治、小野 基、金成 淳一、小島あづさ、清水あゆみ、

　　宿野 隆史、鈴木 悟嗣、鈴木 由紀、滝沢 国、戸田真美子、

　　柄谷 朋子、野水 晃子、春名 理史、深田 亜紀、丸山 浩、

　　三浦 英俊  
　　（富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：小松 博幸、岡田 一広、小幡 鮎子、梶田ア友美、後藤 普、

　　酒井 瞳、佐々木健二、佐藤 健、須田 雅恵、高志こころ、

　　高安 洋治、滝川 邦彦、竹内 良子、塙田 和也、戸簾 暢広、

　　中島 和哉、中野 秀昭、西村 優子、早川さやか、三浦 知徳、

　　和田千絵子  
　　（富山大学人文学部学生）

事務局：堀本 吕義 神岡町教育委員会教育長

　　村井 充佳 神岡町教育委員会教育課長

　　古宿 稔 神岡町教育委員会社会教育係長

　　大平 愛子 神岡町教育委員会学芸員

調査の概要



第1図 調査参加者写真（門前地区、東から）



第2図 門前地区建物（左：馬屋SB04、右：総柱建物SB01、南東から）



第3図 富山大学理学部チームによる考古地磁気資料採取風景（門前地区、北東から）

## 第2章 遺跡の立地と歴史的環境

### 1 遺跡の立地

#### (a) 神岡町の地勢と遺跡立地 (図版1・3, 第4図)

神岡町は岐阜県北部、旧飛騨国吉城郡高原郷に位置する。その人口は約13,000人、面積は312.34km<sup>2</sup>であり、うち耕地面積8.72km<sup>2</sup>、宅地面積2.32km<sup>2</sup>、山林面積221.52km<sup>2</sup>である。その広い土地のほとんどは山地・森林であり、標高差が700mもある複雑な地勢である。この中において、町や集落は山々の間を流れる谷や川に沿って立地し、神岡町市街地は河川の浸食により幾階層かに分かれた河岸段丘状の土地に成立している。この市街地中心部の標高は約400mを測る。この地域は、1950年(昭和25年)に舟津町・阿曾布村・袖川村が合併し、町制を施行したものであり、江馬氏下館跡の所在する殿地区は、古くは阿曾布村に属していた。

江馬氏下館跡は高原川中流域にある殿段丘の中央部、標高約455mに立地する。殿段丘は北アルプス連峰に源を発する小谷および蒲田川、双六川が合流し山峠を北流して日本海に注ぐ高原川(神通川水系右支)と、神岡町東北端に位置する北アルプスの支脈二十五山(標高1,327m)および、天蓋山(標高1,527m)付近に源を発する和佐保谷の浸食により形成された河岸段丘である。

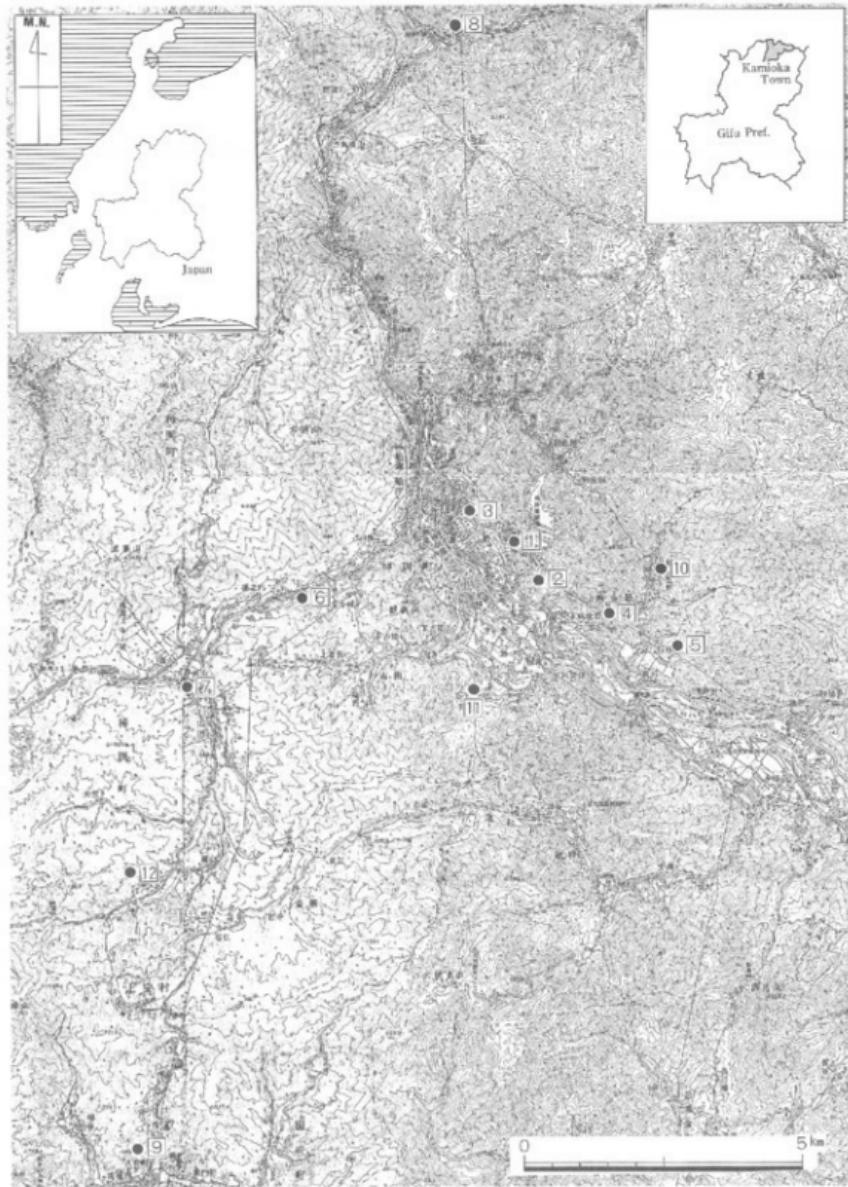
遺跡の背後にあたる東側は二十五山から南に向かって伸びる支脈が屏風のように段丘をさえぎり、尾根の南端頂および稜線延長には「高原源訪城」がある。現在は二十五山に発電所の導水管が通ったためその水量は減ってしまったが、かつては山麓裾部に豊富な湧水や谷水があり、この地域への水源となっていたようである。

遺跡西側は西堀跡から約55m西の付近において、旧高原川が南から北西に蛇行し段丘を分断して形成した標高差約7mの崖が自然の要害となっている。その対岸の段丘を向野と呼び、現在は神岡鉱業の社宅街・一般住宅地となっている。

遺跡南側は、和佐保谷が二十五山から延びる支脈を浸食・切断して形成した低位段丘が南約1kmの付近まで広がっている。この地区はかつては耕地であったが、現在は工業団地や運動公園となっている。

北側の段丘野尻には東町城が位置している。この遺跡は『飛州史』に「江馬之御館」と記すものであり、現在の神岡城である。この館跡北側は段丘上で最大の広がりをもち、農耕地として利用していたが、第2次大戦後、神岡鉱業の社宅拡張や都市計画による住宅地化、学校建設等によって市街地化している。東町城から眺望できる最下位段丘上は江戸時

江馬氏館跡 II



1. 江馬氏下館跡 2. 高原謀訪城跡 3. 東町城跡 4. 洞城跡 5. 石神城跡 6. 寺林城跡 7. 歐元城跡  
8. 土城跡 9. 梶打城跡 10. 遊輪石神神社 11. 立石遺跡 12. 柏原古墳

8 第4図 江馬氏下館跡と周辺の属城跡・遺跡 (縮尺 1/100,000)

代、舟津町村として周辺農村の商業地として発展し、現在も市街地が広がっている。

また中世江馬氏が君臨したと伝えられる吉城郡高原郷（現在の神岡町・上宝村）の中心をなす集落は、いずれも高原川およびその支流に形成された段丘上に位置している。江馬氏は江馬氏下館跡の東側背後にある高原諫訪城を中心に、高原郷に東町城（「江馬之御館」）・洞城・石神城・寺林城・政元城・土城、荒城郷（現在の古川町）に梨打城、越中に中地山城など多くの支城を築き、支配地全体を要害として防備していたようである。

#### (b) 古絵図・古文書から見た下館跡の変遷（第5～7図）

殿地区に現存する土地に関する最も古い記録として元禄検地水帳（元禄7年、1694年）がある。しかしこれに付随するもしくは同時期の絵図がないため、水帳にあげている孫字名の正確な位置を知ることはできない。

第5図は江戸時代末～明治初年の江馬氏下館付近の絵図、第6図はそのトレース図である。これらの図を見ると「土井ノ内」、「土井ノ上」、「田ノ下」、「ほりはた」などの地名の地区を畠として利用していることから、周辺の田よりもやや高い地形であったことが予想される。明治初年頃は、このように僅かではあるがかつての館の地形・施設の名残を留めている。

館跡内郭部に当たるであろう字「土井之内」には庭園遺構が遺存していたと推定できるが、江戸時代末期の文化年間（1804～1817）に、江馬氏と関係の深い臨済宗瑞岸寺12世陽堂泰旭がこの地区を再開発した。そして文化末年に再建した瑞岸寺本堂の境内拡張に際して、その石垣として庭園の景石を利用したようである。

第7図は明治21年の地籍図であるが、これをみると明治初年には畠があった字中通り一帯が、すべて水田になっていることがわかる。ここには掲載しなかったが、昭和初年頃に撮影した当地の写真をみると、田の畦畔にかつては池の景石であったであろう巨石を用いていることがわかる。

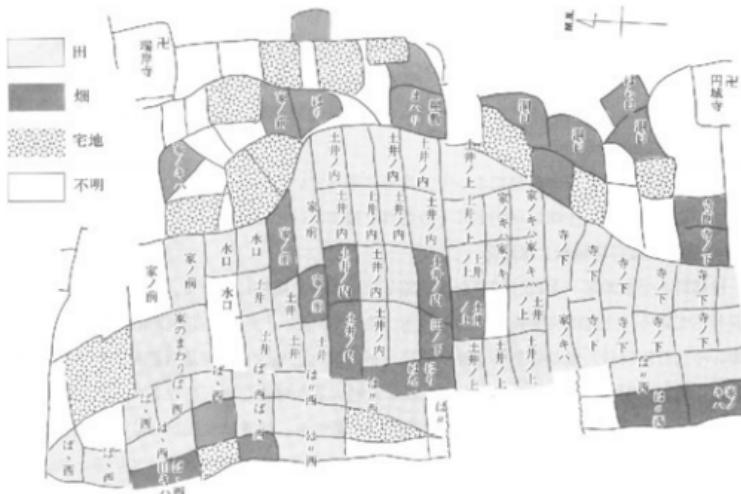
このように後世の耕作化等によって、地形に残っていたかつての館の痕跡は次第に失われつつあり、明治の中頃には字名にその名残を残すだけになったようである。

#### (c) 遺跡周辺の現地形と原地形

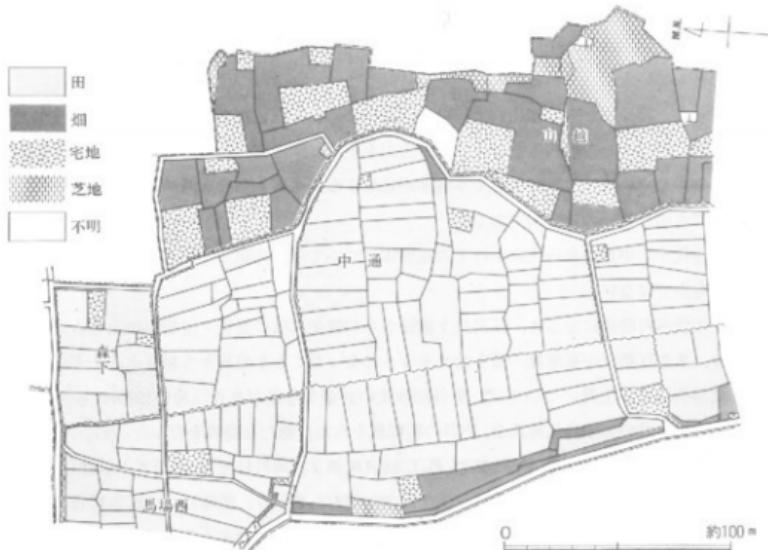
神岡町大字殿地区一帯は1972年から実施した土地改良事業によって、その地形が大きく変わっている。土地改良事業施行前の地形（原地形）は、「土地改良事業計画概要書」（昭和47年10月31日付、岐阜県知事平野三郎宛、神岡町営土地改良事業施行認可許可申請書）には、「旧来の圃場は極めて小さく、そのうえ起伏多き複雑な地形をなしている。地形は東西1/60・南北1/350の傾斜で、地質は洪積層に属する。地質は地表から0～30cmまでは茶褐色粘質土質腐食土壤、30～80cmまでは黒色泥質土壤で花崗岩礫が混っている。80cm以上は黄褐色礫層で径30cmの礫および玉石が混じっている。」としている。



第5図 江馬氏下館跡付近絵図（江戸末～明治初年）



第6図 江馬氏下館跡付近絵図トレース図（江戸末～明治初年、小島道裕氏原図を一部改変）



第7図 江馬氏下館跡付近地籍図（明治21年、小島道裕氏原図を一部改変）

このように中通り一帯は南北に細長く緩傾斜で広がり、東側山麓から河川敷跡までの幅は南北に比して狭く、傾斜が急な地形であった。そして土地改良事業の施行に伴い、山麓の起伏が多い高地を削り取り、その土砂によって段丘野尻の低地を埋めた。その結果、館跡西部の外郭部分は土砂の著しい移動がなされ原地形は失われた。また中通り一帯、江馬氏下館跡を南北に縦断している町道周辺の変貌は著しく、土地改良事業とあいまって埋立て、宅地化、工場敷地等の開発が進み、市街地近郊として様相を一新し、かつての地形とはその姿を大きく変えてきている。

## 2 歴史的環境（第4図）

高原川水系の河岸段丘上には古くから人々の営みがあったようである。石神・麻生野・殿・小笠・釜崎・朝浦・吉田など、高原川・吉田川によって形成された河岸段丘上や、山田など山田川沿いの河岸段丘上では縄文時代の土器・石器が出土している。また麻生野地区からは縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土し、また同地区的遊轡石神社は、縄文時代中期の硬玉製大珠をはじめとする石器類を保管している。石神地区からも縄文時代中期の赤色顔料付有孔鍔付土器や石器・石棒などが出土した。上小笠の立石遺跡は縄文後～晩

期のものであろう環状列石遺構であり、周辺から土器・石器なども出土している。遺跡の範囲やその変遷等、不明な点は多いものの、縄紋時代を通してこれらの河川沿いに人々が暮らしていたようである。

一方、高原郷からは弥生式土器の出土はほとんど確認されていない。

飛驒における古墳の確認例は国府・古川を中心とする古川盆地と、高山盆地の宮川水系に集中している。これに対して本遺跡が立地する高原川水系の高原郷では、山田川沿いの柏原古墳が唯一の確認例である。

古代から中世鎌倉時代にかけての高原郷については、確認できる遺跡や史料が少なく、明らかではない。

中世室町時代に至ると、江馬氏下館跡から13世紀以後の遺構・遺物が出土するようになり、また江馬氏が高原郷一帯を治めるようになったことを史料から知りえるようになる。江馬氏関連の史料については、葛谷鶴彦氏の詳細な考察があり（葛谷1970）、また本書第4章4において小島道裕氏が、史料の再解釈を含めた新たな提言を行った。特に小島氏は、江馬氏の出自について、伊豆国田方郡江馬庄（現伊豆長岡町付近）との関連を示唆している。当時、鎌倉幕府執権北条氏が伊豆国江馬庄を領有しており、彼等はこの所領にちなんで江馬（江間）を称していた。また現地を直接管理する在地の御家人としての江馬（江間）氏も存在していた。そして小島氏は、13世紀中頃にはすでにこの北条流または伊豆の江馬氏のいずれかの一族が飛驒に所領を得て高原郷に入り、南北朝の内乱を経て在地領主として成長していった可能性が高いことを指摘している。

高原郷の江馬氏が史料上に表われるのは14世紀後葉以後のことであり、「山科家文書」応安5年（1372年）の記録がその初見である（岐阜県教育委員会1969）。以下、葛谷・小島氏の研究にそって述べることとする。

「山科家文書」の記述には江馬但馬四郎の名があり、広瀬左近将監と共に飛驒国の江名子・松橋等の領家職を、守護の家人らの濫妨を停止して、道行するよう命じられている。永徳元年（1381年）7月2日の伊勢因幡（貞長）入道宛足利將軍家御教書案にも、江馬但馬四郎の名があり、領家職道行を命じられている。

一方、永徳3年（1983年）7月5日の佐々木大膳大夫（京極高次）宛足利將軍家御教書案には江馬能登三郎の名があるが、ここでは江馬能登三郎等の飛驒国江名子・松橋の領家職侵犯を停止させることを京極高次に命じている。

江馬但馬四郎、江馬能登三郎の出自、系譜共に不明であり、同一人物であるのか別人であるのか、また高原郷で伝えられる江馬氏と同族なのかも明らかではない。しかしすでに14世紀末には、高原郷にいた江馬氏の一族が室町幕府と直接結びついてその公務を執行したり、逆に反抗する力をもっていたのである。

さらに文明3年（1471年）10月5日、室町幕府奉行人連署奉書が江馬左馬助に出されている。この奉書は、飛騨国大野郡岡本上下保、石浦郷及び江名子、松橋両郷が山科家領として返付されたので早く現地に赴き姉小路基綱らと合力して治めるよう、というものである。また翌4年7月29日の細川勝元から姉小路左衛門佐に宛てた書状にも江馬左馬助の名があり、姉小路家から、以降永く忠節を尽くすように申し付けられている。

「梅花無尽巻」には、延徳元年（1489年）5月6日、その作者である僧・万里集九が高原郷、荒城郷を訪れ、高原城下で江馬氏から饗應をうけ、9日安國寺を出立する際には人馬を供されたと記している。当時、江馬氏が高原郷から荒城郷近辺、つまり高原川流域に留まらず、既に古川盆地にまでその勢力を拡大していたことが判る。

戦国時代になるとその動乱のなかで活躍した江馬氏の姿が記されている。この頃の江馬氏の当主は左馬助時盛であった。弘治2年（1556年）から永禄7年（1564年）にかけて、江馬氏は武田氏について、上杉氏についたりしながら力を蓄えていたが、永禄8年頃には武田氏についてその勢力を越中今まで伸ばしていた。しかし天正元年、武田信玄が没すると、かねてから上杉方と結んでいた常陸介輝盛が父時盛を殺害し、本城である高原諒訪城を支配するようになった（岐阜県教育委員会1968）。

天正4年（1576年）には上杉氏の軍勢が飛騨に攻め入り、輝盛はこれに降伏している。天正6年（1578年）上杉謙信が病没すると、南飛騨の三木自綱は織田信長を後盾として、輝盛と対立するようになった。天正10年（1582年）本能寺の変により信長が没すると、これまで武田・上杉・織田と結びつつ互いに牽制し合っていた飛騨の諸勢力は飛騨の支配権をめぐって対立するようになった。この中でも北飛騨の江馬輝盛と、南飛騨の三木自綱が二大勢力であった。そして同年10月27日に、江馬輝盛は三木自綱と吉城郡荒城川を挟んで戦ったが敗れ、輝盛は討死にし、翌月28日には高原諒訪城も落城した。このようにして、中世の北飛騨に雄飛した江馬氏は近世への転換期に領主としての姿を消すことになった。

### 3 中世の街道と高原郷・江馬氏（第8回）

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛騨国の最北端に位置し、越中・信州と接していることから古くより交通の要所となっていた。ただ中世における街道の史料は必ずしも多くはない、その詳しい経路については近世以後の記録によるところが多い。しかしこれで示すように、中世における館・城の立地は、これらの街道と密接な関係があったと推定できることから、街道の名称や正確な道筋はともかく、ほぼ同様の経路の交通路があったと推定して大過はないであろう。

中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは、幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。この鎌倉への道を鎌倉街道と呼ぶ。飛騨のみならず、北陸諸国から鎌倉

のある関東方面に向かうには、日本アルプスを越え、信州・甲斐に抜けるのが最も近道であり、飛驒の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。

有峰街道：越中高岡から高原郷を抜けて信州に至る道であり、鎌倉街道の一つであった。越中高岡から和佐府・下之本・森茂・山吹峠・双六を通り中山から高原川にそって長倉・今見に至り、そのまま高原川に沿って一重ヶ根・平湯と進み、安房峠を越えて信州に抜けるもの（安房越え）と、そこから蒲田川沿いに柄尾・神坂・中尾を通り、中尾峠を越えて信州に抜けるもの（中尾越え）であった。鎌倉街道と呼ばれるものはもう一つあり、高山盆地から益田川水系を通り、野麦峠を越えて信州に抜けるものである。鎌倉幕府が倒れると、これら鎌倉街道は鎌倉へ上る道としての役割は失うものの、飛驒・北陸諸国を信州と結ぶ道として信濃街道・信州街道と呼ばれるようになった。

飛驒と越中を結ぶ街道は越中街道と呼び、主要なものは越中東街道・越中中街道・越中西街道の3つである。

越中東街道：高山から上庄瀬・今村峠・八日町・大阪峠（十三峠）を越えて高原郷に入り、吳山・山田・寺林を通り、舟津から高原川東岸沿いに東漆山・東茂住・横山通り加賀領東猪谷に至る道である。

越中中街道：舟津で越中東街道から分岐するものであり、高山川西岸を割石・西漆山・西茂住・中山を経て、谷で“籠の渡し”で宮川を渡り、越中蟹寺に至る。

越中西街道：下山中道とも呼ぶ。宮川沿いに高山・広瀬・古川・袈裟丸・野口・大無羅・林・三河原（文道寺峠）・打保・杉原・小豆沢・加賀沢を通り越中蟹寺に至るものであり、室町時代になると飛越を結ぶ交通路として重要視されるようになった。

上記の主要街道の他にも、下記のような信濃（有峰）街道と越中東街道とを連絡する脇街道が知られている。

有峰道：土から跡津・佐古・大多和を経て大多和峠を越え越中高岡に至る。

上宝道：鹿間から殿・麻生野・數河・浅井田・桃原を経て中山に至る。

山之村嶺：山之村で信濃（有峰）街道に連絡する道。坂巻から殿・和佐保・伊西峠を越え森茂に至るものと、土から跡津・佐古・青木峠を経て下之本に至るものがあった。

吉田街道：山田から杉越峠を越えるものと、寺林から寺林峠を越えるものがあり、ともに吉田に出て、益崎に至った。

高山街道：山田から神原峠を、数河街道は西から袈裟丸を経て杉崎を結んだ。

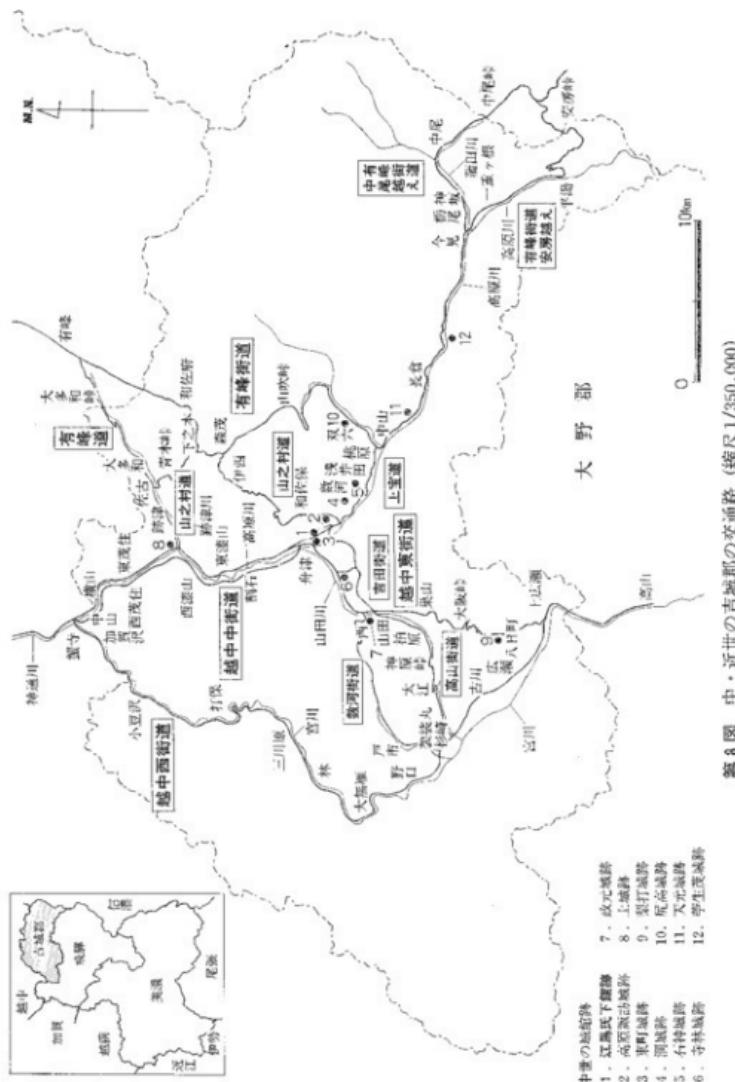


図3-9 中・近世の吉野郡の交通路（縮尺1/350,000）

この様に中世の飛驒国高原郷は飛驒・越中・信州を結ぶ主要街道が通るだけではなく、それらを連絡する脇街道も通る交通上の重要な地域である。

江馬氏下館跡は、越中東街道と信濃（有峰）街道とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり、これらを通じても両主要街道と連絡がとれる。また江馬氏城館跡に指定されている城跡は、これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。江馬氏にとって、軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが、高原郷を支配する上で一つの重要な要因であつたであろう。

#### 4 周辺の城跡（図版1、第4・8図）

**高原諏訪城跡**：江馬氏下館の東側背後、二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上、保木土平（城山）山頂に位置する。標高622m、北高270mである。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く、包囲された感じであるが、南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり、比較的攻撃しにくい位置にある。江馬氏は支配下の各地に城を築き、高原郷全体を要害としていたが、高原諏訪城は江馬氏の本城としてその中心となっていた。しかし、築城年代・築城者とともに不明である。

本丸は東西20~24m・南北34mの平地であり、ここには用途不明の径30~45cmの河原石70数個が散在している。本丸から下った所に南北36mの土堀と推定できる設備があり、それが途切れる位置におよそ9m四方の平地がある。

本丸下には幅6~10m・長さ139mの鉢巻き状の腰曲輪がある。本丸の南方、直高12m下に東西の方向に山地を掘り切った幅1.8m・長さ36mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に、東西9.6m・南北10.8mの二の丸（出丸）がある。この城の南側において山之村道が上宝道から分岐する。

**江馬之御館跡**：現在の神岡町東町、江馬氏下館の北方、段丘野尻に位置する。『飛州志』によれば、江馬氏が武田氏に属した後、武田信玄の越中侵攻のため、その家臣山県昌景の縄張りで造り、後の金森長近の入國の際に、その家臣山田小十郎が入れ置かれたとされる。「東町城」・「沖野城」・「野尻城」とも呼ぶ。

**洞城跡**：神岡町の中心からやや高原川をさかのぼった麻生野地区の山上、標高630m、北高190mの位置にある。「麻生野城」とも呼ぶ。『飛州志』には、城主は麻生野右衛門大夫直盛と記しており、築城者はこの直盛であると考えられる。また彼は永禄7年（1564年）に55歳（一説には57歳）で没しており、築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり天正6年（1578年）8月18日夜、輝盛の軍勢に攻められ、慶盛は自害し、城も焼け落ちたという。山頂を利用して二段ほどの平場を設けた簡単な構造

の城である。

**石神城跡**：神岡町石神地区にある。「杏城」・「二越城」とも呼ぶ。江馬時経の築城とされる。山頂を利用して二段ほどの平場を設ける。なお、麻生野城と石神城は共に、高原郷と鎌倉（有峰）街道を結ぶ上宝道沿いに立地し、双方の展望に留意して築いている。

**寺林城跡**：神岡町寺林、<sup>寺林</sup>玄蕃山と呼ぶ半独立峰頂部にあり、二段の平場が残っている。「玄蕃城」ともいわれる。高原郷の主要街道である越中東街道沿いにあたる。

**政元城跡**：神岡町西にある。「山田城」とも呼ぶ。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝え、円形の平場と腰曲輪が残っている。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三墓峠を越える本道と、数河峠を越える脇道（数河街道）に分かれ、政元城はその分岐点の押えであったと推定できる。

**土城跡**：神岡町牧、高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山にある。「鬼ヶ城」とも呼び、頂部に二段の平場がある。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。高原郷の主要街道である越中東街道と、越中と信州松本平を結ぶ鎌倉（有峰）街道を結ぶ脇街道には大字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る有峰道がある。上城はその分岐点にあり、北方に備えると共に、属城である越中中地山城（富山県上新川郡大山町）との連絡にあてられたものであろう。

**梨打城跡**：吉城郡国府町八日町、古川盆地を流れる宮川の支流荒城川が東の山峡に入ってまもなく、北岸の桐谷と十三幕の両峡谷に挟まれた標高749mの山頂にある。『飛州志』には高原郷源訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記されている。北飛驒の雄であった江馬氏が南方を固めるために造った出城であろうが、築城者、築城年共に不明である。天正10年の荒城川の合戦で輝盛が三木氏に破れた時、本城高原源訪城と共に落城している。城は、本丸・二の丸からなる整然とした繩張りであったと伝えられるが、現在では遺構は判然としない。『斐太後風土記』には、城地は東西72m・南北108mと記されている。越中東街道はこの城の東側を抜けて大阪峠から高原郷に入るが、梨打城はその守りであった。

その他江馬氏持ち分の関係城跡には「八幡山城」・「吉田城」（神岡町）、「孝生茂城」・「尻高城」・「天元城」（上宝村）、「中地山城」（富山県上新川郡大山町）などがある。

（大平愛子）

## 第3章 発掘調査の成果

### 1 調査前の知見（図版3・4）

江馬氏下館跡は北飛驒の高原郷を治めた中世武家である江馬氏の居館跡であり、1980年に国の史跡指定を受けた江馬氏城館跡の中心遺跡である。

1973年度に江馬氏居館跡・庭園跡との伝承をもつ神岡町大字殿地区において土地改良工事に先立って試掘調査を行い、広範囲にわたる遺構の存在を確認している。この調査によつて庭園遺構の概要をほぼ確認し、園池に隣接した建物跡、館を開む堀跡の存在も明らかになつた。以後、1978年にかけて、調査区を拡大しつつ館内外の発掘調査を行い、建物跡、館の三方西・北・南を開む堀跡などを検出している（神岡町教育委員会1979）。

1994年度にはそれまでの調査によって部分的に確認していた館の三方を開む堀跡について、その規模と築造・廃絶年代を確認することを主目的とする調査を行つた。その成果は、以下のようなものである（神岡町教育委員会・富山大学考古学研究室1994）。なお江馬氏下館は東側の山を背にして残りの三方を開んでいる。建物配置と薬研堀の位置からみて正面は西を向く。規模は南北97m、東西は推定114m（山裾まで約130m）である。

**北堀**：幅4m、深さ1mの箱堀。堀の内側に接して、幅3m、高さ0.5~0.8mの土壘状の高まりがある。

**南堀**：幅4m、深さ1.1mの箱堀であり、角度をやや東にふつて新たに掘り直している。掘り直した新堀は幅5m、深さ0.7mの箱堀である。掘り込みの土層の検討から南堀は新旧2時期、6段階の変遷をたどることが判つた。旧堀の埋土には館内側からの流れ込み層があり、土壘を伴つていたと考えられる。なお新堀にはこのような層が堆積しない。また旧堀西方には園池の排水路が接続する。南堀では旧堀の東側部分をいったん埋め戻し整地した後、その南側に新堀を掘り直しているが、この排水溝以西では旧堀跡をそのまま利用している。

**西堀**：館の正面であり、館への導入部となる二つの土橋がある。北側の土橋1は幅約3m、南側の土橋2は幅約7mであり、こちらが主門である。堀は、土橋1の北側では、幅4.4m、底幅1.8m、深さ1.4mの箱堀であり、南側では幅4.5m、底幅0.2m、深さ3mの薬研堀である。その埋土は自然の堆積ではなく、整地して一度に埋め戻している。この埋土の流れ込みの方向から、西堀の内側に土壘の存在が想定できる。これらの堀は、わずかに水が溜まる程度であり、基本的には空堀であったようである。なお、これらの堀は出土遺物からみて16世紀前葉には埋めていたと考え得る。

**基本層序：**館内部地区では3つの遺構面があり、館の成立期を含めて3回の整地を行ったと考え得る。

**庭園：**館の南西隅に位置する。庭園の石組、池中の石組や橋脚、付属する建物などが出土している。池辺の施設や建物の配列から、京都の庭園様式にならって造ったものであると推定されている。圓池からの排水溝は南堀に接続していることから、圓池は旧堀の段階に構築したものであることが判る。

**建物：**最上層遺構面で検出した館内の建物跡は、礎石建物9棟、掘立柱建物1棟、柵列4列、溝跡等を検出している。これらの建物群はその主軸方位の違いから2時期あったことが確認され、報告書中ではこれをA期・B期にわけて整理している。両者の新旧関係について一部礎石抜き取り穴の重複(SB03・SB11)や礎石の検出レベルからみてA期(SB01～SA07)がB期(SB08～SB11)に先行することが判明している。A期建物は遺構の残存状態が良好で平面規模も推測できるが、B期建物については削平を受け、平面規模は明瞭ではない。建物と南堀との主軸方位をみると、古いとされるA期建物と南堀新堀の主軸方位が一致し、南堀新堀段階にA・B両時期の建物が伴うことが指摘されている。これら各期の遺構には、建物跡の主軸方位、堀の重複状況、庭園と堀の関係等にみられるように前構築工法の踏襲の意識が強くうかがわれる。

**館外部の遺構の広がり：**1978年度調査では遺構の広がりを確認するため堀の外側の区画のトレンチ調査を行った。館の北側・南側では南北に長軸をとる十字型のトレンチをそれぞれ4本・1本設定した。西側は西堀の延長ラインから段丘端部まで東西に長いトレンチを1本、段丘端部に東西方向に2本、南北方向に1本のトレンチを設定した。

館南東の段丘端部近くで方形の堅穴住居を検出したが、その他の区画のトレンチでは土地改良工事等により地山まで削平をうけ、明確な遺構の広がりは確認できなかつたと報告されている。しかし館の正面に当たる2本の土橋の存在から、段丘下を通る街道から館内部への導入路が西堀の外側の区画に存在すると考えられる。

1978年度概報では江馬氏一族および家臣団の居館は地形もしくは戦略上の制約等の諸条件により分散して存在していたものとされている。また、1994年度報告では、北堀北側付近については地籍図等に「馬場西」の地名がみられることから馬場などに使用されていたと推定されている。1994年度調査では北堀北方の、指定地外にトレンチを設定して遺構の広がりの確認を行った。若干の中世遺物の出土がみられたことから、館関係の遺構が指定地外にも広がっていると考えられる。

**遺物：**中世の遺物は土師器皿を中心として4600点ほどが出土しており、その出土量は堀の内側地区に多い。出土土器・陶磁器の種類は、土師器、瓦器、貿易陶磁器、白堺系陶器、瀬戸美濃、珠洲、八尾、常滑などである。13世紀後半から16世紀中葉にかけての各時代の

## 江馬氏城館跡Ⅱ

遺物から構成され、15世紀前半の遺物量が最も多く、館の最盛期と考えられる。また館全体では量は少ないものの16世紀中葉までの遺物が見られる。

**江馬氏下館跡の変遷：**1973年度以来の調査に加えて、1994・1995年度の調査によって、江馬氏下館全体の変遷がかなり明確になってきた。そこでその成果に基づき、本報告書から、下記のⅠ～Ⅲ期の時期区分を設定して用いることとする。

**江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀）：**一定の遺物が出土するようになり、この地の利用が始まる。総柱式建物が散在し、堀はまだ造っていない段階である。1994年度報告の江馬氏下館1期、1995年度報告の門前地区第1段階に相当する。

**江馬氏下館Ⅱ期（14世紀末～16世紀初め）：**方約一町の館を整備した段階である。建物主軸の方位の変化に基づき、ⅡA期・ⅡB期に細分できる。

**江馬氏下館ⅡA期（14世紀末～15世紀前半）：**には堀・庭園を造成し館としての機能が出揃う。1978年度報告のA期建物の時期である。遺物の出土量は最も多く、館の最盛期である。1994年度報告の江馬氏下館2-a1期、1995年度報告の門前地区第2a段階に相当する。

**江馬氏下館ⅡB期（15世紀後半～16世紀初め）：**には建物の方位が変化し（1978年度報告のB期建物）、門前地区には馬屋が出現する。1994年度報告の2-a2期、1995年度報告の門前地区第2b段階に相当する。

**江馬氏下館Ⅲ期（16世紀中頃～16世紀末）：**江馬氏が下館の堀を埋め、その機能を他に移してから、1582年に三木氏に敗れ領主としての江馬氏の歴史が終わるまでの時期である。1994年度報告の江馬氏下館2-b期と3期の一部に相当する。地籍図や縄張図等の検討から江馬氏下館Ⅲ期には、東町城・高原諒訪城が本拠であった可能性が高い。

（大平愛子）

## 2 調査の方法（図版4）

以上の調査前の知見に基づきつつ、1995年度には、館の門前をどのように利用していたか、また館内の園池をいつの段階に、どのような規模、構造等をもって造成したかを解明することを目的とし、調査を実施した。

**調査区の設定：**調査区の設定は1994年度と同様に、1978年度調査終了時に用いた基本杭1（国土座標X=35878.577, Y=13064.049, Z=455.555）と基本杭2（国土座標X=35913.142, Y=13116.680, Z=455.653）を結ぶ線を基準として設定した。すなわちこの軸線をY軸として、基本杭1を通りこれに直交する軸線をX軸とした。基本杭1が原点Oである。なおこの座標の方向は、館内のA期建物の軸線に合せたものであり、X軸が磁北から西へ約35度振っている。

昨年度はこの座標を利用して、6m方眼の地区割を設定したが、今年度からはすべての

遺物について座標・標高を記録しての取り上げることにしたため、地区も1mを単位とする座標によって表示することとした。ただし測量基準杭は昨年度の成果に対応させるため、6mごとに設定した。

調査区は館の外部と内部の2箇所に設け、それぞれ門前地区、園池地区と呼称した。

門前地区は館の西側にある現在の田地の区画に合わせて設定した。X座標は-15~-42m、Y座標が-11~-35mの地区である。

園池地区は園池の中心を通るようにL字形のトレーンチ二本を組合わせて十字形の試掘坑を設定した。そして交点から北へ伸びるものをN区（X座標が-12~-24m、Y座標が16~-18m）、南へ伸びるものをS区（X座標が-24~-36m、Y座標が18~20m）、東へ伸びるものをE区（X座標が-24~-26m、Y座標が20~36m）、西へ伸びるものをW区（X座標が-22~-24m、Y座標が20~16m）とそれぞれ呼称した。さらに、E区の東端から南へ試掘坑を拡張し、拡張区と呼称した。

以上の地区の面積は、門前地区約1212m<sup>2</sup>、園池地区約139m<sup>2</sup>であり、合計約1351m<sup>2</sup>となる。また過去の調査を含めた調査面積の総計は10477m<sup>2</sup>となる。

**調査の方法：**門前地区では調査区予定地の南端に層位観察用の試掘坑を設定して、表上、旧表土から地山層に及ぶ基本層序を確認した。その後、調査区全体を重機を使用して、旧表土まで掘削し、それより下層は人力により発掘した。小さな遺構は二分法を用いて発掘し、大きな遺構には四分法を用いた。

園池地区ではまず1978年度調査終了後に埋めた灰色川砂を除去して、遺構面の再検出を行った。遺構保存のため全体的な掘り下げはこの遺構面までとし、池の掘り込み面、景石の掘形、池の堆積層序等を確認する目的で、適宜試掘坑を設定して地山まで掘り下げた。

**記録：**遺構の平面図・断面図はすべて縮尺二〇分の一で、割付け実測を行った。なお小さな柱穴・土坑については、断面図は主要な建物や構列に伴うものと、堆積に層位があるものについて作成した。ただしすべての遺構について、埋土、長径、短径、深さを記録して遺構観察表を作成し、断面図の作成が可能なようにしている。

写真撮影は遺構検出状態、土層断面、遺物出土状態、遺構完掘状態等を中心に行った。調査区全体の発掘後全景写真の撮影については高所作業車を利用し、またバルーンによる空中写真撮影を行った。

遺物の取り上げは、すべてのものについて、前述の座標によるX・Y・Z座標を少数点以下2桁まで記録して行った。

(石井淳平)

### 3 門前地区の調査成果

#### (a) 層位 (図版17~20・図版42~図版44)

江馬氏下館跡は、高原川の浸食によって形成された河岸段丘上に立地しており、館の背後にあたる東側には山が迫っている。このため、門前地区の標高は東側の館内部地区に比べ低くなっている。地山における固池地区と門前地区南端との標高差は約0.6mである。門前地区内においては、西北から南東にかけて高くなっている、その高低差は約0.8mである。

門前地区の基本層序は、調査地区の4方向の各壁面で観察しており、上層から表土、土地改良土(盤土)、旧耕作土、遺物包含層、地山に大別できる。

表土は第1層黄褐色砂質土である。土地改良土(盤土)は第2層明黄褐色砂質土である。第4層黒褐色弱粘質土および第10層黒褐色弱粘質土・明黄褐色土は旧耕作土に相当し、後者の下面には耕作に伴って沈着した鉄分がある。そして第35層にぶい黄褐色砂質土が地山である。門前地区では、1994年度調査において地山1とした館三方の堀が掘り込む土層は確認できなかった。また館内部では地山1上に整地層があり、建物が掘り込むが、このような大規模な整地は、門前地区では行っていないようである。

(田中慎太郎・宮崎順一郎)

#### (b) 遺構

**建物・柵列跡** (図版41・45~48)：今回の調査では建物8棟、柵3列を復元し、これらの柱穴数は149基である。ただし門前地区全体で発掘した柱穴数は705基であり、そのほとんどが中世期のものと推定できることから、さらに多くの建築活動があったことを推定できる。また張り出しがある可能性のある建物も存在するが、確実ではないため記述で指摘するに留めた。

以上のうち柱痕を観察できた柱穴は28基であり、柱痕の直径の平均値は0.08mである。またそのうち建物を形成するものは6基であり、柱痕の直径の平均値は0.12mである。今回の調査では柱自体が遺存したり、柱を抜き取った痕は確認できなかった。なお文中に示す尺は、1尺を0.303mとして計算したものである。

(古屋聰洋)

**SB01** (図版45)：門前地区北西部、X座標24.6~36.1、Y座標-32.9~-25.0の範囲に位置する。南北5間、東西3間の南北棟の総柱式掘立柱建物である。南側第1・第2柱列の東側に柱筋をそろえ柱間が等しい柱穴があるため、東側南端に1間×2間分の張り出しがある可能性もある。主軸方位はN-35°Wであり、座標にはほぼ一致する。

規模は桁行11.28m(37.2尺)、梁行は総長6.82m(22.5尺)である。桁行・梁行共に柱間は約2.3m(7.6尺)等間である。柱間7.5尺、桁行37.5尺、梁行22.5尺に復元できる可

能性があろう。以下このような解釈の記述は省略するが適宜読み取られたい。また北側柱列東から第2柱穴と第3柱穴の柱間は1.85m(6.1尺)、第3柱穴と第4柱穴の柱間は2.45m(8.1尺)である。なお南側第2柱列東第4柱穴及び南側第3柱列東第3柱穴は検出できなかった。柱穴はやや不揃いであるものの、直径0.3mの円形を中心として深さは0.1~0.2mであり、埋土は黒褐色土と茶褐色土が中心である。なおSP564がSE09を壊している。

また建物内部の南側では竪と推定できる被焼痕を有する遺構SX01を検出した(図版51)。さらにこの建物の東側において、これに付属したであろう井戸SE10を検出した(図版51)。この井戸には1間×1間の覆屋が付属し、柱間は2.5m前後である。柱穴はやや不揃いであるものの、直径0.3m前後の円形を中心として、深さは東側柱列が0.14m、西側柱列が0.05mを測る。埋土は黒褐色土と茶褐色土が中心である。

遺物はSP536・SP575から土師器皿各1点、SX01からは土師器皿2点、珠洲壺72点、珠洲すり鉢3点、鐵製品2点、打製石斧1点。その他骨片が出土した(図版57の2~6・58の7)。

(工藤直子)

**SB02** (図版46)：門前地区中央よりやや南寄り付近、X座標-3.0~1.9、Y座標-25.9~-15.3の範囲に位置する。南北3間、東西6間の東西棟の側柱式掘立柱建物である。主軸方位はN-54.5°-Eであり、座標軸にほぼ一致する。桁行は総長約10.4m(34.3尺)、梁行は総長約4.8m(15.8尺)である。桁行・梁行共に柱間は約1.9m(6.3尺)等間であるが、桁行では東隅、梁行では南隅の柱間は約1.0m(3.3尺)である。柱穴は直径0.3m前後の円形もしくは梢円形であり、深さは0.09~0.47mを測る。埋土は黒褐色土を中心に層をなし、一部に地山ブロックが混じる。また、SP122からは直径0.13mほどの、SP178から直径0.07mほどの石を検出しているが、根石であるかどうかは不明である。SP48・SP180では柱痕跡を確認し、前者は直径0.13m、深さ0.23m、後者は直径0.09m、深さ0.32mを測る。SP45がSK07・SK78を、SP706がSK10・SK79を壊している。SP48から土師器皿の体部片が、SP122からは漆の塗膜が出土している。

(中谷正和)

**SB03** (図版46)：門前地区の中央やや南寄り、X座標2.5~6.7、Y座標-26.0~-15.8の範囲に位置する、南北2間、東西7間の東西棟の側柱式掘立柱建物である。この建物の北側には、東側柱列・西側柱列の柱間と同間隔の柱穴があることから、北側に1間分張り出す可能性もある。主軸方位はN-53°-Eであり座標軸にほぼ一致する。桁行約10.1m(33.3尺)、梁行約3.8m(12.5尺)であり、そのうち東側一間、西側一間が庇である。柱間は庇を除くと桁行、梁行共に、約1.9m(6.3尺)等間であり、東側の庇は約0.92m(3.0尺)、西側の庇は約0.72m(約2.4尺)である。なお南側柱列東第2・3柱穴は検出できなかった。柱穴はやや不揃いであるものの、直径0.3~0.4m前後の円形を中心として、深さは0.3m前後である。また、柱穴の深さは南側柱列と北側柱列がほぼ対応し、第2・第6柱穴は他

の柱穴よりやや深く、建物を構成する四隅の柱穴はやや浅くなっている。埋土は黒褐色土と茶褐色土を中心にして層をなし、一部、地山ブロックが混じる。SP59・SP236では柱を支えるために底部に据えた石を検出した。SP259・SP261の土中からは楕石が、SP113からは用途不明の石が出土した。SP78・SP148では柱痕跡を確認し、前者は直径0.17m、深さ0.23m、後者は直径0.2m、深さ0.58mを測る。なお、SP259からは繩紋土器1点、SP305からは土師器皿1点が出土している。

(小林香織)

**SB04** (図版47)：門前地区のほぼ中央、X座標11.3～16.4、Y座標-33.2～-13.7の範囲に位置する。南北2間、東西9間の東西棟の掘立柱建物であり、その長大な形状から南庇付の馬屋と推定した。主軸方位はN-60°-Eであり座標よりやや東へ振る。桁行は約19.0m (62.7尺) であり、柱間は約2.1m (6.9尺) 等間である。梁行は約4.1m (18.4尺)、柱間は身舎部分が約2.2m (7.4尺)、庇部分が約1.8m (5.9尺) である。柱穴は直径0.3m前後の円形を中心として、深さは約0.04～0.46mとばらつきがある。埋土は黒褐色土を中心として、一部、地山ブロックが混入する。なお遺物は出土しなかったが、柱穴の重複関係から棚列SA02に先行することが判る。

(海道雅子)

**SB05** (図版48)：門前地区南寄り、X座標-11.6～-8.6、Y座標-26.0～-15.0の範囲に位置する。南北2間、東西7間の東西棟の側柱式掘立柱建物である。この建物は北側に東側柱列・西側柱列の柱間と同間隔の柱穴があることから、東側・西側柱列は2間分北に拡張する可能性があり、東側柱列はSB02の東側柱列と柱筋をそろえている。主軸方位はN-54.5°-Eであり、座標にはほぼ一致する。桁行は総長約10.94m (36.1尺)、梁行は総長約2.95m (9.7尺) である。桁行の柱間は約1.9m (6.3尺) 等間であるが、南側柱列において東からそれぞれ第1柱穴と第2柱穴の柱間は0.93m (3.1尺)、第6柱穴と第7柱穴の柱間は約1.0m (3.3尺)、第7柱穴と第8柱穴の柱間は約1.48m (4.9尺) である。梁行の柱間は西側柱列では約1.39m (4.6尺) 等間であるが、東側柱列は南からそれぞれ第1柱穴と第2柱穴の柱間は1.98m (6.5尺)、第2柱穴と第3柱穴の柱間は0.96m (3.2尺) である。また、北側柱列では東から第2柱穴が検出できなかった。柱穴は直径0.3m前後の円形もしくは楕円形であり、深さ約0.15～0.52mを測り、柱列でまとまってはいない。埋土は黒褐色土を中心にして層をなし、一部、地山ブロックが混じる。SP157では柱痕跡を確認し、直径0.16m、深さ0.12mを測る。SP40がSE01を譲る。SP142からは金銅板1点が出土している (図版57の1)。

(藤田良子)

**SB06** (図版48)：門前地区南隅、X座標-14.7～-12.6、Y座標-26.9～-24.8の範囲に位置する総柱式掘立柱建物である。調査区外へ広がる可能性がある。主軸方位はN-36°-Wであり、座標にはほぼ一致する。SB06の遺構推定範囲はSB07の遺構推定範囲と重なっている。東西長3.9m (12.9尺)、柱間は1.9m (6.3尺) 前後である。南北長は不明で

あるが、調査部分において、柱間は1.9m（6.3尺）前後である。SB06・SB07の両建物において、その遺構の配置およびピットの位置関係から、同位置（SP218地点）に柱穴を持つと考える。柱穴は直径0.3m前後、深さは0.1m前後を測る。埋土は黒褐色土を中心とし、SP218のみ茶褐色土である。SP147の埋土には黒褐色土ブロックが混じる。SP617では柱痕跡を確認し、直径0.09m、深さ0.1mを測る。遺物は出土していない。

**SB07**（図版48）：門前地区南隅、X座標-13.3～-16.0、Y座標-26.0～-30.1の範囲に位置する総柱式掘立柱建物であり調査区外に広がる可能性が高い。主軸方位はN-34°-Wであり、座標とは一致しない。SB07の推定範囲はSB06の推定範囲と重なっている。検出した部分において、東西長は4.0m（13.2尺）、柱間は1.3m（4.3尺）前後である。SB07とSB06はSP218を共有している可能性が高い。柱穴は直径0.3m前後、深さは0.1m前後を測る。埋土は黒褐色土を中心とする。遺物は出土していない。  
（古屋聰洋）

**SB08**（図版48）：門前地区ほぼ中央、X座標11.1～14.0、Y座標-25.4～-20.6の範囲に位置する。南北2間、東西3間の東西棟の側柱式掘立柱建物である。主軸方位はN-57°-Eであり、座標にはほぼ一致する。桁行は4.7m（15.5尺）、梁行は2.82m（9.3尺）である。桁行の柱間は約1.9m（6.3尺）等間であるが、東からそれぞれ第3柱穴と第4柱穴の柱間は約0.93m（3.1尺）である。梁行の柱間は西側柱列は約1.4m（4.6尺）等間であるが、東側柱列は南から第1柱穴と第2柱穴の柱間は0.92m（3.0尺）、第2柱穴と第3柱穴の柱間は1.85m（6.1尺）である。柱穴は直径0.4m前後の円形もしくは指円形であり、深さは約0.2～0.4mを測るが、柱列でまとまつてはいない。埋土は黒褐色土と茶褐色土を中心として層をなし、一部、地山ブロックが混じる。SP292では直径約0.08mの、SP301では直径約0.27m・約0.15mの根石が、SP310では直径約0.1mの根石と推定できる石を検出した。SP267・SP270・SP292・SP315・SP749では柱を支えるために柱穴の底に据えた石を検出し、その直径は順に約0.14m、約0.18m、約0.22m、約0.25m、約0.18mを測る。遺物は出土していない。  
（藤田良子）

**SA01**（図版47）：門前地区のほぼ中央、X座標12.4～13.0、Y座標-35.8～-16.0の範囲に位置する東西方向の欄列である。主軸方位はN-54.5°-Eであり、座標にはほぼ一致する。調査範囲外の西にのびる可能性がある。また第1柱穴のSP239から北へSP242・SP244へ2間分、第9柱穴のSP385から北にSP391・SP396～2間分欄列がのびる可能性もある。調査地区内では10間分を検出し、長さ20.0m（66.0尺）、柱間は約2.0m（6.6尺）とほぼ等間隔である。柱穴は直径約0.27～0.66m、深さは約0.07～0.33mと一様ではない。埋土は黒褐色土を中心とする。SP239では直径0.22mの根石が出土し、SP271から繩紋土器1点が出土している。

**SA02**（図版47）：門前地区のほぼ中央、X座標11.4～12.4、Y座標-35.6～-19.9の範

## 江馬氏城館跡 II

間に位置する東西方向の構列である。主軸方位はN-60°-Eであり、座標と一致しない。調査地区外の西にさらにのびる可能性がある。調査地区内では7間分を検出し、柱間は約2.4m(7.9尺)等間であるが、東隅の柱間のみ約1.7m(5.6尺)、検出長約15.9m(52.3尺)である。柱穴は直径0.2~0.3m、深さは約0.1~0.2mである。埋土は黒褐色土を中心あり、一部、地山ブロックが混じる。遺物は出土していない。柱穴の重複からSB04より後に設置したものであることがわかる。

(海道雅子)

**SA03** (図版46)：門前地区中央よりやや南寄りの、X座標-3.8~-3.9、Y座標-15.2~-19.9の範囲に位置する。東西方向の3間の構列である。主軸方位はN-54.5°-Eであり、座標にはほぼ一致する。柱間は約1.9m(6.3尺)等間であり、東隅柱間は約1.0m(3.3尺)、総長約4.7m(15.6尺)である。柱穴は直径0.3m前後の円形であり、深さは0.08~0.48mと一様ではない。埋土は黒褐色土を中心に層をなす。SP97では、直径0.18m、深さ0.19mの柱痕を確認した。また同じ柱穴から石を検出したが、用途は不明である。なおこの遺構は柱間の間隔がSB02と対応しているため、SB02の一部となる可能性がある。遺物は出土していない。

(中谷正和)

その他の柱穴について (図版41)：今回の調査で検出した建物8棟及び構3列における柱穴は門前地区柱穴総数705基のうち149基であるが、残りのいくつかの柱穴についても、調査段階において建物あるいは構列を形成する可能性のあることを注意していた。しかし最終的に建物及び構列として図化しなかった理由は、推定柱穴列の中に柱穴を欠くものが多くたためである。以下、このようなものについて記述する。なお記述中のA期軸はN-54.5°-E、B期軸はN-60°-Eである。

門前地区中央区の、X座標9.4~10.2、Y座標-21.9~-36.0の範囲に位置するSP291からSP600は、B期軸にはほぼ一致する列であり柱間は等間である。6間以上の構列になる可能性がある。

門前地区北側区の、X座標23.1~32.0、Y座標-14.0~-20.4の範囲に位置するSP429からSP415とSP415からSP493は、それぞれ等間の柱筋をなしている。これら2列の柱列は直交しており主軸がB期軸にはほぼ一致する、3間×4間の南北棟の堀立柱建物である可能性がある。

門前地区北側区の、X座標28.7~38.5、Y座標-15.5~-20.1の範囲に位置するSP491からSP479はA期軸とはほぼ一致する列であり柱間は等間である。この柱列の東側には同一方位の柱穴列が幾つかあり、西側柱列5間分の建物である可能性がある。構であるという可能性もあるが、断定できない。

門前地区北側区、X座標28.5~34.0、Y座標18.0~25.9の範囲に位置するSP455からSP468とSP468からSP530は、柱間が等間である。この2列の柱列は直交し、建物の主軸が

B期枠にはほぼ一致する、東側柱列3間、南側柱列4間の東西棟の掘立柱建物である可能性がある。

(小林香織)

**井戸**：今回の調査では井戸を10基検出した。ただし湧水はなかった可能性が高く、すべて溜め井戸と推定する。遺物の出土はSE03からのみである。

**SE01**（図版13の1・49）：門前地区南東寄り、X座標-9.0、Y座標-18.0に位置する。平面形は長径1.56m、短径1.26mの楕円形をなす。深さ0.7m、底径約0.8mを測り断面形は台形を呈する。埋土は第5層から第10層が壁際に堆積し、中央に礫を含む第1層から第4層が堆積している。SP40（SB05）・866・867・869がSE01を壊している。

**SE02**（図版13の2・49）：門前地区中央からやや南東寄り、X座標5.0、Y座標-20.2に位置する。平面形は一辺約1.4mの不整方形、底面形は一辺約0.9mの隅丸方形をなす。深さは約0.7mを測り、断面形は台形を呈する。埋土はほぼ水平に堆積している。

**SE03**（図版13の3・49）：門前地区ほぼ中央、X座標11.8、Y座標-27.8に位置する。平面形は一辺約0.9mの隅丸方形、底面形は一辺約0.9mの隅丸方形をなす。深さは0.57mを測り、断面形は台形を呈する。この底部ほぼ中央に直径約0.28m、底径0.12m、深さ0.3mを測る円筒形の小穴をもつ。小穴部が最初に埋まり、井戸本体の埋土は両側から流れ込むように堆積している。瀬戸美濃皿・近世陶器皿が出土した。

**SE04**（図版49）：門前地区ほぼ中央、X座標16.1、Y座標-21.9に位置する。平面形は長径1.64m、短径1.36mの楕円形、底面形は直径1.31mの円形をなす。深さは0.9mを測り、断面形は台形を呈する。この底部ほぼ中央に直径0.3m、底径0.2mの円筒形の小穴をもつ。埋土は両側から流れ込むようにはほぼ水平に堆積する。SP851（SB04）がSE04を壊している。

**SE05**（図版50）：門前地区中央よりやや北寄り、X座標18.7、Y座標-18.2に位置する。平面形は直径約0.9mの円形、底面形は直径約0.45mの円形をなす。深さは0.96mを測り断面形は、すり鉢形を呈する。埋土の堆積状況は南から流れ込むように堆積している。

**SE06**（図版13の4・50）：門前地区中央やや北寄り、X座標17.9、Y座標-25.5に位置する。平面形は直径約1.2mの円形、底面形は直径約0.5mの円形をなす。深さは0.96mを測り断面形は、すり鉢形を呈する。埋土は南から流れ込むように堆積している。SK80がSE06を壊している。

**SE07**（図版13の5・50）：門前地区的やや北寄り、X座標21.0、Y座標-29.5に位置する。平面形は直径約1.20mの円形、底部は直径約0.35mの円形をなす。深さは0.93mを測り断面形は、すり鉢形を呈す。埋土は北から流れ込むように堆積している。

**SE08**（図版13の6・50）：門前地区西壁沿いやや北寄り、X座標20.0、Y座標-34.0に位置する。平面形は長径1.24m、短径0.92mの楕円形、底面形は直径約0.5mの円形をなす。深さは0.89mを測り、断面形は、すり鉢形を呈する。埋土は水平に堆積し、底部付近は粘

質である。SK77がSE08を壊している。

**SE09** (図版13の7・51)：門前地区北西寄り、X座標24.5、Y座標-30.4に位置する。平面形は直径約1.3mの円形、底面形は直径約1mの円形をなす。深さは0.5mを測り断面形は台形を呈する。この底部は中央に直径約0.35m、底径約0.1m、深さ0.3mの円筒形の小穴をもつ。埋土は小穴に砂質土が堆積し、井戸本体にはやや粘性のある土が南から流れ込むように堆積している。SP564 (SB01) を壊している。

**SE10** (図版13の8・51)：門前地区北寄り、X座標30.5、Y座標-22.8に位置する。平面形は直径約1.5mの円形、底面形は直径約1.2mの円形をなす。深さは0.76mを測り断面形は台形を呈する。この底部は中央に直径約0.35m、底径約0.3m、深さ0.3m以上を測る円筒形の小穴をもつ。埋土は小穴が粘土であり、井戸本体には弱粘質土が両側から流れ込むように堆積している。

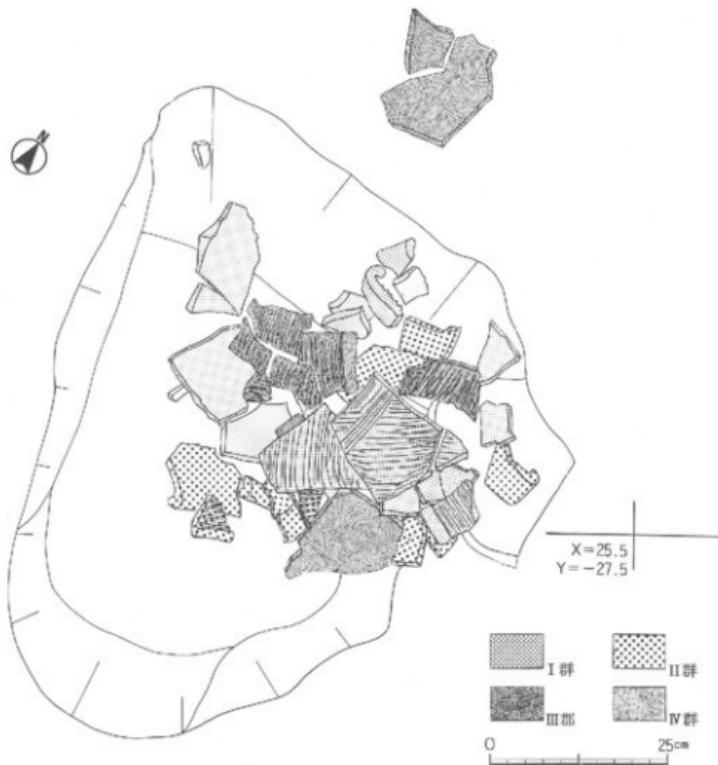
竈：竈跡1基を検出した。この遺構はSB01とともにう屋内竈である。

**SX01** (図版12・51)：門前地区中央より北寄り、X座標25.6、Y座標-17.5に位置する。燃焼部は南北幅約0.92m、東西幅約0.66mを測り、西辺が広がる隅丸の不整三角形を呈する。残存部の高さは約0.2mである。内面全体に被熱の痕跡がある。東壁と西南壁に粘土を張り付け、西南壁の粘土は被熱している。この燃焼部の東隅に南北幅約0.27m、東西幅約0.2mを測る不整形の焚口がある。内部には薪の残存物であろう炭化物が散布している。煙道や上部施設は残っていなかった。埋土は炭を大量に含む燈色の焼土であり、また竈の東壁と南西壁の外側にも幅0.3m前後の範囲に焼土が広がる。この埋土中から珠洲すり鉢3点、甕72点、土師器皿2点、鉄製品2点、打製石斧1点、骨片2点が出土した (図版57の2-6・58の7)。

この竈はSB01の南壁沿い中心よりやや東寄りに位置する。燃焼部と焚き口を結ぶ軸はSB01の梁行きの軸にはほぼ一致しており、この建物に伴う屋内竈であったものである。そしてSB01と共に廃棄したのである。珠洲甕の出土状況はこの竈の廃棄時に行われた祭祀の形態をよく示しているため、以下でその埋納の手順を復元する。

**竈埋納行為の復元** (第9図) : SX01は、珠洲甕の破片によって、丁寧に被覆した状態で出土した。これらの珠洲甕の破片は、全て同一個体のものである。そしてこの甕の体部内面上位の部分には、液体を貯蔵した結果と考え得る顕著な使用痕跡がある。おそらく凍つたり融けたりする状態で水甕として使用していたものであろう。

その外面には打ち叩いて壊した痕跡があり、また底部を含めて一個体のすべては残存していない。これら破片は、4つの大きな単位からなるため、他所で破棄して大きめの破片を竈の埋納に利用したと推定できる。これら4つの破片のまとまりをI・II・III・IV群とすると、各群の細片の分布状況は第9図のようになる。この中にも、碎片が混じることから、



第9図 門前地区 SX01の遺物出土状況

埋納の直前に再び打ち割ったのであろう。

珠洲甕の分布は焚き口を中心に広がり、各群毎にまとまる傾向がある。すなわち甕内最下部を中心にI群が広がり、その上にII群、III群の順に重なりII群とIII群の間にIV群が混じっている。またIII群は中央にややまとまり、I群・II群はやや広く散布する。このようにI・II・III・IV群の順に打ち割って甕を覆っている。

なおこの甕は珠洲IV期後半のものであり14世紀後半にあたることから、この総柱式建物と甕は、館の堀を掘削する直前のものと推定できる。従ってこの埋納行為は；一建物の廃棄に伴うものとするより、江馬氏下館Ⅰ期からⅡ期にかけて、従来の総柱式建物群を廃棄

して、堀・庭園・礎石建物・側柱建物からなる全く異質な空間を形成した際の産物と理解する方が良いであろう。

以上の埋納行為は、江馬氏館の変遷と密接に関わるものであり、また珠洲陶器の実用性と宗教性の接点を理解する上で貴重な例となるものである。

**土坑**：今回検出した上坑には、倒木痕16基とその他の土坑55基がある。倒木痕は平面形が不整形を呈して底面に凹凸があり、断面形は概ね皿形を呈するもの、さらに埋土に礎を多量に含むものや地山上が底部から浮いて層をなしているものである。倒木痕を除く土坑のうち遺物が出土した土坑は7基である。

**SK02**（図版14の1）：門前地区南東寄り、X座標0.0、Y座標-17.5に位置する。直径約3.9m、深さ0.16mを測る。平面形は円形、断面形はほぼ皿形を呈し、底面には細かい凹凸が広がる。埋土は黒褐色土である。SK06・SK07・SP52に壊されている倒木痕である。遺物は出土していない。

**SK06**（図版51）：門前地区東南寄り、X座標-0.4、Y座標-15.7に位置する。直径約0.6m、底径約0.5m、深さ0.5mを測る。埋土は黄褐色土混じりの黒褐色土と暗褐色土からなり、拳大の礎を含む。SK02・SK78・SP47を壊し、SP471に壊される。土師器皿6点、珠洲壺1点が出土した（図版58の9）。

**SK10**（図版52）：門前地区南寄り中央、X座標-3.6、Y座標-23.5に位置する。直径約1.0m、底径約0.7m、深さ0.24mを測る。SP704・SP705・SP706・SP881に壊される。土師器皿1点、瀬戸美濃天目碗1点・丸皿1点、炭が出土した（図版58の10・11）。

**SK24**（図版14の2）：門前地区南西寄り、X座標1.7、Y座標-33.7に位置する。平面形は長径約4.35m、短径約3.07mの東西に長い不整円形を呈する。底面側縁は深さ約0.2mのところで緩やかに凹凸をなし、底面部中央で直径約1.5m、深さ約0.35m底面に細かい凹凸をもつて鉢状の落込みを有する。埋土中に地山土に似たブロックや層が入り込んでいる。倒木痕であり、遺物は出土していない。

**SK25**（図版16の1）：門前地区中央やや東寄りX座標9.0、Y座標-18.2に位置する。直径約2.8m、深さ0.6mを測る。底面は凹凸が激しい。黒褐色土の埋土中に地山に似た礎混じりの層が底から浮いた状態で入り込んでいる。倒木痕であり、SP647に壊される。繩紋土器1が出土した。

**SK38**（図版15の2）：門前地区ほぼ中央、X座標8.2、Y座標-28.0に位置する。直径約2.3m、深さ0.25mを測る。底面には細かい凹凸が広がる。埋土は拳大の礎を多く含む黒褐色土である。倒木痕であり、遺物は出土していない。

**SK51**（図版52）：東壁沿い北寄り、X座標35.6、Y座標-13.3に位置する。南北長0.73m、東西長0.82mを測り、遺構東側は壁にかかっている。深さは約0.1mを測り、底面は平坦

である。埋土は極暗赤褐色砂質土である。SP756・SP757に壊され、縄紋土器1点が出土した（図版58の12）。

**SK60**（図版15の1）：門前地区中央よりやや北寄り、X座標-20.8、Y座標-22.8に位置する。平面形は長径4.52m、短径3.14mの南北に長い楕円形を呈し、深さは0.54mを測る。黒褐色の埋土中央に、疊混じりの地山に似た層が幅約1.0m、厚さ約0.3mにわたり底から浮いた状態で堆積している。倒木痕であり、SK54・SK59に壊される。遺物は出土していない。

**SK73**（図版52）：門前地区北西寄り、X=35.6、Y=-13.3に位置する。平面形は長径4.66m、短径2.64mの東西に長い楕円形を呈し、深さは0.27mを測る。埋土は炭と砂粒が混じる黒褐色粘質土である。SK74を壊し、SP759・SP760・SP806に壊される。土師器皿38点、青磁碗1点、古瀬戸折縁深皿1点、北部系山茶椀1点、珠洲すり鉢12点、鉄釘8点、鉄製品1点、縄紋土器7点が出土した（図版58の13～23、59の24～32）。

**SK77**（図版16の2・50）：西壁沿いやや北寄り、X座標19.8、Y座標-35.2に位置する。長径1.38m、短径0.68m、深さ0.1m、底部は平坦となる東西に長い溝状の遺構である。底部には20～30cm大の6個の礫が中心を開むように出土した。この礫は遺構底部に接している。埋土は黒褐色粘質土である。青磁1点、鉄刀子1点、産地不明陶器1点、炭が出土した（図版59の33）。

**SK78**（図版51）：門前地区東南寄り、X座標-0.1、Y座標-15.7に位置する。直径約0.5m、深さ約0.26mを測る。埋土は黒褐色土である。SK06・SP45・SP741・SP858に壊される。土師器皿1点が出土した（図版59の34）。

**SK79**（図版52）：門前地区南寄り中央、X座標-3.6、Y座標-23.5に位置する。直径約0.8m、深さ0.23mを測る。埋土は黒褐色土である。SK15を壊し、SP706・SP881に壊される。瀬戸美濃天目椀1点が出土した（図版59の35）。

（中島義人）

その他の遺構：ここでは、上記した遺構以外で特筆すべきものについて述べる。

**SX02**（図版41）：調査区西端のX座標40.6～41.3、Y座標-33.4～-26.7の調査区北壁西端部に位置する掘込み状遺構であり、調査区外にのびる。検出長は約6.4m、深さ約45cmである。埋土は黒褐色弱粘質土である。出土遺物は土師器皿1点、伊万里1点、縄紋土器1点である（図版59の36）。西壁及び北壁断面での観察から、包含層である第28層黒褐色土の上面からの掘り込みと思われる。今回の調査区では、調査区北西端において西側の掘肩をわずかに検出したのみであり、遺構の形態や性格については不明である。江馬氏館廃絶後の遺構と考え得る。

（田中慎太郎）

**SD01**（図版41）：調査区の中央やや南より、X座標-7.9～-0.3、Y座標-36.4～-13.5に位置する。検出長は約24.21m、幅約71cm、深さ約7.8cmである。埋土は黒褐色土である。

出土遺物は縄紋土器 2 点、石器 8 点、鉄製品 1 点である（図版60の52・53）。

この溝状造構の時期は、造構検出面において、SK03を除いた他の全ての造構を壊していることから、近世以降の造構と考え得る。（宮崎順一郎）

(c) 遺 物（図版57~60・62~66）

門前地区から出土した遺物は総数241点である。整理に際してはそのすべてについて、出土地点、造構、層位、種類、器種、分類、法量、個体数、破片数を記録して資料化した。その内訳は縄紋土器34点・石器16点の縄紋時代遺物の他に、中世の土器・陶磁器が174点、近世の陶磁器が2点、鉄製品・鉄片15点である。この他に漆塗模が出土している。

また中世の食器資料については、その組成比率を第1表に示している。かなりの数の建物関係造構の検出に比較して、土器・陶磁器の出土はごく僅かである。このうち陶磁器類は最盛期の江馬Ⅱ期のものよりⅠ期の資料が多い。なお館内を含めた本遺跡の中世食器資料出土傾向については、第4章第3節において考察している。また庵を埋納する祭祀に珠渦甕を用いた例を確認した。

第1表 門前地区出土食器の種類器種別組成表

種 類	器 種	破 片 数	個 体 数
土 器	皿	69	1.26 (35.4%)
瓦質土器	火鉢	1	0
珠 洋	壺	1	0 (※ %)
	甕	72	0.63 (17.7%)
	すり鉢	15	0.96 (27.0%)
庵 戸 美濃	天目茶碗	4	0.25 (7.0%)
	皿	4	0.36 (10.1%)
	不 明	1	0 (※ %)
白 瓷 系 陶 器	碗	1	0 (※ %)
貿易陶器	青磁碗	5	0.1 (2.8%)
	盤	1	0 (※ %)
総 計		174破片	3.56個体分

(個体数は全て口縁部計測法による)

また個々の遺物の記述については、貿易陶磁は国立歴史民俗博物館集成の分類（国立歴史民俗博物館1993）に、瀬戸美濃は藤澤良祐氏の分類・編年（藤澤1986・1991a）に、珠洲は吉岡康暢氏の分類・編年（吉岡康暢1994）に、瓦器・土師器は1994年度調査報告（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）の分類に従っている。なお各遺物の詳細については別表11を参照されたい。

（中田書矢）

**SB05出土品**（図版57・62の1）：1は金钢板である。長辺約1.6cm、短辺約1.4cm、厚さ約0.08cmである。一方の側面には欠けた痕跡があり、他方の面には剥離した痕跡がある。全体的に腐食しているが、一部塗金した部分が残っている。用途は不明である。

**SX01出土品**（図版57・58・62・63の2～7）：2は土師器皿である。T-4類に属し、口径約8cmを測る。胎土は砂粒をわずかに含み焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

3は珠洲すり鉢である。口径約41cmを測る。口縁端部と口縁基部を押さえ、撫でている。口縁端部を水平に挽き出しており、口縁端面を凹み気味に仕上げている。胎土は2mm大の砂粒を含み、やや粗い。焼成は還元硬質である。色調は灰色を呈する。珠洲IV期後半に属し、14世紀前半のものである。

4は珠洲甕である。口径約50cmを測る。口縁形態は短い頸部を深めに折り返して方頭状を呈する。体部外面には3cm幅に7条の平行叩き目を施し、内面には當て具痕がある。また内面の上位の位置約15～30cmの範囲で細かい剥離痕が水平・帯状にめぐる。このことは甕の内容物が液体であり、液体の凍結等が原因によって内面が劣化したものと考え得る。剥離の範囲は液面が上下する範囲に相当するのであろう。胎土は礫を含み、密である。焼成は還元硬質であり、色調は青灰色を呈する。珠洲IV期後半に属するものである。

5・6は鉄釘であり、全体に錆が付着している。5は長さ約2.5cm、頭部の下、幅約0.5cmの位置で屈折している。6は長さ約4.8cm、頭部の下幅は約0.4cmである。

（井手口恵美）

7は打製石斧である。全長13.7cm、全幅6.6cmを測る。くびれをもつ撥形であり、石材は硬質凝灰岩である。後正面を磨いており、刀部に若干の刃こぼれがある。

**SK01出土品**（図版58・63の8）：8は繩紋土器の深鉢の口縁部破片である。口径約21cmを測る。口唇部に凹線を施し、外面に炭化物が付着している。胎土には細かい小白石を含み、焼成は良好である。繩紋後期後葉～晩期前葉のものである。

**SK06出土品**（図版58・63の9）：9は上師器皿である。T-6類に属し、口径約11cm、器高1.7cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は黄橙色を呈する。

**SK10出土品**（図版58・63の10、11）：10は土師器皿である。T-6類に属し、口径約11cmを測る。内面に顯著なススの付着がみられる。胎土は密であり、色調は良好である。色調は黄橙色を呈する。

11は瀬戸美濃の丸皿である。口径は約11cmを測る。口縁部内面に小突起もつ。全面に緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、色調は灰黄色を呈する。大窯第3～4小期に属する。

**SK51出土品** (図版58・63の12) : 12は繩紋土器深鉢の口縁部破片である。口縁部形態は波状を呈し、内側に折り返す、折り返し口縁である。口縁端部に半載竹管による爪形の刺突を施す。頸部には半隆起線による区画をもち、半隆起線は空間に刻みをもつ。胎土は粗く、雲母を含み、焼成は良好である。色調は黄灰色を呈する。繩紋中期前葉のものと考えられる。

**SK73出土品** (図版58・59・63・64の13～32・第2表) : 13～19は土師器皿である。いずれも胎土は密であり、焼成は良好であるが、色調には差異がある。13はT-1類に属する。口径は約11cmであり、色調は灰黄色を呈する。14はT-1類に属し、口径約11cmを測る。色調は灰白色を呈する。15はT-1類に属し、口径約11cmを測る。色調は灰黄色を呈する。16はT-1類に属し、口径約12cmである。色調は淡黄色を呈する。17はT-1類に属し、口径約13cmを測る。色調は橙色を呈する。18はT-2類に属し、口径約8cmを測り、色調は灰白色を呈する。19はT-4類に属し、口径約8cm、器高1.1cmを測る。色調は淡黄色を呈する。

20は瀬戸の折線深皿である。口径約24cmを測る。体部は直線的にひらく。口縁部は外折し、端部上面は浅く凹む。全面に淡緑灰色の灰釉を施す。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。古瀬戸中期前半に属し、14世紀のものである。

21～24は珠洲すり鉢の口縁部破片である。21は口径約30cmを測る。口縁部はやや外傾して面をとる。胎土はやや粗く、焼成は還元硬質である。色調は青灰色を呈する。珠洲Ⅲ期に属し、13世紀後半のものである。22は口径約29cmを測る。口縁部はやや内傾して面をとる。胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は還元硬質である。色調は青灰色を呈する。珠洲Ⅳ期前半に属し、14世紀のものである。23は口径約35cmを測る。口縁部はやや内傾し、端部上面はやや凹む。胎土は砂粒が混じり、焼成は還元硬質である。色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期後半に属し、14世紀後半のものである。24は口径約30cmを測る。体部は内湾気味にひらく、口縁端面は、ほぼ水平である。胎土は小石をわずかに含み、焼成は還元硬質である。色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀のものである。

25は珠洲すり鉢の底部破片である。底径約11cmを測る。底部には静止糸切り痕を残す。胎土は小石をわずかに含み、焼成は還元硬質である。色調は灰色を呈する。珠洲Ⅳ期に属し、14世紀のものである。

26～32は鉄釘であり、全体に鏽が付着している。26は長さ約2.0cm、頭の下の幅約0.5cmを測る。27は長さ約2.5cm、頭の下の幅約0.5cmを測る。28は長さ約2.8cm、頭の下の幅約0.4cmを測る。29は長さ約3.1cm、頭の下の幅約0.2cmを測り、屈折している。30は長さ約3.9cm、頭の下の幅約0.5cmを測り、屈折している。31は長さ約4.2cm、頭の下の幅約0.7cmを測り、屈折している。32は長さ約5.5cm、頭の下の幅約0.4cmを測り、屈折している。

第2表 門前地区 SK73出土食器の種類別組成表

種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	38	0.45 (35.2%)
珠 洞	すり鉢	12	0.81 (63.3%)
瀬戸美濃	折縁深皿	2	0.02 (1.5%)
貿易陶磁	青磁碗	1	0 (※%)
総計		53破片	1.28個体分

(個体数は全て口縁部計測法による)

SK73からは上記の遺物以外に体部小片のため図化しなかったが、13世紀後半～14世紀前半の鎌連弁文の青磁碗が出土している。この土坑から出土した土師器は上述したように、1994年度報告で設定した口縁部に強い撫で調整を施し、江馬最盛期以前の14世紀中ごろのものと推定した土師器T-1・T-4類に相当する。SK73出土の遺物は14世紀を下限としており、本遺物群は江馬氏館整備前の初期の遺物組成を良く示している。第2表はSK73の食器組成である。

(田中幸生)

**SK77出土品** (図版59・64の33) : 33は刀子である。全長24.4cmを測る。刀身部は長さ約17.4cm、幅約2cm、厚さ約0.3cmである。茎部は長さ約7.0cm、幅約1.4cm、厚さ約0.2cmを測り、直径0.2cm程の目釘穴をもつ。

**SK78出土品** (図版59・64の34) : 34は土師器皿である。T-6あるいはT-7類に属し、口径約13cmを測る。胎土は1mm大の小石を含み、焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。

**SK79出土品** (図版59・64の35) : 35は瀬戸美濃の天目茶碗である。口径約11cm、器高6cmを測る。体部下方はほぼ直線的にひらき、口縁部は直立して、端部は短く外折する。黒褐色の鉄釉を施し、高台周辺には部分的に暗赤褐色の錆釉を施している。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。大窯第3小期に属し、16世紀前半のものである。

**SX02出土品** (図版59・64の36) : 36は土師器皿である。T類に属し、口径約9cmを測る。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

**SP32出土品** (図版59・64の37) : 37は瓦器の火鉢の体部破片である。外面は鏡磨き調整によって平滑に仕上げ、口縁部に格子状の印文を施す。内外面は灰色を呈している。胎土は石英を若干含み、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。15世紀のものである。

**SP125出土品** (図版59・64の38) : 38は繩紋土器の深鉢の口縁部破片である。口径約20cmを測る。口縁部内外面に炭化物が付着している。胎土には雲母や小石を含み、焼成は良好

である。色調は黄橙色を呈する。縄紋後期後葉から晩期前葉のものである。

**SP281出土品** (図版59・64の39) : 39は縄紋土器の深鉢の口縁部破片である。口径約24cmを測る。口縁部内面にRL縄紋を横位に施す。外面には円形刺突文と爪型文を並行して施している。胎土には小白石を含み、焼成は良好である。色調は淡黄色を呈する。縄紋中期初頭のものである。

(本村 徹)

**SP307出土品** (図版60・65の40) : 40は縄紋時代の石鏡である。縦幅3.0cm, 横幅1.6cm, 厚さ0.3cm, 重さ1.4gを測る。有茎であり、やや抉りが入る。石材は安山岩である。

**SP411出土品** (図版60・65の41) : 41は土師器皿である。T-1類に属し、口径は約10cmを測る。胎土は砂粒をわずかに含み、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

**SP419出土品** (図版60・65の42) : 42は鉄釘である。全体に鏽が付着している。長さ約3.2cm, 幅約0.6cmを測る。

**SP537出土品** (図版60・66の43) : 43は石臼である。上臼であり、直径は26cmを測る。上面に窪みがあり、中央よりやや寄った部分に円形の穴が貫通する。また、側面中位には2.0cm×5.0cmの角型の挽き手孔がみられる。下面中央部には芯棒穴がみられ、そこから放射状に刻み日を施す。また下面の一部に被熱した痕跡がある。石材は凝灰岩である。

**SP782出土品** (図版60・65の44) : 44は土師器皿である。T類に属し、口径約13cmを測る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色を呈する。

**過構面上出土品** (図版60・65の45~47) : 45・46は土師器皿である。45はR類に属し、口径約13cmを測る。胎土はやや砂粒を含み、焼成は良好である。色調は浅黄色を呈している。46はT-6類かT-7類に属し、口径は約12.5cmを測る。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は不良である。色調は浅黄色を呈する。

47は瀬戸美濃の丸皿である。口径約11cmを測る。体部は内湾ぎみに強く立ち上がる。口縁部は一段くぼんで肥厚し、端部は丸く收まる。胎土は密であり、灰白色を呈す。焼成は良好である。暗赤灰色の鏽釉を全面に施し、外面はその上に黒褐色の鏽釉を縞状に施している。大窯第3小期に属し、16世紀前半のものである。

**第6層黒褐色弱粘質土出土品** (図版60・65の48) : 48は青磁杯の底部破片である。高台径は、約3cmを測る。内面見込みに、双魚紋を貼り付ける。胎土は灰色を呈して密であり、明緑灰色の釉が厚くかかる。全面施釉した後に、外底の釉を掻き取って露胎としている。露胎部分と施釉部分の境は、赤色に発色している。13世紀後半~14世紀中頃のものである。

**第3層黒褐色弱粘質土出土品** (旧耕作土層、図版60・65の49~51) : 49は青磁碗である。口径約11cmであり、体部は弯曲ぎみに立ち上がる。胎土は密であり、灰色を呈す。釉調は明緑灰色を呈す。龍泉窯系碗E類に属し、15世紀初め~15世紀中頃のものである。

50は土師器皿である。T-6類かT-7類に属し、口径約12cmを測る。胎土は砂粒をやや含み、

焼成は良好である。色調は胎土が黒色、内外面は浅黄橙色を呈する。

51は、瀬戸美濃の志野丸皿である。口径約13cm、高台径8cm、器高2.6cmを測る。体部は直線的にひらき、口縁端部がわずかに外反する。底部は削り出し輪高台である。高台内の削り込みは浅く、やや内反りぎみである。胎土は砂粒を含んでやや粗く、灰白色を呈す。焼成は良い。灰白色の長石釉を全面に粗く施しており、底部外面には、釉だまりができる。大窯の第10小期に属し、17世紀前半頃のものである。

**SD01** (図版60・65の52, 53) : 52は鉄釘である。全体に鏽が付着している。長さ約4.2cm、頭部の下幅約1.2cmを測る。

53は打製石斧である。著しく欠損し、形態は不明である。長さ8.3cm、幅7.3cmを測る。  
石材は凝灰岩である。

(山崎雅恵)

#### (d) 小 結

以上のように1995年度江馬氏下館跡門前地区の調査により、館内だけではなく館外にも数多くの営みがあったことが判明した。そして13世紀後半に始まり、15世紀の最盛期をへて、16世紀以後に衰退していくという基本的な在り方は、館内とほぼ同じ歩みをたどったものである。同時に初期には総柱建物が散在する景観であったが、館において堀を掘削して庭園を造成した最盛期には、館内との顕著な差異が生じたことが明かとなった。これは当時の全体としての遺跡構造を理解する上で、重要な知見となるものである。

その主要な点は、館内には整地土層があり礎石建物があつて土器・陶磁器、特に京都系土器がかなり出土するのに対して、門前地区には整地土層がなくすべて掘立柱建物であり、土器・陶磁器の出土がごくわずかであることである。館の整備は単なる領主の生活の変化だけではなく、地域のより強固な身分制的構造の成立を示すものであろう。

また館外においては、焼物ではなく木と鉄による生活があったようである。漆器椀皿類と曲物や桶という木製貯蔵具、また鉄鍋・釜があれば何ら不自由はなかつたであろう。土器類が安価な食器ではなく、儀礼的食器であったことは明らかである。そして遺跡構造と儀礼とに表われる階層化と、生活水準の同質化はいずれも中世社会の重要な動向である。これらの諸点については、考察においてさらに分析を加えることとする。

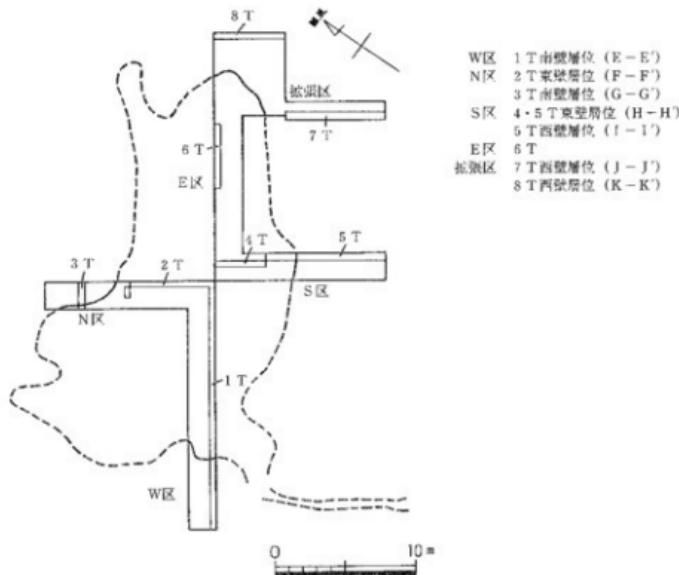
(宇野隆夫・大平愛子)

#### 4 園池地区の調査成果

江馬氏下館跡の庭園については古くより「五ヶ石（御花石）」の伝承があり、今も現存する多くの景石によってかつての姿を偲ぶことができる。そして1973年から始まった発掘調査によって、池汀線・排水路・景石等の主要な遺構配置が明らかとなっている。

1995年度の調査は、園池の構造を把握すること、またその築造・埋没年代を確認することを目的として実施した。また各トレンチを隣接する館内建物や南堀まで拡張し、これまでに調査した遺構との関係から、園池を江馬氏館変遷のどの段階で造成したものであるかを解明する努力を行った。

調査にあたってはまず地上に立てた状態で現存する景石の実測図を作成した。調査地区は、園池推定範囲のはば中央を通るように、L字形トレンチを2本組合わせて、十字形に設定した。これらトレンチについて、北方向をN区、西方向をW区、南方向をS区、東方向をE区とした（第10図）。なおE区では、南方向に拡張区を設定している。発掘は、まず1978年度調査埋め戻しの際に遺構保存のために入れた川砂層を除去し、検出面の再検出を行った。



第10図 園池地区のトレンチ設定図（縮尺1/400）

池底や汀部の地山層までの確認は、各トレンチに設定したサブトレンチ(1T~8T)によって行った。このうち層位図を作成したトレンチは、1T~5T、7T、8Tの7本である。以下はサブトレンチで確認した層位を使って説明するが、文章中では次のように表現する。

**1T : 1T南壁層位 (E-E')**

**2T : 2T東壁層位 (F-F')**

**3T : 3T南壁層位 (G-G')**

**4・5T : 4・5T東壁層位 (H-H')**

**5T : 5T西壁層位 (I-I')**

**7T : 7T西壁層位 (J-J')**

**8T : 8T西壁層位 (K-K')**

また園池の基本層序は以下の通りである。①川砂層（1978年度調査終了後、遺構保存の為に埋めたもの）、②池堆積層（池の造成から廃絶までに堆積した土層）、③盛土層（園池の造成時に池の汀部、中島、あるいはその他の施設を造った盛土層）、④基盤層（園池築造時の基盤層）、⑤地山。

なお、④園池築造時の基盤層は、1994年度報告の「地山1」であり、館の三方を囲む堀の掘り込み面の層である。  
(芳賀万里子)

#### (a) 池 (図版21~40・53~56)

**池の汀線・規模：**池の形態は1978年度調査概報によると、東西に長い不整形円形であり、北側については、その中央付近において北西方向に張り出すように湾曲し、S字を描きながら池尻に至る。南側は後世の搅乱を受けており不明瞭であるが、おおよその推定は可能であり、上手から南方向に緩やかな弧を描きつつ池尻に向かい、池尻付近において大きく南方向に張り出し排水路へと続く。今回の調査では東西南北の各方向にトレンチを設定しており、その各方向において池汀部の確認を行った。その結果、池は基盤層を掘り込んで造成しており、汀部付近の池底には共通して黄褐色砂ブロックを含む上層が存在することが判った。なお池には景石、汀石、中島、滝口、洲浜などの遺構が伴う。

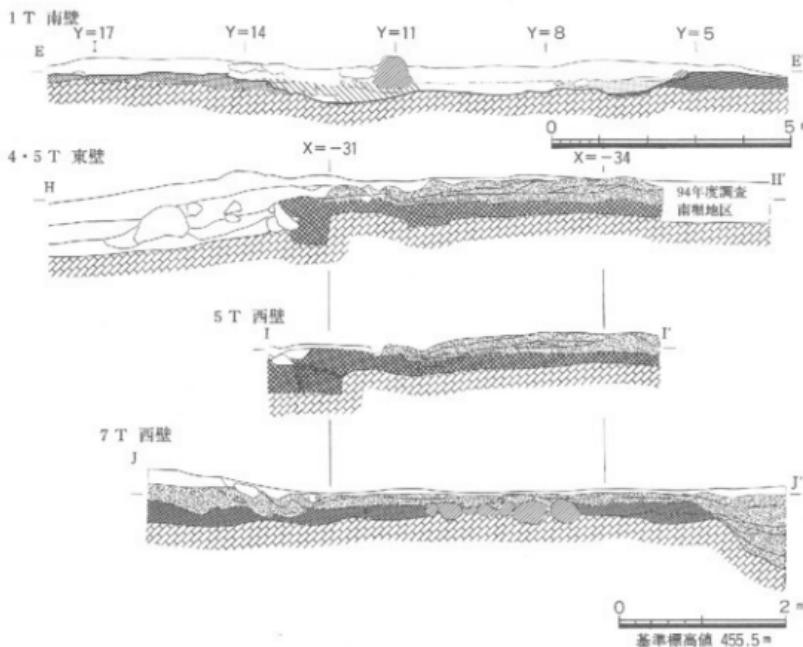
以下に、池汀部の各調査結果を記す。

西汀部は汀石の残存状況が良好であり、川原石による石列がある（第12図 景石No58~61・図版28の2）。1TではY座標5.0付近において基盤層・地山を大きく掘り込んでいる。

北汀部は汀石の残存状況が悪く、明確ではない。特に掘り下げは行わなかったが、池汀部の黄褐色砂ブロック混じり土はN区でも確認しており、この層が途切れるX座標-17.0~-13.0付近を北汀部と判断した（図版33の1）。

南汀部は汀石の抜き取りなど後世の搅乱を受けていて不明瞭である。4・5T (H-H') のX座標-31.0~-30.0付近において基盤層が途切れること、また黄褐色砂ブロックを含む土層がこの位置から池底にかけて存在することから、この付近を南汀部と判断した（図版36の1）。

東汀部は、洲浜状の敷石周辺に盛土を行ったY座標30.0~34.0付近であると推定した（図



第11図 園池地区の土層堆積図

版22の1)。

以上の知見から、今回確認した園池の規模は、東西約28m、南北約14mである。また澁口付近と池底の最も深い部分より求めた園池全体の比高は約1mを測る。

池汀部に共通して存在する黄褐色砂ブロックを含む層については、人為的な盛土層の可能性が高いが、個々の景石を据えるためのものではない。

池底の状況：池底は特に石や粘土を敷いたりせず、地山を掘削してそのまま池底として

使用している。保水能力については1978年度調査概報に詳しいように、水の補給があれば溝水するようである。なお堆積層の自然科学的分析は本書の付章に詳しいが、それによると水が溜まつたり、潤れたりしていたようである。

池堆積層は、1Tにおいては第2層黒褐色土、2Tにおいては第2層黒褐色土から第4層黒褐色弱粘質土、4・5T(H-H')においては第5層黒褐色土から第7層黑色土である。これら池底の堆積層からは土師器皿、瀬戸美濃、珠洲等の中世遺物が出土しており、全て館最盛期である15世紀を中心とするものである。この中において最も新しい時期の遺物は、16世紀第2四半期の瀬戸美濃皿(図版61の8!)である。

**景石:** 景石に用いた主な石材は、遺跡の背後、東側にひかる山地に分布する船津花崗岩と高原川水系で採取されたであろうホルンフェルスの2種類である。そして大型の景石には船津花崗岩を、小・中型の景石には船津花崗岩に加えてホルンフェルスを使用している。なお石材については、神岡町文化財審議会会長若田俊一氏に御教示を頂いている。また石材利用については第4章第2節において、さらに考察を加えている。

S区の景石No.129・130では景石を据えた際の掘形を確認し(図版25の2), 裏込め土と根石によって据えたと考えた(図版37の1)。またNo.129・130は、その周りに掘形を認めたため、原位置を保っていると判断した。

E区6Tでは景石No.77の東側から掘形を検出し、No.77は原位置から転倒したと考えた(図版24の2)。裏込め土中からは土師器皿が出土している(図版61の63)。

N区景石No.23は原位置近くに転倒したであろう景石である(図版33の2)。No.23の北側にはこれを据えていたと推定する根石No.17~20を検出した。No.17~20の最長軸は17~32cmである。なおW区では汀線の近くに、景石を据えていたと考えられる根石を検出した(No.54~57、図版29の1)。No.54~57の最長軸は16~24cmである。

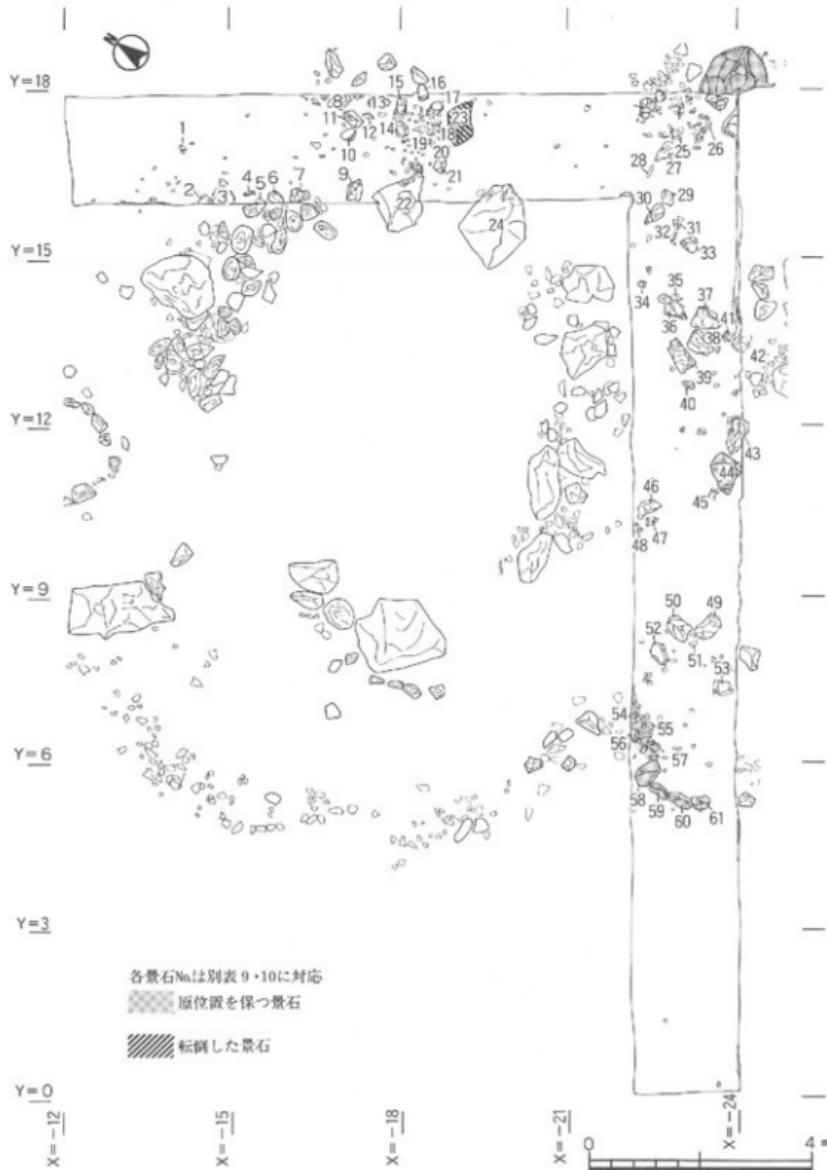
W区では景石No.58~61の河原石を組んだ汀綫を確認した。これらは原位置を保っているが、南端の一個を欠く。

E区の、X座標-26.0~-24.0、Y座標21.0~-24.0の位置では、河原石を乱雑に敷いている(図版25の1)。これらは汀石として用いたであろうホルンフェルスが多いが、掘形がなく、堆積層中から出土した。そのため、後世抜き取られた汀石が池底部分に投げ込まれたものと推定できる。

以上のように本園池の景石は、ほとんどが掘形に据えて裏込め土を入れて固定し、かつ根石をもつものが多い。また個々の景石について、原位置を保っているもの、原位置から倒れた状態のもの、後世に移動したものとの区別を一定程度行うことができた。この結果は第12・13図に示している。

**中島:** 中島造構の築造状況は1T、2Tにおいて確認した。その結果、中島はその裾部付

江馬氏城館跡 II



第12図 園池地区の景石配置図(1) (縮尺1/100)



第13図 園池地区的景石配置図(2) (縮尺1/100)

近において地山を深く掘り下げて後に、人工的に土を盛り上げて構築したものであることが判った。

中島の汀石はほとんど旧状をとどめておらず正確な規模・形状等は判らないが、1978年度調査概報と今回の調査から一定の推定が可能である。その規模は、裾部分において東西約7m以上、南北2.5m以上であり、池本体と同様に東西に長いようである。中島頂部と池底の比高は調査部分において平均0.5mである。

中島の築造について以下に述べる。1Tでは、Y座標13.0付近において地山を掘り込むが、これが最初の中島築造に伴う掘削の西端部である。2Tにおいては、X座標-21.0付近において地山が盛り上がる部分がある。この盛り上がりは中島遺構の基部にあたる可能性があり、中島の北端部と推定する。

中島は人為的に土を盛り上げて構築したものであるが、それを構成する土層（1T第3・9・10・11層）上方部には、地山を掘削する作業において生じたであろう黄褐色砂ブロックが多く混じっている。そして下層にいくに従って黄褐色砂ブロックが存在しなくなる。詳細は不明であるが、この下層の黒色土は基盤層の掘り残しである可能性が高いであろう。

中島の裾部には粘質土（1T第8層）が僅かに堆積しており、おそらく水際になった部分と推定する。更に、この粘質土の上には礫砂混じり土が堆積しているが、この礫砂混じり土に景石No.44（第12図）を据えている。これについては、中島の改築などに際して景石を据えた、あるいは据え直した結果である可能性を考えておきたい。

**導水施設：**導水施設については1978年度調査概報によると、導水口と推定できる施設を3個所検出しているが、それに続く導水路は不明であるとしている。今回の調査では、その中から1978年度調査において滝口と推定した個所の再調査を行った。滝口と推定するのは、X座標-27.0～-25.0、Y座標29.0～32.0の範囲にある巨石が傾いた状態で立つ景石No.135・136を中心とした石組み遺構である（第12図）。またその下方には洲浜状の敷石が広がる（巻首図版2・図版21の2・56）。滝口周辺では全面にわたって盛土を行っていて、等高線に示されるように、他の個所に比べて起伏が著しい。また滝口周辺から洲浜下方部にかけての比高は約0.8mである。

この滝口の位置は、池の最東端であり、山側に最も近く位置することから、山から池に水をひく導水路の検出を試みた。しかし南堀方向への拡張トレンドにおいても、8Tにおいても導水路は確認できなかった。今後の調査に期待したいが、館廃絶後の耕地化に際して削平を受けたか、滝口は形のものであり実際には降水と桶等によって運搬した水とによって滞水させていたかのいずれかであろう。

なお洲浜状の敷石の面からフイゴの羽口と打製石斧が出土している（図版61・67の86）。

（向井裕知）

### (b) 関連施設

**基本層序：**N区は館の建物がある位置まで含めて設定し、層位関係の確認を行った。その結果、3Tでは第9～11層が、園池の基盤層に対応すると判定できた。8Tでも第5層が基盤層である。この園池構築時の基盤層は1994年度調査では「地山1」としたものであり、館の三方を囲む堀はこの面から掘り込んでいる。3T第7・8層、8T第3・4層はこれら基盤層上面にさらに盛土整地したものである。後述するSB06はこの3T第7層（盛土整地層）の上面に建築している。3T第3～5層の性格は不明であり、8T第1層は滝口付近の盛土層である。なお今回調査の地山は1978年度調査の地山でもあり第1期建物の遺構面となっているものである。また今回調査の園池構築時の基盤層は1978年度調査では第2～3期の遺構面にあたる。

**池関連遺構：**池と関連する遺構としては、1978年度調査で検出したSB06の根石、南堀土壘、石組遺構、小石列、その他がある。なおW区のY座標0.0～5.0付近は遺構が存在しない場所のようである。

**SB06**（図版33の1・54）：N区では、X座標-14.0、Y座標17.0の地点において、1978年度調査で確認したSB06の礎石根石の一部を再検出した。SB06は東西約13m、南北約9mの東西棟建物であり、園池と主軸を同じくする会所風の礎石建物である。今回確認した礎石根石は、その東南端のものである。この根石は、盛土整地層3T第7層上面に据えているため、SB06の建築は、園池の造成後であると考え得る。

**南堀土壘**（図版38・40の1・55）：1994年度調査の報告において、南堀（旧堀）の埋土が館内部から流れ込んだものであり、また地籍図の調査から、小島道裕氏が堀の内側に土壘が存在したことを推定している。そのためS区は1994年度調査の南堀地区まで含めて設定し、南堀と園池との層位関係の確認と、土壘の存否の確認を行った。

土壘については、S区4・5T（H-H'）において、幅約3mの第11～17層の盛土層を、X座標-34.7～-31.6の範囲において確認した。5T（I-I'）では第1～10層が、盛土層である。これらは全体的に小礫が多く混じり、固く締っている。同様の層は7Tにも存在し、また第5・7～11層は南堀（旧堀）埋土であり、第7層オリーブ褐色砂質土が盛土部分から南堀（旧堀）に流れ込んでいる。

これらの盛土層は約3mの幅で堀にそってのびるものであるため、土壘の基底部である可能性が高い。従って南堀（旧堀）の埋土は、南堀廃絶時にこの土壘を壊して埋めたものであろう。

**石組遺構**（図版40の2・55）：拡張区のX座標-34.0～-31.0付近において、石組遺構を検出した。石組は検出面で約1mの幅であり、すべて船津花崗岩である。園池構築時の基盤層である7Tの第14・15層に対応するものであり、この上層に盛土層がのる。そのた

め石組は、圓池構築以前の遺構である可能性が高いが、その性格は不明である。

**小石列**（図版36の1）：S区のX座標-32.0付近において、小型の石からなる石列を検出した。この石列は、1978年度調査においてS字形石組みとしたものの一部である。石列は盛土層（5T第1層）上面にのるものであり、土壌を削平して南堀を埋めた後に設置した遺構である。

**その他の遺構**（図版54・55）：W区1TのY座標0.7地点では、圓池構築時の基盤層から掘り込む遺構を検出した。その埋土は第17層黒褐色土・第18層灰黄褐色砂である。第18層からは二次被熱を受けた土師器皿が出土している（図版61の78）。また1TのY座標1.6地点からも基盤層を掘り込んだ遺構を検出した。埋土は第16層オリーブ褐色土である。

S区ではX座標-31.0付近において、地山を大きく抉った遺構を検出した。これを圓池造成時の基盤層が覆うため、圓池成立以前の遺構であると判断した。

N区3Tでは第7層（盛土整地層）上面から掘り込んだ遺構を検出した。埋土は第1層暗褐色粗粒砂、第2層褐色粗粒砂である。またこの下層に第9層（基盤層）から掘り込んだ遺構がある。埋土は第6層黒色粘質土である。断面の層位観察のみからは、第3～5層の性格は充分には判らない。

拡張区8Tでは盛土整地層である第3層黒褐色土上面から掘り込んだ遺構を検出した。埋土は第1層黒褐色土であり、淹口付近の盛土層である。  
（芳賀万里子）

#### (c) 遺物（図版60・61・65・67）

**表土出土遺物**（図版60・65の54～61）：54～57は手づくね成形の土師器皿であり、すべて胎土は密であり焼成は良好である。54はT-1類に属し、口径は約11cmを測る。色調は黃白色を呈する。55はT-5類に属し、口径約12cmを測る。色調は橙色を呈する。56はT類に属し、口径約12cmを測る。色調は黃白色を呈する。57はT-6類かT-7類に属し、口径約12cmを測る。色調は浅黄橙色を呈する。

58は中国製青磁碗である。口径約15cmを測る。体部外面に鎬蓮弁文を持つ。釉調は明緑灰色を呈する。龍泉窯系碗B1類に属し、13世紀後半～14世紀前半頃のものである。59は龍泉窯系の青磁盤である。口径約30cmを測る。口縁を水平に折り曲げ、さらに端部を垂直につまみあげて仕上げてある。口縁端部には輪花状の抉り込みを持つ。口縁部の内面には一条の寛書き沈線を施している。釉調は緑灰色を呈する。

60は中国製青花皿である。口径約12cmを測る。口縁内外面に界線を持ち、外面体部に唐草様を施す。16世紀初頭頃ものであろう。

61は近世陶器の丸碗である。口径約13cmを測る。透明釉を施し、器壁には嵌入が多い。釉調は浅黄色を呈する。18世紀中頃以後の京焼である可能性がある。

**サブトレンチ出土遺物**（図版61・67の62～87）：62～79は手づくね成形の土師器皿であ

る。その多くは胎土に砂粒をほとんど含まず緻密であり、焼成は良好であるが、63・70・71・72・74は胎土に若干の砂粒を、69は長石粒を含んでいる。なお70・79は、口縁部内外面にはタールが付着し、燈明皿として使用したものである。

62はT-5類に属し、口径約8cmを測る。色調は浅黄橙色である。63はT-5類に属し、口径約9cmを測る。色調は黄橙色を呈する。64はT-6類かT-7類に属し、口径約9cmを測る。体部に指押え痕が浅く残る。色調は浅黄色を呈する。65はT-6類かT-7類に属し、口径約10cmを測る。色調は灰白色を呈する。66はT-6類かT-7類に属し、口径約10cmである。色調は浅黄色を呈する。67はT-6類に属し、口径約10cm、色調は黄橙色を呈する。68はT-6類かT-7類であり、口径約10cmを測る。色調は浅黄橙色を呈する。69はT-6類かT-7類に属し、口径は約11cmである。色調は橙色を呈する。70はT-5類に属し、口径約11cmである。色調は内面が浅黄橙色、外面が灰白色を呈する。71はT-2類に相当し、口径約12cmである。色調は黄橙色を呈する。72はT-6類かT-7類に属し、口径約12cmを測る。色調は黄褐色を呈する。73はT-2類に属し、口径約11cm、器高約1.7cmを測る。色調は灰白色を呈する。74はT-6類かT-7類に属し、口径約11cm、器高約1.4cmを測る。色調は黄白色である。75はT-6類かT-7類に属し、口径約12cmを測る。色調は黄白色を呈する。76はT-6類かT-7類に属し、口径約12cm、器高約2.2cmを測る。色調は浅黄橙色を呈する。77はT-6類かT-7類に属し、口径約12cmを測る。色調は灰褐色を呈する。78はT-6類に属し、口径約12cmを測る。色調は黄褐色である。79はT-8類に属し、口径約14cmである。色調は浅黄橙色を呈する。80は古代の土師器壊で、口径約7cmを測る。色調は浅黄橙色である。10世紀前半のものと考えられる。

81は瀬戸美濃の丸皿である。口径約10cmを測り、灰釉を施している。二次的に被熱し、灰釉は一部に残るだけである。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は黄灰色を呈する。大窯第3小期に属し、16世紀前半のものである。82は瀬戸美濃天目碗の体部破片である。体部下方は、やや丸みを帯びている。内外面に暗褐色の鉄釉を施す。胎土は密であり、焼成は良好である。色調は灰白色を呈する。

83は瓦器の火鉢である。口径約32cmを測る。口縁がほぼ垂直に立ち上がる筒形になるものである。内面を鏡磨きによって平滑に仕上げている。胎土に雲母片を多く含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈する。15世紀のものであろう。

84は壺器系陶器の壺である。口径約16cmを測る。全体に回転撫で調整を施し、自然釉がかかる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。色調は褐灰色を呈する。

85は鉄釘である。全体に錆が付着している。長さ約4.8cm、頭部の下幅約0.7cmである。

86はフイゴの羽口の先端部であり、基部が破損している。外面にけずり調整を施している。孔の直径は約2.2cmを測り、先端部に鉛滓が厚く付着する。基部の直径は約7.5cmを測ると推測でき、かなり大型のものである。色調は孔内面が黄橙色、外面が浅黄橙色、鉛滓

部分が黄灰色を呈する。現在分析中であるが、視覚的には削済に見える。

87は縄紋時代の彫形打製石斧である。基端部を欠損し、長さ12.7cm、幅10.2cmを測る。石材は凝灰岩である。

なお86・87は池の滝口付近において、洲浜状の敷石と混じった状態で出土した。また78は上坑埋土から、62-77、79-87は園池廃絶時の堆積層から出土している。このように園池造成時の基盤・盛土層からは縄紋時代遺物と中世の土器器皿などがまばらに出土し、これを埋める堆積層からは館最盛期に対応する土器器皿（T-6類・T-7類）・瀬戸美濃・瓦器等が多く出土している。これらの中において、最も時期が降る遺物は16世紀第2四半期の瀬戸美濃丸皿であり、この頃には池が埋った可能性が高い（図版61の81）。（平井晶子）

なお園池地区から出土した遺物は総数158点を数える。その内訳は、縄紋土器13点・石製品1点の縄紋時代遺物の他に、中世の土器・陶磁器片118点、近世の陶磁器片8点、フイゴ羽口4点、鉄製品・鉄片14点、石臼1点である。これらは池堆積層からの出土が目立ち、基盤層や盛土層からの出土は少ない。第3表では、中世の食器組成を算出している。この中において、土器器皿が75%という高率を占めていて、館内部での一般的な傾向と一致している（第4章第3節参照）。この構成は門前地区の食器組成と大きく異なる様相である。

また注目すべきものとしてフイゴ羽口がある。今後、館と職人の関係を考えていく上で重要な資料となるであろう。このことを考える材料としては、1978年度調査の館外トレチで検出した方形の堅穴住居がある。

第3表 園池地区出土食器の種類器種別組成表

種類	器種	破片数	個体数
土器器皿	皿	103	1.28 (75.6%)
瓦質土器	火鉢	1	0.04
瓷器系	壺・甕	3	0.11 (6.5%)
瀬戸美濃	天日茶碗	2	0 (※%)
	皿	2	0.09 (5.3%)
	すり鉢	2	0 (※%)
質易陶磁	青磁碗	2	0.07 (4.2%)
	盤	2	0.07 (4.2%)
	青花皿	1	0.07 (4.2%)
総計		117破片	1.69個体分

(個体数は全て口縁部計測法による)

## &lt;付&gt;1978年度調査における園池出土の遺物（第14図）

1978年度に神岡町教育委員会は、園池の池底に複数のトレンチを設定して調査を実施している。ここではその遺物の概要について、紹介することとする。出土遺物実測図は第14図に示した。

1～3は手づくね成形の土師器皿である。3点とも内面に不規則な撫でを施して、口縁部の撫でを省略する型である。T-6・7に類するものである。

6～9は瓦器の火鉢、10が風炉である。6・7は口縁部が肥厚しないまま強く内彎するものであり、胴張りの太鼓形と推定でき、第I類にあたる。8・9は口縁部が肥厚せずに強く内側に折り、上面を水平に作る型である。8は第II類に、9は第III類にあたる。いずれも15世紀代のものである。

11は珠洲すり鉢であり、口縁部を外削ぎに仕上げている。珠洲Ⅲ～Ⅳ期初頭のものである。12は珠洲の甕である。口縁部を短く「く」字状に屈曲させ、方頭に仕上げる。珠洲V期に当たる。

4・5は青磁の椀である。4は外面に鎮蓮弁文をもつ龍泉窯系椀B1類にあたり、13世紀後半～14世紀前半のものである。5は龍泉窯系椀B4類に属する線描きの蓮弁文椀である。15世紀から16世紀初め頃の年代のものであろう。

出土地点は遺物の注記等から判断して、1・11が池東側の導水路付近から、それ以外のものが池底からである。4の青磁椀や11の珠洲すり鉢が14世紀末以前のやや古い年代のものであるが、土師器皿のほとんどは1994年度報告で主体タイプとした15世紀段階のものである。また池底出土品にのみ限ると、年代が遡るのものは青磁椀の破片1点だけである。これらは、今回出土の遺物群とはほぼ同様の傾向を示すものである。（中田青矢）

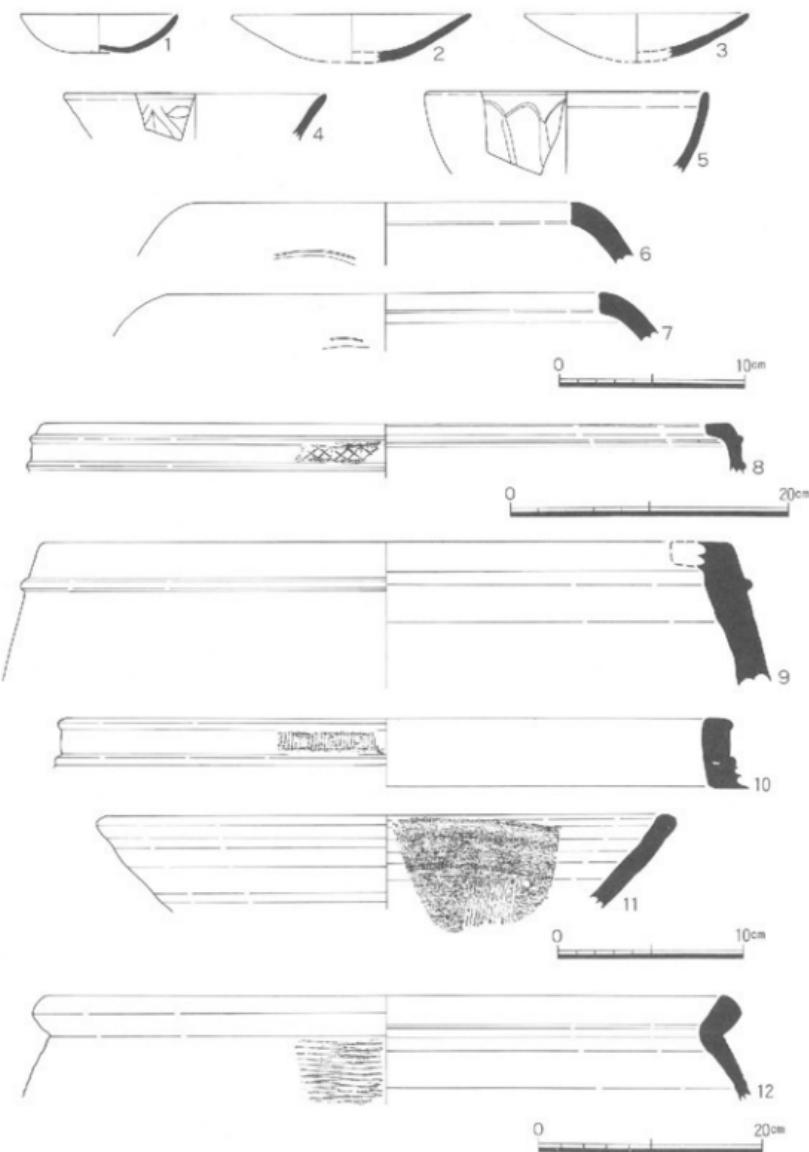
## (d) 小 結

本年度の調査によって、園池の池はトレンチ部分において東西約28m、南北約14mの規模であり、中央部には東西約7m以上、南北2.5m以上の中島を築くものであったことが判明した。汀線部と池底の比高は、最大で約1.0mである。また前回の調査において、池中央部から金具を伴った橋脚状の支柱を検出していることからみて、中島にかかる橋があったことを推定できるであろう。

池底は素掘りの状態であり、地山層まで削った後に、掘削土を用いて池の汀部と中島に盛土したものであろう。そして汀線部には直径30～40cm前後の川原石を敷き、水中、あるいは陸上の要所に巨大な景石を配した。汀石は主に高原川で採取したホルンフェルス、立石には背後の山から運び込んだであろう船津花崗岩を用いている。

景石の掘え付けについては、根石を敷いて埋め込む方法が一般的であった。また景石には、後世に動かしたものも多く、本来の配置を復元することは難しいが、掘形、より正確

江馬氏城館跡 II



第14図 江馬氏庭園1978年度調査出土遺物実測図（縮尺1/3, 但し8は1/4, 12は1/5）

には根石を確認することによって移動の有無を判定できることが判った。そして池底には倒れた状態の景石や、掘形を伴わない乱雑に集積した川原石などが存在した。これに対して、汀石は保存状態が比較的良好である。

池への導水路は滝口付近では検出できなかった。後世の削平の結果であるのか、池の形式として滝口を設置して、降水あるいは人・畜力によって給水したかのいずれかであろう。

池周辺の遺構との関係としては、S区拡張区における南堀・盛土との層位関係が重要である。この盛土は土塁の基底部である可能性が高く、池と旧堀・土塁とを一連の工事として造成したことが判明した。また今回再検出したSB06は庭園に面した会所風の建物であるが（小野1994）、この遺構面上からは15世紀の遺物が多く出土している（神岡町教育委員会委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995）。この時期には、庭園とそれに伴う建物が館を構成する施設として成立していたのであろう。1994年度調査の知見では、南堀の新堀がこれに伴うものであり、遺物からみた館の最盛期もほぼこの時期である。

池の年代については以上の知見から、館を整備して遺物出土量が増大する14世紀末頃に成立し、15世紀が最盛期であり、16世紀の初めの頃には廃ったと推定しておきたい。

今回の調査は部分的な試掘調査であるが、池・中島・汀石と景石群は、全体としての庭園の風景を構成していたと推定できる。さらにおそらく本庭園は屋敷施設と、背景をなす観音山・小菅の台地とも合わせて全体としての景観をなしていたであろう。その中で、庭園がどのような意味をもっていたかを考えることが重要な課題である。

（中田書矢・宇野隆夫・大平愛子）

## 第4章 考 察

前章において、1995年度調査の成果を示したが、本章においては調査によって明らかになつた事柄をより詳細に分析して、その意義をより明らかにする努力を行いたい。

### 1 門前地区

#### (a) 造構配置の変遷

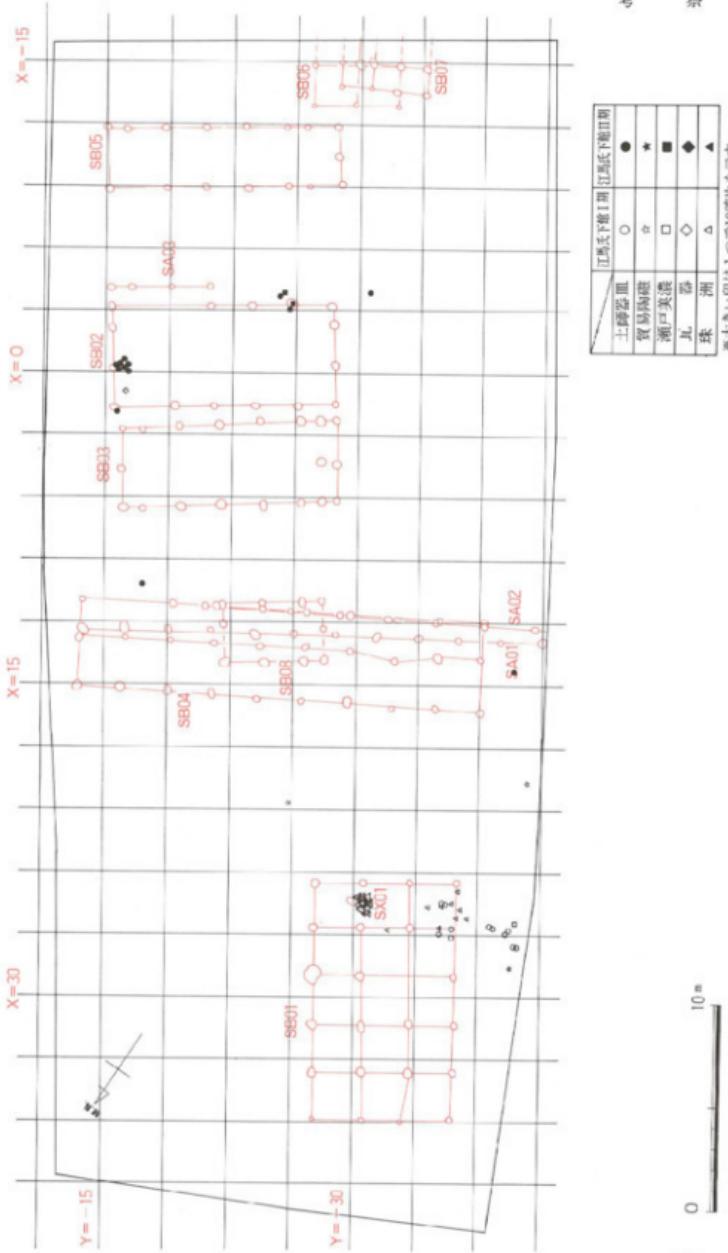
本調査において、門前地区では705基の柱穴を検出しており、これらの柱穴から建物8棟・柵列3列を復元した。さらに出土遺物に加えて、復元できた建物・柵列の中には重複の関係や主軸方位の違いがあることから、門前地区の造構群は何段階かにわたって変遷したと推測できた。またその建物方位が変化する傾向は、従来の調査によってかなり明確となっている。

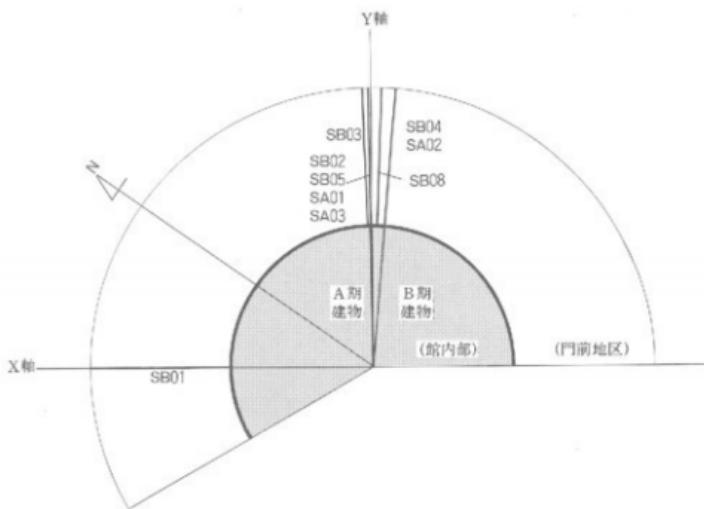
以下ではまず、遺物の散布状態と建物との関係について示した後に、門前地区的建物の配置の変化を、館の変化と関わらせつつ述べることとする。

**出土遺物の散布状態と建物との関係：**門前地区から出土した遺物は241点であり、その中で土器・陶磁器は174点であった。まずこれらの遺物の空間的な分布を示した(第15図)。全体的に遺物の散布はまばらであるが、SB01とSB02の2地点付近にやや遺物が集中する地区がある。

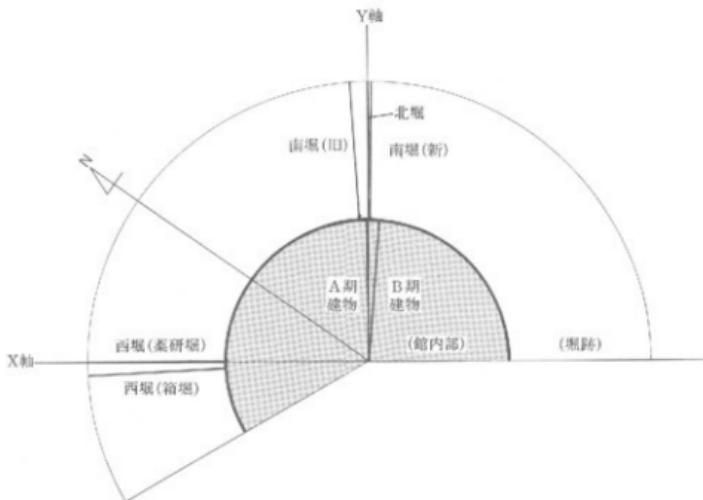
これらの内、SB01の周辺で出土した遺物はすべて14世紀までの年代におさまるものである。特にSB01に付属する竈SX01やこの建物が壊している土坑SK73から珠洲IV期の製品と手づくね成形の上師器皿がまとめて出土した。この上師器皿は、口縁部を強く撫でるT-1・T-5類がほとんどであり、珠洲と同じく14世紀頃の年代のものである。これら遺構・遺物は、江馬氏下館Ⅰ期(13世紀後半から14世紀中頃)に対応するものであろう。

これに対して、SB02の柱穴やこの建物が壊した土坑からは、江馬氏下館跡出土土師器の主体をなす型であるT-6・T-7類が出土した。これは15世紀前半のものと考えるものであり、建物の成立年代もこれに近い頃であろう。SB02は隣接する建物群と共に、江馬氏下館ⅡA期(館の盛期、14世紀末~15世紀前半)の段階のものと推察したい。またこの時期には柵列の北側での遺物散布が著しく減少していることから、性質の違う空間となったことを推定できる。なお柵の南が館の主門に、北側が脇門に対応する区画である。また北側の区画には、建物に付属しない井戸が多く存在する。





第16図 門前地区建物主軸方位図

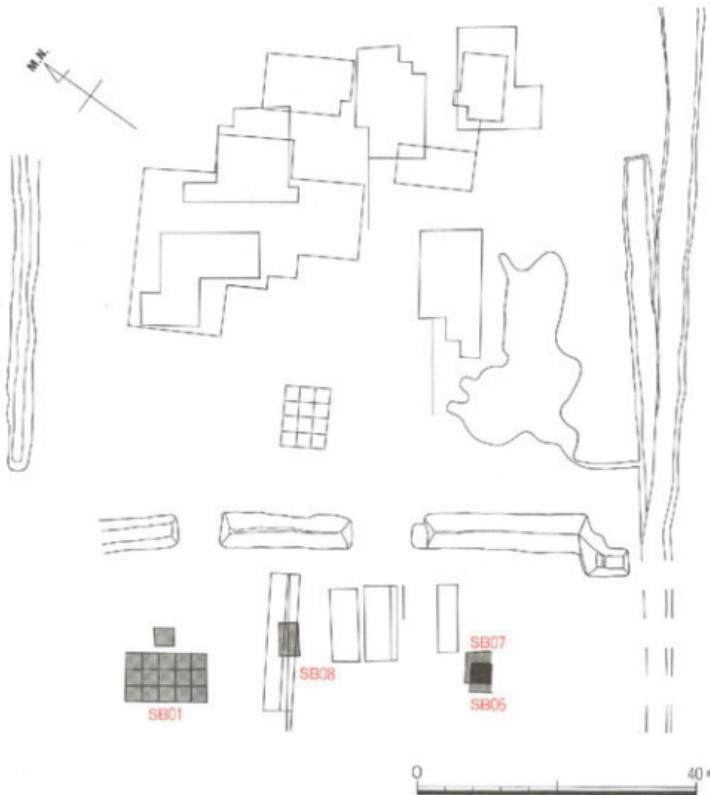


第17図 堀主軸方位図

なお馬屋SB04については、出土遺物がないが、建物主軸の方位からⅡB期（15世紀後半～16世紀初頭）の時期のものと推察している。  
 （中田書矢）

以上の遺物との関係と、建物主軸の方位、建物構造等から、江馬氏下館跡門前地区の遺構群は大きく以下の3段階に分けて理解することが可能であろう（第18図～20図）。

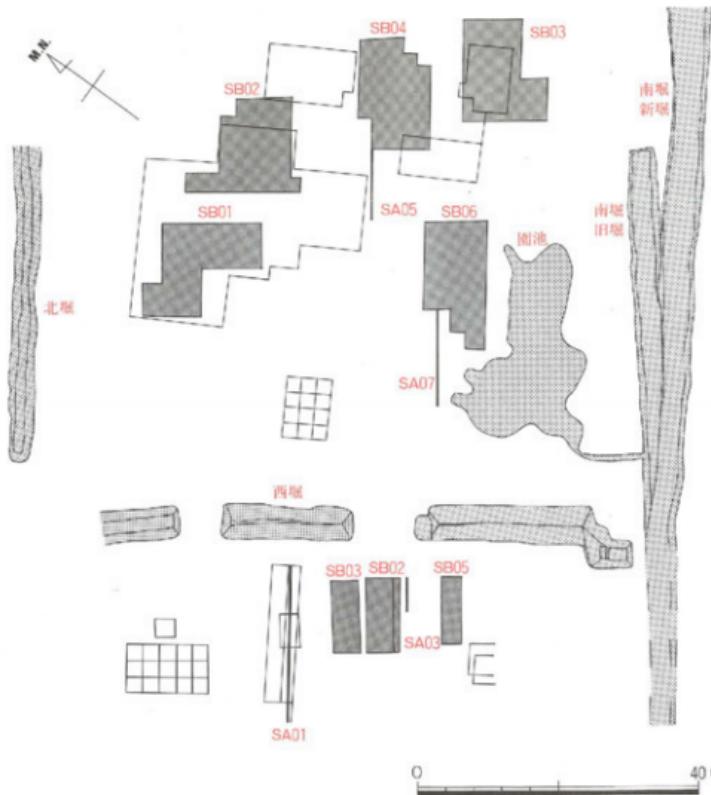
**第1段階**（第18図）：SB01・SB06・SB07・SB08であり、これらはN-54.5°-Eの方位を中心とする総柱式建物群である。また建物に付属した井戸が存在する。この建物方位は1979年度調査において確認した館内A期建物の主軸方位とはほぼ一致する。江馬氏下館Ⅰ期に相当するであろう。年代は出土遺物から13世紀後半から14世紀中頃にあたると推定できる。



第18図 遺構変遷図（江馬氏下館Ⅰ期）

この時期には館の堀はまだ存在せず、段丘上に縦柱式建物が点在する景観であったであろう。龍泉窯系青磁の優品が存在することからみて、居住者はある程度の身分・地位をもつ人々であった可能性が高い。

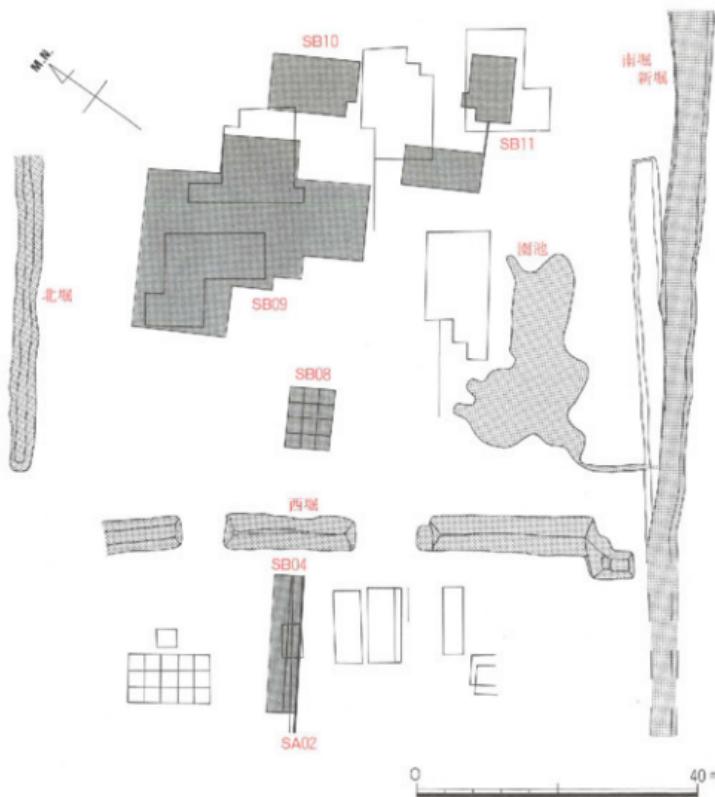
**第2a段階（第19図）：**SB02・SB03・SB05・SA01・SA03である。建物方位は第1段階と変わらないが、建物構造が側柱式となり、その配置と出土遺物からみて、館の堀が成立して以後のものと推定できる。年代は14世紀末から15世紀前半頃にあたるであろう。江馬氏下館ⅡA期に相当する。そして門前地区の内部は、館正面の主門と脇門に対応するよう、横で南北に区画している。なお主門付近の堀は立派な薬研堀であり、脇門から北は箱



第19図 遺構変遷図（江馬氏下館ⅡA期）

堀である。

そして門前の南側地区の建物は3棟とも東側の建物筋を備えており、ここから堀までの約5~6mの空間には造構がほとんど存在せず、堀にそう道路が存在した可能性が高い。またSA01とSB03の間の約6~7mの空間も同様の理由から道路であった可能性が高いであろう。館の主門を通り館内部に入る経路としては、西方からSA01・SB03の間を通って東へ進み、薬研堀を南方に折れて主門に至る場合と、堀にそう南北方向の道からという2つの道筋を推定できるであろう。また脇門側の北側地区には、建物が少なく井戸場が成立したようである。



第20図 造構変遷図（江馬氏下館II B期）

この段階において、館内では整地層の上に礎石建物や園地を造成していることと比べると、この地域の空間が区画施設を境として大きく変わる性質のものになったたことを理解できるであろう。

**第2b段階**（第20図）：SB04・SA02である。方位はおよそN-60°-Eであり、館内のB期建物の主軸と一致する。なおSA02がSB04を廃すことから、この段階内での変遷があったことを推定できる。年代は15世紀後半から16世紀初め前後の頃であろう。江馬氏下館II B期にあたる。

この段階において門前地区では、人が居住する建物が減少した可能性が高い。特にSB04は、従来は柵が区画していた場に設置した長大な建物であり、9間の馬屋と推定するものである。

おそらくこの時期には、門前にはかなり広い広場があり、字名に残る馬場あるいは馬場に連なる空間があって、戦国期の岸壁構造に連なる構えをとっていたのであろう。

そして第2b段階以後には、江馬氏は本拠を他所へ移し、この地区は再び等質的な空間に戻ることとなり、耕地として再開発され近代に至ることとなる。

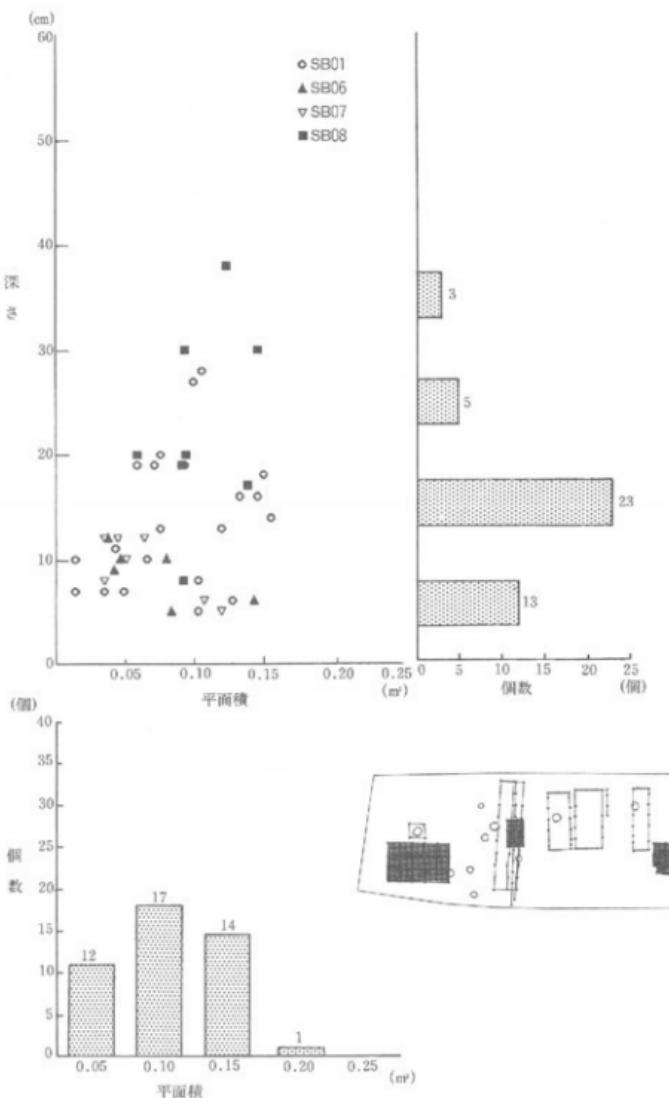
なお付章に示す遺跡探査の成果からは、門前地区第2a段階の建物と館の堀の間に電気抵抗が高い帯状の部分があり、堀に並行する道路が存在したことを示している。館側だけではなく、門前地区の北・西・南側にもこのような部分があり、第2a・2b段階の門前地区は、方格地割りの中の2区画分に相当した可能性がある。（田中慎太郎・占屋聰洋）

#### (b) 建　物

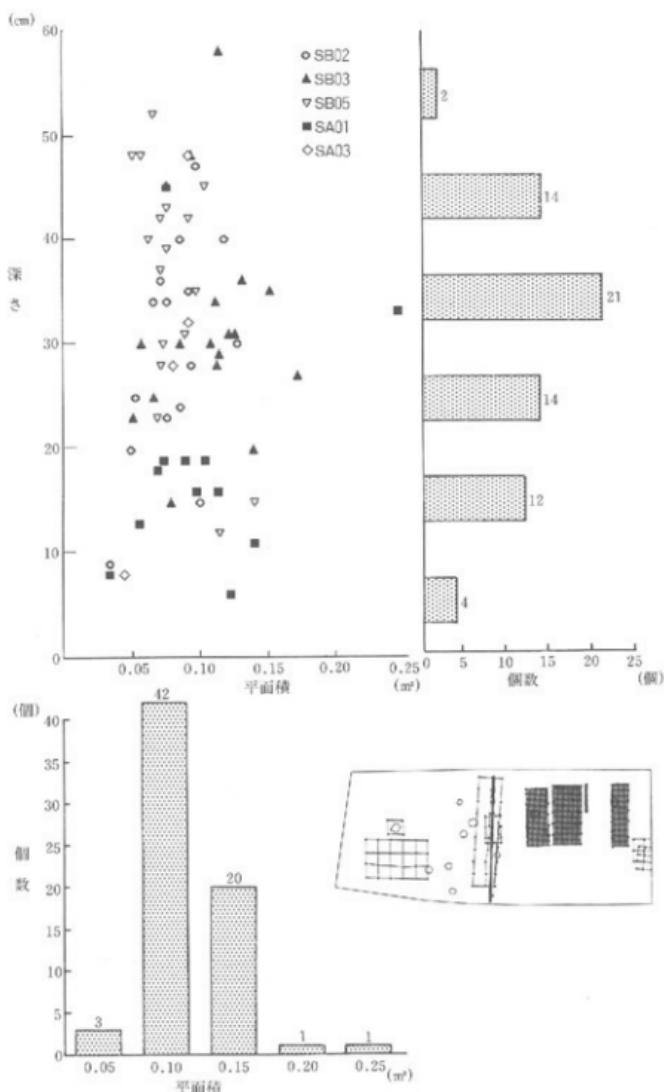
今年度の門前地区的調査では、数多くの柱穴を検出し、遺構が館の外部にまで広まることを確認した。本節では従来の調査による知見も加えて、建物の造営活動について復元する試みを行いたい。なお門前地区では705基の柱穴を検出したが、建物（住居・柵）として復元できたものは149基である。

建物を復元できない柱穴が生じる理由としては、削平によっていくつかの柱穴が消失していること、あるいは中世には、複雑な柱配置をとる場合があることなどを考え得るが、いずれにせよ前後の時期の遺跡の性格を考えると、出土した柱穴のほとんどは江馬氏下館の段階のものと推定することができる。そこで、建物として復元できなかった柱穴を、復元できたものの比率に応じて配分し、より本来の活動に近い復元を行うこととした。

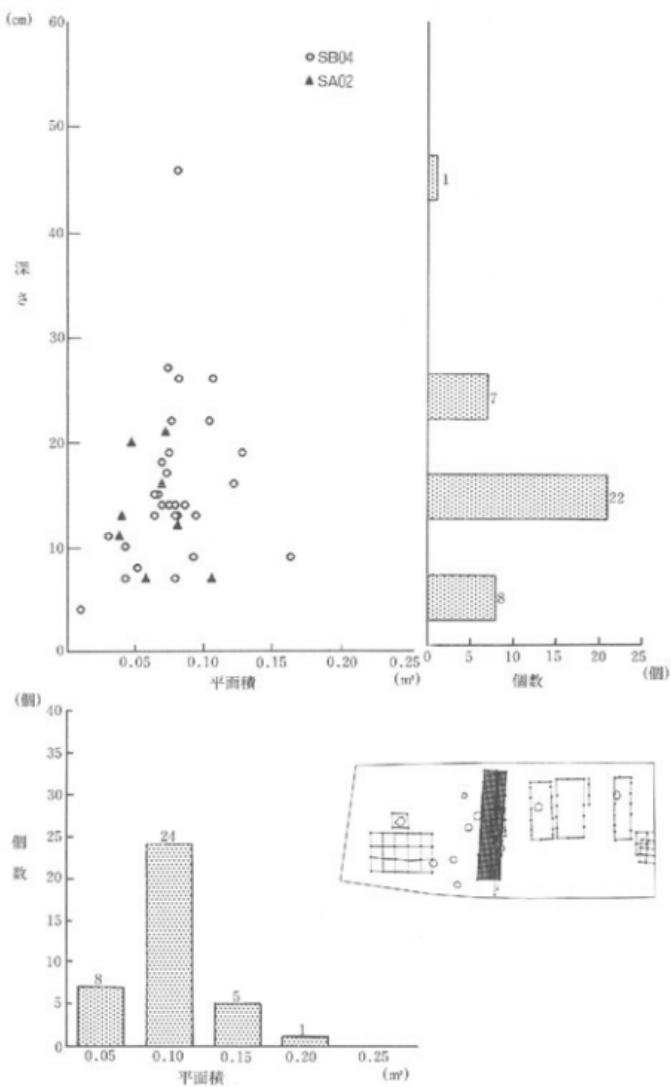
**柱穴**（第21～23図）：まず柱穴堀形の平面積を横軸、深さを縦軸とする散布図を作成した。面積は、 $[(\text{長径} + \text{短径}) \div 2]^2 \times 3.14$  と計算している。また面積は $0.05m^2$ 毎、深さは10cm毎に柱穴基数を算出している。なおこれらは遺構に伴う柱穴149基についてのものである。また建物になる柱穴堀形のうち、柱痕を観察できたものは7例であり、直徑の平均は約0.33mである。



第21図 建物・構列の柱穴法量散布図（第1段階）



第22図 建物・構列の柱穴法量散布図（第2a段階）



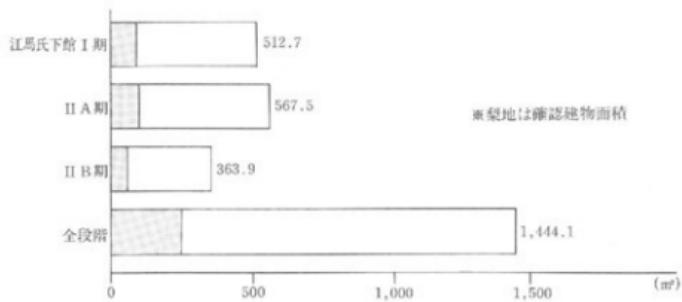
第23図 建物・構列の柱穴法量散布図（第2b段階）

第1段階では柱穴は44基ある。その平面積は $0.01\sim0.15m^2$ の間に散布し、 $0.05\sim0.10m^2$ の付近にまとまりがある。また深さは20cm以下のものが81.4%と中心をなす。

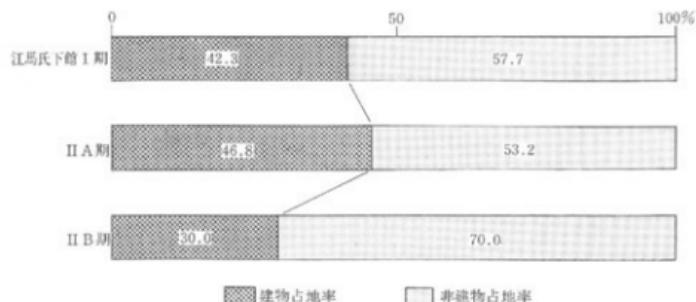
第2a段階では柱穴数は67基あり、平面積は $0.05\sim0.10m^2$ のものが62.7%を占め、中心をなしている。深さは10cm以下から60cm近くのものまで様々であるが、30~40cmに中心がある。

第2b段階では柱穴数は38基である。平面積は $0.05\sim0.10m^2$ のものが全体の64.9%を占めている。深さは10~20cmのものが全体64.9%である。

柱穴の大きさについては、このように各段階を通じて $0.05\sim0.10m^2$ のものが主体をなしてい、大きな変化はない。一般的な傾向としては、中世前期の総柱式建物は中世後期の側柱式建物よりも柱穴掘形が大きいが、門前地区の総柱式建物SB01などが第2a段階に



第24図 門前地区建物段階別面積



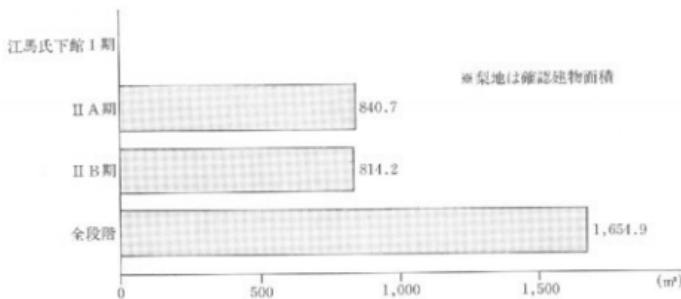
第25図 門前地区建物段階別占地率

接する時期のものであることが、柱穴掘形が小さい理由である可能性が高いであろう。また第1段階の柱穴掘形の平面積には、かなりばらつきがあるが、第2a・2b段階は画一的であるという傾向がある。

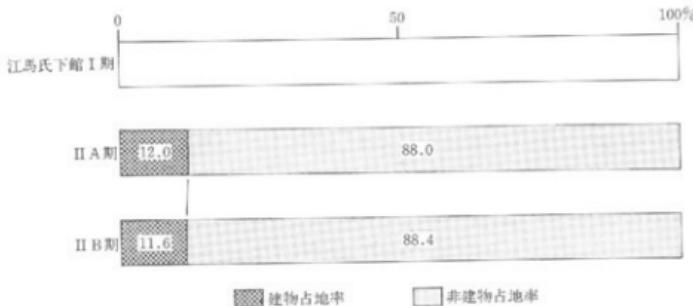
一方、柱穴の深さについては、第2a段階の柱穴を深く掘り込む傾向がある。付章に示した遺跡探査の成果からは、第2a段階の側柱建物は床張りの構造であった可能性が高いことがその理由になる可能性がある。

**建物面積：**建物面積については、まず門前地区について示して後に、館内部の建物を含めて検討しよう。

**門前地区的建物（第24・25図）：**門前地区で復元した建物の総面積は305.0m<sup>2</sup>であるが、柱穴の数から、建物の建築総面積は少なくとも1444.1m<sup>2</sup>と算出した。江馬氏下館跡Ⅰ期



第26図 館内部建物段階別面積



第27図 館内部建物段階別占地率

512.7m<sup>2</sup>, II A期567.5m<sup>2</sup>, II B期363.9m<sup>2</sup>である。また段階別建物占地率（建物総面積の発掘面積に対する比率）を示すと、I期では42.3%, II A期では46.8%, II B期では30.0%と、II B期において占地率が低下している。これらのことから、門前地区において江馬氏下館 I・II A期には建物を活発に建てたが、II B期にはこれが減少したと推察できる。

**館内部の建物**（第26・27図）：館内部の建物については、礎石建物を中心として面積を計算した。なお建物の全体が判明していないものもあるが、復元した部分の最少面積を算出している。

館内部の建物総面積は1654.9m<sup>2</sup>であり、江馬氏下館 II A期840.7m<sup>2</sup>, II B期が814.2m<sup>2</sup>と、門前地区よりも総面積は広い。門前地区のようにII B期に建物面積が減少する傾向は存在しない。これに対して建物占地率は、II A期12.0%, II B期11.6%と低く、門前地区よりもゆったりとした配置である。

**館内部と門前地区の建物の差**：館の建物と門前地区の建物は、方位を共有しながら変遷したと考え得る建物群である。しかし江馬氏下館 II A・II B期の館内部の建物と門前地区的建物を比較すると、礎石建物と掘立柱建物という構造の違い以外にも、いくつかの差が存在したことが判る。

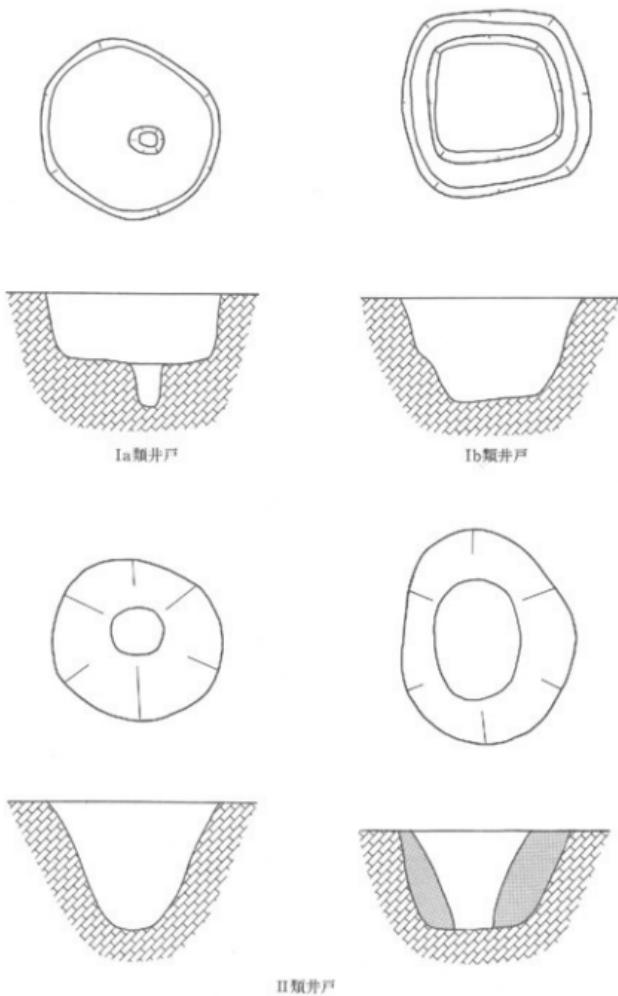
館内部建物は個々の建物も建物総面積も門前地区より大きい。他方、建物占地率についてみると、館内は門前地区よりはるかにゆったりとした配置である。また江馬氏下館 I期と比較して、門前地区建物の柱穴堀形の大きさはかなり画一的である。このように、館の堀と庭園の整備は、館内の問題にとどまらず、殿役丘のかなり広い面積を区画して、異質な空間を作り出す作業であった可能性が高いであろう。 （中谷正和・海道雅子）

### (c) 井 戸

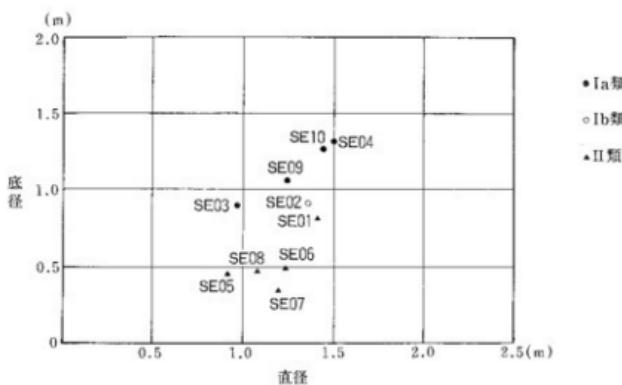
門前地区で検出した井戸は総数10基であるが、全て涌水ではなく溜め井戸であったであろう。門前地区的井戸からは、井戸網・水溜めのような施設は出土しなかったが、本来何らかの木製施設があったであろう。ここでは井戸掘形の形態と規模、埋土の堆積状況などから井戸割の構造を推測し、以下の3種類に分類した（第28図）。

**I類井戸**：SE02・SE03・SE04・SE09・SE10である。掘形の平面形は隅丸方形または不整円形を呈し画一性はない。壁面は多少崩壊しているものもあるが、ほぼ垂直に立ち上がる。底部は不整円形を呈し水平な面をもつ。おそらく方形の木製井戸側を設置したものである。この底部ほぼ中央に直径20cm・深さ30cm余りの小穴を設けているSE03・SE04・SE09・SE10を I a 類、これを設けないSE02を I b 類とする。

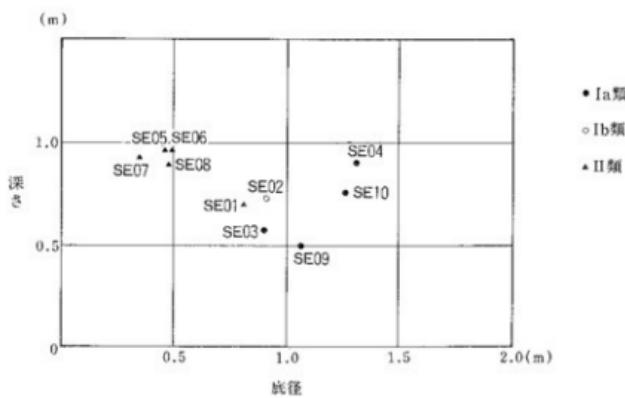
埋土の堆積状況をみると、井戸本体には掘形から流れ込むように埋土が堆積しているが、その土が底部の小穴に流れ込むことはなく、また小穴の中の堆積は1層である。このことから底部の小穴は井戸の掘削時に掘り込み、すぐに埋めたものと考え得る。井戸において



第28図 井戸分類図



第29図 井戸法量散布図(1)



第30図 井戸法量散布図(2)

は、色々の祭祀を行う。例えば石川県鳳至郡穴水町西川島遺跡では、13世紀の井戸の底に蓋をした曲物や口を塞いだ土器などを埋納していた（穴水町教育委員会1980）。I a類井戸底部の小穴も、何等かの木製祭祀具を埋納した可能性が高いであろう。

**II類井戸**：SE01・SE05・SE06・SE07・SE08があたる。この類の井戸は、掘形平面が円形をなし、壁面は約70~80度の角度で落ち込み、底部が狭くやや丸みをもち、明確な面を形成しない。井戸側に円形の曲物か桶を用いていたと推定するものである。埋土の堆積状態は、SE05・SE06は掘形から流れ込むように堆積し、SE07・SE08は水平堆積をなしている。

**規模**（第29・30図）：方形の木製井戸側を設置したと推定する I a・b 類井戸は、掘形の形態は類似するが、掘形直径0.9~1.5m、底部直径0.9~1.3m、深さ50~90cmと規模についてはまとまりがない。これに対して、曲物あるいは桶を設置したと推定する II類井戸では、SE01を除く4基の井戸は、掘形直径が1m前後、底部直径が30~50cm、深さ90cm前後を測り、底径が掘形直径の半分程度、深さは底径の2倍以上となる深いすり鉢形を呈し、その形と規模は画一的である。またSE01は井戸側に比べ掘形を大きく掘っているため掘形の法量は他の II類井戸に比べ大きくなる。

**時期と性格**：門前地区は第2a段階から櫛SA01・02や、馬屋SB04によって南北に区画するようになるが、このことと井戸の型式・配置は関連するようである。

I a類井戸ではSE10が第1段階建物跡に付属する。また第2a段階以後の区画施設に壊されることから、その多くは第1段階に営んだものと推察する。

I b類井戸のSE02は第2a段階建物のSB02内に位置する。柱穴など他の遺構との重複がないため確実ではないが、第2a段階に属して、祭祀を省略するようになったものである可能性があろう。

II類井戸は、その配置からSE01とSE05・SE06・SE07・SE08の2群に分けることができる。前者は門前地区の南西域に位置し、第2a段階の建物跡SB05に壊されることから、第1段階に設置した可能性が高い。これに対し後者の4基の井戸は門前地区中央を東西に走る区画施設に沿って位置し、第2a・2b段階の施設であったと考えたい。

**小結**：段丘上は、地下水位が低く、水が乏しい所であり、井戸は大切な施設である。門前地区的溜め井戸には、おそらく山裾の湧水や雨水を溜めたものであろう。

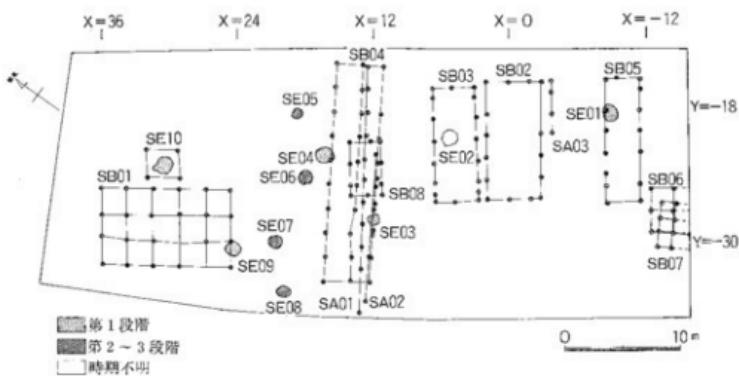
第1段階では、木製の方形井戸側を使用し井戸祭祀を行う I a類井戸を中心であったであろう。その規模には色々のものがある。SB01に付属した竈SX01の埋納祭祀も含めて、この段階では、祭祀行為を活発に行っていた可能性が高いであろう。

第2a段階以後では、形・規模が画一的な II類井戸を中心に、新たに設置した門前地区的区画北側にそって設置している。それは I類井戸より格下と推定できる曲物・あるいは桶を使用したものであり、祭祀行為を行った形跡は乏しい。またこの区画は、館脇門に対

## 江馬氏城館跡 II

応する区画である。

このように第2a・2b段階の館整備に伴う変化は、門前地区における井戸型式・配置の変化としても表われているのである。  
(中島義人)



第31図 井戸配置図

第4表 井戸計測表

(単位: m)

時期	井戸名	型式	直徑	底徑	深さ	小穴直徑	小穴底径	小穴深さ
第1段階	S E01	II類	1.410	0.81	0.70			
	S E03	I a類	0.970	0.90	0.57	0.28	0.12	
	S E04	I a類	1.500	1.31	0.90	0.30	0.20	0.30
	S E09	I a類	1.240	1.06	0.50	0.35	0.10	0.30
	S E10	I a類	1.445	1.26	0.76	0.35	0.30	0.30
第2～3段階	S E05	II類	0.915	0.46	0.96			
	S E06	II類	1.235	0.49	0.96			
	S E07	II類	1.195	0.35	0.93			
	S E08	II類	1.080	0.48	0.89			
不明	S E02	I b類	1.360	0.91	0.73			

## 2 園池地区

江馬氏下館跡は室町時代の武家館と園池がともに良好な状態で遺存している貴重な遺跡である。本節では池の石材の使用法を分析し、また他の中世武家館に伴う庭園跡と比較を通して、江馬氏下館跡の園池の理解を深める試みを行いたい。

### (a) 石材の利用（第32～38図）

江馬氏下館に付属する庭園については、地表に残る「五ヶ石（御花石）」と通称する巨石を傍証として、その存在が言い伝えられていた。1973年から実施した試掘調査の際には、故森 薩庭園文化研究所所長が、当庭園遺構が室町時代の庭園様式に比定できるとの報告を行っている。その後の発掘調査においても、景石、撒き石、石垣、S字型に並ぶ玉石、金具を伴う橋脚状の支柱、立木の根など、庭園であることを裏付ける遺物・遺構が出土している。

今回の調査ではトレンチ内で検出した景石、礫、および地表面上に確認した主要な景石について、神岡町文化財審議会会長若田俊一氏の教示を頂きつつ使用石材の同定を行った。また石材の大きさについては、最大幅・最大厚・検出面からの高さを記録した（別表9、10）。なお現地表面に露出する主要な景石は43個であり、トレンチ内検出面の景石と10cm以上の礫は179個、10cm未満の礫は659個である。

また観察・測定表の記載では最大長10cm未満の石、および拡張区7T内の性格が不明である石組遺構については省略している。この石組遺構には10cm以上の個体が21個、10cm未満の個体が30個ある。石はかなり風化しており、表面に赤褐色をおびたものである。無造作に積み上げたような状態である。

**船津花崗岩（類）：**この地域に普遍的な岩石であり、現在も民家の石垣などに利用している。地質・鉱物学的には、この地域（飛騨帶、飛騨外縁帶）を形成する一連の花崗岩類の総称であり、下之本型と船津型の二型に大別される。色調は主に黄褐色を呈するが、風化が進んでいる部分では黒ずんでいることが多い。

**ホルンフェルス：**非常に硬く緻密な石質であり、いずれも水磨が進んだ河原転石である。色調は青灰色を呈するが、水に濡れるとより鮮やかに発色する。

**その他：**砂岩、安山岩、漫流紋岩、凝灰角砾岩などの小円礫が少量存在する。いずれも水磨が進んだ河原転石である。上記2種の岩石に比べて数は少ない。

**採取地の推定：**船津花崗岩は、山石、川石のいずれの可能性も考え得る。川石であるとすれば、高原川水系の河床からの採取である可能性が高い。検出した船津花崗岩の中には表面が比較的滑らかであり、水磨を受けている可能性を指摘できるものが少數ある。しかしその多くは山石であろう。遺跡の背後、東側にひかる山脈が最も可能性が高い。

## 江馬氏城館跡II

ホルンフェルスとその他の岩石は一部の例外をのぞいては水磨を受けた転石であり、ほとんどが川石である。おそらくは当遺跡の立地する河岸段丘下を流れる高原川水系での採取であろう。現在も高原川の河床に同種の円礫を見ることができる。

**石材の使い分け：**10cm以上の石材の大きさについてみると、いずれの石材も15cm付近に40%~50%を占める大きなピークがあり、55cm付近と95cm付近にも小さなピークがある(第32図)。

15cm前後の石材は、ほとんどがホルンフェルスとその他の石材の河原転石である。これらは、池や中島の汀線に並べた汀石の基本的な大きさを示すものである。そしてトレンチ内において出土した10cm以上の河原転石では、約6割をホルンフェルスが占めるのに対して、10cm未満の石材では約9割がその他の石材であることが対照的である(第33・34図)。おそらく、汀石としてはホルンフェルスを意識的に選択したのであり、その他の石材は主に撒き石として採取したのである。ホルンフェルスは、水に濡れると緑色を基調とする鮮やかな色に発色し、庭園の景観の重要な要素をなしたであろう。

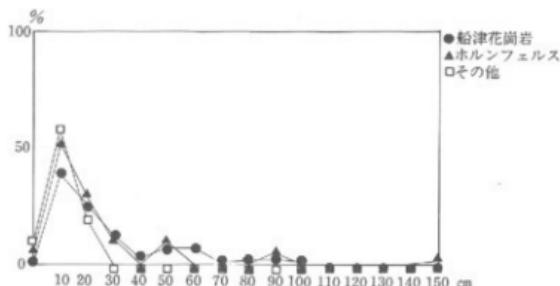
これに対して、大型の石材はほとんどが船津花崗岩であり、景石として用いている。また拡張区TT内の石組造構でも船津花崗岩を使用していた。同時に船津花崗岩は、小破片を撒き石として使用することもあり、特に滝口付近の洲浜においては、船津花崗岩の小破片がかなりの比率を占める(第35・36図)。

なお性格は不明であるが、池の堆積土層中に石英の破片が散在し、意識的に散布したものである可能性がある。

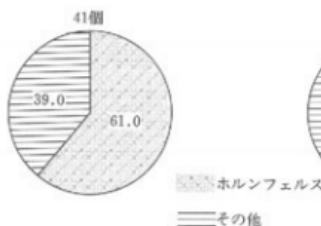
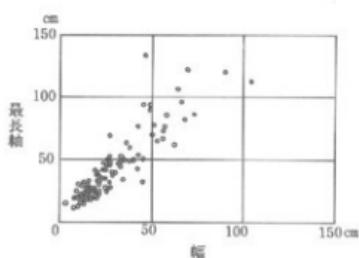
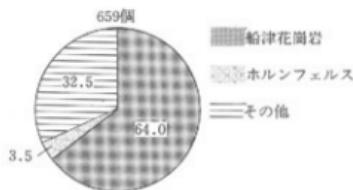
以上のように、江馬氏館庭園の使用石材は、基本的に在地産の岩石を使い分けている。すなわち景観上重要な景石としては、大型の石材を得ることのできる船津花崗岩を用い、汀石は色彩が鮮やかなホルンフェルス転石を使用した。暗色の船津花崗岩と鮮やかなホルンフェルスの色彩の対照は非常に効果的であったであろう。また撒き石には、船津花崗岩、ホルンフェルス、石英を含むその他の石材を用いているが、これも注意して使い分けたようである。

なお京都の庭園においては、平安期以後、ホルンフェルスと質感が似た在地産のチャートを使用することが基本であったが、室町期以後、結晶片岩や花崗岩の使用が活発となっていく(京都芸術短期大学・京都造形芸術大学1994)。江馬氏館庭園において、船津花崗岩のような石材を多用する色彩感覚も、おそらくは京風庭園に源流があるのであろう。

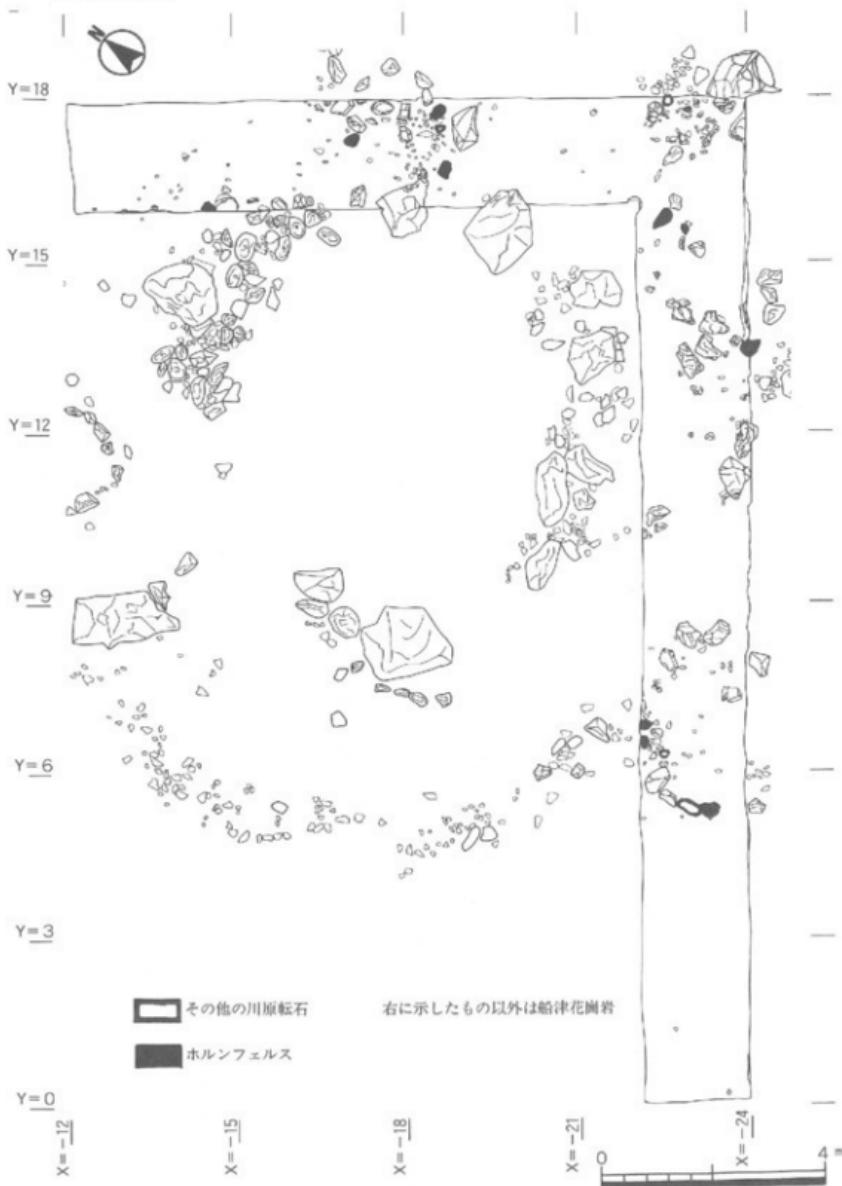
(松本 茂)



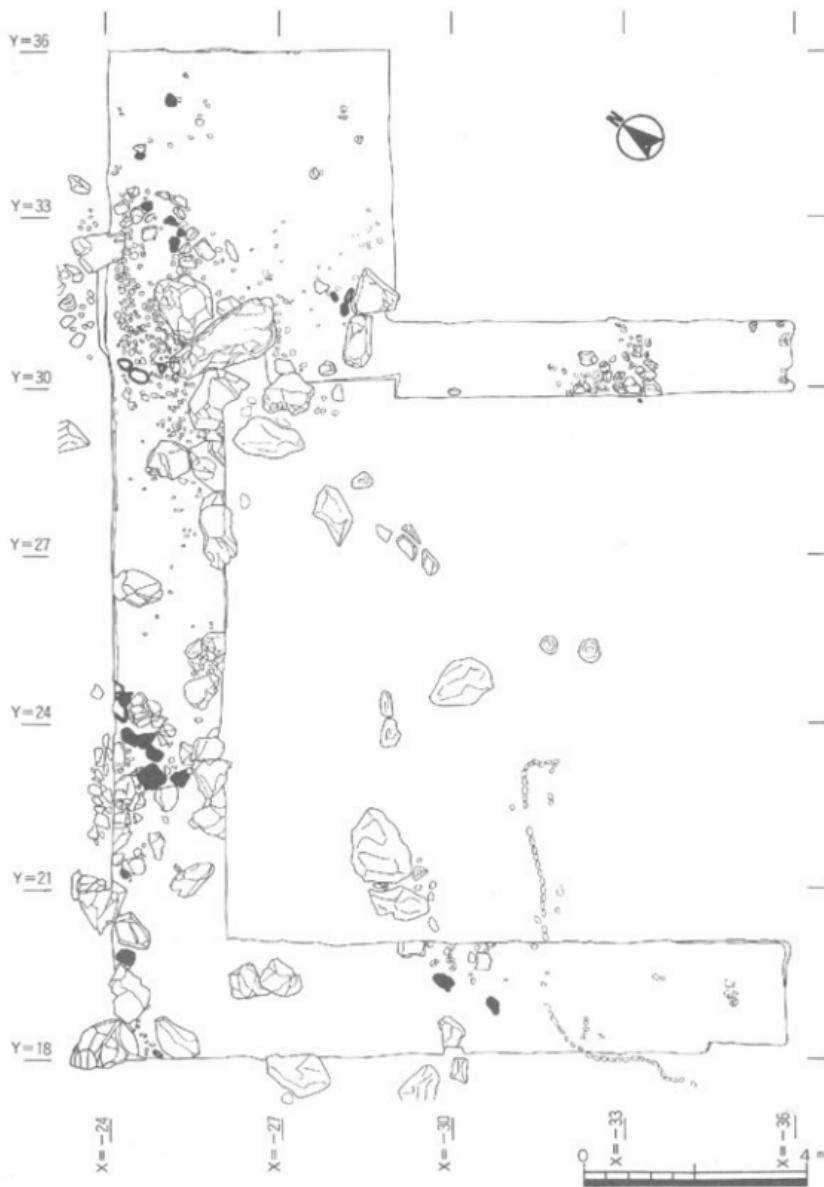
第32図 岩石別三軸平均径

第33図 トレンチ内検出の河原転石  
(10cm以上)の個体数第34図 トレンチ内検出の河原転石  
(10cm未満)の個体数第35図 船津花崗岩大きさ散布図  
(10cm以上の個体)第36図 トレンチ内検出の景石・礫石材別  
個体数比 (10cm未満の個体)

江馬氏城館跡 II



第37図 園池地区の河原転石（10cm以上の個体）位置図(1)



第38図 囲池地区の河原転石（10cm以上）の位置図(2)

## (b) 武家館の庭園遺構

江馬氏下館跡は庭園を伴う武家居館として貴重な例である。また奥州平泉や鎌倉の浄土庭園を除くなら、15世紀の江馬氏下館庭園は武家庭園として時期が遅る例である。ここでは、充分な数ではないが管見にふれた中世の庭園について、池の規模と屋敷面積とを検討し、江馬氏下館庭園の特色を探ることとしたいたい（第40～45図）。



第39図 中世武家館に伴う庭園跡の位置（図中の番号は第5表と対応する。）



第40図 中世武家館に伴う庭園集成(1)

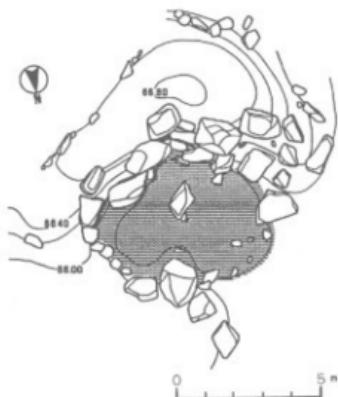


7. 北島神社 庭園路 (縮尺 1/600)



8. 一ノ谷朝倉氏造路 朝倉氏館跡 庭園SG20  
(縮尺 1/400)

第41図 中世武家館に伴う庭園集成(2)



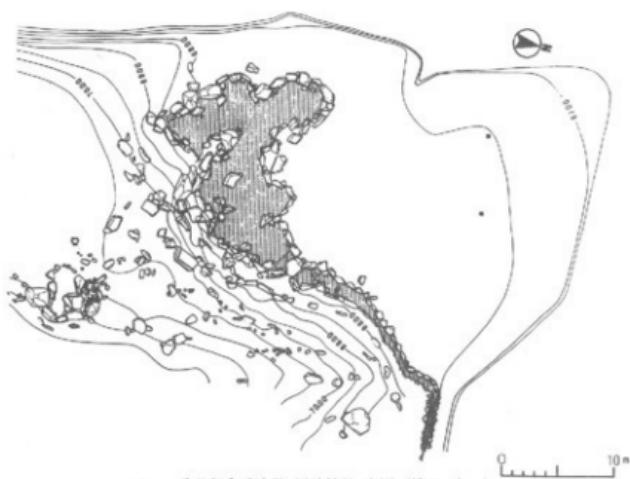
9. 一乗谷朝倉氏遺跡  
南陽寺跡 庭園  
(縮尺 1/200)



10. 一乗谷朝倉氏遺跡  
中の御殿跡  
庭園SG212  
(縮尺 1/400)



11. 一乗谷朝倉氏遺跡  
湯殿跡庭園  
(縮尺 1/500)

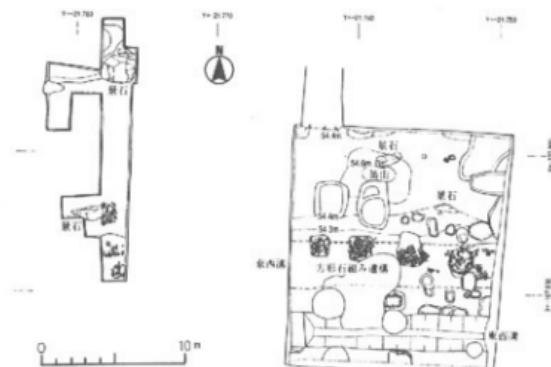


12. 一乘谷朝倉氏造跡 派訪館跡 庭園 (縮尺 1/500)



15. 観音寺城平井丸跡庭園 Hf1 (縮尺 1/250)

第43図 中世武家館に伴う庭園集成(4)

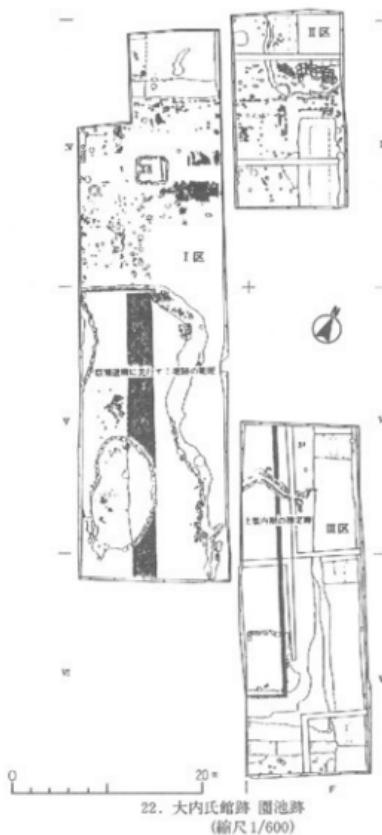


17. 室町殿跡 庭園跡 (縮尺 1/400)



18. 大内城跡 池状造構SX253 (縮尺 1/250)

第44図 中世武家館に伴う庭園集成(5)



第45図 中世武家館に伴う庭園集成(6)

第5表 中世武家館に伴う庭園施設一覧表

通称名	所在地	年代	施設年代	馬場	砂場	石庭	枯山水	砂面庭	花壇	参考文献
1 大友船跡	野原櫻利根郡月夜野町	15		2.3 4.3	6.4 4.5	18.56 21.6				—
2 大友船跡	野原櫻利根郡月夜野町	15		4.3 6.4	4.5 8	—				—
3 高梨氏船跡	長野県中野市大字中野字小綱	15		6.4	51.2	6180.0	604296	—	—	11
4 江口氏下船跡	岐阜県吉城郡中野町	15		—	19	570	6961.5	6062720	—	12
5 東氏船跡	岐阜県瑞島郡上鶴大和町牧字志の辺き	15		—	11	271.7	6556.28	6042745	3.5	4
6 鳥羽山崎跡	鳥羽山崎市二保			—	—	—	—	—	18.9	22
7 北島神社	三重県伊勢市郡美村	15	天正元年(1573)	20.8 5.4	53.5 14.3	1112.8 77.22	—	6560.0	611171	19.20
8 一乗谷體會氏船跡	福井県福井市越前守内町	16中葉		4.5	6.4	28.81	6.068	6.00500	—	未調査
9 一乗谷體會氏船跡	福井県福井市越前守内町	16中葉		4.5	6.4	28.81	6.068	6.00500	—	1.17
10 一乗谷體會氏船跡	福井県福井市越前守内町	16中葉	天正元年(1573)	3.7	1.7	62.9	1456.0	6424200	—	1.16
11 一乗谷體會氏船跡	福井県福井市越前守内町	16中葉	天正元年(1573)	7.1	21.8	154.78	832.0	836033	3.1	1.17
12 一乗谷體會氏船跡	福井県福井市越前守内町	16中葉	天正元年(1573)	15.3	16.8	287.84	672.0	429335	4.2	3.02
13 一乗谷體會氏船跡	福井県福井市越前守内町	16前半	天正元年(1573)	44.1	77	3395.7	0	3.3	6.6	21.78
14 旧秀穂寺船跡	滋賀県高島郡高岡村木村井	16前半		0	—	—	—	—	—	19.20
15 舊首守城主安土町石舟丸	滋賀県高島郡高岡村安土町石舟	15前半	水戸11年(1568)	1241.1	493.2	1695.0	294973	—	—	10
16 舊首守城主安土町石舟丸	滋賀県高島郡高岡村安土町石舟	15前半	水戸11年(1568)	1241.1	493.2	1695.0	294973	—	—	19.20
17 宝町附跡	京都市東山区上京区鳥足通	14								5, 13
18 大内城跡	京都府福知山市大内小字平城	12後半								6
19 沖田城跡	大阪府守田市城山町	16前半	水戸11年(1568)	3.5	3	10.5	7396.0	601149	—	2
20 和光城跡	大阪府守田市北区和光町	14前半								14
21 二郎宮ノ前通跡	兵庫県神戸市北区二郎宮ノ前	—		5.9	9.4	55.35	5011	—	—	15, 16
22 大内氏船跡	山口県山口市大野大野大路	15前半	天文20年(1551)	7.7	10	77	795	21629.5	0.030823	7
										13.5

長條は最も長い部分を測った値。短辯は長辯を削った幅と直交するライン上で最も長い部分を測った値である。

\*面積は地盤に沿って長辯と短辯の積を示したものである。

\*「—」は存在しないもの、空欄は存在未確認、不明、計測不能のものである。

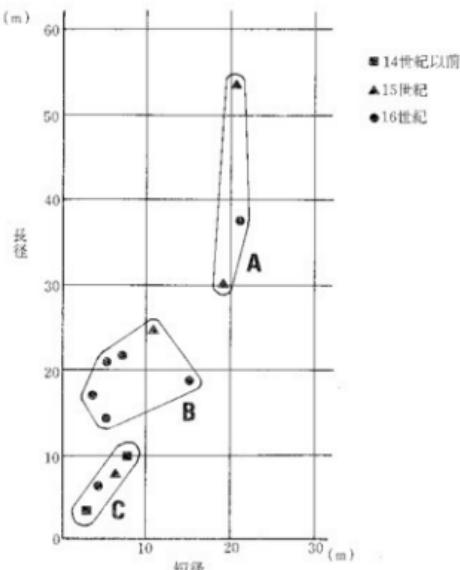
\*〔池占地指數〕=〔池の面積〕÷〔池の面積〕

第5表は集成した資料の一覧である。またその所在地を、第39図に示した。なお第5表と第39図の番号は一致している。年代は、それぞれの館の最盛期の時期を記した。なお池の正確な面積を算出するのは簡単ではないが、ここでは長径と短径を掛けた面積を、池の相対的な大小を示す指標として用いることとする。

以下で、資料数のまとまっている中世後期(15・16世紀)の武家館に伴う庭園跡について、その規模、館における園池の占める割合を比較検討し、江馬氏下館跡の庭園の位置付けを試みる。なお、分析に用いた資料は、原則として報告書の刊行されているものを扱った。

**池の規模と占地率(第46~48図)**: 集成資料において、池の規模にはおよそ3群があり、大きなものからA群(長径30m以上のもの)、B群(長径14m以上30m未満のもの)、C群(長径14m未満のもの)とする。

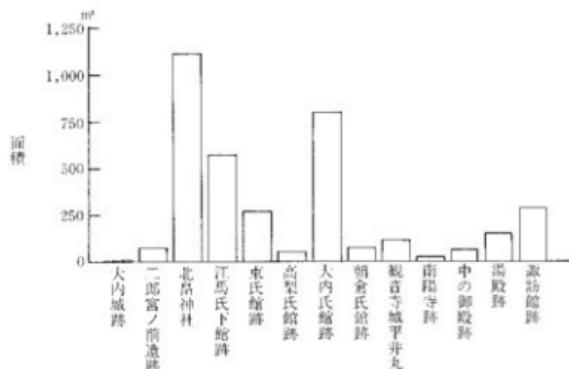
年代についてみると、12~14世紀ではすべてC群である。15世紀はA群を主としてB群が加わるが、B群の唯一の例である東氏館例は、B群の中では規模が最も大きいものである。また15世紀の岡司館と推定される北畠神社例は、集成資料中で最大である。16世紀では、各群があり、B群の規模のものが主体をなしている。次第に小さな池が増加するのは、造



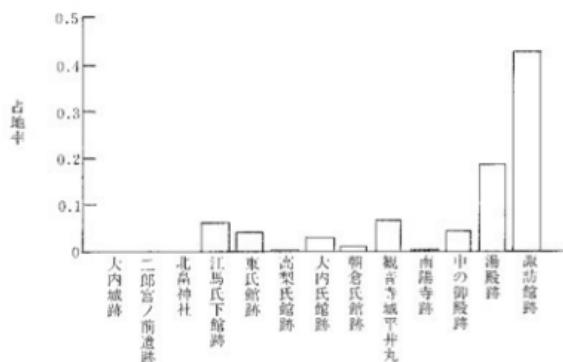
第46図 園池規模の比較図

園がより広い階層に廣まりつつあったことを反映しているのである。

15世紀代の池についてみると、国司館である北畠神社が突出して大きく、江馬氏下館跡、東氏館跡、高梨氏館の順に小さくなる。また16世紀のものでは16世紀前半の大内氏館跡が突出して大きい。これらは1国の支配者とそれ以下の有力者の差を表わしているのである。しかし16世紀中頃以後では朝倉氏館を含めて、規模の小さいものがほとんどである。



第47図 園池面積の比較図



第48図 園池占地率の比較図

以上の資料において、館の面積が判るものについて、池占地指数を算出した（第48図）。この値が大きいほど、館の中での池、おそらくは庭園の占める面積が大きいことを示している。

年代別にみてみると、16世紀前半までのものには余り大きな差がない。すなわち池の規模と屋敷の規模がほぼ対応している。他方、16世紀中頃以後の例では、観音寺城・平井丸跡と、朝倉氏遺跡中の御殿・湯殿跡・諏訪館跡という占地率が高い群と、朝倉氏館跡・南陽寺跡という低い群の2つのまとまりがある。

朝倉氏館跡・南陽寺跡は、江馬氏下館跡・東氏館跡・高梨氏館跡・大内氏館跡に近い占地率であり、これらの多くは一回あるいは一地域の領主の館という公的な性格が強い館である。他方、占地指数の高い平井丸跡、中の御殿跡、湯殿跡、諏訪館跡は家臣や領主の妻妾の館であり、私的な意味合いが強い館であるといえるであろう。

公的な性格の強い館の一群をみると年代が下がるほど園池占地指数が低下していく傾向がある。そして公的な館においては江馬氏下館跡の占地指数が最も高いことが判る。

**中世武家館に伴う庭園：**以上のように中世武家居館に伴う園池の事例を集成し、池の面積・占地指数についての若干の分析を行った。上記の諸点を確かなものとするには、さらに多くの事例が必要であるが、一定程度の傾向をうかがうことはできるであろう。

武家館に伴う園池の初見は、平安時代末、奥州平泉の櫛之御所跡である。これは武家館において庭園が取入れられた初見として重要な意味をもつであろう。しかし中世前期の武家館に伴う庭園は京都周辺にわずかに、小規模なものがあるだけである。鎌倉の今小路西遺跡は、鎌倉幕府北条得宗家との関係が推測される上級武士の館であるが、園池は出土していない。中世前期にはまだ武家館に一般的に園池を取り入れていなかったようである。

中世後期、特に15世紀になると武家館に伴う園池の確認例は増加し、以前よりも広い地域に分布するようになる。園池はおそらく単なる贅沢ではなく、館様式の一環であり、各地域の武家が力をつけ、中央との直接的な繋がりをもつようになったことを示しているのである。この時期の池占地指数がほぼ同じであり、全体の規模が1国の領主級と地域の領主級において明確な違いがあったことがこの点を示唆しているであろう。

16世紀中頃以後になると、家臣の館や領主の妻妾の館などにも園池が造られるようになる。この場合には池占地指数がかなり高い。他方、朝倉氏館跡（領主館）の池占地指数は逆に低くなっている。いずれの場合にも、従来の園池ひいては武家方形居館の役割が変わりつつあったのではなかろうか。館において園池が構築される位置も、それまでは館の正面側、外部との連絡口の近くに位置していたものが、館の奥の部分に位置するようになる。またその構成は、一乗谷朝倉氏遺跡で見られるように、所々に巨石を配しながら園池全体を石で護岸し、植栽するものに変化する。これは中世から近世への変化の一つの

重要な側面である可能性があろう。

以上のように検討するならば、江馬氏下館の園地は小島道裕氏が指摘したように、飛驒の花の御所（室町御所）というべき性質のものであり、飛驒半国を支配し室町幕府とも深く関わりながら活躍した江馬氏にふさわしいものであったと言えるであろう。

#### 〈付 記〉

庭園の資料収集に際し、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター保存工室長加藤允彦氏より多くのご教示・ご指導を得た。記して厚くお礼申し上げる。 (大平愛子)

第5表 第39~48回の参考文献

- 足羽町教育委員会 1969 「一乗谷朝倉氏遺跡 I 昭和43年度発掘調査整備事業概報」
- 池田市教育委員会 1994 「池田城跡－主郭の調査－」
- 伊野近宮 1990 「大内城跡」『季刊自然と文化 特集中世居館』、日本ナショナルトラスト
- 神岡町教育委員会 1979 「江馬氏城跡発掘調査概報」
- 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1994 「平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要」
- 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984 「京都府遺跡調査報告書」第3冊 大内城跡
- 朽木村教育委員会 1981 「池の沢庭園遺跡発掘調査概要」
- 古賀信幸 1993 「守護大名大内（多々良）氏の居館跡と城下山口一大内氏館跡と町並遺跡 発掘成果からー」『守護所から戦国城下町へ—地方政治都市論の試みー』日本考古学協会新潟大会シンポジウム3.、日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 古賀信幸 1994 「守護大名大内（多々良）氏の居館跡と城下山口」「守護所から戦国城下町へ—地方政治都市論の試みー」、名著出版
- 滋賀県教育委員会 1971 「觀音寺城跡整備調査報告書」
- 月夜野町教育委員会 1983 「人友館跡遺跡現地説明会資料」
- 中野市教育委員会 1993 「高梨氏館跡発掘調査報告書」
- 浪貝 純・堀内明博 1992 「中世都市遺跡の調査=京都」『季刊考古学』第39号、雄山閣出版
- 灰掛 黒 1990 「和氣遺跡」『季刊自然と文化 特集中世居館』、日本ナショナルトラスト
- 兵庫県教育委員会 1994 「二郎宮ノ前遺跡現地説明会資料」
- 兵庫県教育委員会 1994 「二郎宮ノ前遺跡発掘調査実績報告書」
- 福井県教育委員会 1979 「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告」I
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1990 「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告」III、第4・13次・第20次調査

- 19 森 薫 1981 「日本庭園史話」 NHKブックス カラー版、日本放送協会
- 20 森 薫 1984 「日本史小百科 庭園」、近藤出版社
- 21 山口市教育委員会文化財センター 1992 「大内氏館跡 - 第13次調査 - 発掘調査現地説明会」
- 22 大和村教育委員会 1981 「東氏館跡発掘調査報告書」
- 23 北島神社庭園跡の実測図は朽木村教育委員会より提供を受けた。

### 3 遺物の考察

本年度の調査は、江馬氏館の周縁部を広範囲に調査した初めての例であり、その結果、多くの周辺施設を構築していたことが判明した。このように、館の内部だけで完結しない生活の場を確認できたのは大きな成果である。この門前空間の利用は館の変遷と密接に関わっており、前節までの遺構の考察はこのような、空間の設定が計画的になされていたことを示唆している。

本節では館の内外で営んだ生活相の違いについて、土器・陶磁器という食器を中心とする遺物の面から検討を加えることにする。そのためにはまず出土食器をすべて計量し、館の内外における構成比率と出土類度を算出し比較することとした。

食器を比較する地区の区分は、館内と館外が基本である。また館外部については、まだ全体像が充分に判っていないが、従来の調査成果を考慮して以下のように分けた。

館 内：三方を堀で囲む地区であり内部の大部分を溝塗している。礎石建物や庭園などの遺構の配置も明らかであり、15世紀前半を最盛期として機能した江馬氏の本拠であった。16世紀初頭には、堀を埋めて拠点を移動している。分析では1978年度と1994年度の館内・堀跡調査区（計2798m<sup>2</sup>）の出土遺物データを用いる。

館門前：館正面の薬研堀によって内部と仕切った部分であり、今回の調査によって馬屋をはじめとする独立柱建物群や井戸などを検出した。この地区は館の盛衰と密接に関わる空間であった。1995年度門前地区（1212.5m<sup>2</sup>）の出土遺物を対象とする。

館外南：南堀が西堀を越えて更に西へのびて、館門前地区と館外南ブロックを区画している。1978年度調査では段丘の西端で方形の堅穴住居を検出している。住居跡は一辺約3mをはかり、四隅に柱穴を配している。15世紀を中心とした遺物が出土していることから、館最盛期の付属施設がこのあたりまで広がっていたことを推測できる。1978年度調査におけるB・C地区（計400.5m<sup>2</sup>）である。

館外北：北堀の外側部分にあたる部分であり、1978年度調査では最下層生活面で柱穴群や土坑を検出している。1994年度に行ったトレンチ調査でも柱穴を検出しておらず、館の遺構が広がることを確認している。なお付近には字名等から館の北方に広が

る馬場があったと推測できる。該当する調査地区は1978年度1・K地区（計526.5m<sup>2</sup>）である。

各地区的計量については口縁部計測法と破片数計算法の2種類の方法を用いて算出している（宇野1992）。なお本来、より細かく時期別の数値を算出しなければならないが、一括遺物はそれほど多くはなく、また館外地区では出土量が乏しいため、ここでは館の存続年代である13世紀後半～16世紀初頭までの中世資料を一括して扱っている。資料の増加に応じて、よりきめ細かい数値を算出することが今後の課題である。

#### (a) 食器組成の比較

ここでは各地区的食器組成について、それぞれ生産と使用の場に立場をおく種類別・用途別の2種の数値を集計している。まず第49図では種類別組成の比較をしている。館内外の各地区とも国産の土器・陶磁器類が高率を占めており、貿易陶磁より高い比率を占めることが共通している。明確に相違するものは、食器に占める土師器の比率である。これが館内では85%であるのに対して、館外の各地区はいずれも50%程度である。なお土師器の比率が少ない館外では、逆に國産陶器の比率が高くなっている。

第50図は用途別組成を比較したものである。珠洲調理具が多い館門前を除くと、各地区とも食膳具が卓越し、おおよその傾向は変わらない。しかしやはり最も多くの食膳具を用いているのは館内部であり、用途別組成の91.5%を占めている。

第6～9表では抜った資料の計測値を合計し、館の内と外の食器構成比率を比較した。ここにあらわされた比率も上述の分析とほぼ同様の傾向であり、一定程度に有効な数値であると評価したい。同じ遺跡においてそのような差異が生じる理由は、食器を用いた人々の階層差に基づくとするのが最も妥当な解釈である（小野1991a）。江馬氏館では多量の土師器皿を使用した階層と、それほどではない階層が館内外で明確に住み分けていたのである。土師器皿は儀礼的食器であり、館内はそのような公的空間であった。また江馬氏館のように土師器皿を主体とする食器組成をもつ居館は、地域の中にあっても陶磁器を主体とする居館より上位の存在であったと考えてよいであろう（北陸中世土器研究会1991）。

また瀬戸・中国製の天目椀や瓦器の火鉢も館内から多く出土しており、これらも館内の格の高さを示している。ただし館外でも堀の南方に瀬戸美濃の香炉・合子などが出土する地点があり、実際にはかなり複雑な在り方もあったであろう。この点については今後の資料の蓄積を待って検討したい。

第6表 江馬氏下館跡出土食器の種類と種別組成表（塙内、13世紀後半～16世紀初）

種類	器種	破片数	個体数
上等器	皿	1181	62.81 (100.0%)
	小計	1181	62.81 [ 85.0% ]
瓦器	(火鉢・風炉)	43	0.72
珠洲	壺	30	0.85 ( 37.6%)
	壺	40	0.83 ( 36.7%)
	すり鉢	29	0.58 ( 25.7%)
	小計	99	2.26 [ 3.1% ]
瓷器系陶器	壺	70	0.11 (100.0%)
	小計	70	0.11 [ 0.1% ]
瀬戸美濃	天目茶碗	53	3.76 ( 55.3%)
	碗	10	0.4 ( 5.9%)
	皿	13	0.51 ( 7.5%)
	盤	23	0.54 ( 7.9%)
	壺・瓶	7	0 ( 約 % )
	すり鉢	42	0.56 ( 8.2%)
	卸皿	4	0.44 ( 6.5%)
	柄付片口	4	0.25 ( 3.7%)
	(合子)	1	0
	(花瓶)	2	0
	その他	10	0.34 ( 5.0%)
	小計	166	6.8 [ 9.2% ]
白瓷系陶器	碗	6	0.04 ( 30.8%)
	皿	1	0.09 ( 69.2%)
	小計	7	0.13 [ 0.2% ]
貿易陶磁器	天目茶碗	2	0.45 ( 25.1%)
青磁	碗	40	0.91 ( 50.8%)
	皿	2	0 ( 約 % )
	盤	3	0.11 ( 6.2%)
白磁	碗	4	0.06 ( 3.4%)
	皿	6	0.23 ( 12.8%)
	杯	2	0 ( 約 % )
青花	皿	1	0.03 ( 1.7%)
	小計	60	1.79 [ 2.4% ]
總計		1583破片	73.9個体分

(個体数は全て円錐部計測法による)

第7表 江馬氏下館跡出土食器の種類器種別組成表 (壙外, 13世紀後半~16世紀初)

種類	器種	破片数	個体数
土師器	皿	208	7.51 (100.0%)
	小計	208	7.51 [ 47.3% ]
瓦器	(火鉢・風か <sup>1</sup> )	7	0.03
珠洲	壺	21	0.06 ( 2.8 % )
	甕	109	0.73 ( 33.6 % )
	すり鉢	38	1.38 ( 63.6 % )
	小計	168	2.17 [ 13.7 % ]
壺器系陶器	甕	2	0 ( ※ % )
	小計	2	0 [ (※ %) ]
瀬戸美濃	天目茶碗	59	1.19 ( 28.5 % )
	碗	7	0.16 ( 3.8 % )
	皿	26	0.63 ( 15.1 % )
	盤	12	0.25 ( 6.0 % )
	壺・瓶	19	0.63 ( 15.1 % )
	すり鉢	18	0.24 ( 5.8 % )
	鉢	8	0.26 ( 6.2 % )
	(香炉)	4	0.19
	(合子)	2	0.25
	その他	9	0.81 ( 19.5 % )
	小計	158	4.17 [ 26.3 % ]
白瓷系陶器	碗	4	0.05 ( 19.2 % )
	皿	1	0.21 ( 80.8 % )
	小計	5	0.26 [ 1.6 % ]
貿易陶磁器	天目茶碗	3	0.25 ( 14.1 % )
	青磁 碗	60	1.23 ( 69.5 % )
	皿	1	0 ( ※ % )
	盤	4	0.03 ( 1.7 % )
	白磁 杯	1	0 ( ※ % )
	皿	11	0.26 ( 14.7 % )
	高麗青磁 碗	1	0 ( ※ % )
	小計	81	1.77 [ 11.1 % ]
総計		622破片	15.88個体分

(個体数は全て口縁部計測法による)

第8表 江馬氏下館跡出土食器の用途種類別組成表  
(堀内、13世紀後半~16世紀初)

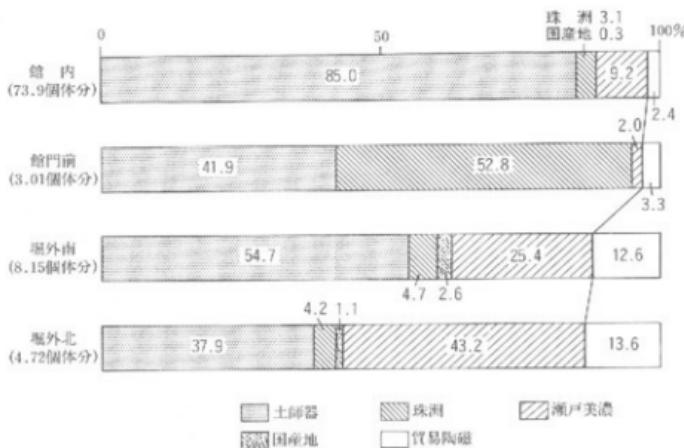
用途	種類	破片数	個体数
食器具	土師器	1181	62.81 ( 89.8 % )
	瀬戸美濃	99	5.21 ( 7.4 % )
	白瓷系陶器	7	0.13 ( 0.2 % )
	貿易陶磁	60	1.79 ( 2.6 % )
	小計	1347	69.94 [ 95.1 % ]
貯蔵具	珠 洋	70	1.68 ( 93.9 % )
	瀬戸美濃	7	0 ( 率 % )
	瓷器系陶器	70	0.11 ( 6.1 % )
	小計	147	1.79 [ 2.4 % ]
調理具	珠 洋	29	0.58 ( 31.7 % )
	瀬戸美濃	50	1.25 ( 68.3 % )
	小計	79	1.83 [ 2.5 % ]
総 計		1573 破片	73.56 個体分

(個体数は全て口縁部計測法による)

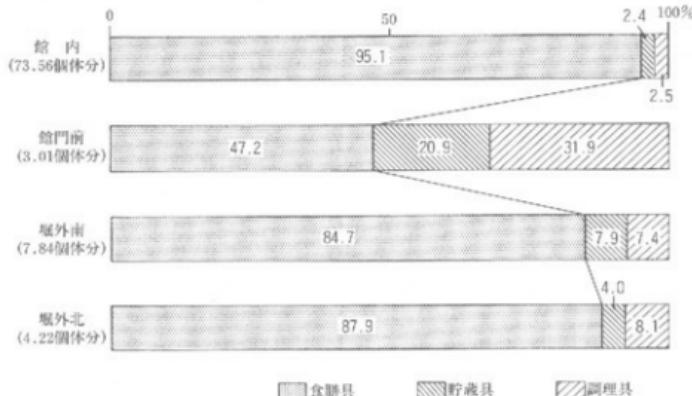
第9表 江馬氏下館跡出土食器の用途種類別組成表  
(堀外、13世紀後半~16世紀初頭)

用途	種類	破片数	個体数
食器具	土師器	208	7.51 ( 63.8 % )
	瀬戸美濃	104	2.23 ( 19.0 % )
	白瓷系陶器	5	0.26 ( 2.2 % )
	貿易陶磁	81	1.77 ( 15.0 % )
	小計	398	11.7 [ 78.1 % ]
貯蔵具	珠 洋	130	0.79 ( 55.6 % )
	瀬戸美濃	19	0.63 ( 44.4 % )
	瓷器系陶器	2	0 ( 率 % )
	小計	151	1.42 [ 9.4 % ]
調理具	珠 洋	38	1.38 ( 73.4 % )
	瀬戸美濃	26	0.5 ( 26.6 % )
	小計	64	1.88 [ 12.5 % ]
総 計		613 破片	15.07 個体分

(個体数は全て口縁部計測法による)



第49図 地区ブロック毎の種類別食器組成



第50図 地区ブロック毎の用途別食器組成

### (b) 出土頻度の比較

地区毎で出土頻度の様相をまとめる前に、まず遺物散布の平面的な広がりについて検討しておきたい（第51・52図）。遺物散布は館内外の広い範囲に及んでおり、とりわけ館内部に偏って出土する傾向が強い。このうち館内での散布については、いわゆるハレ向きの空間に少なく、台所や常御殿などのケの空間に多い傾向がある。また南堀にも多くの出土遺物があり、その場の機能と関係するものと推察する。

このような在り方に対して、館外部の散布状態は広く分散的な様相を呈している。例えば門前地区における集中地点は、主として個々の建物の付近にまとまるものであった。堆積には二次的な移動も考慮しなければならないが、同じような傾向を館外全般において認めることができる。C地区の堀穴住居に出土が集中することも、その一例である。

これらの点を前提としつつ、各地区における単位面積（1m<sup>2</sup>）あたりの出土頻度を比較した（第53図参照）。その数値は前述した構成比率とあわせて、遺跡における食器使用の実態をかなり反映しているようである（第10表）。

全体的な傾向としては館内の1,68片が最も多く、外部の各地区よりかなり高い数値である。なお館内の資料は、盛土整地面上での出土品であり、下層遺構の存在を考えるならば、更に多くの量となるであろう。そして各地区毎の違いは、土師器皿の量差として特に顕著にあらわれている。土師器皿の出土量は館内に集中しているが、陶磁器類の出土量は館内外であまり差異がない。

これに対しても、館外部の様相を最も端的にあらわしているのは門前地区である。ここにおける上器・陶磁器の出土頻度は他の館外地区と比べても、非常に低いものであった。更にこれを時期別に仕分けるとほとんどが中世前期に遡る年代の遺物であり（江馬氏下館Ⅰ期：0.96個体、Ⅱ期：0.11個体）。年代を館の最盛期に限った場合、館門前に居住する人々が土器・陶磁器を使用することは極めて稀であったのであろう。おそらく日常の食器としては多くの漆器・木器類が普及していたのであろう。門前地区では漆の塗膜がいくつか出土しており、このことを裏付けている。

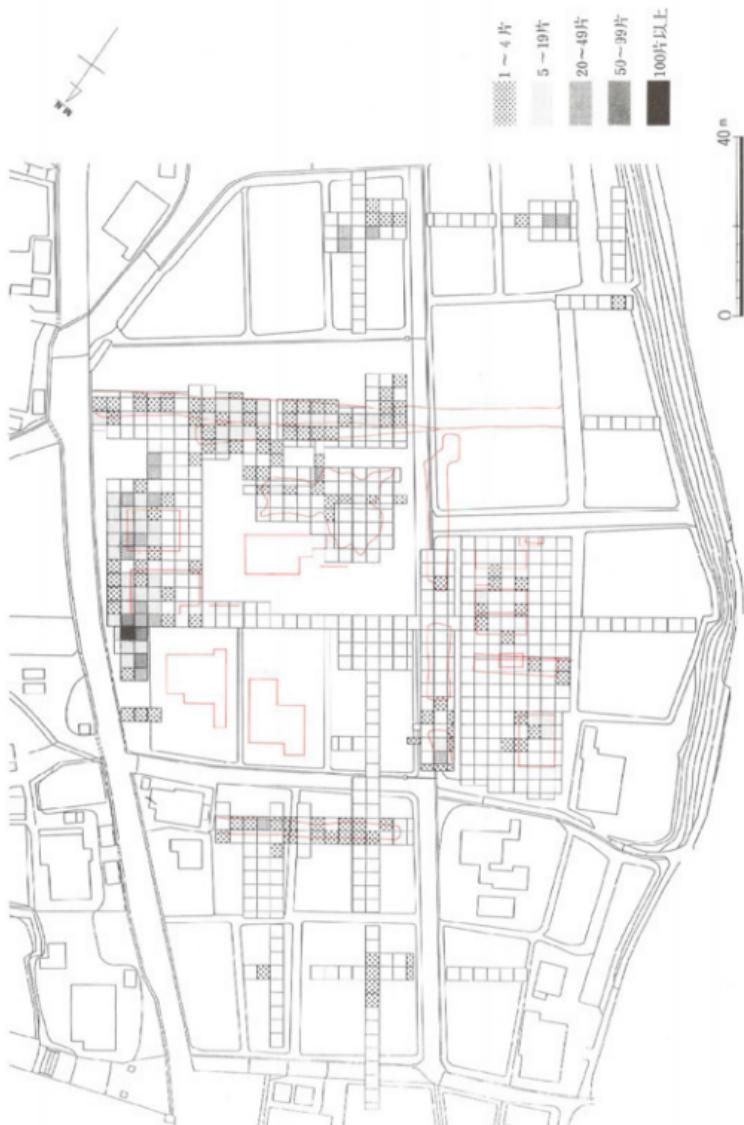
### (c) 小 結

以上、館内外における食器組成と出土頻度には明確な差があり、居住者の身分や・場の機能の違いを反映するであろうという見通しを立てることができた。このような使用法は、館の整備と密接な関係をもって、意識的に行ったものであろう。

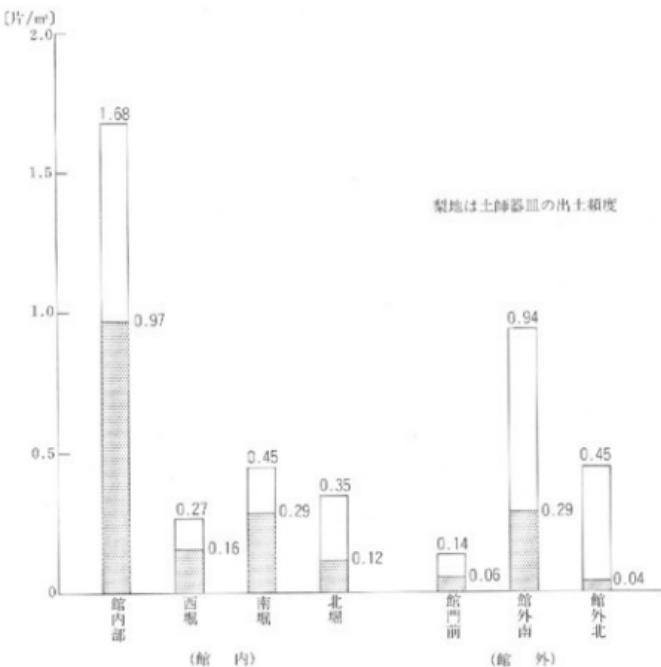
館内において土器・陶磁器の出土密度が高く、特に土師器皿と一部の高級品の構成比率が高いことは、そこが非常に公的で重要な場であったことを示している。特に土師器の主体が畿外的なロクロ土師器ではなく、京都系の手づくね土師器であり、93.1%を占めていることが、京風庭園とあわせて示唆的である。これらは小島道裕氏が次節で示すように、



第51図 中世遺物の出土散分布図（破片数）



第52図 土師器皿の出土散分布図（破片数）

第53図 地区ブロック別の出土頻度 (1 m<sup>2</sup>あたり)

第10表 調査区毎の出土量一覧表

地区名	調査年度	調査面積 [m <sup>2</sup> ]	破片数 [片]	出土頻度 [片/m <sup>2</sup> ]
館内部	1978~1994	1359.0	2289(1318)	1.68(0.97)
西堀地区	1994	379.0	104( 60)	0.27(0.16)
南堀地区	1994	820.0	370(237)	0.45(0.29)
北堀地区	1994	240.0	83( 29)	0.35(0.12)
館内総計		2798.0	2846(1644)	1.02(0.59)
門前地区	1995	1212.5	174( 69)	0.14(0.06)
B地区	1978	243.0	222( 80)	0.91(0.33)
C地区	1978	157.5	154( 37)	0.98(0.23)
I地区	1978	238.5	131( 10)	0.55(0.04)
K地区	1978	288.0	108( 12)	0.38(0.04)
館外総計		2139.5	789( 208)	0.37(0.1 )

破片数計算法。括弧内には土師器皿に関するデータを示した。

江馬氏が室町幕府と強く結びつつ領国支配を強める中で、本拠地を小京都化しようとしたことの表われであろう。

(中田書矢)

#### 4 江馬氏下館と江馬氏—文献史料による考察一

##### (a) 室町期の江馬氏

まず今までの発掘調査によって江馬氏下館の存続期間の問題をまとめれば、次のようになると思われる。

- 13世紀代から遺物が見られる。
- 14世紀末ころに、館と庭園が同時に造られている。
- 遺物は16世紀ころまで見られるが、15世紀後半ころには衰退し始めており、当主の居館としての機能は失われていた。

すなわち館は、おそらく鎌倉時代中頃から始まると思われるが、室町時代初期の14世紀末ころに現在形態が確認される館が形成され、15世紀後半の応仁文明の乱のころに当主の居館が別の場所に移動する、という展開が予想される。

従って、江馬氏に関する史料が多く残されている戦国期の16世紀ころには、江馬氏自身はこの館に住んでいなかったことがほぼ確実であり、この館の性格を考える上では、それよりも前の、14~15世紀の室町期の史料による必要がある。

この時期の史料は多くはないが、幸い『山科家文書』及び『山科家礼記』に公家山科家の飛驒の所領に関する史料が20点ほど含まれており、これによってこの時期の江馬氏の性格をうかがうことができる。

史料の全文については既に『岐阜県史』史料編古代中世4および『神岡町史』史料編などでも紹介されているため（ただし後者は文書名等に誤りが多い）、ここでは主要な文書のみを読み下しで、適宜修正・省略して掲げることとした。

##### A 足利将軍家御教書案

前左衛門督教言卿雜掌申す飛驒国江名子・松橋等領家職の事、院宣を下さるるの所、守護家人垣見左衛門藏人・同左近藏人等謹妨すと云々、早く江馬但馬四郎相共に、下地を雜掌に沙汰し付け、請取を執り進むべきの状、使節緩急有るべからざるの状、仰せにより執達件の如し、

応安五年十二月十四日 〔印判〕 武藏守御判

広瀬左近将監殿

## B 足利將軍家御教書案

山科宰相（教言） 雜掌申す飛驒国江名子・松橋両郷領家職の事、守護被官人垣見左衛門藏人・同左近藏人等押領すと云々、早く江馬但馬四郎相共に、彼の妨げを退け、下地を雜掌に沙汰し付け、請取を執り進むべきの状、更に緩急有るべからざるの状、仰せにより執達件の如し、

(1381) 永徳元年七月二日 (伊勢貞長)  
左衛門佐在判  
(1381) 伊勢因籍入道殿

## C 伊勢貞長施行状案

山科宰相家領当國江名子・松橋領家職の事、七月二日御教書の旨に任せ、江馬但馬四郎相共に、下地を彼の雜掌に沙汰し付け、請取を取るべし、もし子細有らば、起請文の詞を載せ、注進有るべく候也、謹言。

(1381) 永徳元  
七月廿二日 (伊勢貞長)  
心定判  
稲垣三郎殿

## D 足利將軍家御教書案

山科前宰相（教言） 雜掌申す飛驒国江名子・松橋両郷領家職の事、被官人垣見新藏人、江馬能登三郎等を相語らい、濫妨狼藉に及ぶと云々、はなはだ然るべからず、所詮不日に彼の輩を退け、雜掌に渡し付けられるべし、もし緩急有らば、殊に沙汰有るべきの状、仰せにより執達件の如し、

(1383) 永徳三年七月五日 (伊勢貞長)  
左衛門佐在判  
(1383) 佐々木大膳大夫殿

## E 室町幕府奉行人(カ)連署奉書案

飛驒国江名子・松橋郷段錢の事、御催促を止められるべきの由候也、恐々謹言、

(1388) 嘉慶二  
五月十六日 備中守□□判  
丹後守貞秀判  
謹上 江馬民部少輔殿

(以上、A～E『山科家古文書』)

## F 伊勢貞宗書状案

山科殿御家領飛驒国所々の事につき、奉書を成され候、國の儀に於いては、御成敗の旨に

## 江馬氏城館跡 II

任せ、如在無く所簷申し付けられるべき由、仰せ出だされ候間、内々私より申せしめ、心事後信を期し候、恐々謹言、

(文明三年) 十月八日 貞宗判

江馬殿御宿所

## G 室町幕府奉行人連署奉書案

山科内藏頭家雜掌申す飛驒国岡本上下保・石浦郷ならびに江名子・松橋郷等の事、返し付けられ訖、早く彼の所にのぞみ、合力を致し、雜掌に沙汰し付けられるべき由、仰せ出だされ候也、仍って執達件の如し、

(文明三年)

十月五日 為信  
之種

姉小路中将家雜掌  
姉小路左衛門佐殿  
江馬左馬助殿

## H 細川勝元書状案

国の儀に就き、江馬左馬助疎略有るべからずの由、注進到来□□□、向後忠節致すの趣、仰せ談ぜられ候らわば然るべく候、恐々謹言、

(文明四年) 七月廿九日 勝元判

姉小路左衛門佐殿

## I 細川勝元書状案

国の儀に就き、巨細承り候旨、等閑有るべからず、向後別して忠節を抽きんぜられ候わば然るべく候、委細議秋庭備中入道申すべく候、恐々謹言、

(文明四年) 七月廿九日 勝元判

江馬左馬助殿

## J 秋庭備中入道書状案

国の儀に就き、屋形より状を以て申さる、此の間は京都に於いて時□□子細にて、御返事遅々候、今度山科殿様御申し候間、委細御札申され、以後いよいよ御忠節然るべく存じ□□、後信の時を期し候、恐々謹言、

(文明四年) 七月廿九日 沙弥

謹上 江馬左馬助殿

(以上、F～J『山科家札記』)

A～Eは、応安5年（1372）から嘉慶2年（1388）に至る、山科家領飛驒国江名子・松橋両郷に関する、室町幕府からの指令である。江名子は現高山市内の江名子、松橋の地名は現在はないがその付近にあったと考えられ、Gに見える岡本・石浦もやはり高山市内に比定されることから、山科家の飛驒国所領は現在の高山市の付近に集中していたと考えられる。問題はこの山科家領と江馬氏の関係で、『江馬氏城館跡発掘調査概報』（1979 神岡町教育委員会）、『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書I～』（1994 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室）などは、「山科家の被官」としているが、これは修正を要する。まずAは、管領細川頼之から神岡町に隣接する現同府町の国人と思われる広瀬氏に宛てられた奉書で、山科家領の江名子・松橋等を守護（京極氏）の被官である垣見氏が押領したことに対し、所領を山科家の代官に引き渡すことを指示したものである。通常こうした幕府からの命令の運行は、守護一守護代の系統で行われるが、この場合は守護自身の被官が当事者であるため、現地の有力国人である広瀬氏と江馬氏の二名が「両使」という制度によって執行を命じられたものである。現高山市内の山科家領とはやや離れた所にいる江馬氏が動員されているのはそのためで、その点からも私的な関係とは考えにくい。つまりこの文書から読みとれることは、江馬氏が飛驒国の中で地域を代表する武士の一人として室町幕府に認知されており、幕府の「公務執行」を命じられる立場にあったことである。そこに至るまでの経緯はともかく、14世紀後半、南北朝末期のこの時点では江馬氏が既にそうした存在であったことは間違いない。江馬氏はれっきとした武士で、山科家とはその所領に職務を執行する関係でしかない。「山科家の被官」とされていたのは、文中の「守護」被官人」の誤読であろう。

次のB・Cも同じ山科家の所領に対する指示で、Bは管領斯波義将から伊勢貞長へ命じ、さらに伊勢貞長から現地の国人と思われる福垣氏へ命じられたもので、ここでもAと同様、江馬但馬四郎が現地で幕府の命令の執行に当たるべき人物の一人として挙げられている点、先のAと同じ内容である。

その二年後のDは、逆に「江馬能登三郎」が山科家領を押領した一人として幕府の排除命令を受ける対象となっている。A～Cの江馬但馬四郎とこの江馬能登三郎の関係は明らかではないが、ここではA～Cに見られる「両使」では埒が明かなかった、というよりその一人が言わば寝返ってしまったためか、管領（斯波義将）→守護（京極高秀）という通常のルートで命令が発せられている。

しかし、五年後のEでは、再び山科家領に関する段錢催促停止の逆行命令が江馬民部少輔に発せられており、江馬氏は基本的には室町幕府と直接結びつき、その権威を現地で表現する立場にある豪族であったと言えよう。

特に幕府政所執事の家である伊勢氏とは関係が深かったらしく、16世紀の史料だが、『天

文日記によれば、「飛州江馬左馬助礼のため来臨……伊勢守庶子の由候」(天文11年(1542)10月3日条)とあり、伊勢氏の庶子が江馬氏に入闘していたことがわかる。文明3年(1471)のFの文書では伊勢氏が江馬氏に対して「内々私より申しせしめ候」と言っており、この時の「江馬左馬助(Gによる)」は別人だろうが、すでに私的な関係があることが伺える。B・Cの文書が伊勢氏を通じて伝達されていることも、そうした関係によるものなのかもしれない。

この他、H・I・Jでは江馬左馬助は細川勝元からも直接指示を受けており、一貫して幕府要路の人物と直接つながりを持っていたことは間違いない。

#### (b) 江馬氏下館と庭園の意味

次に、以上のような江馬氏の性格と館および庭園の関係について考えてみたい。江馬氏が室町幕府の命令を受けて確かな文献史料に現れるのは1372年だったが、折りしも時の將軍足利義満は1378年に新たに造営した室町殿(「花の御所」)へ居を移している。新しい室町幕府的な武家儀礼もこのころには形を整えつつあったと思われ、江馬氏下館はその直接の影響下に造られたものと見て間違いない。

詳しい検討は建築史家・庭園史家に譲りたいが、約一町四方の館の南側はほぼ全面を庭園として、ここに広大な石組みの圓池を設けそれに臨む会所を付設する、といった構成は、地方豪族自らが生み出したものではなく、中央(京都)で成立した儀礼空間としての館という装置を模倣したものと見るのが妥当であり、義満の「花の御所」および基本的にそれを受け継いでいると見られる洛中洛外園屏風(尼博甲本、上杉本)に描かれた足利將軍邸や細川管領邸などの構造に江馬氏下館の内部構造が酷似していることは、そのことをよく示している。

すなわち、まず洛中洛外園に見えるこれらの館の建物配置は、門から入ると広場があり、正面に公的な場である主殿(寝殿)があり、その奥に日常生活の場である「常の御所」が、また庭に面した位置に会所などがある、というもので、江馬氏下館も基本的にこれと同じである。庭園は、洛中洛外園では、門から入った部分の広場からは屏で隠されており、会所の位置まで来てはじめて眺めることができるようになっているが、江馬氏下館でも広場との間に掘立柱屏SA07があり、やはり同様の機能を持つ施設と考えられる。また、門は足利將軍邸・細川管領邸いずれも正副二つ(唐門と棟門)が並んで描かれており、江馬氏下館に正面の門が二ヶ所にあることも、この様式に倣った可能性を考えられよう。

庭園自体は洛中洛外園の描写では池の奥に樹木が茂っており築山があったと思われ、「花の御所」跡の発掘(浪貝・堀内1992)でも築山状の高まりが認められている。江馬氏下館の南端の方は池をはずれた付近で止まっているが、これも館の周囲をめぐるものではなく、庭の背後を区画すると共に土壌状の築山を築くために掘られたものだっ

たのではないだろうか。

また、江馬氏下館の正面に当たる西堀が断面V字状を呈する薬研堀であることについても、「花の御所」跡の発掘調査で館の南限と思われる位置からやはり薬研堀が検出されており、これさえも地方豪族的なものではなく、中央の館に倣った可能性が大きいと思われる所以である。大きく違うのは周囲が築地ではなく土壘であることくらいであろうか。

一般的に見てもこのような構造の館は少なくない。近年の研究によれば、15世紀後半から顯著になる各地の守護所は平地の方形館であることが多く（金子・前川1994），また紀行文などから、そこには池を伴う庭園があったこともうかがえる。たとえば、大永6年（1526）尾張の守護所清須を訪れた宗長は、「庭ひろくふるきたち（館）の、ほりせき入れて、柳の古木、藤山吹のきし、池のさゝなみ、水鳥とも羽うちかわす様、絵にもかゝまほしくそみえし」（『宗長手記』）と記し、また、飯尾宗祇は、文明12年（1480）に山口の大内氏の別邸築山殿について、「池は海こずゑは夏の深山かな」と詠んでいる（『老葉』、『下草』第十）。築山殿に隣接する大内氏館では、16世紀のものらしいが、広大な園池も出土している（第4章第1節4参照）。

室町幕府と直接結びつき、その權威を地方において体现する存在であれば、その儀礼装置としての館も中央に倣うのは必然であろう。江馬氏下館は守護に準じるクラスの、地域を代表する有力国人の館として、室町期から各地につくられていたであろうこうした武家館の一つの典型であり、遺構としては最も早い時期のものである。想像の範囲になるが、この庭園も、今度確認された園池の堅固なつくりや幕府との直接の関係から考えて、中央の幕府関係者から庭師の派遣など直接の指導を受けてつくられた可能性は十分考えられよう。

また、「馬場西」の小字名などから館の北側にあったのではないかと予測される馬場についても、単なる馬乗り場ではなく、こうした室町幕府的な儀礼のために館に付随した空間であった可能性がある。実際に延徳3年（1491）越後の守護上杉氏のもとを訪れた管領細川政元は、守護館に付随した迎賓館的な施設である至徳寺長松院に逗留して、しばしば「犬馬場」と呼ばれる馬場に出て「遊覧」し、また細川氏・上杉氏の双方が犬追物を<sup>わざ</sup>行<sup>ゆ</sup>行<sup>ゆ</sup>している（冷泉為広『越後下向記』、矢田1944による）。やはり戦国期の例になるが、越前一乗谷の朝倉氏館、近江觀音寺城の六角氏館、近江高島郡清水山城の高島氏館などの付近では、「犬の馬場」「イノ馬場」といった地名が見られ、これもこのように室町時代に武家儀礼として発達していた犬追物を行ったことによると考えられる。江馬氏のもとを訪れたことのある禪僧万里集九も、文明17年（1485）尾張守護所清須城の織田敏信邸で犬追物を見ている（『梅花無尽藏』）。

犬追物は単なる個人的な武芸の修練ではなく、正式に興行するには相当の施設と人数が

必要とされている（『古事類縁』武技部参照）。従って、地方において周辺の武士を集めて自らの館でこれを行なうことは、当然その地方における中心人物であることを示すステータスシンボルとしての意味を持ったと思われる。江馬氏下館で犬追物が行なわれたかについては今のところ文献的にも遺構・遺物の点でも確認されてはいないが、江馬氏下館が基本的に権威誇示の場という意味を持って造営された存在である以上、主殿・会所・庭園という室内での儀礼のための施設と対になる、屋外での儀礼のための空間としての意味をこの「馬場」が持っていたことは間違いないであろう。今回発見された門前の「馬屋」も、軍事教練の場というよりも、そのような意味での「馬場」と関わるものなのかもしれない。

以上のような意味で、この館と庭園は、今日直接にはその姿をとどめない生粋の室町的武家館であり、中でも義満の「花の御所」に時期的にもきわめて近い、その地方版＝「飛驒の花の御所」であると言なうことができよう。門前の屋敷群などは、おそらく地方豪族館としての発展の端緒であると思われるが、館自体の構造が京都の武家館を忠実に写したものであることは、室町という時代における中央と地方との関係を考える時、極めて興味深いものがある。

#### (c) 江馬氏の出自について

14世紀後半に室町幕府と公的なつながりを持つ在地の有力者として文献に姿を現し、その後も幕府と関係を保ち続けた江馬氏の地方武家としての性格を追ってきたが、それではそれ以前の江馬氏はどのような存在だったのだろうか。江馬氏の出自や、いつからこの地に居住していたのかが残された大きな問題だが、最後にこの点について、若干述べておきたい。

『江馬家後鑑録』等の後世の史書・系譜等に見える、平經盛の子輝経が北条時政に養育され、後に飛驒へ流されたのが江馬氏の祖である、といった記述が疑わしいことは既に指摘されているが、「江馬」の地名はこの付近ではなく、考えられる場所としてはやはり北条氏に關係の深い伊豆国田方郡の江馬庄（現伊豆長岡町付近）である。ここは北条氏の重要な所領で、北条義時が江馬（江間）四郎（小四郎）、北条泰時も江馬（江間）太郎を称し、泰時の弟に始まる名越氏が江馬氏とも称されるようになる。後世の史書・系譜類もこうした事實から江馬氏の祖を北条氏と関わらせたものと思われる。

このように鎌倉時代の北条氏の一族が伊豆の江馬庄にちなんで江馬氏を称する一方、鎌倉幕府の御家人の名簿とも言える建治元年（1275）の「六条八幡宮造営注文」には、伊豆国の項に「江間平内兵衛入道（跡）」が見えており、おそらく江馬庄の現地にも江馬（江間）氏が御家人として存在していたことが知られる。

江馬氏が飛驒の高原郷に入部した経緯については確かな史料はないが、南北朝初期の康永3年（1344）、圓城寺が「飛驒国高原・小八賀南方」の替え地として佐渡国の中木など

6 保に地頭職を与えられていることは、あるいは江馬氏の動向に関係するのかもしれない。しかし、13世紀から遺物が見られることは、館が何らかの形でそれ以前の鎌倉時代から存在していたことを示すと考えられ、それを重視するなら北条流の江馬氏もしくは伊豆の江馬氏のどちらかが飛騨に所領を得て、その一族が鎌倉時代のある時期に移り住んだものと考えるのが妥当であろう。名越氏は高原郷に隣接する越中国<sup>（北陸）</sup>の守護を勤めており（飛騨国は不明）、そのこともあるいは何らかの関係があるかもしれない。

実は、高原郷には江馬氏が鎌倉時代に出したとされる文書が一点存在する。上宝村本覚寺に所蔵される禁制制札案（木札）がそれで、次のような文面である。

#### 禁制

於本覚禪寺境内

一諸殺生之事、

一放火人之事、

□二籍之事、

右之条々、堅く停止せしむる者也、仍って下知件の如し、

〔正嘉元年五月〕日 遠江守平朝臣在判

（『岐阜県史』古代・中世 1, 1097頁。写真も所収。）

『岐阜県史』も「ナホ研究ノ余地アリ」としているが、こうした三箇条の禁制が出されるのは一般には15世紀後半の文明年間であることからも、この制札が実際に鎌倉時代に出されたかは疑問の余地がある。だが、「正嘉元年（1257）五月」という年紀が記され、「遠江守平朝臣」が発給したとされることには、何らかの背景があった可能性も考えられよう。その場合「遠江守平朝臣」が誰なのかが問題だが、北条氏でこの時に遠江守を名乗っているのは北条時直と思われ（『吾妻鏡』康元2年（1257）2月10日条）、名越（江馬）氏ではないようである。だとすれば伊豆の御家人江馬氏の方だろうか。しかし、いずれにしても13世紀半ばのこのころに、江馬氏が何らかの形で高原郷にはいってきた可能性は十分考えられるのであり、「正嘉元年」の年紀は、あるいは江馬氏と高原郷の関係の始まりを示唆しているのかもしれない。

北条氏の一族、伊豆の御家人のいずれにしても、江馬氏は鎌倉時代から幕府に連なる武家の一員であり、高原郷入部の後、南北朝の内乱を経て在地領主として成長を遂げ、室町期には武家政権の確たる地域の代表者となっていたのではないだろうか。こうした展開が、この館と庭園の歴史的背景としては最も似つかわしいように思われる。

（小島道裕）

(注)

1 康永3年(1344)11月16日足利尊氏所領寄進状(『圓城寺文書』、『岐阜県史』史料編古代・中世4所収)。なお、圓城寺文書中の文和2年(1353)足利將軍家御教書によれば、飛騨国には造園城寺料があったことが知られ、高原郷もそうした役割を持っていたことと思われる。昨年度報告書166頁で指摘されたマツ、二木林の拡大も、こうした林業活動の結果と考えられ、また山間部に京都風の館と庭園があることも、そのような背景による濃厚な中央との結びつきを考えれば決して不自然なことではないことが理解される。

(付記)

本稿作成にあたり、特に(C)について、石井道氏より多くの御教示を得た。

## 5 結語

江馬氏下館は中世の武家について知る上で、一つの典型を提供するものである。ただし、その具体的な調査の成果を記述する以前に、その理解に必要と思う若干の点を述べておきたい。

江馬氏下館が立地する殿丘は、繩紋時代中～晩期の営みがなされて以後、弥生時代以後には全くと言っていいほど考古資料が存在しなくなる。そして10世紀に端緒的に開発を試みたようであり、13世紀後半以後になって、本格的な遺跡が成立した。

この地域は、日本海に注ぐ神通川水系の高原川にそい、山地の中に段丘地形が発達する繩紋時代の生活適地である。しかし用水源には乏しく水田農業には不適な場所柄である。また第1章において示しているように、神岡町全体でも平野面積は少なく、それは基本的には飛騨国全体に通じるものであった。水田史観に立つならば、江馬氏館の遺構や遺物は、あまりに立派であり、その力の基盤について疑問をもたざるを得ない。しかし中世遺跡に接すると、このような経験は決して珍しいことではなく、山の資源と交易の力を実感させられることが多い。そしてこの分野の経営は、農業開発以上に水準の高い技術と社会的関係を必要とするものなのである。

江馬氏下館調査の大きな成果の一つは、池淵浜の撒き石に混じって、鷹羽口が出土したことであり、いまその鉱滓が神岡鉱山のものであるかどうかを分析中である。また館内が焼物の世界であるのに対して、館門前には木と鉄の世界があつたことが明らかになった。それは、飛騨国あるいは東日本を広く覆うものであり、むしろ焼物の世界が特殊であった。そして門前地区の土中から得た漆塗膜片は、肉眼では粗末なもののように見えたが、四柳嘉章氏の分析によれば、炭粉渋下地ながら、朱の上塗りを施すなかなかの高品質のものであった。そしてこれが館堀外の地区的出土であることを重視するならば、遺跡は明確な身分秩序の形成を感じさせるが、中世の人々の豊かさも忘れてはならないことを実感する。

さらに辻誠一郎氏は、花粉分析から付近に造林あるいは人為的に管理したクリ林やトチノキ林が存在したことを見た。そして花粉に存在しないヒノキ木炭が出土していることから、木材の広域流通があったことを示唆している。

また本書第2章において述べているように、江馬氏下館の地は、越中・飛騨・信濃の交通の接点であり、また北陸道諸国と鎌倉とを結ぶ表街道としても重要であった。この地が、河川交通・陸上交通を通じて、日本海域と太平洋域の接点となることは、能登珠洲窯・越中八尾窯の製品と、尾張瀬戸窯の製品がいずれも出土することが象徴している。そして焼物は行き交う物資のほんの一部分であり、それが江馬氏の繁栄を支えた一つの柱であったことは間違いないであろう。江馬氏下館は武家居館としてだけではなく、当時の社会の営みの全体の中に位置づけなければならない。

江馬氏下館Ⅰ期（13世紀後半～14世紀中頃）には、殿段丘上に縦柱式建物が点在する景観が生れた。その出土遺物には龍泉窯系青磁の優品を含み、居住者は通常の農民ではないと推測できる。また京都系土器を使用する祭祀よりも、井戸祭祀や竈祭祀のような個々の遺構における儀礼的行為が目立つ時期でもある。江馬氏は、小島道裕氏が示すように、北条流あるいは伊豆の江馬（江間）氏の系譜を引くものであろう。確証はないが江馬氏下館Ⅰ期の主が、このような人々であった可能性は非常に高いであろう。また彼らがどのような社会的関係の中で力を蓄えて行ったかは、次の段階において庭園の借景ともなる館正面の觀音山などの諸遺跡が、山岳寺社権門の施設であるか、武家の城であるかが判明すれば、重要な手掛かりとなるであろう。

江馬氏下館Ⅱ期（14世紀末～16世紀初め）には、方約一町の居館が成立した。居館の中は整地地業を行い、堀・圓池・礎石建物を縦密な計画のもとに整備している。また館周辺も、この堀に並行・直交する道路や柵によって区割りして、様々な施設を設置した。それは小島道裕氏が「飛騨の花の御所」と的確に表現した通りのものであり、圓池だけではなく、館様式全体と館周辺の整備を含めて、室町幕府との直接的な関係の中で、確立したものであろう。

それは一地方武家の京都文化へのあこがれや模倣などではなく、武家が列島規模で力を強める中において必要とした先端的政策であったに違いないものである。今後は館周辺だけではなく、公家寺社権門や商工業者・農民の営みを含めた地域景観を復元することが課題であろう。この面では、館南外において出土している竪穴建物などが大切な意味をもつものである。中世の一般的傾向から言えば、川筋・街道にそって帯状の都市的空間を形成しつつあり、武家居館がその重要な場を押えていたことを予測できる。

江馬氏下館ⅡA期（14世紀末～15世紀前半）において、門前地区の建物は画一的な側柱建物となり主門の門前屋を形成し、脇門の門前は井戸場となっている。館外のこのような

## 江馬氏城館跡Ⅱ

景観を復元できたのは非常に稀な例である。また京都系土器を使用した儀礼は館内部において盛んに行っていたであろうが、個々の遺構での祭祀行為は、あまり行わなくなってきたようである。さらに、焼物が少なく木（漆器、木製容器）と鉄（鍋・釜）の生活を行っていたであろうことは、先述のとおりである。また館内の池・中島の造成は館整備の一環として実施し、その景石・汀石・撒き石として様々な色調・光沢の石材を周到に使い分けていた。

江馬氏下館ⅡB期（15世紀後半～16世紀初め）には、門前は広場状となり長大な馬屋を設置した。おそらく字名に残る馬場が門前地区北側に広がっていたであろう。飛驒武士の力は騎馬技術・戦術によるところが大きいが、小島道裕氏が指摘するように馬場は館内と一体となった儀礼空間でもある。馬場そのものは從来から存在したであろうが、門前の広場化は江馬氏下館の儀礼体制の強化すなわち全国的ネットワーク体制の拡充として理解しておきたい。

16世紀初めを境として、江馬氏は別の場所、おそらくは東町城、今の神岡城に本拠を移した。おそらくこの戦国時代が江馬氏の最盛期であり、1582年に三木氏との飛驒統一をかけた戦いにおいて敗れて歴史上から姿を消した。この本拠地の移動については、戦闘の形跡がなく、おそらく威信の象徴であった館正面の薬研堀ほかを自らの手で廃棄している。

江馬氏下館が立地する殿段丘は地域平地の最高所であるのに対して、東町城は最も低い段丘上に位置している。軍事的にみても、威信の面からも、その移動の理由は説明できない。おそらく、より川筋に近い場において商工業を振興し、かつそれを強く支配しようとしたとするのが唯一の解釈であろう。

同時に園池の考察からは、この時期にその公的な性格がうすれて、表から裏の施設に転換する傾向が生じつつあったことを推定した。それは居館そのものの性格の変化の一環でもあったであろう。武家の方形居館は、中世を通じてその社会的地位・営みの核となるものであったが、それは中世条里開拓とも密接な関係をもち全国的な規模での一定の格式を付与されるという性質のものであった。16世紀の江馬氏については、武家がこのような制約から脱却する姿勢を強めて近世の体制を確立していく歩みとして理解し、中世社会の中において力を蓄えていた江馬氏下館の段階と対比しておきたい。

以上のように1995年度江馬氏下館跡調査の成果を位置づけた。現在の考古資料において江馬氏下館は中世社会を復元的に提示することができる数少ない例であり、今後もその内容を充実する調査を重ねていきたい。  
(宇野隆夫・大平愛子)

## 付章　自然科学的調査の成果



## 江馬城館跡の焼土および池底堆積物の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫・水上裕美・川浪英子

### はじめに

土には、普通的に磁石になることができる鉱物（磁性鉱物）が含まれている。これらは、磁鐵鉱 ( $Fe_3O_4$ ) や赤鉄鉱（ベンガラ,  $Fe_2O_3$ ）のような鉄の酸化物と鉄に少量のチタンが混じっているチタン磁鐵鉱 ( $(Fe, Ti)_2O_4$ ) で、1~3%程度の量が含まれている。

運ばれてきて堆積する土粒子に含まれる磁性鉱物は、すでに磁化を持っており、小さな磁石の粒となっている。これらの磁性鉱物粒子は、水中で堆積する際に、地球磁場の力を受けて、丁度、磁針が北を指すのと同じように、持っている磁化の方向を地磁気と同じ向きに向けて配列し、堆積する。堆積が進んで堆積物が圧密され、鉱物粒が動けなくなると、磁化の配列はそのまま保存されるので、堆積層が全体として、その時に作用していた地磁気の方向の磁化を持つことになる。この磁化を堆積残留磁化 (detrital remanent magnetization, 略して, DRM) という。堆積物に含まれる磁性鉱物の量が多いときには相当強い残留磁化を示す。

一方、カマドや炉跡のような焼土遺構では、焼成によって、炉床の土に含まれている磁性鉱物も熱せられ高温になると、磁石になる性質が失われ、非磁性になるために、先に持っていた磁化が消える。この磁性を失う温度をキューリー点という。この反応は可逆的で、キューリー点以上の高温から冷えてくると、キューリー点の温度を通過した途端に再び磁性が蘇り、磁化を持つことができるようになる。このときの磁化の向きは、そのときに作用している地磁気の方向となる。こうして獲得される磁化を熱残留磁化 (thermoremanent magnetization, 略してTRM) という。土器や陶磁器などの焼物、窯跡や炉跡などの焼土遺構は、すべてTRMを有する。キューリー点は鉱物の種類によって異なり、磁鐵鉱では578°C、赤鉄鉱では670°C、チタン磁鐵鉱の場合はチタンの含有量が増えるとキューリー点は下がる。一番高いのはチタンの含有量がゼロの磁鐵鉱の578°Cであり、鉄に対するチタンの含有量が25%を超えるとキューリー点は0°C以下になる。通常は540~560°Cのものが多い。

TRMやDRMなど、考古学的な遺構や遺物が有する残留磁化を用いて、過去の地磁気の変動の様子を明らかにする研究が考古地磁気学である。

地球磁場は永年変化と呼ばれるゆっくりとした時間変化をしており、堆積や焼成の年代が異なる遺構では、異なる方向の残留磁化をもつ。考古時代の地磁気永年変化については、西南日本各地の比較的年代がよくわかった遺跡の焼土遺構の考古地磁気学的研究から、過

去2,000年間にわたる相当詳しい変動が明らかにされている (Hirooka, 1971 : 広岡, 1977)。遺構のもつ残留磁化の方向をこの永年変化曲線と照合すれば、考古地磁気学的に年代を推定することができる。これを考古地磁気年代推定法という。

今回は江馬氏城館跡のカマドの焼上と庭園の池底の堆積物の考古地磁気測定を行った。TRMを用いた焼土遺構の考古地磁気測定は膨大な数の例があるが、DRMの測定例は、わずかに兵庫県の弥生時代の水田遺構で試みられたもの (広岡・岡田, 1988) があるのみである。

### 測定試料の採取

TRMを測定する場合は、試料として採取する焼上は、正確に過去（焼成時）の地磁気を記録している部分でなければならない。十分な熱残留磁化を獲得しているよく焼けた部分で、最終焼成以降動いていない部分であることが必要である。考古地磁気推定年代はサンプリングの良否で決まる。DRMを用いる場合は、細粒の堆積物でしかも磁性鉱物が多く含まれている緻密なものがよいようであるが、測定してみるとやはりよく分からぬことが多い。

遺跡現場で測る試料の方位は、クリノメーターの磁針の示す磁北を基準にしたものであるので、遺跡での磁北と真北のずれの角度（現在の偏角）の分だけずれている。そのずれを知るために、現場で太陽の方位観測を行った。太陽の真北からの方位角は、観測地点の緯度・経度と時刻、および、理科年表に掲載されているその日の太陽の赤経・赤緯とグリニッジ恒星時から、計算によって求めることができる。一方、遺跡現場で、トランシットを用いて、磁北を基準にした太陽の方位角を観測しておくと、観測時刻について計算で求めた方位角と観測値との差が、その地点の現在の偏角値を与える。こうして求められた遺跡現場の現在の偏角値は、西偏7.07°となった。測定した残留磁化の偏角は、この値を用いて補正してある。

今回の江馬氏城館跡では、西堀の西側で見出されたカマド跡から焼土試料を21個と、園池内の堆積物を2つの断面で採取した。東側断面では、1層準7個のサンプルを9層準（層準番号CHD(3)～(16)）で、西側断面では5層準（CHD(12)～(16)）で試料を採取した。東側断面の下から5層準（層準番号CHD(3)～(7)）は園池底堆積物で、その上の4層準（CHD(8)～(11)）は埋土である。西側断面では5層準全てが池底堆積物である。

石膏で固めて採取した焼土試料は、研究室に持ち帰ってからダイヤモンド・カッターを用いて、34mm×34mm×34mmの立方体に成形し、プラスティック・キューブを押し込んで採取した堆積物試料は、パラフィンで密封してから裏蓋を接着した。各遺構、層準の試料番号は第1表の通りである。

第1表 江馬氏城館跡の考古地磁気試料番号

遺構名・層準名	試料番号
焼土 カマド	CHD 1~21
園池堆積物 東側	
CHD (3)	CHD 31~37
CHD (4)	CHD 41~47
CHD (5)	CHD 52~57
CHD (6)	CHD 61~67
CHD (7)	CHD 71~77
CHD (8)	CHD 81~87
CHD (9)	CHD 91~97
CHD (10)	CHD 101~107
CHD (11)	CHD 111~117
西側	
CHD (12)	CHD 121~127
CHD (13)	CHD 131~137
CHD (14)	CHD 141~147
CHD (15)	CHD 151~157
CHD (16)	CHD 161~167

### 残留磁化の測定

磁化測定には、夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SSM-85型）を使用した。この磁力計は、高透磁率金属（ニメタル）で地磁気を遮蔽した無磁場空間内で試料を回転させ、試料が作る磁場の変化をリングコア型のフラックスゲート磁気センサーで測定するものである。6回置き直し法で測定した。1回で回転軸に垂直な直交2成分が測定されるので、合計12の成分が得られる。直交3成分のそれぞれを4回ずつ測定したことになる。

採取してきた試料が持っている残留磁化を自然残留磁化（natural remanent magnetization, 略して, NRM）といい、これには色々な安定性の磁化成分が含まれている。磁気的に安定で磁化の方向や強度が変わりにくい成分から、外部磁場の変化によって容易に磁化の方向や強さを変えてしまう不安定なものまで、安定性の色々な磁化成分から成り立っている。一般に、焼成温度が低いときや堆積物の場合には、不安定な磁化成分の割合が多い。NRMに不安定成分が多いと、最終焼成後あるいは堆積後の長い埋積期間中に、地球磁場や周りのものが作る磁場によって影響をうけ、磁化方向を変えることが多い。

不安定な磁化成分の消去には交流消磁法を用いる。地磁気を遮蔽した無磁場空間内におかれたソレノイド・コイルに交流電流を流し、交番磁場を発生させると、コイル内に置かれた試料は磁気的に描かれて、不安定な磁化成分が消去される。実験の手順は、まず、

全試料について、NRMの測定を行って、磁化方向のまとまり具合や磁化強度を知り、次いで、交番磁場の強さを適当な段階に設定して、交流消磁を行い、消磁後に再度、残留磁化を測定する。この段階で磁化のまとまり具合が改善されたか否かを見た後、更に高い消磁磁場の段階で消磁を行う。この手順を繰り返して、何段階もの消磁を行うことを段階交流消磁という。

今回の測定では、焼土試料は25 Oe, 50 Oe, 75 Oeの3段階で、岡池堆積物のキューブ・サンプルでは25 Oe, 50 Oeの2段階で消磁実験を行った。

カマドの焼土はTRMにしては磁化方向が大きくばらついており、磁化獲得後に動いたものが多く含まれていると思われる。

岡池底堆積物および岡池埋土についても、磁化方向のばらつきは大きく、また、常識的な地磁気方位から相当大きく外れている。当初、層準毎に平均磁化方向を求めて、地磁気がどのように変動しているかを時間的に追跡しようとしたが、1層準7個の試料では誤差角（フィッシャーの信頼角）が大きくて細かい議論ができなかったので、東側断面と西側断面にわけて、それぞれの測定結果を一括して平均磁化方向を求めた。特に、西側断面ではばらつきがひどく、偏角が南東を指すもの多かった。これは、水流などの影響を受けて、うまく地磁気の方向のDRMを獲得できなかったことを示しているのであろう。また、これらキューブ・サンプルは、交流消磁をすると磁化方向のばらつきがより大きくなる傾向が認められ、消磁前のNRMのものがまとまりは最もよい。池底堆積物、埋土とともに非常に空隙の多いルーズなものであったため、消磁の際に交番磁場で揺すられて、磁性粒子自身が物理的に動いたのが原因と考えられる。

焼土の各消磁段階の残留磁化測定の結果は、第2～5表に、キューブ・サンプルの測定結果は第6～14表に示してある。

同一の遺構から探った試料の中に、他の試料のものから大きく外れた磁化方向を示す試料が若干個含まれていることが多い。これは、試料採取の際の方位測定の誤差、十分温度が上がってない部分を試料として探った、外れた方向の磁化を持つ礫が含まれている、あるいは、磁化獲得後に動いた部分を試料とした、などの理由が考えられるが、いずれにしても、本当の昔の地磁気の記録とはいえないでの、遺構ごと、あるいは、層準ごとの平均磁化方向を求める統計計算はこのような試料を除外して行った。表中に\*印が付されているものが除外された試料である。今回は、上述のようにばらつきが大きく、地磁気の方向から外れているものが多く、どれを除外し、どのデータを採用するかに頭を悩ませた。

第2表 江馬氏城館跡 焼土のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
CHD 1	0.8	79.7	0.592
*	2	95.5	0.788
*	3	21.4	48.9
*	4	-2.3	70.4
*	5	20.1	53.1
*	6	62.2	69.2
*	7	27.7	61.3
*	8	54.4	54.9
*	9	-4.8	49.6
*	10	-6.6	27.5
*	11	-27.9	55.9
*	12	-6.2	43.6
*	13	-81.0	-17.4
*	14	-14.2	33.2
*	15	-62.1	59.7
*	16	3.5	71.4
*	17	2.2	38.4
*	18	158.5	-36.3
*	19	-97.5	30.4
*	20	22.1	63.3
*	21	70.1	16.2

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第3表 江馬氏城館跡 焼土の25Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
*CHD 1	-28.3	76.3	0.392
*	2	105.4	0.623
*	3	21.5	45.5
*	4	-2.1	68.5
*	5	25.5	54.8
*	6	71.2	64.8
*	7	34.6	64.5
*	8	52.7	56.3
*	9	-2.0	51.7
*	10	-14.0	13.1
*	11	-31.8	56.1
*	12	-8.3	19.1
*	13	-84.9	-22.7
*	14	-0.7	36.9
*	15	-66.5	58.2
*	16	13.1	68.7
*	17	10.0	35.7
*	18	156.8	-37.5
*	19	-98.3	23.1
*	20	41.8	65.3
*	21	76.0	4.0

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第4表 江馬氏城館跡 焼上の50Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (× 10 <sup>-4</sup> emu/g)
CHD	1	-15.3	77.7	0.281
*	2	122.2	64.3	0.420
*	3	21.4	44.5	1.90
*	4	-7.7	64.2	1.43
*	5	26.9	52.2	0.950
*	6	74.4	63.7	0.688
*	7	43.7	58.8	0.863
*	8	49.5	55.8	1.01
*	9	-3.6	51.2	0.587
*	10	-17.5	4.4	0.930
*	11	-42.3	47.2	1.41
*	12	-7.8	-20.6	0.338
*	13	-86.3	-26.8	2.27
*	14	0.8	36.4	0.232
*	15	-63.4	52.6	0.404
*	16	11.2	67.5	0.448
*	17	13.2	26.5	0.587
*	18	156.7	-39.1	3.12
*	19	-100.7	20.0	0.889
*	20	40.1	64.6	0.592
*	21	87.4	-6.8	0.419

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第5表 江馬氏城館跡 焼上の75Oe消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (× 10 <sup>-4</sup> emu/g)
CHD	1	4.7	81.5	0.228
*	2	124.8	55.7	0.331
*	3	23.9	42.4	1.54
*	4	-20.6	60.2	1.17
*	5	31.9	52.2	0.841
*	6	91.6	60.4	0.563
*	7	47.5	57.3	0.643
*	8	56.9	53.1	0.832
*	9	2.4	48.7	0.456
*	10	-21.8	-4.1	0.856
*	11	-47.7	47.9	1.23
*	12	-12.2	-63.1	0.329
*	14	6.1	27.4	0.201
*	15	-62.9	47.4	0.346
*	16	18.3	68.1	0.425
*	17	15.8	24.6	0.508
*	18	154.5	-39.0	2.80
*	19	-103.1	21.7	0.851
*	20	48.4	69.2	0.538
*	21	78.6	-10.7	0.356

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第6表 江馬氏城館跡 園池東側断面池底堆積物のNRMの磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)	
CHD(3)	*CHD 32	58.8	50.3	1.95	
	* 35	40.5	60.9	1.50	
	36	23.3	37.2	1.25	
	37	34.3	46.5	1.46	
CHD(4)	*CHD 41	57.0	12.9	1.29	
	42	46.1	32.5	1.66	
	43	50.6	30.2	1.86	
	*	44	60.6	30.3	1.37
	45	29.7	45.4	1.70	
	46	43.0	30.1	1.68	
	47	36.1	27.5	1.29	
	CHD 52	5.5	45.7	0.768	
CHD(5)	*	31.0	9.9	1.33	
	*	71.7	17.1	1.25	
	*	63.6	-5.1	1.76	
	56	37.3	29.9	1.29	
CHD(6)	*	18.8	-6.5	1.68	
	CHD 61	56.1	67.3	0.543	
	62	41.8	40.8	0.718	
	63	31.7	44.3	1.58	
	*	-95.4	-38.1	0.762	
	65	45.6	34.1	1.87	
	*	39.6	-2.3	0.827	
	*	46.9	-27.5	1.67	
CHD(7)	*CHD 71	-20.0	45.5	1.20	
	72	39.7	39.3	1.06	
	*	73	44.8	-24.8	1.36
	74	40.6	44.8	0.335	
	75	22.6	21.9	0.653	
	76	40.2	44.4	1.06	

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第7表 江馬氏城館跡 園池東側断面埋土のNRMの磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)
CHD(8)	CHD 81	18.9	59.6	0.411
	*	82	37.3	1.26
	*	83	56.0	0.624
		84	12.1	0.673
	*	85	60.3	0.947
	*	86	37.4	1.00
	*	87	55.1	1.19
	CHD 91	58.0	42.8	1.22
CHD(9)	*	92	94.8	2.14
		93	41.4	1.14
	*	94	44.0	1.19
		95	-0.4	1.87
		96	48.7	0.622
		97	60.0	1.23
	CHD 101	37.9	46.2	1.00
	102	44.6	16.8	1.07
CHD(10)	103	30.9	23.9	1.02
	104	27.3	15.6	0.716
	105	56.1	40.1	0.607
	*	106	80.0	0.827
		107	35.6	0.637
	CHD 111	36.5	40.3	0.718
	112	58.9	52.1	0.894
	*	113	0.5	0.491
CHD(11)	114	30.3	40.8	0.746
	115	23.7	21.8	1.07
	116	51.0	38.8	0.896
	117	58.9	69.2	0.917

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第8表 江馬氏城館跡 園池西側断面池底堆積物のNRMの磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)
CHD(3)	CHD 31	42.0	32.7	0.841
	32	69.4	50.8	0.347
	34	51.7	32.1	0.687
	35	9.0	69.3	0.748
	36	3.3	16.2	0.557
	37	30.0	17.6	0.390
CHD(4)	CHD 41	73.9	5.7	0.597
	42	47.0	26.4	0.416
	43	47.1	13.9	0.672
	44	66.9	17.4	0.343
	45	-22.2	45.7	0.681
	46	30.0	34.4	0.574
	47	21.9	33.8	0.574
CHD(5)	CHD 52	-79.0	36.3	0.516
	53	-7.0	16.0	0.656
	54	127.6	57.4	0.548
	*	55	79.2	-5.8
	*	56	-40.5	66.2
	*	57	-3.4	-7.5
CHD(6)	*CHD 61	-184.3	-5.0	0.145
	62	9.9	57.0	0.217
	63	10.6	42.5	0.807
	64	-118.1	-38.8	1.41
	65	33.1	38.8	1.097
	66	23.8	-11.2	0.341
	67	37.7	-45.7	1.10
CHD(7)	CHD 71	-37.9	25.1	0.816
	72	37.1	47.8	0.498
	*	73	31.9	-41.7
	*	74	-150.1	-78.3
	*	75	-6.9	-12.4
	76	12.1	48.5	0.384

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第9表 江馬氏城館跡 園池東側断面池底堆積物の25Oe消磁後の磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)
CHD(12)	CHD 121	140.4	55.6	0.646
	122	170.3	65.1	0.746
	123	135.4	79.4	0.492
	124	138.4	45.7	0.628
	125	140.2	46.4	0.589
	126	76.1	44.0	0.728
	127	113.9	32.4	0.899
CHD(13)	*CHD 131	-138.6	71.0	0.324
	*	-110.7	41.3	0.870
	132	111.4	35.1	1.06
	133	57.6	67.8	0.226
	*	119.0	1.9	0.898
	135	39.1	52.1	0.611
	136	102.5	23.6	0.912
CHD(14)	*CHD 141	166.7	-18.3	0.392
	142	145.4	44.3	0.586
	143	168.0	50.0	0.806
	144	45.1	76.2	1.68
	145	162.3	31.9	1.34
	*	162.9	-6.5	0.974
	147	151.2	11.0	0.873
CHD(15)	*CHD 151	-62.8	37.9	0.269
	152	67.8	41.2	1.07
	153	129.1	65.0	0.763
	154	120.4	25.5	0.619
	*	143.6	3.1	0.520
	*	156	83.1	0.5
	*	157	142.0	3.7
CHD(16)	CHD 161	18.5	60.4	0.517
	*	162	108.9	0.597
	*	163	135.5	0.526
	164	-51.9	15.0	0.244
	165	134.3	59.4	0.992
	166	71.6	42.0	1.16
	167	123.4	17.4	0.874

\*: 統計計算の際に除外したもの。

第10表 江馬氏城館跡 園池東側断面埋土の25Oe消磁後の磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
CHD(8)	* CHD 81	-183.6	-41.4	0.160
	* 82	34.7	1.0	0.971
	* 83	65.8	-35.4	0.252
	84	-3.2	15.5	0.327
	* 85	64.8	-17.2	0.665
	* 86	24.5	-61.1	0.770
	* 87	56.3	-2.5	0.538
	CHD 91	67.4	36.4	0.592
CHD(9)	* 92	102.8	-13.8	1.88
	93	31.5	10.7	0.477
	* 94	45.3	-0.4	0.704
	95	-24.3	67.1	1.61
	96	72.0	44.6	0.200
	97	78.7	85.8	0.891
	CHD 101	41.7	52.5	0.457
	102	43.9	5.5	0.534
CHD(10)	103	-0.4	42.9	0.510
	104	-2.5	25.2	0.359
	105	-137.5	72.8	0.498
	106	-164.5	74.0	0.664
	107	-2.8	48.0	0.137
	CHD 111	41.1	30.5	0.250
	112	40.2	77.2	0.368
	* 113	-56.6	-49.6	0.617
CHD(11)	* 114	7.8	-12.5	0.304
	115	5.5	17.1	0.611
	116	45.8	32.4	0.247
	117	76.5	84.1	0.526

\* 統計計算の際に除外したもの

第11表 江馬氏城館跡 園池西側断面池底堆積物の25Oe消磁後の磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)	
CHD(12)	CHD 121	117.8	61.2	0.279	
	122	-102.4	70.4	0.350	
	123	-83.2	20.9	0.212	
	*	124	172.5	-20.0	0.315
		125	123.9	32.1	0.201
		126	83.9	21.0	0.340
		127	86.8	22.1	0.882
CHD(13)	CHD 131	-25.9	59.3	0.285	
	132	-96.7	17.3	0.716	
	133	108.6	31.6	0.880	
	134	-32.4	57.3	0.093	
	135	104.5	1.5	0.611	
	136	0.8	35.3	0.393	
	137	108.1	18.8	0.666	
CHD(14)	*CHD 141	161.9	-43.3	0.206	
	142	110.6	18.5	0.261	
	143	-167.1	64.3	0.354	
	144	14.2	62.7	1.47	
	145	171.7	41.8	0.755	
	*	146	147.3	-0.1	0.397
	*	147	153.4	-12.2	0.269
CHD(15)	CHD 151	-64.7	12.8	0.356	
	152	63.6	31.4	0.840	
	153	156.4	59.4	0.387	
	154	111.7	18.7	0.289	
	155	162.8	27.7	0.226	
	*	156	63.9	0.2	0.828
	*	157	144.1	-14.2	1.08
CHD(16)	CHD 161	0.4	58.7	0.688	
	162	101.8	24.4	0.456	
	*	163	-89.3	-51.1	0.216
	*	164	-43.7	-8.3	0.540
	165	150.0	37.9	0.346	
	166	71.4	18.9	0.754	
	*	167	128.0	-0.3	0.476

\*:統計計算の際に除外したもの。

第12表 江馬氏城館跡 園池東側断面池底堆積物の50Oe消磁後の磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)	
CHD(3)	CHD 31	46.0	27.1	0.605	
	32	115.5	35.7	0.129	
	34	70.4	23.4	0.528	
	35	-3.2	74.7	0.630	
	36	-10.0	12.1	0.392	
	37	31.6	11.4	0.210	
CHD(4)	*CHD 41	84.0	-0.2	0.524	
	42	52.0	21.1	0.220	
	43	54.0	10.9	0.566	
	44	77.9	3.2	0.259	
	45	-38.2	45.9	0.527	
	46	34.6	41.4	0.426	
	47	19.4	37.1	0.435	
	*CHD 52	169.8	-24.7	1.156	
CHD(5)	53	-13.7	13.2	0.515	
	54	152.9	51.9	0.518	
	*	55	93.1	-12.3	0.502
	*	56	-58.9	65.4	0.721
	*	57	-9.4	-11.8	0.806
CHD(6)	*CHD 61	-177.7	-30.3	0.226	
	62	-0.7	55.6	0.146	
	63	6.3	47.3	0.684	
	*	64	-121.4	-39.2	1.39
	*	65	34.2	41.0	0.927
	*	66	17.1	-22.3	0.242
	*	67	33.0	-52.7	0.983
CHD(7)	CHD 71	-43.2	21.0	0.697	
	72	38.0	56.7	0.381	
	*	73	32.1	-49.7	1.125
	*	74	-164.1	-72.8	0.274
	*	75	-17.6	-24.8	0.326
	76	7.9	54.7	0.404	

\*:統計計算の際に除外したもの。

第13表 江馬氏城館跡 園池東側断面埋土の50Oe消磁後の磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)	
CHD(8)	*CHD 81	-180.3	-46.3	0.261	
	82	35.0	0.8	0.952	
	*	83	59.3	-61.8	0.374
	84	-13.0	2.9	0.232	
	*	85	72.5	-24.5	0.627
	*	86	19.0	-75.1	0.786
	87	63.3	1.4	0.368	
	CHD 91	72.8	36.2	0.488	
CHD(9)	*	92	105.7	-14.7	1.90
	93	23.2	9.3	0.281	
	*	94	46.9	-0.5	0.532
	95	-35.0	67.3	1.56	
	96	113.7	55.3	0.145	
	97	-166.5	80.6	0.885	
	CHD 101	44.5	57.4	0.370	
	102	47.4	2.6	0.426	
CHD(10)	103	-24.3	49.5	0.380	
	104	-8.5	27.6	0.275	
	105	-141.0	58.3	0.517	
	106	-166.6	71.5	0.517	
	107	-51.5	30.0	0.057	
	CHD 111	40.9	21.9	0.153	
	112	-118.3	72.1	0.267	
	*	113	-66.0	-54.3	0.681
CHD(11)	*	114	-6.7	-29.0	0.235
	115	-2.3	16.6	0.497	
	116	48.1	29.8	0.121	
	117	161.3	78.5	0.450	

\*:統計計算の際に除外したもの。

第14表 江馬氏城館跡 園池西側断面池底堆積物の50Oe消磁後の磁化測定結果

層準番号	試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 <sup>-4</sup> emu/g)	
CHD(12)	CHD 121	108.3	73.2	0.211	
	122	-85.9	63.5	0.302	
	*	123	-79.9	-7.0	0.272
	*	124	-173.8	-34.3	0.293
		125	126.4	21.0	0.119
		126	87.6	13.9	0.261
		127	82.7	20.2	0.808
		131	-29.2	49.5	0.229
		132	-97.6	12.1	0.716
		135	105.6	32.4	0.723
CHD(13)	134	-72.3	28.3	0.102	
	135	96.1	1.0	0.513	
	136	-8.0	24.1	0.402	
	137	111.1	16.0	0.593	
	*CHD 141	169.8	-48.8	0.175	
	142	107.5	9.7	0.196	
	143	-128.0	64.3	0.250	
CHD(14)	144	12.7	58.5	1.46	
	145	-185.1	43.9	0.652	
	146	145.1	1.8	0.221	
	*	147	156.1	-39.1	0.126
	*CHD 151	-107.8	-52.8	0.364	
	152	30.4	7.4	0.748	
	153	-42.7	32.3	0.348	
	154	31.4	43.9	0.195	
	155	-68.7	52.5	0.174	
	*	156	61.0	-1.5	0.810
CHD(15)	157	138.6	70.5	1.06	
	CHD 161	0.9	57.1	0.640	
	162	104.1	23.8	0.402	
	*	163	-89.9	-51.3	0.258
	*	164	-40.1	-17.8	0.542
	165	156.6	44.7	0.240	
	166	70.3	16.8	0.671	
CHD(16)	*	167	122.1	-0.6	0.310

\*:統計計算の際に除外したもの。

### 考古地磁気年代推定

第2～14表の測定結果を用いて、カマド遺構、圓池底堆積物東側断面、同西側断面について消磁の各段階ごとに平均磁化方向と磁化のばらつきの大きさを統計的に求めた。このときの統計計算にはフィッシャーの方法(Fisher, 1953)を用い、平均偏角・平均伏角・95% レベルのフィッシャーの信頼角 ( $\alpha_m$ )・フィッシャーの精度係数(K)および平均磁化強度を得る。

平均磁化方向(平均偏角・平均伏角)を中心にして、その周りに半径  $\alpha_m$  の円(フィッシャーの信頼円)を描くと、その円内に、95%の確率で真の磁化方向が存在することになる。すなわち、平均磁化方向の周りに土  $\alpha_m$  の誤差があることになる。測定試料数が多くなるほどその平均磁化方向の信頼度が高くなるので、同一遺構からの試料数が多いほど、 $\alpha_m$  の値は小さくなる。よく焼けた窯跡の場合には、磁化のばらつきが多少大きなものでも、 $\alpha_m$  は3°以内におさまる。

Kは、個々の試料の磁化方向の平均的なばらつきの程度を表すパラメータである。この値は大きいほどばらつきが小さいことを意味し、通常のよく焼けた窯跡では500以上の値となる。この値は測定試料数には関係なく、その遺構の個々の試料の磁化方向のばらつきがどの程度であるかを示している。このような統計計算の結果は第15表に示されている。

カマド焼土の  $\alpha_m$  はNRMの方が25 Oe消磁のものより小さいが、ここの試料の磁化方向の消磁による変化は、系統的に東へ動くものが多いので、同一方向の粘性残留磁化成分が付加されていると考え、少しばらつきは大きくなるが25 Oe消磁後の結果を採用した。

圓池底堆積物については、磁化方向のまとまりが最もよいものでも、試料個数が36もあるのに、 $\alpha_m$  が5.09°であり、Kの値も28と小さく、方向のそろいがあまり良くないことを示している。また、消磁によって磁化方向のばらつきが大きくなるが、カマド焼土のような系統的な変化は見られないので、消磁前のNRMのものを考古地磁気データとして採用した。

第15表の考古地磁気データを西南日本の考古地磁気永年変化曲線上にプロットすると、第1図のようになる。白丸が50年ごとの地磁気の方向を表わし、黒丸が測定結果(各窯の平均磁化方向)、それを囲む円がフィッシャーの信頼円( $\alpha_m$ )である。黒丸に一番近い部分の永年変化曲線の年代が推定年代値を与える。

先にも述べたように、圓池底堆積物東側断面の磁化方向は偏角が大きく東に振れているので年代推定は難しいが、永年変化曲線の一一番近い部分の年代をとることにし、永年変化曲線が正確に過去の地磁気変動を表しているものとすると、考古地磁気推定年代は次のようになる。

カマド焼土 A.D. 1250 ± 110 年

園池底堆積物東側断面 A.D. 1320 ± 150 年

園池底堆積物西側断面 —

となろう。園池底堆積物西側断面は地磁気の方向から大きく外れていて、測定された磁化方向が地球磁場の記録とは考えられないので、年代推定は行わなかった。園池底堆積物西側断面の磁化方向は普通の地磁気の方向から大きく外れているので、通常用いている部分拡大シュミット・ネット内には入らない。年代の推定はできないが、どれくらい離れているかを示すために、全円のシュミット・ネットにプロットしたものを第2図に示しておく。

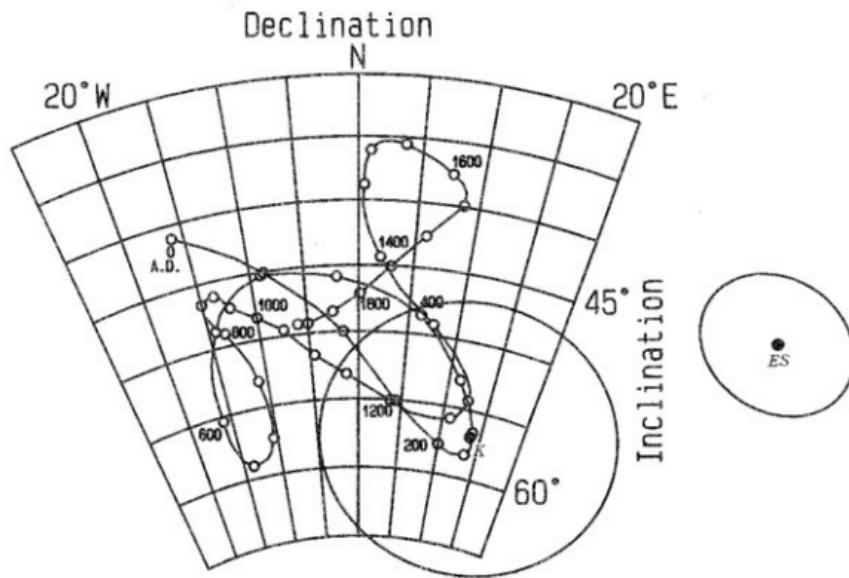
第15表 江馬氏城館跡の考古地磁気測定結果

遺構名	消磁段階	N (° E)	D (° E)	I (°)	$\alpha_{95}$ (°)	K	平均磁化強度 ( $\times 10^{-4}$ emu/g)
カマド	( NRM	13	1.4	54.6	9.48	20.1	1.19 )
	( 25 Oe	11	13.7	56.9	10.01	21.8	1.14
	( 50 Oe	11	17.3	56.1	10.64	19.4	0.807 )
	( 75 Oe	10	21.4	52.4	12.58	15.7	0.715 )
園池 東側断面堆積物	NRM	36	37.5	40.4	5.09	28.0	1.06
	( 25 Oe	41	26.0	47.1	10.65	5.4	0.564 )
	( 50 Oe	41	26.0	49.0	13.76	3.6	0.460 )
	西側堆積物	( NRM	24	115.9	56.0	14.54	5.1
	( 25 Oe	26	102.8	62.1	22.74	2.5	0.794 )
	( 50 Oe	26	81.6	64.6	25.17	2.3	0.503 )
							0.471 )

N: 試料個数, D: 平均偏角, I: 平均伏角,  $\alpha_{95}$ : フィッシャーの信頼角,

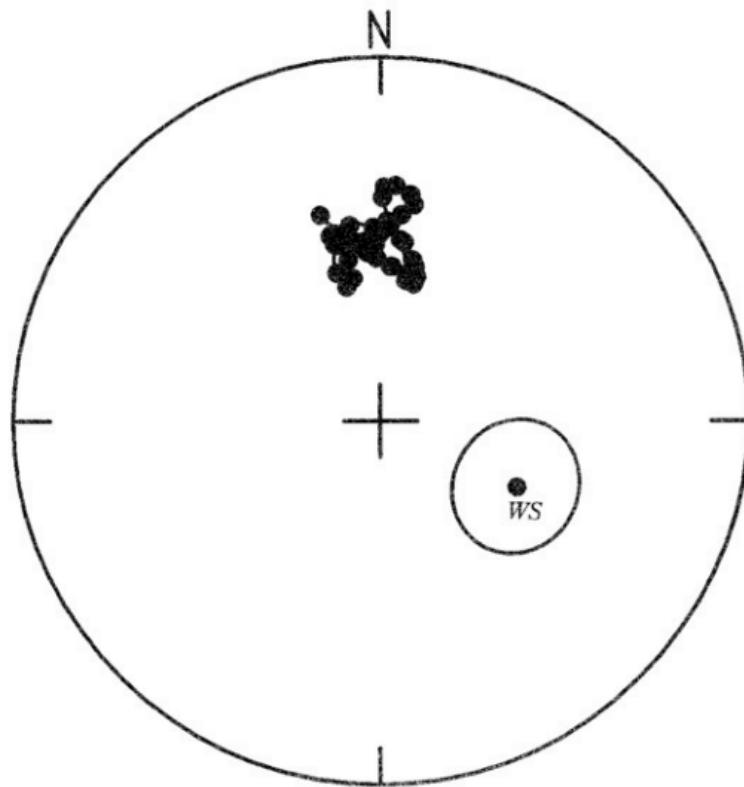
K: フィッシャーの精度係数。

( ) は年代推定のための考古地磁気データとして採用しなかったものを示す。



第1図 西南日本の考古地磁気年変化（広岡、1977による）と、  
江馬氏城館跡の考古地磁気測定結果。

K：カマド焼上，ES：園池底堆積物束側断面。  
Declination：偏角，Inclination：伏角。



第2図 全円シュミット・ネットに投影した西南日本の考古地磁気永年変化  
(広岡, 1977による) と、圍池底堆積物西側断面の考古地磁気測定結果。  
WS: 围池底堆積物西側断面。

### 引用文献

- R. A. Fisher (1953) Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol. 217, 295-305.
- Kimio Hirooka (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Memoirs of Faculty of Science, Kyoto University, Series of Geology & Mineralogy, vol. 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向, 第四紀研究, vol. 15, 200-203.
- 広岡公夫, 岡田宗 (1988) 堆積残留磁化による水田遺構の年代推定の試み, 昭和63年度日本文化財科学会大会研究発表要旨, 40-41.

## 江馬氏城館跡下館跡出土漆器の塗膜分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

### I. はじめに

岐阜県吉城郡神岡町所在の江馬氏城館跡は、『下館跡発掘調査報告書Ⅰ』<sup>1)</sup>の刊行によって、平方形館の様相が明らかにされ、出土遺物の詳細な計量分析も報告されるなど大きな成果があげられている。

しかし、遺物の中で当然一定量を占めるはずの漆器を含む木製品の実態が、遺跡立地の関係から全く不明のままであったが、1995年度の発掘調査で門前地区SP169から漆器の塗膜片が出土した。漆器の品質ランクは遺跡・遺構の性格を探る手がかりとなることも多く、近年注目される遺物の1つであるが、以下に漆塗膜と上塗顔料の蛍光X線分析結果を報告する。

### II. 分析方法と結果

漆器は同一素材で上質品から普及品までさまざまな品質のものがあり、表面からの観察では判断できないため塗膜分析を行う。塗膜分析は漆器の品質を決定する塗装工程(髹漆)や下地材料を解明する方法で、塗膜をポリエチル樹脂に包埋の上、これを#100~3000までの研磨材によって薄く研磨し、スライドグラスに貼り付ける。これを再び同様の工程で研磨し、金属顕微鏡や偏向顕微鏡で観察する。上塗顔料の定性分析はセイコー電子製蛍光X線微小部膜厚計STF-8000を使用した。

提供された漆器は木胎は遺存せず、漆塗膜の細片だけである。表面に付着した砂のクリーニングにもことのほか時間を要し、極めて遺存状態の悪いものであった。分析には6点の試料を作成して平均値を算出した。以下の報告は下から塗装順に番号を付して説明する(図版1参照)。

#### 塗膜分析

- ① 炭粉渋下地層。漆器の木地(木胎)の上に施されるもので、本試料は剥離が著しく炭粉粒子がかろうじて残り、その間に茶色を呈した若干の柿渋を確認した。層厚はすべてが残っていないのでわからないが、現存の最大層厚は80μmである。炭粉粒子の構成は、針状粒子の最大は2.4×38.9μm、ほかに2.2×14.6μm、2×7μm前後のものが確認できる。この間を2×3μm、2×4μm程度の楕円形・三角形・台形粒子が埋めている。図版1-2では炭粉粒子の粗い空間から上層の漆が染み込んでいることが知られる。

なお、炭粉はモミガラ類が含まれている可能性もあるので(図版1-3)、今後の検

討課題にしておきたい。

- ② 下塗漆層。最大層厚は $12.2\mu\text{m}$ で、薄いところは $4.9\mu\text{m}$ 。透明性はやや不良。

③ 上塗赤色漆層。表面色はやや暗い朱色である。最大層厚は $14.6\mu\text{m}$ で、薄いところでは $2.5\mu\text{m}$ しかない。赤色顔料は螢光X線による定性分析の結果、朱(HgS)であることが判明した(図1)。朱粒子の大きなものは $9.7\times14.5\mu\text{m}$ の方形を呈し、この他 $2\times3\mu\text{m}$ の橢円形、 $2.4\times9.7\mu\text{m}$ の針状粒子が粗く分散している。この間を $1\mu\text{m}$ と $0.5\mu\text{m}$ 前後の微粒子が埋めているが、破碎工程は概して細かい方であろう(図版1-3)。上塗漆は朱の発色をよくし、また刷毛目を残さず美しく仕上げるために、よく精製した漆を用いることが一般的である。全体として高価な朱を節約した薄い上塗と言える。

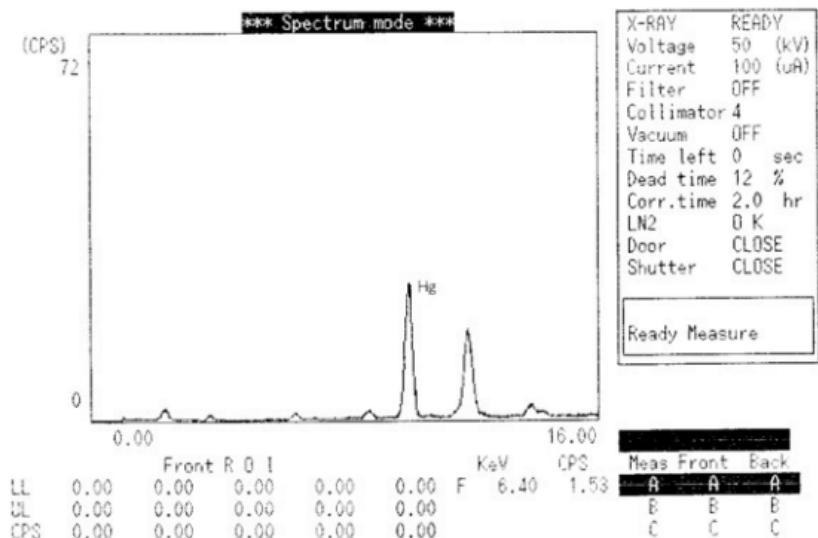
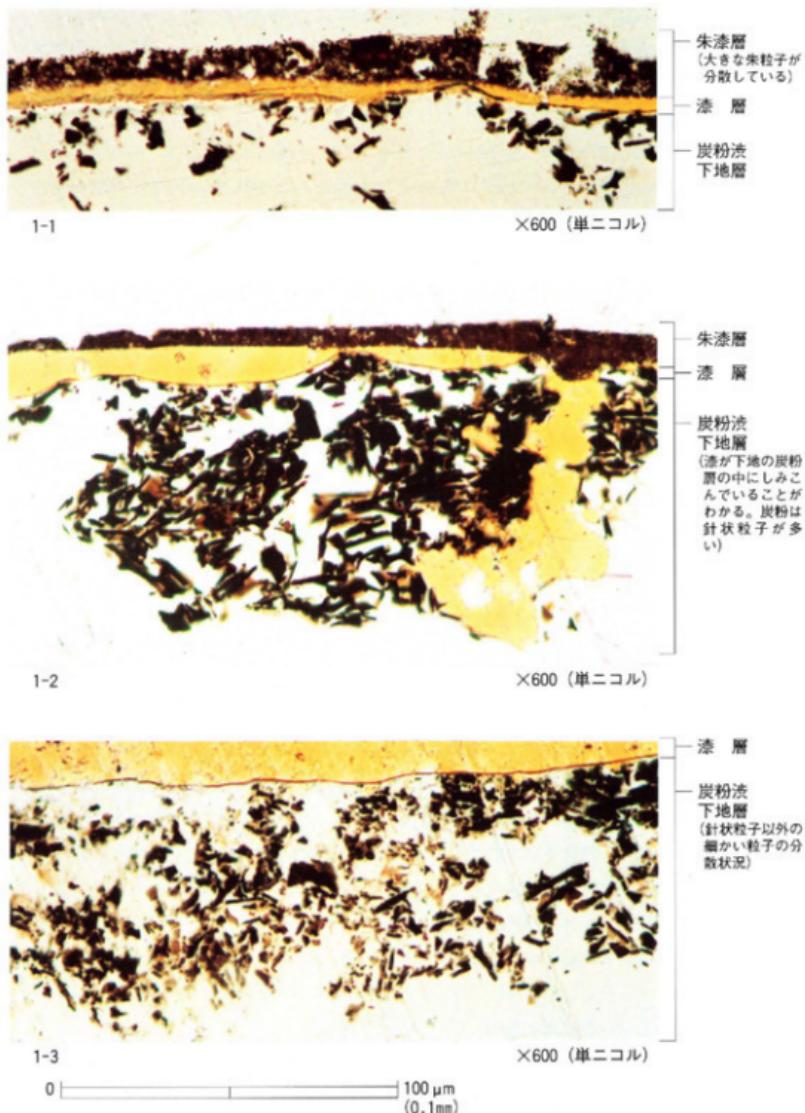


図1 上塗顔料（朱）の常光X線分析



図版1 漆器塗膜層の顕微鏡写真

### Ⅲ 小 結

分析を行った江馬氏城館跡下館跡出土漆器の年代は、宇野隆夫教授によると14世紀末～15世紀初めと推測されている。器形は細片であるためよくわからないが、椀皿類と思われる。塗膜分析結果から渋下地(柿渋に炭粉粒子を混ぜたもの)ではあるが、上塗は朱塗であることが判明した。

漆器は上質品の漆下地から普及品の渋下地漆器まで、階層や行事に応じて各種のものが生産されており、そのランクについて石川県七尾城跡シッケ地区遺跡(16世紀)の分析例から紹介したことがある<sup>3)</sup>。そこでは下地ランクとして、上質品(漆下地漆器)の一辺地(下地を2回施す)2ランク、一辺地(下地1回)2ランク、そして普及品としての渋下地漆器に分けた。これに赤色漆器はさらに上質の朱塗と普及品用のベンガラ塗に2分され、漆下地の朱塗の場合、高級品ではさらに何層もの漆が塗重ねられ、朱漆も3～4層になることもある。こうした基準は中世漆器全体に適応可能で、時代と地域性を加味して判断することになる。

さて、前述のランクによれば江馬氏城館跡下館跡出土漆器の場合は、下地は普及型の渋下地であるが、上塗が朱塗であることから、渋下地漆器では良品ということになる。しかも外見上では上質品の朱漆器と同じであり、購入者は高価な支払いをしたかも知れない。ただ、品質の問題は時代による赤色漆器の普及頻度からも考察することが必要となるので、若干その概要を述べておくことにしたい。

いうまでもなく赤色(朱)漆器は古代ではステータス・シンボルであり、限られた階級しか使用できなかったが、11世紀ごろから地方の田舎クラスでも渋下地に内面ベンガラ塗のものを使用していたことが判明している<sup>4)</sup>。しかしこれは一般的なものではなく、内面朱塗を含む朱漆器が都市の上層クラスや寺院を中心として普及しはじめるのは13世紀末ごろからで、当時の様子が『遊行上人絵巻』『東征伝絵巻』などに描かれている。14世紀代に入ると地方でも一定量流通するようになるが、富山県立山町辻遺跡出土の内面赤色漆器(有段皿、14世紀後半)はベンガラ塗の渋下地漆器であった<sup>5)</sup>。15世紀では総赤色漆器の出土量が次第に増加し、武士クラスではかなりを占めるようになったことが、1463(寛政4)年の「新見地頭方所見搜物色々在中」(東寺百合文書サ函123)からもうかがえる<sup>6)</sup>。新見莊地頭方所で使用された漆製品は、瓶子・鏡子・提子・鏡箱・蒔絵の茶入れ・葉壺・湯盞台・茶盆・香箱・折敷・椀・皿などで、在地支配者層が使用した当時の製品全体がほぼ網羅されている。記述を読む限り、内面赤色椀も含めると大半が朱漆器である。16世紀になるとこの傾向は一層加速する<sup>7)</sup>。

こうしたことと他地域の城館跡出土例から考えると、14世紀末～15世紀初めに比定される江馬氏城館跡下館跡出土の朱漆器は、在地領主の家財として相応のものといえよう。

なお、江馬氏城館跡では陶磁器・土器類の出土ピークが15世紀前半にあり、16世紀半ばまでは生活地であったとされている。しかし木製品が遺存しにくい環境にあるため、本来所有していたはずのものが確認できないわけであるが、今後の全体調査と遺物計量の参考までに福井市朝倉氏遺跡出土の16世紀漆器組成を紹介しておきたい。

朝倉氏遺跡では同研究所の岩田隆氏の協力を得て性格の異なる遺跡出土漆器の下地分類（肉眼観察）を行った。

「本館」出土の漆製品は椀・皿・蓋・飴栓・机脚・合子蓋・棗・凹盤状不明品など53点、器種の豊富さは領主クラスに共通したものである。うち椀は、30点（56.6%）、皿は17点（32.1%）である。椀皿だけの比較では椀63.8%、皿36.2%、総赤色が10.7%、内面赤色が17%、外赤内黒色2.1%，総黒色は70.2%である。漆下地は10.6%，渋下地は89.4%となる。赤色椀が少なく、また渋下地が多いという意外な結果がでているが、椀皿については大半が外振から出土しているので被官クラスに帰属する可能性が大である。

中級武士の屋敷（49次調査）では、54点の食器のうち椀42点（77.7%）、皿11点（20.3%）で、椀の比率が高い。下地の区分では渋下地が81.4%，漆下地が18.6%と、これも本館同様渋下地漆器の比率が高い。内外面の表面色では総赤色が16.7%，内面赤が11.1%，両者で27.8%，総黒色は72.2%である。

寺院では65点のうち椀45点（69.2%），皿13点（20.2%）。下地の区分では渋下地が81.5%，漆下地が18.5%と、これも渋下地漆器の比率が高い。内外面の表面色では総赤色が12%，内面赤色が29%，両者で41%，総黒色は59%である。鉢、筒形の加わっている点が他と異なっている。

町屋では29点のうち椀24点（82.75%，端反1），皿5点（17.25%）。下地の区分では渋下地が48.2%，漆下地が51.8%。内外面の表面色では総赤色が37.9%，内面赤色が37.9%，両者で75.8%，総黒色は24.2%。ここでは赤色椀と漆下地漆器の比率が最も高いという特色が見られた。これは漆器商人の家である証明がない場合は、絵巻物にみると町衆クラスの台頭を示す例として理解する他はないであろう。

おなじ16世紀の七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器は、塗師など職人の居住区と考えられる町屋遺構からのもので、49点のうち器形別では椀89.8%，皿8.2%，鉢2%，下地では渋下地漆器84%，漆下地漆器16%，塗装色では内面赤色を含めて赤色漆器は35%であった。

文献での財産所有例では、越前・常陸半島の刀彌大音氏の雑物注文（16世紀中頃）<sup>30</sup>のうち、漆器は皆朱と内朱で占められ、中世期の実態を引きずっているとされる甲州・八田村に本拠をおいた在地領主・八田家財目録（慶長11年書き上げ、5冊）<sup>31</sup>によると、「深椀10具、下椀4具、黒い鉢5、大杯3、中杯1、酒杯1、小椀1、四ツ椀55具、五ツ椀10具、弁当椀12、手塩皿33枚、鉢2」とかなりの漆器があげられており、残りににくい漆器所有者の復

元に参考となる点が多くある。しかし、朝倉氏遺跡例に見るごとく文献に記されない遺物の出土や名称の実態に迫るには緻密な発掘調査に勝るものではなく、いかに考古学と文化財科学を駆使して遺物から各種情報を引き出すかが重要な鍵となる<sup>100</sup>。

## 註

- 1) 前川 要ほか『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書Ⅰ』岐阜県神岡町教育委員会、富山大学考古学研究室、1995
- 2) 炭粉は通有は針葉樹の木炭であるが、紀州・黒江や大和・吉野では苧殻を、若狭では楓殻を用いている。これがいつごろまでさかのほるかはわからないが、正確な同定ができれば流通問題に大きく貢献できるであろう。
- 3) 四柳嘉章「七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器の塗膜分析（第1次報告）」『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』石川県七尾市教育委員会、1992
- 4) 四柳嘉章「16世紀の漆器－七尾城跡シッケ地区遺跡出土漆器の塗膜分析（第2次報告）」『石川考古学研究会誌』38、1995
- 4) 四柳嘉章・江頭俊郎「古代末期の浹下地漆器について－加賀市田尻シンバイダン遺跡出土漆器の塗膜・定性分析」『中世北陸の在地窯』北陸中世土器研究会、1990
- 四柳嘉章「古代～近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会誌』34、1991
- 四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と両期」『石川考古学研究会誌』35、1992
- 5) 四柳嘉章「立山町辻遺跡出土中世漆器の塗膜分析」『大境』15、富山県考古学会、1993
- 6) 小泉和子「莊園政所の家財と生活」『朝日百科 日本歴史2』、1986
- 7) 四柳嘉章「掘り出された縄文～中世の漆器」日本漆文化会議、1995
- 8) 綱野吉彦「北国の社会と日本海」『日本海と北国文化』小学館、1990
- 9) 萩原三雄「財産目録からみた陶磁器の所有－甲州八田家家財目録を中心に」『貿易陶磁研究』15、1995
- 10) 四柳嘉章「漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、1995

## 江馬氏下館遺跡における電磁気探査と放射温度計探査

富山大学理学部 酒井英男, 上田純子, 上坂麻子

人文学部 宇野隆夫

田中地質コンサルタント 田中保士

### 1. 初めに

遺跡における電磁気探査は、遺跡の概要、遺構や遺物の位置・性格を探る目的で実施されている。最近の研究から電気探査・磁気探査・地下レーダー探査などの有効性は遺構により異なり、それぞれの遺構にふさわしい手法があると考えられる様になった。遺跡の発掘前に各種探査を実施して、結果の比較により有効性を検討することは、探査手法の改良を行うだけでなく、新しい手法の開発に結び付く。

本稿では、岐阜県神岡町江馬氏館遺跡において、富山大学考古学研究室による発掘調査の前に行った電磁気探査と地ドレーダー探査、放射温度計探査を報告する。また、岐阜県上宝村中尾地区で実施した人工焼土の探査実験および放射温度計による青森県の十三淡遺跡での調査もあわせて報告する。

### 2. 探査方法

電気探査、地下レーダー探査および放射温度計探査の概要を簡単に紹介する。磁気探査については、酒井ほか(1993)等を参照されたい。

#### 2-1 電気探査

電気探査は、人工電流を地下に流して電気比抵抗の地下分布を探る手法であり、埋没遺構と周囲土壤の比抵抗の違いから、遺構の位置が推定できる。

探査には4本の電極(電流電極2本、電位電極2本)を用いるが、電極の配列のパターンにより手法が異なる。今回は二極法とウエンナー法を用いた。二極法は、電流電極1本と電位電極1本からなる固定電極を探査区域から離れた位置に固定して、残りの2本の電極を移動電極として一定間隔に保ちながら測定していく平面探査法である。一般に、固定電極と探査区域との距離は移動電極の間隔の30倍以上に設定する。ウエンナー法は電極4本を等間隔に配置して同様な調査を行なう。電気探査の探査深度は土壤の物性にも依存するが、電位電極の間隔の約半分と考えられている。

二極法はRM-15装置、ウエンナー法はDZD-2装置を使用して行なった。

#### 2-2 地ドレーダー探査

電磁波は地中に放射されると、地中の埋蔵物や地層の境界など比抵抗や誘電率の異なる

面で反射して地表に戻ってくる。地ドレーダー探査は、この反射された電波を捉えて、境界面解析から地下構造を探る探査法である。測線上のデータ解析を垂直断面図で行い、地下構造による反射面を解析する。

本研究では、センサー部がスキー板のような形状を持ち、探査地域の地形にあまり影響されないカナダ製EKKO-4型装置を用いて、電磁波パルス反射法による探査を実施した。

### 2-3 放射温度計探査

放射温度計は、土壤から放射される赤外線の波長を調べて温度を測定する。表土の下の遺構の比熱が周囲と異なるとき、遺構は太陽光で暖められた熱源となり、表土を通して熱が放出されると考えられる。特に、日が落ちた夕刻時の測定は比熱の変化を良く反映し、遺構位置を探る新たな手法となる可能性がある。

従来、この様な目的で放射温度計による調査は行われていないため、遺構調査の新たな手法として有効であるかの検討を目的に探査を実施した。

## 3. 江馬氏下館遺跡における電磁気探査

江馬氏下館は、岐阜県吉城郡神岡町の神通川水系高原川の河岸段丘に立地する中世豪族江馬氏の居館跡である。1973～1978年に神岡町教育委員会によるトレンチ調査が実施され、館内部の庭園跡と館をめぐる堀および建物の礎石が確認されている。

探査は、昨年度の調査(酒井ほか、1995)で判明した館を取り囲む堀跡のうち西堀を横切る道の存在を調べ、更に周囲の建物等を検討することを主な目的として行った。探査範囲は、西堀跡の西側54m×24mに及んでいる。同範囲を二極法電気探査と磁気勾配法で探査した。また、西堀跡と平行な測線上で、ウエンナー法電気探査と地下レーダー探査及び放射温度計探査を実施した(図1)。

以下に探査結果を示す。放射温度計探査については第4章に述べる。

### 3-1 西堀跡の西側地域の探査

二極法による電気探査は表土剥ぎ取り前に、1mメッシュの測定点で行なった。図2には、探査結果で得られた比抵抗値の高低分布をドットの濃淡で示している。同範囲での比抵抗の最小値は70Ω、最大値は110Ωであった。

探査領域の四辺に幅約2mの高比抵抗の領域が存在している。また内側には、数カ所の低比抵抗の領域が認められる。これらは、発掘調査との対比から、探査範囲内の建物と広場、周囲を取り囲む道に良く対応していた。建物地域の比抵抗は周囲より低くなっている、これは建物に床があったので、踏みしめられなかったためと考える。周囲の道は踏みしめられて高比抵抗を示している。つまり、電気比抵抗の高低には、踏みしめによる土壤中の含水率の減少も原因になっていると考える。

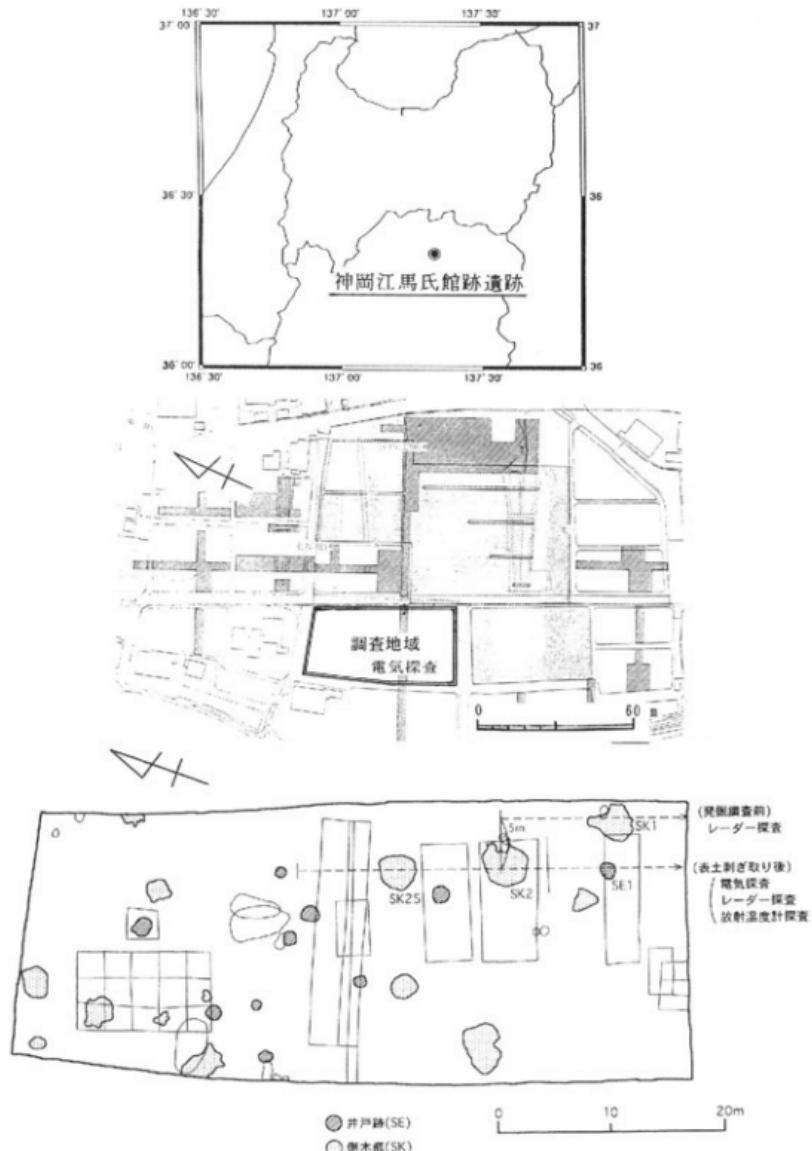


図1 江馬氏館遺跡の位置および二重法と磁気勾配法の探査範囲  
下図はそれ以外の探査測線（電気探査、地下レーダー探査、放射温度計探査）

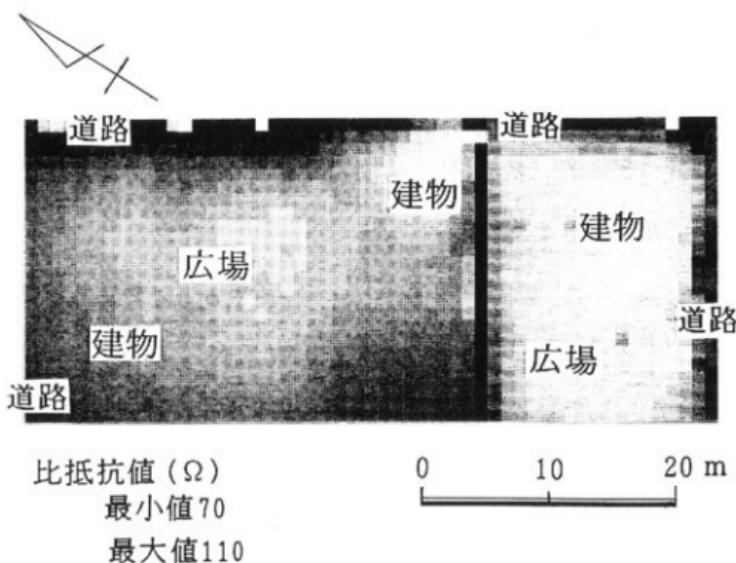


図2 図1の中間に示す調査範囲における二極法電気探査の結果

磁気探査は、表土剥ぎ取り前は北側30×24m、剥ぎ取り後は南側30×24mの範囲を測定点1mメッシュで行なった。磁気センサーの高度は表土剥ぎ取り前は25cm、剥ぎ取り後は地面に接して設定した。測定の結果、表土剥ぎ取り前は東側の領域に側溝に対応する磁気異常(～280nT)が存在したが、炉跡や窯跡を示唆する異常は認められなかった。剥ぎ取り後の南側の探査でも、明確な異常は見つからなかった。

### 3-2 西堀に平行な測線の探査

図1の下図の測線で実施した探査結果を図3と図4に示している。

図3に示すウエンナー法による電気探査は測定点間隔0.5mで行なった。測線の27～29m、35～39mに周囲より高比抵抗の領域がみられ、これらは発掘で現われた倒木痕に対応した。また測線の46～48mにも高比抵抗の領域が認められるが、倒木痕に比べて変化量は小さかった。この領域は井戸跡と対応した。

地下レーダー探査は周波数100MHzを使用し、表土剥ぎ取り前と剥ぎ取り後に実施した。図4上図の剥ぎ取り前の結果では、測線の42～48mの範囲の深さ約2mの地点に遺構を示唆する反射パターンが認められた。これは発掘調査から倒木痕に対応することが判明した。下図の剥ぎ取り後の測線(剥ぎ取り前の測線より4m北西)でも、深度1mに遺構を示唆

する反射パターンが2箇所で認められ、測線の32~38mは倒木痕に、測線の42~46mは井戸跡に対応した。

発掘調査前の探査は雨中のかなり湿った畑で行った為にレーダー波の減衰が強く、不鮮明な反射波の記録となった。表土剥ぎ取り時の調査は、水分の多い表土が除かれており夏の日照りの中で行われたので、比較的、鮮明な反射波が得られたと考えられる。地下レーダー探査が、土質の電気的性質に大きく影響されることが確認された。

以上の様に、電気探査と地下レーダー探査で得られた結果は発掘で示された倒木痕や井戸跡とよく対応し、両手法がこの様な遺構の調査に有効であることが示された。電気探査で倒木痕等の箇所が高比抵抗として表れたのは、これらの領域が周囲より空隙率の高い土壤で埋められている為ではと考えている。

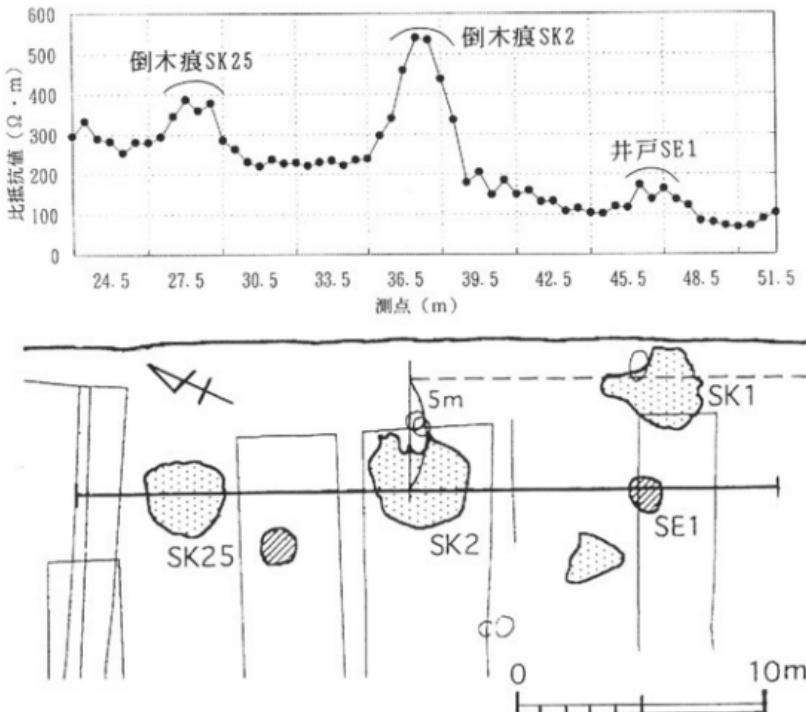


図3 ウエンナー法による電気探査の結果

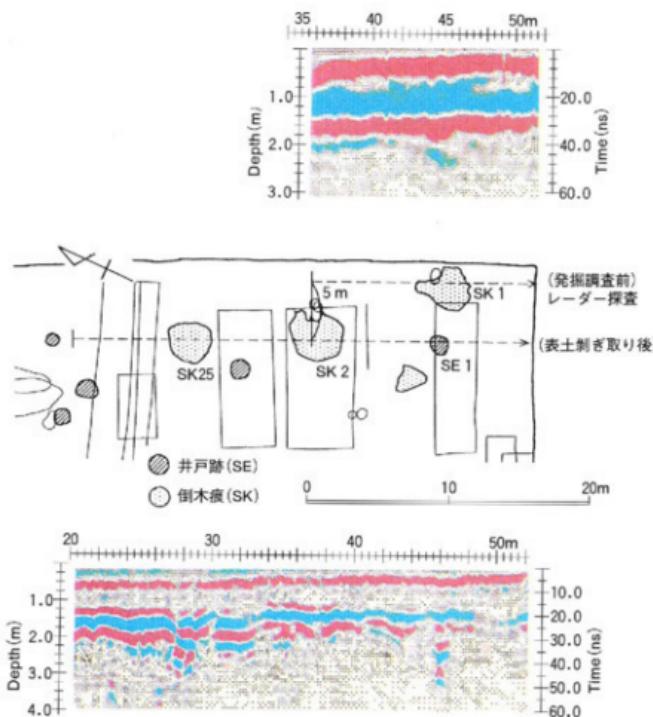


図4 地下レーダー探査の結果

#### 4. 放射温度計探査

江馬氏下館遺跡の図1の測線において、携帯型の放射温度計を用いた探査を0.3m間隔で行なった。図5に結果を示す。測線の43m付近で温度が30°Cから15°C近傍まで急減しているが、この理由は検討中である。この大きな変化を除くと、35~37m及び44~45mの地域で周囲より温度が低くなっていることが注目される。両地域内では温度変化は小さい。発掘調査との比較の結果、両地域は倒木痕と井戸跡に対応した。

同様な調査を青森県十三湊遺跡でも実施した（国立歴史民俗博物館、1995）。図6に測定結果と発掘調査を比較しており、井戸跡、布堀りの堀基礎、竪穴住居の各遺構に対応した温度変化が認められた。

放射温度計探査により遺構と対応した変化を検出できることが、今回の調査から示唆された。これは、遺構と周囲の地山土壤の土質の違いが比熱の差となる為と考えている。同

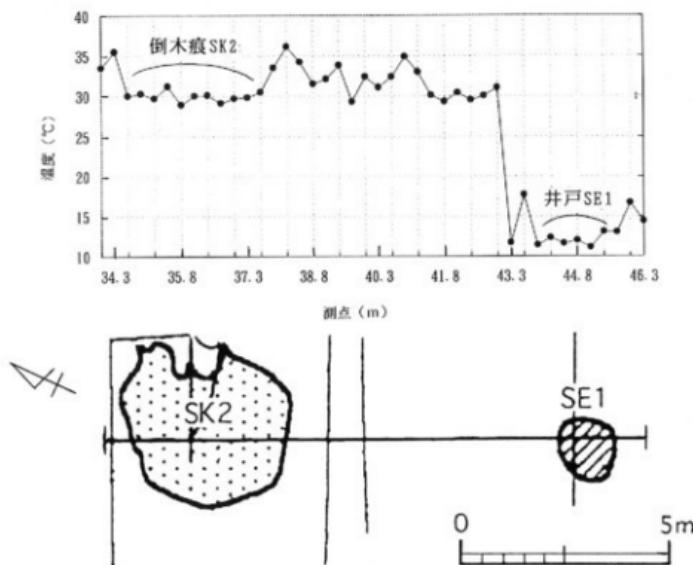


図5 江馬氏館遺跡における放射温度計探査

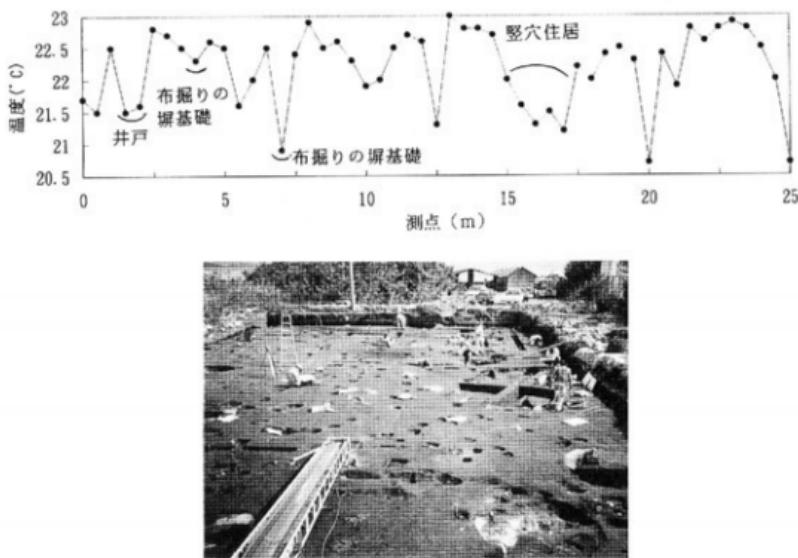


図6 青森県十三湊遺跡の放射温度計探査

手法の有効性をさらに検討するために、今後、表土に被われた遺構等での検討が、課題である。

## 5. 人工焼土実験

遺跡において焼上遺構の確認は重要なテーマである。古い時代の焼土遺構には目で判別が困難なものも多い。富山大学の研究グループは、数年前から電磁気探査による焼土遺構の検討を行なっている。またモデル実験として野外で人工焼土の領域を作り、現われる電磁気的な変化を調べている。沖積層の焼成実験では、被加熱による土壤の磁性変化が顕著であり、電磁気の調査による焚火などの焼土遺構の検出が可能であることが確かめられている（酒井ほか、1994など）。

今回は、火山地域の遺構を想定して実験を行なった。実験地域に選んだ、岐阜県吉城郡上宝村および周辺地域には、縄文時代の遺構が存在することが示唆されている。同地域は活火山である焼岳を控えており、紀元前後に生じた大規模火碎流（雲仙の数倍の規模）など、火山噴出物に埋まった遺構が存在する可能性がある。実験を行なった上宝村中尾地区の京都大学防災研究所・穗高砂防観測所は約2000年前の中尾火碎流堆積物が数10m堆積している地域に位置している（澤田ほか、1990）。

### 5-1 火碎流堆積物を用いた焼成実験

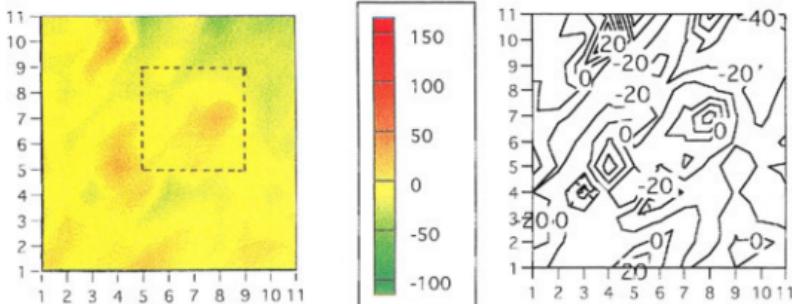
穗高観測所の敷地内で、南北1.8m×東西1.8mの正方形に穴を60cm深度まで掘り、中尾火碎流起源の堆積物を一面に約30cmの厚さに敷き詰めて、実験地域を作成した。同火碎流に含まれる角礫はそれ自身が磁気異常源となると予想されたので、7mmの節で大きめの角礫を前もって取り除いて使用した。実験地域で、磁気勾配が比較的緩やかな60cm×60cmの範囲を選び、一昼夜、薪を燃やした。探査は焚火（焼成）前後に、ブラックスゲート磁力計による磁気勾配探査および帯磁率探査、電気比抵抗探査を実施した。前調査と焚火実験は平成7年7月10~11日に実施し、後調査と試料採取はその数日後に行った。

図7上は焼成後の磁気勾配探査の結果である。磁気センサーを地表に接してメッシュ15cmで121点を測定した。焼成前の磁場分布はかなり幅（-40~50nT）があり、焼成後も顕著な変化は認められなかった。焼成の中心地域でも、沖積層の磁気探査（酒井ほか、1994）で得られた明確な変化は認められなかった。下図の帯磁率の分布では焼成域が弱い領域として表れている。これは灰が充分に除かれずに測定された為ではないかと考える。

### 5-2 火山灰を用いた焼成実験

次に火碎流堆積物を取り除いた後、火山灰を敷詰めて同様な実験をした。火山灰は、富山市西部に分布する呂羽山礫層の上部に位置する50万~70万年前に形成された地層から採取した。同火山灰は粗粒な石英、雲母、角閃石の斑晶を含み、細粒部は粘土化（風化）し

## 磁気勾配探査 (nT)



## 帯磁率探査

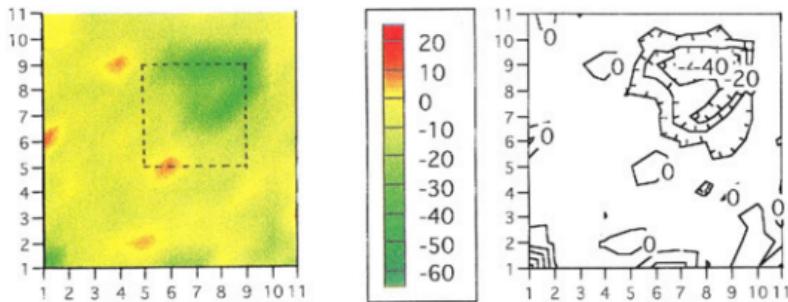


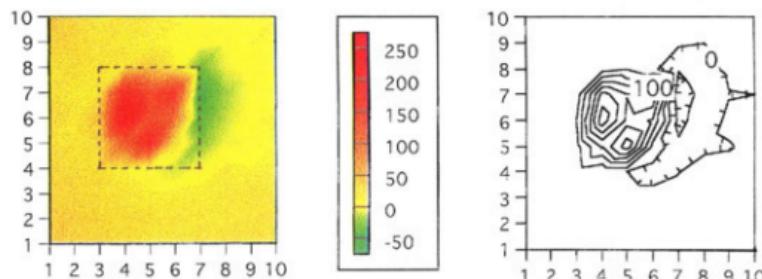
図 7 焼岳中尾火碎流の実験地での焼成実験（焚火）後の磁気探査の結果

ている（富山大学・小林武彦教授私信）。礫は殆ど含まれていなかった。磁気勾配、帯磁率および比抵抗の探査結果を図 8 に示している。磁気勾配探査と帯磁率探査は焼成前後の変化量を解析している。

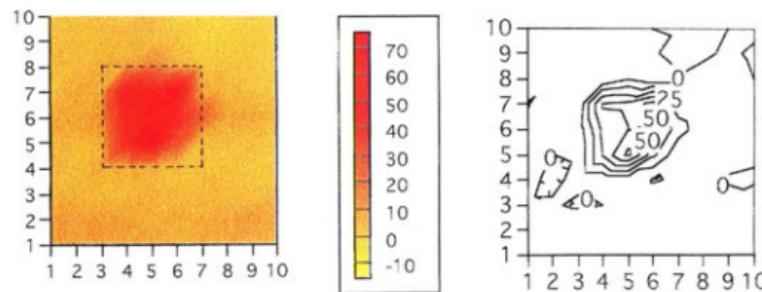
磁気勾配の分布は、焼成域の北側が正で南側が負となる変化を示した。これは薪で焼成された領域が熱を受けて地磁気と平行に、強い磁石となったことを示している。帯磁率探査でも焼成域に顕著な異常が認められる。磁気勾配と帯磁率で認められた磁気異常は、土壤に含まれる水酸化鉄 ( $\text{FeOOH}$ ) などの非磁性鉱物が、焼成により磁鉄鉱などの磁性鉱物に変化した為に現れたと考えられる。

焼成実験後の比抵抗探査から、焼成域の外側の比抵抗は  $300\sim650 \Omega \cdot \text{m}$  と比較的低いのに対し、焼成域は  $700\sim1100 \Omega \cdot \text{m}$  と高い値を示した。焼成に伴い、土壤の電気比抵抗も変化したことが確認されたが、これは土壤の含水率の低下が主な原因だと考えている。

## 磁気勾配探査 (nT)



## 帯磁率探査



## 電気比抵抗探査 (ohm)

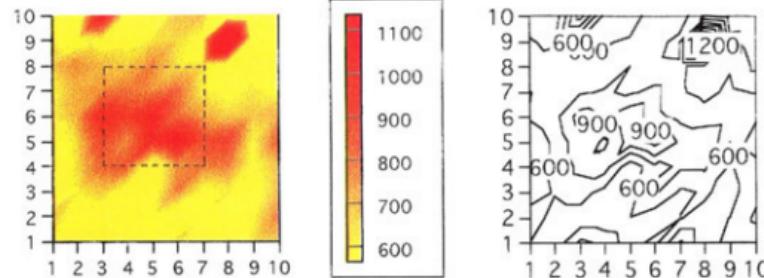


図 8 呉羽山火山灰層の実験地での焚火後の磁気探査および電気比抵抗探査の結果  
枠内は焚火（焼成）箇所を示す

これらの結果から、火碎流の地層では焼上遺構が存在しても、火碎流自体が強い不均質な磁化を持っており、磁気測定による遺構の検出は難しいと考えられる。火山灰層では地層の磁化は火碎流ほど強くなく、また均質であるので、焼成に伴う土壤の磁化変化は検出可能である。また今回の実験では、加熱により電気比抵抗も顕著に変化していることから、火山活動の影響を受けた遺構では電気探査も有効であると考える。

鶴高観測所では、焼岳火山のモニターを目的に各種の連続観測（地震、温泉蒸気温度、地雷位、電磁波等）が実施されている（酒井ほか、1991など）。今回の焚火実験の際に、焼成地域を挟んで設置されていた数10m間隔の地雷位差の連続観測データにも変化が認められており、土中温度の変化は土質の電気比抵抗に影響することが確認された。

## 6.まとめ

岐阜県神岡町江馬氏下館遺跡において、電気探査と地下レーダー探査、放射温度計探査を実施した。いずれの探査でも遺構を示唆する顕著な変化が認められた。発掘調査前と表土剥ぎ取り後に行った電気探査と地下レーダー探査は、建物や道路、井戸跡と良く対応しており、これらの手法が同様な遺跡の調査に有用であることが示された。また表土剥ぎ取り後に実施した放射温度計探査は、初めて試みた手法であるが、目では確認が難しい土壤の違いを検討する新たな手法として利用できることが示唆された。同手法は、青森県の十三瀬遺跡でも成果が得られた。

火山地域での焼土遺構を想定した調査実験では、磁気探査とともに電気探査の有用性が示唆され、火山で埋まった遺構での調査に役立つ成果が得られた。

## 謝 辞

神岡町教育委員会の皆様には、探査の便宜を図って頂き、また発掘調査結果との比較において議論を頂いた。人工焼土の実験においては、京都大学防災研究所・鶴高砂防観測所の澤田豊明助教授にお世話になった。以上の方々に感謝する。

調査の一部に、文部省科学研究費一般研究(C)：課題番号07831004、および富山県高等教育振興財团助成金を使用した。

## 参考文献

- Clark A.(1990): Seeing beneath the soil — prospecting methods in archaeology —, B.T. Blatsford Ltd, London, 1987, PP176.
- 神岡町(1987)：史跡江馬氏城跡発掘調査概報、1987, PP60.
- 酒井英男、平井徹、沢田豊明、中山武、和田博夫、三雲健(1991)：焼岳における電磁気観測、

## 江馬氏城館跡 II

- 京都大学防災研究所年報, No34 B-1, 343-354.
- 酒井英男, 小林剛, 山田剛士, 田中保士(1993) : 石川県珠洲市大島遺跡における登り窯の  
磁気探査, 『珠洲大島窯』, 富山大学考古学研究, 6, 真陽社, 67-75.
- 酒井英男, 平井徹, 山田剛士, 張忠良, 田中保士(1994) : 焚火実験による焼成領域の電磁  
気調査, 立山町教育委員会, 『芦峰寺室堂遺跡』, 57-64.
- 酒井英男, 武田昌明, 前川要(1995) : 江馬氏館における電磁気探査とレーダー探査, 富山  
大学人文学部考古学教室, 「江馬氏城館跡」一下館跡発掘調査報告書 1-, 151-164.
- 国立歴史民俗博物館(1995) : 青森県十三湊遺跡・福島城跡の研究, 国立歴史民俗博物館報  
告書, 第64集.

## 江馬氏下館の園池堆積物から得られた古環境資料と木炭の樹種

国立歴史民俗博物館 辻 誠一郎

パレオ・ラボ調査室 藤根 久・吉川 昌伸・村田 泰輔

### 1. はじめに

平成7年度7・8月に実施された江馬氏下館の発掘調査では、館内の園池の調査によってその形態や堆積物の分布が明らかになった。園池の堆積物は、園池がどのような堆積環境であったを知る手掛かりとなり、周辺域にどのような植物群・植生が存在したかを知る有効な試料として注目された。また、館外西側の調査によって建物群や炉・かまどが確認され、門前の様子が明らかになってきたが、採取された炉・かまど跡の木炭群は、燃料材および周辺の植生を知る手掛かりとして注目された。そこで、周辺の植物群・植生と園池の堆積環境に関する情報を引き出すために、園池堆積物の花粉分析と珪藻分析、および木炭群の樹種同定を試みた。ここではその結果を記載し、平成6年度の成果をあわせて人と植生の交渉史について若干の考察を加えた。なお、分析にあたっては、木炭群の樹種同定を藤根が、花粉分析を吉川が、珪藻分析を村田が担当した。この小論は、それらの分析結果を整理し、考察を加えて辻がまとめたものである。

### 2. 園池堆積物

園池の堆積物は黒褐色の有機質泥からなり、ラミナを認めることはできなかった。

花粉分析および珪藻分析に供する試料は、園池中央の浮島周辺のSトレーナー・N2トレーナー・Wトレーナーにおける園池堆積物の下部からそれぞれブロックで採取し、室内においてそれぞれの分析用に分割した。花粉分析は、KOH溶液処理、傾斜法・篩法による砂粒除去、HF処理、アセトトリシス法の順に物理・科学的処理を施した。同定・計数は樹木花粉が200個以上となるよう行い、樹木花粉については樹木花粉総数を基数とし、草本花粉・シダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、百分率で出現率を求めた。珪藻分析は、風乾後、過酸化水素水による珪藻殻の分離、遠心分離による濃縮を施した。同定・計数は200個以上になるまで行い、百分率で出現率を求めた。古環境復元のための指標として、小杉(1988)、安藤(1990)の環境指標種群を主に参考にした。

花粉分析の結果を第1図および第1表に示した。花粉群の組成はいずれの試料も類似しており、花粉・胞子総数に占める樹木花粉の割合が61~72%と高かった。樹木花粉では、クリ属が80%と高率で優占し、トチノキ属が7%で随伴した。草本花粉は19分類群と比較的種数が多く、中でもヨモギ属・タンポポ科・イネ科が目立った。稀少であるがソバ属を産した。得られた花粉群には、クリ属やトチノキ属といった虫媒性のものが高いのに対

して、風媒性の花粉が著しく乏しいという特異性が指摘できる。マツ属複雑管束亜属やスギといった針葉樹は花粉生産量が大きいのに低率での産出しか記録されていないので、クリ属やトチノキ属は、館や周辺に相当量が存在したことを物語っている。ヨモギ属やタンボボ亜科のような日当たりのよい草地に卓越する草本類が高い出現率を占めることも特異であり、人間の干渉の強い空間が広がっていたことが指摘できる。

珪藻分析の結果を第2表に示した。珪藻遺骸群の組成はいずれの試料も類似しており、淡水域に生育する種群が大半を占めたが、Wトレンチの試料からのみ汽水域に生息する不明の種群が検出された。淡水域の種群は、広範囲な生息域をもつ広布種が高率を占めるが、中～下流域河川指標種群、湖沼浮遊生種群、沼沢湿地付着生種群など多様で、河川から沼に生育する珪藻群が混在している。すなわち、園地の堆積物には溜池のような環境に生育していた種群というより、水流のある環境に生育する種群など多様な環境の種群が雑多に含まれており、園地の水が水流のある環境から取り水されていたことを示唆している。汽水域に生育する珪藻の産出は、山間部に位置する園地では考えにくいことであるが、園地での塩類の蓄積があった可能性や、海鳥の排泄物に多量の珪藻が含まれていることがしばしばあり、海からの鳥が園地に排泄をした可能性などが考えられ興味深い。

### 3. 門前地区から出土した木炭の樹種

門前地区の南部中央区においては、SK73遺構、SX1遺構、および屋内かまど跡付近の3か所から木炭がまとめて出土した。採取された土壤混じりの試料から、直径1cm以上の比較的大きな木炭片を選び出し、あらかじめ実体顕微鏡で横断面を観察した後、片刃カミソリなどを用いて横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）の3断面についての試料を作成した。これらを真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走定型電子顕微鏡（日本電子製、JSM T-100型）にて観察した。

観察の結果、同定できた分類群は、針葉樹がマツ属複雑管束亜属・ヒノキ属・コウヤマキの3分類群、広葉樹がコナラ節・クリ・ムクノキ・モチノキ属の4分類群で、2点については根拠が乏しく？を付した。その内訳は以下のとおりである。SK73遺構の9点は、コナラ節（6点、以下同じ）、ヒノキ属(2)、ムクノキ(1)にそれぞれ同定された。また、SX1遺構の19点は、クリ(7)、ヒノキ属(5)、コナラ節・モチノキ属・コウヤマキ(各2)、・モチノキ属？(1)に同定された。屋内かまど跡付近の5点は、ヒノキ属(2)、ヒノキ属？・クリ・マツ属複雑管束亜属(各1)に同定された。

以下では、標本の記載と同定の根拠を示す。

マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版 1a~1c

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り開むエビセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁は内側に向かって著しく突出している（放射断面）。エビセリウム細胞以外は、放射仮道管を含め単列で、1~10細胞高である（接線断面）。マツ属複雑管束亜属には主に沿岸部に生育するクロマツと内陸部に生育するアカマツが含まれるが、種の同定には至っていない。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 図版 2a~2c

仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである（横断面）。分野壁孔は大型の窓状である（放射断面）。放射組織は柔細胞からなり、2~5細胞高である（接線断面）。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 図版 3a~3c

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである（横断面）。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1~3個ある（放射断面）。放射組織は柔細胞からなり、1~9細胞高である（接線断面）。ヒノキ属にはヒノキとサワラが含まれるが、種の同定には至っていない。

コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 4a~4c

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。コナラ節には温帯に広く分布するコナラ・カシワ・ナラガシワ・ミズナラなどが含まれる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版 5a~5c

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~16細胞高である（接線断面）。

ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版 6a~6c

厚壁で中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~5個複合して散材する散孔材である。木部柔組織は、連合翼状ないし帶状で明瞭である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放

射断面)。放射組織は、異性 1~4 細胞幅、2~25 細胞高である(接線断面)。

モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版 6a~6c

小型でうす壁の管孔が単独あるいは 2~6 個程度放射方向に複合して散材する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、25 程度の棒状からなる階段状である(放射断面)。道管および木繊維の内壁には、明瞭ならせん肥厚が見られる(横断面および接線断面)。放射組織は、異性 1~4 細胞幅、3~47 細胞高である(接線断面)。モチノキ属にはモチノキなど多数の種が含まれる。

#### 4. 若干の考察

平成 6 年度の調査において見出された薬研堀内堆積物の花粉群の組成は、樹木花粉ではクリ属が優占し、トチノキ属とマツ属複雑管束亞属がこれに次ぐこと、花粉・胞子总数に占める草本花粉の割合が高く、イネ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属の順に高率を占めるという特異なものであった(辻・植田, 1995)。今回検討した岡地堆積物の花粉群の組成は、クリ属が優占しトチノキ属を随伴することでは類似するが、マツ属複雑管束亞属が目立たないこと、草本花粉の割合が低いことで、若干の差異がある。このような差異は、マツ属複雑管束亞属が周辺山地からの飛来花粉と考えられることから、堆積域での集積の差異が反映されたものと見ることができる。また、草本花粉の組成は堆積域周辺の局所的植生を反映しやすいので、薬研堀内堆積物の草本花粉の高率出現が薬研堀と門前地区の植生を強く反映したためと考えることができる。

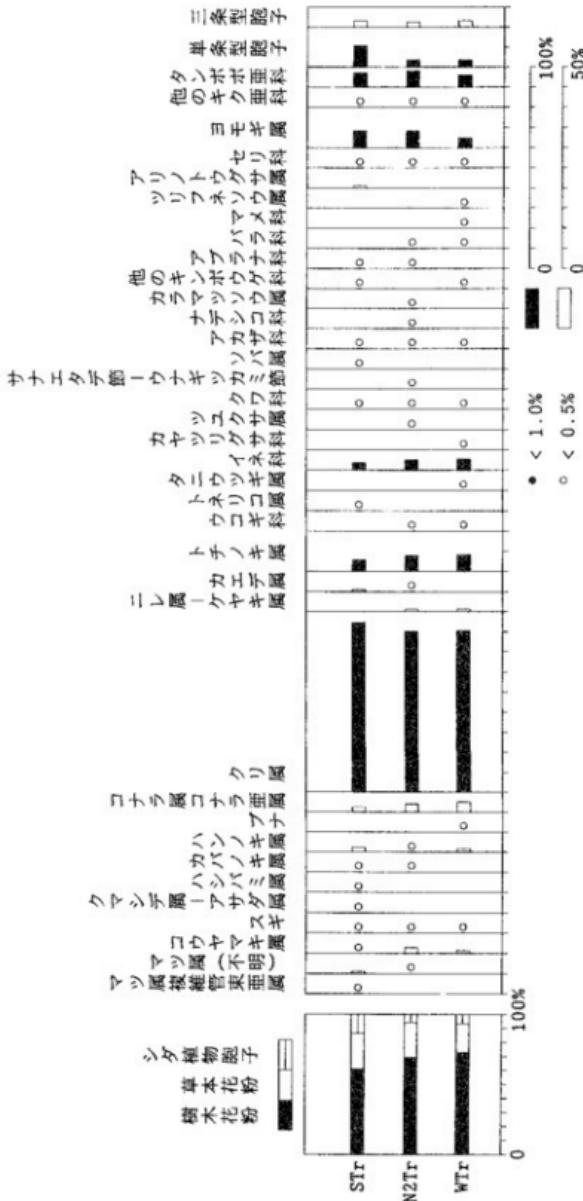
このような考えにもとづくと、周辺山地の植生は、マツ属複雑管束亞属(いわゆるニヨウマツ類)が多少とも認められるものの、風媒性の他の針葉樹やコナラ亞属など落葉広葉樹は乏しかったと考えられ、森林植生としてはかなり貧相な状況になっていたことが指摘できる。一方、少なくとも館とその周辺には、クリ属とトチノキ属が高い頻度で生育していたと考えることができる。このような食料資源としても木材資源としても有用な特定の植物群の高率の産出は、江馬氏下館とその周辺に、人為的な保護・管理あるいは造林によってつくられたクリ林やトチノキ林が存在していたと見ることができ、江馬氏の経済・交易を考える上でたいへん興味深いことと言えよう。

木炭群として検出された燃料材の樹種は、木炭の量がそれほど多くないとはいえ、ヒノキ属・クリ・コナラ節など数種に限られることは興味深い。SX1 遺構で多いクリは周辺に存在したクリ林からもたらされたものであろう。コナラ節やコウヤマキといった樹種も花粉群の組成には含まれるので、周辺からもたらされた可能性があるものである。しかし、木炭では目立つヒノキ属が花粉群の組成にまったく認められないことは、ヒノキ属材が遠方から持ち込まれたものであることを示唆する。ヒノキ材は古墳時代以降、とくに古代以

際に木材資源として多用される傾向にあり（山田，1993），交易によって搬入された可能性はあるであろう。

#### 引用文献

- 安藤一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理，第42巻，73-109
- 小杉正人 1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用，第四紀研究，第27巻，1-20
- 辻 誠一郎・植田弥生 1995 江馬氏下館の薬研堀内堆積物から得られた古環境資料，「江馬氏城館跡—下館跡発掘調査報告書Ⅰ」，165-168，神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室編
- 山田昌久 1993 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史，植生史研究特別第1号，1-242



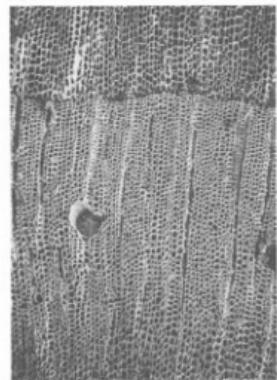
第1図 江島氏ド館の圓錐堆積物の花粉分析図

第1表 江馬氏下館の園池堆積物の花粉組成  
(数字は個数)

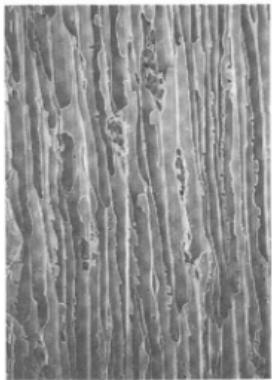
和名	学名	STR	N2TR	WTR
樹木				
マツ属複管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	2	-	-
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	2	-
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	2	7	3
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.)D.Don	1	1	1
クマシデ属—アサダ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	1	-	-
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	1	-	-
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	2	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	6	2	4
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	-	-	2
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	7	10	12
クリ属	<i>Castanea</i>	239	202	196
ニレ属—ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	-	3	3
カエデ属	<i>Acer</i>	3	1	-
トチノキ属	<i>Aesculus</i>	16	20	20
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	-	2	1
トネリコ属	<i>Fraxinus</i>	1	-	-
タニウツギ属	<i>Weigela</i>	-	-	1
草本				
イネ科	<i>Gramineae</i>	17	18	18
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	-	-	3
ツユクサ属	<i>Commelinaceae</i>	-	1	-
クワ科	<i>Moraceae</i>	4	1	2
サナエタデ節—ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	-	1	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	1	-	-
アザガ科	<i>Chenopodiaceae</i>	3	1	2
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	-	1	-
カラマツソウ属	<i>Thalictrum</i>	-	2	-
他のキンポウゲ科	other <i>Ranunculaceae</i>	2	-	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	4	2	-
バラ科	<i>Rosaceae</i>	-	1	2
マメ科	<i>Leguminosae</i>	-	-	1
ツリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	-	-	1
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	6	-	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	4	1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	39	30	16
他のキク亜科	other <i>Tubuliflorae</i>	4	2	1
タンボボ亜科	<i>Liguliflorae</i>	32	29	20
シダ植物				
単葉型胞子	<i>Monolete spore</i>	49	13	12
三葉型胞子	<i>Trilete spore</i>	15	9	11
樹木花粉	Arboreal pollen	283	252	243
草本花粉	Nonarboreal pollen	116	90	68
シダ植物胞子	Spores	64	22	23
花粉、胞子总数	Total Pollen & Spores	463	364	334
不明花粉	Unknown pollen	43	36	31

第2表 江馬氏下館の園池堆積物の珪藻組成  
(数字は個体数。最上段の2種は汽水域に生息する種。)

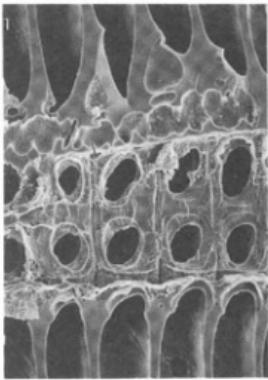
分類群	種群	Str N2T WTr		
		Str	N2T	WTr
<i>Diploneis pseudovalis</i>	?	-	-	4
<i>Thalassiosira bramaputrae</i>	?	-	-	8
<i>Achnanthes biasolettiana</i>	W	25	22	24
<i>A.</i> <i>hustedtii</i>	W	22	18	20
<i>A.</i> <i>lanceolata</i>	K	2	4	2
<i>Amphora pediculus</i> (Kutz)	W	6	5	6
<i>A.</i> <i>perpusilla</i>	W	6	7	6
<i>Caloneis molaris</i>	W	4	2	4
<i>C.</i> <i>silicula</i>	W	8	8	3
<i>Cocconeis placentula</i>	W	3	6	8
<i>Cyclotella comta</i>	W	10	10	8
<i>Cymbella affinis</i>	W	3	2	4
<i>C.</i> <i>cistula</i>	O	8	4	4
<i>Diatoma mesodon</i>	W	4	-	2
<i>Eunotia faba</i>	W	4	2	2
<i>Fragilaria capusina</i>	W	4	6	3
<i>F.</i> <i>constricta</i>	W	6	5	6
<i>F.</i> <i>paracitica</i>	W	7	6	6
<i>Gomphonema acuminatum</i>	W	4	8	6
<i>G.</i> <i>parvulum</i>	W	3	4	3
<i>G.</i> <i>specise</i>	W	2	4	3
<i>Gyrosigma</i> spp.	W	6	8	4
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	2	4	2
<i>Melosira granulata</i>	W	4	6	5
<i>M.</i> <i>italica</i>	W	4	6	6
<i>Navicula helvetica</i>	W	5	3	5
<i>N.</i> <i>pusilla</i>	W	7	8	6
<i>N.</i> <i>radiosa</i>	W	7	8	8
<i>N.</i> <i>ventralis</i>	W	5	4	3
<i>Nitzschia angustata</i>	W	1	4	3
<i>Opephora pacifica</i>	W	6	2	4
<i>Pinnularia borealis</i>	W	6	8	4
<i>P.</i> <i>rupestris</i>	W	6	6	6
<i>P.</i> <i>subrostrata</i>	W	5	5	8
<i>Synedra arcus</i>	K	6	5	5
<i>S.</i> <i>ulna</i>	W	8	6	6
不定または不明 (?)		-	-	12
中～下流性河川 (K)		8	9	7
湖沼浮遊生 (M)		14	16	13
湖沼沼澤湿地 (N)		6	5	6
沼澤湿地付着生 (O)		18	14	14
陸域 (Q)		8	12	6
広布種 (W)		149	142	145
不明 (?)		6	8	4
珪藻般数		209	206	207



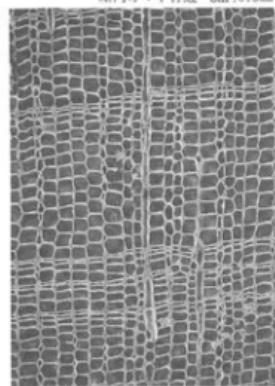
1a. マツ属復縫管束亞属 (横断面)  
屋内カマド付近 bar:0.5mm



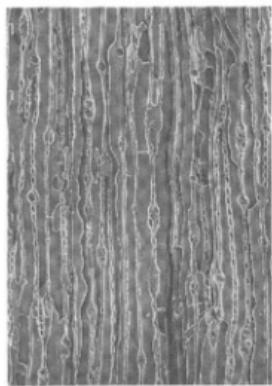
1b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



1c. 同 (放射断面) bar:0.05mm



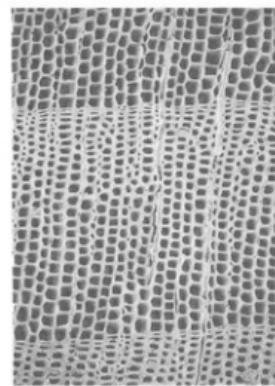
2a. コウヤマキ (横断面) SX1 bar:0.1mm



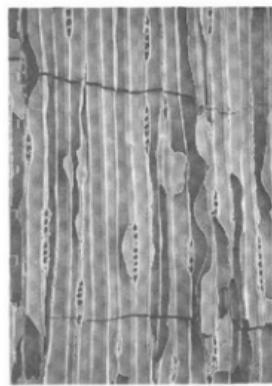
2b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



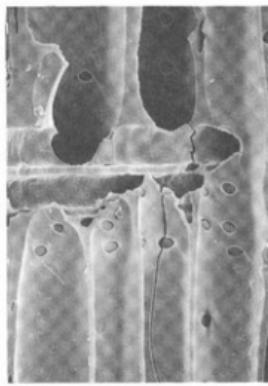
2c. 同 (放射断面) bar:0.05mm



3a. 七ノキ属 (横断面) SX1 bar:0.1mm

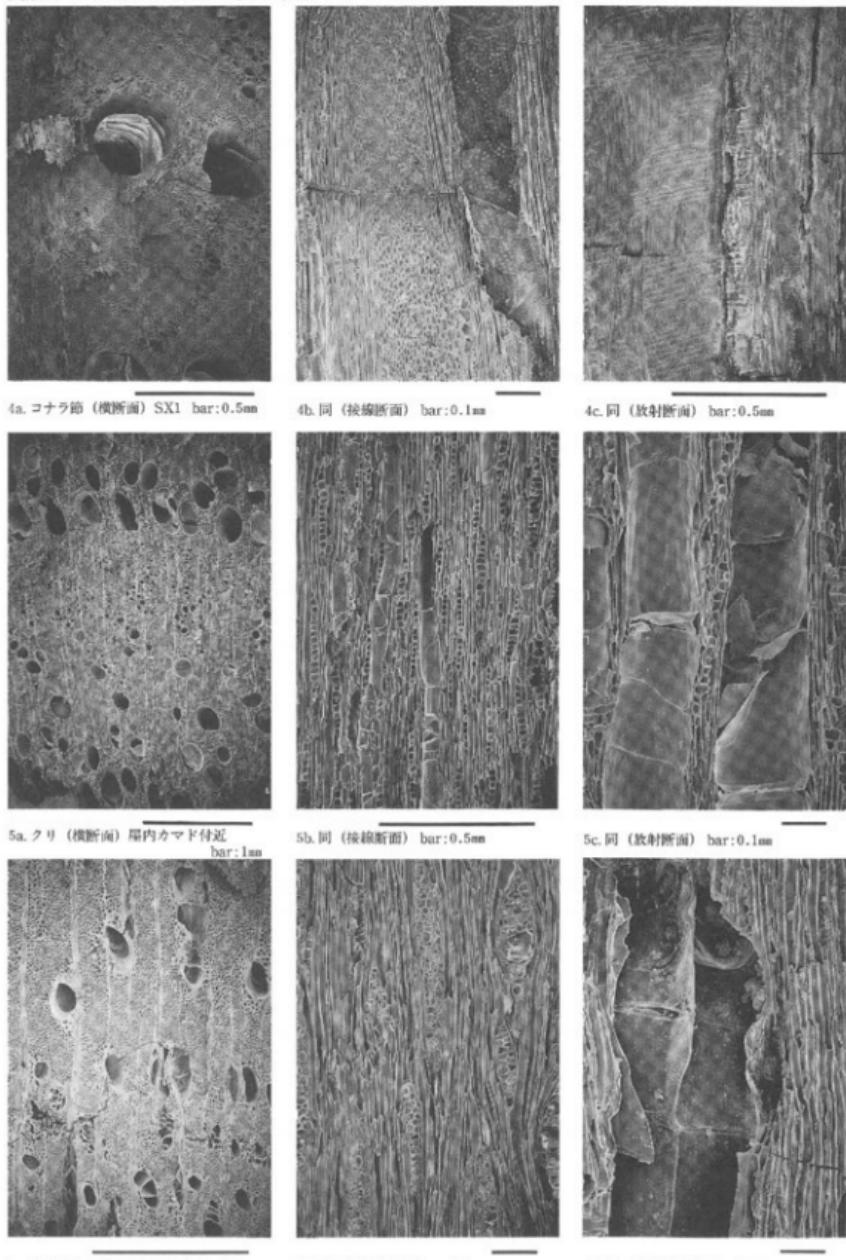


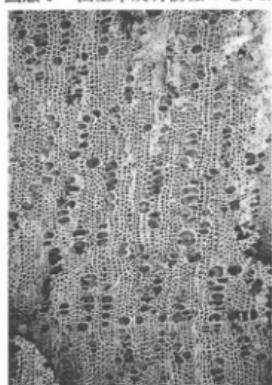
3b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



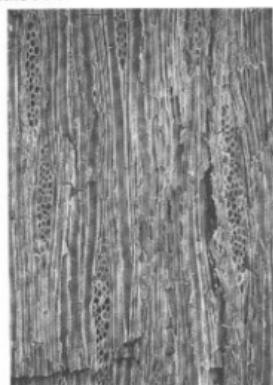
3c. 同 (放射断面) bar:0.05mm

図版2 出土木炭材樹種の電子顕微鏡写真

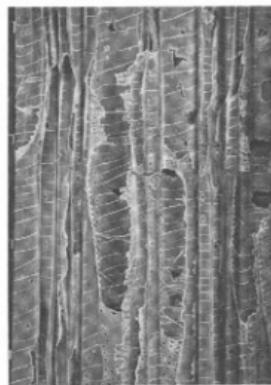




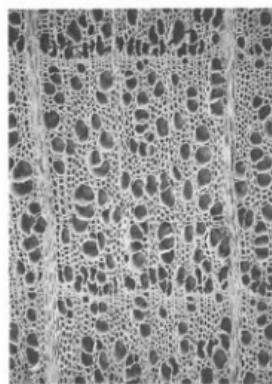
7a. モチノキ属 (横断面) SX1 bar:0.5mm



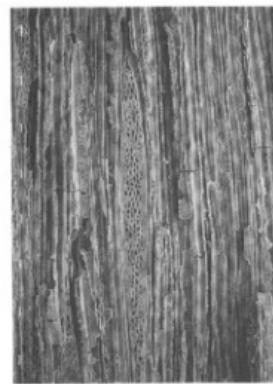
7b. 同 (接線断面) bar:0.5mm



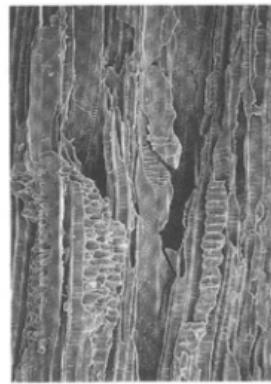
7c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



8a. モチノキ属? (横断面) SX1 bar:0.5mm



8b. 同 (接線断面) bar:0.1mm



8c. 同 (放射断面) bar:0.1mm



## 参考文献

- 青森県八戸市教育委員会 1993 「根城一本丸の発掘調査」 青森県八戸市教育委員会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究会』No2, 日本貿易陶磁研究会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」「史林』第65巻第5号, 史学研究会
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の方法と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集, 国立歴史民俗博物館
- 宇野隆夫 1994 「日本海における中世の生産と流通」『中世都市十三湊と安藤氏』 国立歴史民俗博物館
- 大山町役場 1964 『大山町史』
- 岡村利平 1912 『飛驒山川』住伊書店
- 小野正敏 1984 「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」『貿易陶磁研究』第4号, 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15, 16世紀における画期の蒸描」『MUSEUM』No416, 東京国立博物館
- 小野正敏 1991a 「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 小野正敏 1991b 「中世陶磁研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』名著出版
- 小野正敏 1994 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』531号, 信濃史研究会
- 勝沼氏館跡発掘調査団 1975 『勝沼氏館跡発掘調査概報』山梨県教育委員会
- 勝沼氏館跡発掘調査団 1977 『勝沼氏館跡発掘調査概報』II, 勝沼町教育委員会
- 勝沼氏館跡発掘調査団 1978 『勝沼氏館跡発掘調査概報』III, 勝沼町教育委員会
- 金子拓男・前川 要編 1994 『守護所から戦国城下町へ—地方政治都市論の試みー』名著出版
- 神岡町 1972 『神岡町史』史料編 上巻 (中世・近世・近代)
- 神岡町 1982 『神岡町史』特集編 (飛騨国野史・国説集成)
- 神岡町教育委員会 1979 『江馬氏城館跡発掘調査概報』
- 神岡町教育委員会 1981 『江馬氏城館跡保存管理計画策定報告書』
- 神岡町教育委員会 1994 『ふるさと「神岡」探検マップ』
- 神岡町教育委員会 1995 『飛驒の神岡』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995 『江馬氏城館跡一下館跡発掘調査報告書 I -』

- 神岡町役場総務課 1992 「神岡町勢要覧」資料編
- 岐阜県 1968 「岐阜県史」通史編 近世上
- 岐阜県 1969 「岐阜県史」通史編 中世
- 岐阜県 1969 「岐阜県史」史料編 古代・中世1
- 岐阜県 1973 「岐阜県史」史料編 古代・中世4
- 岐阜県郡上郡大和村教育委員会 1984 「東氏館跡発掘調査報告書」
- 岐阜市教育委員会 1990 「城之内遺跡」
- 京都芸術短期大学・京都造形芸術大学 1994 「遺跡庭園の調査と復元整備」
- 葛谷鶴彦 1970 「中世江馬氏の研究」神岡町
- 葛谷鶴彦 1972 「越中街道」「飛驒の街道」飛驒運輸株式会社
- 国立歴史民俗博物館 1993 「日本出土の貿易陶磁」
- 国立歴史民俗博物館 1994 「中世都市十三塗と安藤氏」
- 小島道裕・前川 要・千田嘉博 1993 「城館調査ハンドブック」新人物往来社
- 小林 幹 1972 「信州街道」「飛驒の街道」飛驒運輸株式会社
- 坂井秀弥 1992 「3.第4回北陸中世土器研究会 城館遺跡出土の土器・陶磁器」「中世土器研究」第65号、中世土器研究会
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989 「珠洲の名陶」珠洲市立珠洲焼資料館
- 瀬戸市史編纂委員会 1981 「瀬戸市史」陶磁器篇二
- 瀬戸市史編纂委員会 1994 「瀬戸市史」陶磁器篇四
- 千田嘉博 1994 「古城探検隊」「歴史読本」第39巻、新人物往来社
- 外岡慎一郎 1984 「六波羅探題と西国守護—<両使>をめぐってー」『日本史研究』268号、日本史研究会
- 高島芳裕・林 努 1981 「風倒木痕とその形成要因について」「座敷乱木遺跡発掘調査報告書」II、石器文化談話会
- 高橋與右衛門 1992 「発掘された中世の建物跡」「北の中世 史跡整備と歴史研究」日本エディタースクール出版部
- 多賀秋五郎 1941 「第5編 第2章 社会経済」「飛驒史の研究」下巻、濃飛文化研究会
- 富山市井口村教育委員会 1990 「井口城跡発掘調査概報」
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1993 「珠洲大畠窯」
- 中井 均 1987 「中世城館の発生と展開」「物質文化」物質文化研究会
- 中井 均 1990 「織豊系城郭の画期」「中世城郭研究論集」新人物往来社
- 中井 均 1991 「中世の居館・寺そして村落—西国を中心としてー」「中世の城と考古学」新人物往来社

- 中条町教育委員会 1993 「江上館跡」 I
- 中条町教育委員会 1994 「江上館跡」 II
- 中条町教育委員会 1995 「江上館跡」 III
- 長野県中野市教育委員会 1993 『高梨氏館跡発掘調査報告書』
- 浪貝 敏・堀内明博 1992 「中世都市遺跡の調査=京都」『季刊考古学』第39号、雄山閣出版
- 丹生川村教育委員会 1983 『尾崎城跡発掘調査概報』
- 野々市町教育委員会 1994 『富樫館跡発掘調査現地説明会資料』
- 橋口定志 1987 「中世居館の再検討」『東京考古』5、東京考古学談話会
- 橋口定志 1990 「中世東国居館とその周辺—南関東におけるいくつかの発掘調査事例から」『日本史研究』330号、日本史研究会
- 橋口定志 1991a 「中世居館研究の現状と問題点」『考古学と中世史研究』名著出版
- 橋口定志 1991b 「方形館はいかに成立するのか」『争点日本の歴史』4、新人物往来社
- 菱村正文 1972 「総論」「飛驒の街道」飛驒運輸株式会社
- 菱村正文 1972 「平湯街道」「飛驒の街道」飛驒運輸株式会社
- 福井県教育委員会 1979 「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告」 I
- 福田豊彦・海老名尚 1992 「『六条八幡宮造営注文』について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集、国立歴史民俗博物館
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」 V
- 藤澤良祐 1991a 「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」 X
- 藤澤良祐 1991b 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」「中世の城と考古学」新人物往来社
- 北陸中世土器研究会 1988 「北陸の中世土器・陶磁器・漆器」
- 北陸中世土器研究会 1990 「中世北陸の在地窯」
- 北陸中世土器研究会 1991 「城館遺跡出土の土器・陶磁器」
- 北陸中世土器研究会 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」
- 北陸中世土器研究会 1993 「中世北陸の家・屋敷・暮しぶり」
- 宮田進一 1990 「〈地域〉北陸」「中近世土器の基礎研究」 VI、日本中世土器研究会
- 宮田進一 1993 「I 第5回北陸中世土器研究会の記録」「中世土器研究」第69号、日本中世土器研究会
- 村瀬一郎 1979 「岐阜県・概説」「日本城郭大系」9、新人物往来社
- 森 薫 1981 「日本庭園史話」NHKブックス カラー版、日本放送協会
- 森 薫 1984 「日本史小百科 庭園」近藤出版社
- 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究会」No 2、日本貿易陶

磁研究会

- 矢田俊文 1994 「戦国期越後における守護・守護代と都市」『守護所から戦国城下へ—地方政治都市論の試みー』名著出版
- 山口市教育委員会文化財センター 1992 『大内氏館跡－第13次調査－発掘調査現地説明会』  
(資料)
- 吉岡 熊 1979 『日本城郭大系』9, 新人物往来社
- 吉岡康暢 1989 『日本海域の土器・陶磁器』中世編, 六興出版
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉岡泰英 1983 『朝倉館の建築的考察』『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 四柳嘉章 1987a 「IV 中世村落における信仰の諸形態」『西川島 能登における中世村落の  
発掘調査』穴水町教育委員会
- 四柳嘉章 1987b 「I 陶磁器・漆器の組成」『西川島 能登における中世村落の発掘調査』  
穴水町教育委員会

# 別表



別表1 門前施設建物計測表

別表2 門前地区解列計画表

標高(日本海側)	標高(東洋側)	長径(m)	短径(m)	面積(m <sup>2</sup> )	面積(%)	主軸方位	南北に切られる面に沿うる可能性あり
S401	10.2.166.(39) 2.016.(63) 1.976.(50) 1.976.(59)	19.36	64.94	1255.5-E	西側に切られる面に沿うる可能性あり		
	1.906.47) 1.916.50) 1.916.51) 2.006.60)						
S402	7.1.415.74) 2.331.76) 2.347.72) 2.347.72)	15.36	52.34	846.0-E			
	2.367.79) 2.411.95)						
S403	5.1.371.37) 5.1.385.11) 5.1.386.14)	4.74	15.84	5.5-E	509.0-北側面あり		

別表3 門前地区戸計測表

判別4		目前地區演替測量		
量標面積	量標面積	X坐標	Y坐標	坡度(%)
10.01		25.6	-21.6	0.83

「地形図十万分の計測表										「地形図十万分の計測表									
測量番号	X座標	Y座標	標高(m)	北緯(°)	東経(°)	標高(m)	北緯(°)	東経(°)	標高(m)	北緯(°)	東経(°)	標高(m)	北緯(°)	東経(°)	標高(m)	北緯(°)	東経(°)	標高(m)	
SK001	-9.7	-11.1	3.95	2.64	154.65	標高(5)	0.39	154.65	標高(5)	0.39	154.65	標高(5)	0.39	154.65	標高(5)	0.39	154.65	標高(5)	
SK002	0.0	-17.5	4.13	3.65	154.77	標高(5)	0.16	154.77	標高(5)	0.16	154.77	標高(5)	0.16	154.77	標高(5)	0.16	154.77	標高(5)	
SK003	-8.5	-13.0	1.32	1.31	155.00	標高(5)	0.16	155.00	標高(5)	0.16	155.00	標高(5)	0.16	155.00	標高(5)	0.16	155.00	標高(5)	
SK004	-7.3	-8.0	0.67	*.62	154.51	0.14	154.51	0.14	154.51	0.14	154.51	0.14	154.51	0.14	154.51	0.14	154.51	0.14	
SK005	-1.5	-14.0	1.40	*.00	154.85	標高(5)	0.16	154.85	標高(5)	0.16	154.85	標高(5)	0.16	154.85	標高(5)	0.16	154.85	標高(5)	
SK006	-0.4	-15.7	0.64	-.57	154.81	標高(5)	0.20	154.81	標高(5)	0.20	154.81	標高(5)	0.20	154.81	標高(5)	0.20	154.81	標高(5)	
SK007	-0.3	-16.0	1.64	.37	154.71	標高(5)	0.29	154.71	標高(5)	0.29	154.71	標高(5)	0.29	154.71	標高(5)	0.29	154.71	標高(5)	
SK008	-3.9	-19.9	1.06	1.02	155.33	標高(5)	0.39	155.33	標高(5)	0.39	155.33	標高(5)	0.39	155.33	標高(5)	0.39	155.33	標高(5)	
SK009	-7.0	-21.0	1.93	*.85	154.86	標高(5)	0.24	154.86	標高(5)	0.24	154.86	標高(5)	0.24	154.86	標高(5)	0.24	154.86	標高(5)	
SK010	-3.6	-23.5	0.96	*.56	154.83	標高(5)	0.21	154.83	標高(5)	0.21	154.83	標高(5)	0.21	154.83	標高(5)	0.21	154.83	標高(5)	
SK011	-1.5	-15.0	2.10	0.70	154.83	標高(5)	0.16	154.83	標高(5)	0.16	154.83	標高(5)	0.16	154.83	標高(5)	0.16	154.83	標高(5)	
SK012	-2.8	-15.1	1.26	0.55	1.16	0.16	154.75	標高(5)	0.16	154.75	標高(5)	0.16	154.75	標高(5)	0.16	154.75	標高(5)		
SK013	-15.0	-32.0	2.10	1.53	0.64	0.55	155.07	標高(5)	0.55	155.07	標高(5)	0.55	155.07	標高(5)	0.55	155.07	標高(5)		
SK014	-13.2	-24.6	0.70	0.64	0.56	0.18	155.02	標高(5)	0.18	155.02	標高(5)	0.18	155.02	標高(5)	0.18	155.02	標高(5)		
SK015	-3.1	-26.5	1.40	*.00	1.00	0.06	154.87	標高(5)	0.06	154.87	標高(5)	0.06	154.87	標高(5)	0.06	154.87	標高(5)		

切り合ひ、関係などにより原形を留めていない七種については、確認できる範囲で計測を行った。

卷之三

確認できる範囲で計測を行った。

## 別表5のつづき

通路番号	X座標	Y座標	法線(度)	傾き(度)	斜度(度)	左上地物	右上地物	地主	他の取り扱い(手順)
S44	-35.6	-30.5	1.65	0.76	0.55	154.79			樹木類 灌木類
S45	-18.2	-35.3	0.94	0.52	0.39	0.11	154.49		樹木類 灌木類
S44	-18.4	-35.8	0.49	0.31	0.20	0.22	154.50	土質改良工事	樹木類 灌木類
S46	19.0	-35.8	0.66	0.34	0.45	0.18	154.49	耕種上器	樹木類 灌木類
S47	-20.5	-35.3	1.70	*0.39	1.67	0.11	154.42	耕種上器	樹木類 灌木類
S48	21.8	-17.9	1.13	0.85	0.82	0.11	154.43	耕種上器	樹木類 灌木類
S49	22.4	-14.6	1.11	0.90	0.79	0.10	154.49	耕種上器	樹木類 灌木類
S50	-31.0	-18.4	1.97	*0.99	0.99	0.37	154.49	耕種上器	樹木類 灌木類
S51	-55.6	-13.3	*0.71	0.72	*0.46	0.07	154.33	樹木類	灌木類 灌木類
S52	-26.8	-18.1	2.62	1.21	2.27	0.11	154.46		灌木類 灌木類
S53	-29.0	-19.6	2.78	1.79	2.77	0.11	154.42		灌木類 灌木類
S54	22.3	34.0	*1.59	1.01	2.23	0.13	154.69		灌木類 灌木類
S45	52.61	-52.5	1.23	0.62	0.55	0.12	154.32		灌木類 灌木類
S46	34.5	-20.9	1.00	0.69	0.72	0.07	154.20		灌木類 灌木類
S47	37.6	-22.5	0.89	0.72	0.82	0.08	154.21		灌木類 灌木類
S48	38.6	-22.5	0.63	0.59	0.52	0.13	154.25		灌木類 灌木類
S49	20.5	-21.3	4.56	1.53	3.56	0.50	154.59		灌木類 灌木類
S50	20.8	-22.8	4.52	*2.02	0.54	154.69			灌木類 灌木類
S41	31.7	-14.8	0.96	0.46	0.94	0.07	154.36		灌木類 灌木類
S42	34.1	-16.9	0.91	0.96	0.51	0.05	154.31		灌木類 灌木類
S43	28.5	-14.9	1.19	0.44	1.21	0.13	154.41		灌木類 灌木類
S44	37.5	-14.2	1.54	0.74	1.25	0.37	154.24	耕種上器	灌木類 灌木類
S45	21.4	-13.9	*0.90	0.74	0.85	0.16	154.52	耕種上器	灌木類 灌木類
S46	22.5	-25.1	1.15	1.30	1.33	0.40	154.66		灌木類 灌木類
S47	26.0	-13.0	1.00	*0.59	0.71	0.76	154.27		灌木類 灌木類
S48	34.0	0.0	2.58	2.14	0.21	154.19			灌木類 灌木類

\*切り合ひ開墾などにより原形を保めていない土壤については、跡識できる範囲で計測を行った。

別表 5 のつづき

測量番号	入出標	Y座標	X座標	高さ(?)	幅(?)	厚さ(?)	測定(?)	測定(?)	出土物	地上	備考(切り直し)
SK69	-37.0 -24.9	0.98	0.33	0.93	0.25	0.16					
SK70	39.4 -27.4	2.66	2.06	0.95	0.46	0.15					
SK71	23.2 -32.8	1.06	0.71	0.96	0.98	0.16					
SK72	26.4 -32.6	4.64	2.65	4.41	0.27	0.16					
SK73											
SK74	25.4 -34.4	*2.70	*1.35		0.50	0.50					
SK75											
SK76	-35.1 -25.7	1.02	0.61	0.70	0.16	0.12					
SK77	38.6 -32.2	1.46	1.04	0.91	0.11	0.12					
SK78	19.8 -35.2	*1.61	0.63	*2.20	0.10	0.43	青磁・刀子・不 明				
SK79	-0.1 -15.7	*0.40			0.26	0.16	十字磁皿				
SK80	-2.9 -33.5	0.62	0.50	0.32	0.23	0.16	青磁天目	①(10E2/2黒褐色 2)(10E2/4黒褐色			
SK81	17.2 -25.5	1.44	0.56	1.26	0.15	0.16					
	18.5 -31.0	1.47	1.05	1.01	0.92	0.16					

\* 切り合ひ關係などにより原形を保てていない土壤については、確認できる範囲で計画を行った。

別表 6 門前地(×不明遺構)計測表

測量番号	入出標	Y座標	X座標	高さ(?)	幅(?)	厚さ(?)	測定(?)	測定(?)	出土物	地上	備考(切り合せ)
SK01	0.11 0.36	25.71	44.95	N -74°	E 73°45'	0.15	65.04	上縁落差・伊勢 里・輪郭土器	(17.5m2/2黒褐色 粘質②10E2/1黑色 粘質)		壁に切られる SK01・7, SK146に切られる 3.4~X40.61~Y56.7 80cm

別表 7 14前地(×溝)計測表

測量番号	入出標	Y座標	X座標	高さ(?)	幅(?)	厚さ(?)	測定(?)	測定(?)	出土物	地上	備考(切り合せ)
SK02											

別表8 門前地区柱穴計測表

(単位: m)

柱番号	地番	X(m)	Y(m)	高さ(m)	深さ(z)	底面(s)	形状	備考(切り合い等)
SP1		-13.4	-13.5	0.21		0.07	黒褐色	SP1に切られる
SP2		-13.4	-13.7	0.26	0.27	0.14	黒褐色	SP1を切る
SP3		-13.5	-13.1	0.30	0.28	0.15	黒褐色	
SP4		-12.5	-14.9	0.31	0.30	0.09	黒褐色	
SP5	S805	-11.5	-15.0	0.22	0.28	0.25	黒褐色	
SP6		-10.2	-12.8	0.28	0.22	0.11	黒褐色+地山ブロック	SP6を切る
SP7	S805	-9.5	-15.0	0.35	0.32	0.33	黒褐色	SP6を切る
SP8	S805	-8.0	-15.1	0.32	0.29	0.39	黒褐色	SP6を切る
SP9		-13.6	-15.2	0.34	0.32	0.17	黒褐色	
SP10	S805	-11.5	-15.1	0.28	0.24	0.15	黒褐色	
SP11		-10.6	-15.4	0.60	0.40			SP11を切る
SP12		-6.7	-15.1	0.25	0.22	0.41	①黒褐色+地山ブロック②黒褐色	
SP13		-4.8	-12.2	0.26	0.20	0.16	黒褐色	
SP14	S803	-3.8	-15.9	0.44	0.30	0.13	黒褐色	SP14を切る
SP15		-2.2	-15.1	0.30	0.29	0.13	黒褐色+地山ブロック	SP15を切る SP7時に切られる
SP16		-2.4	-14.2	0.46	0.42	0.20	黒褐色+地山ブロック	SP15を切る
SP17		-1.7	-14.7	0.33	0.29	0.16	黒褐色	SP15を切る
SP18	S802	-1.9	-15.0	0.47	0.30	0.17	黒褐色	
SP19		-1.2	-15.1	0.35	0.34	0.17	黒褐色+黒褐色+黒褐色	
SP20		-0.9	-13.0	0.21	0.19	0.31	黒褐色	
SP21		-0.5	-13.2	0.39	0.38	0.24	①黒褐色②黒褐色	
SP22		2.2	-13.3	0.38	0.31	0.24	③黒褐色④黒褐色+砂粒⑤黒褐色+地山ブロック	
SP23		3.7	-13.3	0.46	0.35	0.10		SP23を切る
SP24		-15.2	-15.1	0.45	0.30	0.06		
SP25		-15.2	-15.6	0.47	0.49	0.08	①黒褐色	
SP26		-15.2	-17.6	0.26	0.23	0.16	黒褐色	
SP27		-12.7	-17.9	0.26	0.23	0.16	黒褐色	
SP28		-11.7	-17.5	0.34	0.28	0.43	①黒褐色+地山ブロック	
SP29		-8.6	-17.8	0.26	0.25	0.48	②黒褐色	SP29を切る
SP30		-8.6	-18.0	0.53	0.32	0.48	③黒褐色+地山ブロック	
SP31	S803	-3.9	-15.1	0.24	0.24	0.08	④黒褐色+黒褐色+地山ブロック	
SP32	S802	0.0	-14.4	0.48	0.33	0.15	⑤黒褐色	
SP33	S802	1.9	-15.5	0.32	0.30	0.23	⑥黒褐色の黒褐色+地山ブロック+砂粒⑦黒褐色	SP33-78を切る SP24-58時に切られる 社底界0.15厚0.13
SP34	S802	1.9	-15.6	0.32	0.30	0.23	⑧黒褐色の黒褐色+地山ブロック+砂粒⑨黒褐色	
SP35		1.0	-15.9	0.45	0.30	0.19		SP35を切る
SP36		1.8	-15.0	0.56	0.18	0.12		
SP37		2.2	-15.7	0.40	0.35	0.17		
SP38	S802	1.9	-15.4	0.40	0.37	0.40	⑩黒褐色	
SP39	S805	3.1	-15.3	0.25	0.20	0.06		SP39を切る
SP40	S805	3.9	-15.8	0.27	0.24	0.23	⑪黒褐色+地山ブロック	
SP41	S805	-3.8	-16.3	0.53	0.32	0.48	⑫黒褐色+地山ブロック	
SP42	S803	-2.9	-15.1	0.24	0.24	0.08	⑬黒褐色+黒褐色+地山ブロック	
SP43	S802	0.0	-14.4	0.48	0.33	0.15	⑭黒褐色	
SP44	S802	1.9	-15.5	0.32	0.30	0.23	⑮黒褐色の黒褐色+地山ブロック+砂粒	
SP45	S802	1.9	-15.6	0.32	0.30	0.23	⑯黒褐色の黒褐色+地山ブロック+砂粒	
SP46	S802	1.9	-15.7	0.32	0.30	0.23	⑰黒褐色の黒褐色+地山ブロック+砂粒	
SP47	S802	1.9	-15.8	0.32	0.24	0.23	⑱黒褐色	
SP48	S802	1.9	-15.6	0.32	0.30	0.23	⑲黒褐色の黒褐色+地山ブロック+砂粒⑳黒褐色	
SP49	S802	1.9	-15.7	0.32	0.24	0.23	⑳黒褐色	
SP50	S802	1.9	-15.8	0.32	0.24	0.23	㉑黒褐色	
SP51	S802	1.9	-15.6	0.32	0.24	0.23	㉒黒褐色	
SP52	S802	1.9	-15.7	0.32	0.24	0.23	㉓黒褐色	
SP53	S802	1.9	-15.8	0.32	0.24	0.23	㉔黒褐色	
SP54	S802	1.9	-15.9	0.32	0.24	0.23	㉕黒褐色	
SP55	S802	1.9	-15.4	0.40	0.37	0.40	㉖黒褐色	
SP56	S805	3.1	-15.3	0.25	0.20	0.06		SP56を切る
SP57	S805	3.9	-15.8	0.27	0.24	0.23	㉗黒褐色の黒褐色+地山ブロック①暗褐色	
SP58	S805	3.9	-15.8	0.27	0.24	0.23	㉘黒褐色の黒褐色+地山ブロック②暗褐色	
SP59	S805	3.9	-15.8	0.27	0.24	0.23	㉙黒褐色の黒褐色+地山ブロック③暗褐色	
SP60	S805	3.9	-15.8	0.27	0.24	0.23	㉚黒褐色の黒褐色+地山ブロック④暗褐色	
SP61		12.9	-15.6	0.24	0.23	0.16	黒褐色	
SP62		15.8	-19.1	0.26	0.25	0.14	黒褐色	
SP63		15.8	-19.5	0.26	0.25	0.14	黒褐色	
SP64		15.8	-19.6	0.26	0.25	0.14	黒褐色	
SP65		15.8	-19.5	0.26	0.25	0.14	黒褐色	
SP66		15.8	-19.5	0.26	0.25	0.14	黒褐色	
SP67		15.8	-19.5	0.26	0.25	0.14	黒褐色	
SP68	S805	-11.5	-19.7	0.32	0.28	0.42	①黒褐色+地山ブロック②黒褐色	
SP69	S805	-9.8	-19.3	0.35	0.30	0.08		SP69を切る
SP70	S805	-9.7	-19.3	0.30	0.30	0.03		SP69に切られる
SP71	S805	-8.9	-19.8	0.37	0.25	0.39	③黒褐色+地山ブロック	
SP72		-4.5	-19.2	0.42	0.39	0.37	観察	
SP73		-5.4	-17.5	0.28	0.26	0.10	黒褐色	
SP74		-5.4	-17.5	0.28	0.26	0.10	黒褐色	
SP75		1.8	-18.3	0.38	0.32	0.47	①黒褐色+地山ブロック+地山ブロック	ピット北側に掘り込み
SP76	S803	2.8	-15.5	0.42	0.32	0.39	②黒褐色+地山ブロック+地山ブロック	柱直筋0.17 厚0.23
SP77	S803	-4.5	-20.2	0.28	0.25	0.10	黒褐色	
SP78	S802	-13.6	-20.1	0.20	0.16	0.19	黒褐色	SP78を切る
SP79	S802	-12.8	-21.3	0.26	0.24	0.24	観察	
SP80	S802	-11.8	-21.5	0.30	0.26	0.24	黒褐色	
SP81	S802	-11.8	-21.5	0.30	0.26	0.24	黒褐色	
SP82	S802	-9.6	-20.7	0.31	0.24	0.12	黒褐色+砂粒	
SP83		-9.5	-21.1	0.35	0.23	0.13	黒褐色+砂粒	
SP84	S805	-6.7	-21.7	0.37	0.35	0.45	複数、2層	
SP85		-8.3	-21.7	0.19	0.18	0.05	黒褐色	
SP86	S802	-3.9	-19.9	0.38	0.32	0.32	①黒褐色②黒褐色+地山ブロック	柱底筋0.18厚0.19 石出土 石厚0.11 厚0.06
SP87	S802	-3.0	-20.0	0.26	0.24	0.20	③黒褐色+地山ブロック+砂粒④黒褐色	
SP88	S802	-1.1	-20.1	0.30	0.28	0.39	⑤黒褐色+地山ブロック	
SP89	S802	1.7	-20.2	0.27	0.25	0.25	⑥黒褐色+地山ブロック	
SP90	S803	2.7	-20.5	0.40	0.38	0.29	⑦黒褐色+地山ブロック⑧黒褐色	石出土 石厚0.19厚さ0.06
SP91	S802	-17.2	-22.1	0.30	0.31	0.10		SP90を切る
SP92	S802	-6.7	-22.3	0.34	0.26	0.12	観察	
SP93	S802	-3.0	-21.9	0.33	0.29	0.45	⑨黒褐色	津川土 植石あり 右F60.13厚さ0.04 右F60.07厚0.05

別表 S のつづき

(単位:m)

番号	傾斜	高さ	幅	厚さ(m)	壁(m)	壁上	備考(切りない等)
SP128	-2.5	-22.1	0.19	0.121	0.09		
SP129	-1.8	-21.5	0.64	0.44	0.15	黒褐色	
SP127	5802.	1.7	22.1	0.34	0.26	0.36	複層
SP128	2.1	21.5	0.12	0.20	0.13		
SP129	5803	2.5	22.4	0.34	0.32	0.30	①②③黒褐色
SP130	-14.7	-24.1	0.35	0.38	0.09		
SP131	-14.0	-23.4	0.35	0.32	0.17		
SP132	-12.8	-23.8	0.40	0.39	0.24		
SP133	-12.5	-23.5	0.20	0.15	0.06		
SP134	-12.9	-23.6	0.30	0.20	0.07		
SP135	-12.1	-23.3	0.55	0.45	0.21		
SP137	5805	-11.6	-23.5	0.30	0.28	0.32	①黒褐色②黒褐色+青褐色
SP138	-10.7	-23.7	0.35	0.30	0.21	①黒褐色②複層黒褐色	
SP140	-9.5	-23.2	0.45	0.43	0.18		
SP142	5805	-8.7	-23.6	0.39	0.26	0.40	複層
SP143	-7.9	-23.7	0.73	0.40	0.15		
SP147	-2.1	-23.9	0.36	0.28	0.10	①黒褐色+地山ブロック	
SP148	5803	2.5	-24.2	0.40	0.36	0.58	①黒褐色②黒褐色+青褐色ブロック③黒褐色+青褐色ブロック
SP149	-14.5	-24.5	0.43	0.28	0.06	黒褐色+砂粒	
SP150	-14.1	-25.0	0.27	0.25	0.08	黒褐色+砂粒	
SP151	-14.6	-25.6	0.39	0.28	0.16	①黒褐色②複層黒褐色③黒褐色+砂粒	
SP152	-2.8	-25.3	0.37	0.24	0.17	①黒褐色土+砂粒	
SP153	5807	4.8	-26.1	0.25	0.23	0.12	①黒褐色+砂粒
SP154	5807	(3.5)	-26.0	0.22	0.20	0.08	①黒褐色+砂粒
SP155	-12.3	-24.5	0.34	0.23	0.09	黒褐色+砂粒	柱軌跡跡径0.09
SP156	5805	-1.6	-24.5	0.30	0.28	0.52	①黒褐色
SP157	5805	-1.6	-25.0	0.35	0.24	0.23	①②③黒褐色
SP158	-10.3	-24.5	0.32	0.26	0.08	黒褐色+地山ブロック+砂粒	柱軌跡跡径0.04
SP159	9.8	-25.0	0.23	0.20	0.08	黒褐色	
SP161	5805	-16.2	-25.0	0.40	0.36	0.14	黒褐色+砂粒
SP162	5805	8.1	-24.4	0.35	0.35	0.42	①黒褐色:地山ブロック②黒褐色
SP163	-8.4	-25.9	0.23	0.22	0.08	黒褐色	
SP164	5805	8.0	-25.2	0.48	0.36	0.15	①黒褐色:地山ブロック
SP165	-7.4	-24.7	0.36	0.26	0.14	①②③黒褐色+地山ブロック④黒褐色	
SP166	-6.5	-25.3	0.27	0.25	0.08	黒褐色+砂粒	
SP167	-5.5	-24.8	0.26	0.24	0.17	①黒褐色+地山ブロック+砂粒②黒褐色③黒褐色	
SP168	-4.9	-24.2	0.22	0.19	0.18	黒褐色	
SP169	-5.0	-24.8	0.30	0.28	0.18	①②③黒褐色④黒褐色+地山ブロック	五・六出土
SP170	-5.0	-25.7	0.34	0.32	0.14	①黒褐色②黒褐色+地山+地山ブロック	右出土
SP171	-4.9	-25.2	0.21	0.19	0.10	①黒褐色+砂粒	
SP172	-1.1	-26.6	0.22	0.20	0.19	①黒褐色+砂粒	
SP173	5802	-3.0	-25.8	0.34	0.22	0.24	①黒褐色+地山+地山ブロック
SP174	5805	-2.3	-25.8	0.37	0.22	0.24	①②③黒褐色+地山+地山ブロック
SP175	5802	-0.9	-26.0	0.36	0.22	0.23	①②③黒褐色②黒褐色+地山+地山ブロック
SP176	5805	-1.7	-24.1	0.35	0.21	0.20	①②③黒褐色+地山+地山ブロック
SP177	5805	-1.7	-25.0	0.30	0.24	0.20	①②③黒褐色+地山+地山ブロック
SP178	5805	-1.7	-25.9	0.30	0.24	0.20	①②③黒褐色+地山+地山ブロック
SP179	5805	-1.7	-24.1	0.35	0.21	0.20	①②③黒褐色+地山+地山ブロック
SP180	5805	-1.7	-25.9	0.30	0.26	0.34	①②③黒褐色+地山+地山ブロック④⑤黒褐色
SP181	5805	2.5	-25.3	0.45	0.42	0.35	①②③黒褐色④地山ブロック⑤黒褐色+地山+地山ブロック⑥黒褐色+地山+地山ブロック
SP182	5802	2.5	-26.0	0.30	0.26	0.25	黒褐色
SP183	5805	-14.7	-26.9	0.45	0.40	0.26	黒褐色
SP184	5805	-12.7	-26.7	0.26	0.23	0.10	黒褐色
SP185	-4.3	-27.3	0.30	0.25	0.15	黒褐色	
SP186	5807	-4.7	-27.5	0.30	0.27	0.12	黒褐色
SP187	-4.1	-27.4	0.27	0.24	0.13	黒褐色	
SP188	5807	-13.8	-27.5	0.22	0.20	0.12	黒褐色
SP189	-12.7	-27.2	0.33	0.32	0.21	黒褐色	
SP190	-12.1	-27.3	0.29	0.25	0.11	①②③④黒褐色⑤黒褐色+地山+地山ブロック⑥黒褐色	
SP191	-10.5	-26.8	0.20	0.10	0.16	黒褐色	SP192に切られる
SP192	-10.3	-26.7	0.27	0.24	0.20	①②③黒褐色	SP191を切る
SP193	-9.8	-27.1	0.32	0.24	0.07	黒褐色	軸部外に柱根跡
SP194	-10.8	-27.9	0.22	0.17	0.06	黒褐色	
SP195	-10.9	-28.4	0.20	0.18	0.14	黒褐色	SP200に切る
SP196	-10.9	-28.5	0.24	0.20	0.05	黒褐色	SP199に切られる
SP197	-10.6	-28.0	0.22	0.20	0.06	黒褐色	
SP198	-9.9	-28.5	0.20	0.17	0.14	黒褐色	SP204を切る
SP199	-9.7	-28.8	0.30	0.28	0.15	黒褐色	SP203・205に切られる
SP200	-9.9	-28.2	0.46	0.38	0.25	①②③黒褐色④黒褐色	SP204・814を切る SP206に切られる
SP201	-9.9	-27.9	0.30	0.30	0.05	黒褐色	SP205を切る
SP202	-9.6	-28.0	0.23	0.21	0.10	黒褐色	
SP203	-8.3	-26.3	0.29	0.24	0.11	①黒褐色②黒褐色③黒褐色④黒褐色	

別表8のつづき

(単位: m)

番号	柱番号	柱高	柱幅	柱厚	柱(φ)	柱(φ)	柱上	側面(切り立たない等)
SP209	-	-7.3	-37.8	0.34	0.39	0.04	黒褐色	
SP210	-	-6.8	-37.4	0.42	0.41	0.10	黒褐色	
SP211	-	-3-25.1	0.28	0.29	0.10	0.04	黒褐色	SP212を切る
SP212	-	-4-25.1	0.28	0.29	0.10	0.04	黒褐色+地山ブロック	SP211に切られる。SP213を切る
SP213	-	-4-25.1	0.28	0.29	0.10	0.04	黒褐色	SP212に切られる
SP214	-	-4-25.2	0.41	0.41	0.10	0.04	黒褐色	
SP215	-	-5-21.3	0.39	0.41	0.10	0.04	黒褐色	
SP216	-	-5-21.3	0.39	0.41	0.10	0.04	黒褐色	
SP217	-	-2-25.1	0.28	0.29	0.10	0.04	黒褐色	
SP218	-	-2-25.1	0.28	0.29	0.10	0.04	黒褐色	
SP219	SP006	-14.6	-28.8	0.35	0.30	0.05	茶褐色	
SP220	-	-0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
SP221	SP007	-19.3	-28.7	0.36	0.21	0.10	黒褐色	
SP222	SP008	-7.6	-28.8	0.36	0.20	0.09	黒褐色	
SP223	-	-12.2	-28.5	0.29	0.17	0.03	黒褐色+地山ブロック	
SP224	SP007	-12.2	-25.7	0.25	0.20	0.14	黒褐色+地山ブロック	
SP225	SP007	-14.5	-30.1	0.42	0.26	0.07	黒褐色	
SP226	SP007	-13.2	-30.1	0.44	0.30	0.06	黒褐色	
SP227	-	-10.9	-29.8	0.20	0.12	0.12	黒褐色	
SP228	-	-10.8	-30.0	0.30	0.22	0.09	黒褐色	
SP229	SP004	-5.2	-18.7	0.44	0.34	0.16	黒褐色	SP238を切る
SP230	-	-16.8	-18.8	0.37	0.33	0.21	①黒褐色②黒褐色+砂粒③黄褐色	
SP231	-	-3.6	-16.6	0.26	0.31	0.18	④砂粒の黒褐色	
SP232	-	-4.5	-15.8	0.34	0.33	0.18	④砂粒の茶褐色	SP235に切られる
SP233	SP003	-4.8	-15.8	0.44	0.38	0.31	④砂粒の黒褐色+地山ブロック	SP234を切る
SP234	SP003	-6.7	-15.9	0.48	0.44	0.28	黒褐色+地山ブロック	ビット底部に柱を支える石あり 石径0.28
SP235	SP001	-8.8	-15.9	0.42	0.39	0.30	黒褐色+地山ブロック	SP238に切られる
SP236	SP001	-8.6	-15.8	0.58	0.45	0.27	黒褐色+地山ブロック②茶褐色	SP237を切る
SP237	SA01	12.4	-16.0	0.61	0.51	0.33	③黒褐色+地山ブロック④茶褐色+砂粒⑤黒褐色+地山ブロック	ビット底部に柱を支える石あり
SP238	SP004	12.9	-16.0	0.23	0.22	0.11	①黒褐色	SP238に切られる
SP239	SP004	14.3	-15.9	0.43	0.35	0.22	①黒褐色②黒褐色+地山ブロック	
SP240	SP004	14.7	-15.8	0.34	0.39	0.23	③黒褐色+地山ブロック	
SP241	SP004	15.3	-15.9	0.23	0.34	0.04	①黒褐色②茶褐色+砂粒	SP486-487に切られる テラスあり
SP242	SP004	16.1	-16.1	0.20	0.20	0.11	①黒褐色②茶褐色+砂粒③地山ブロック	②の上に石 石径0.067, 高0.058
SP243	SP004	17.9	-15.5	0.36	0.31	0.17	①黒褐色②茶褐色	
SP244	SP004	17.8	-16.2	0.31	0.19	0.31	①黒褐色②茶褐色	
SP245	SP004	18.1	-16.3	0.34	0.31	0.14	①黒褐色②茶褐色	
SP246	SP004	20.2	-15.8	0.49	0.34	0.14	①黒褐色②茶褐色+砂粒	
SP247	SP004	20.4	-15.5	0.16	0.14	0.05	①黒褐色②茶褐色+砂粒	
SP248	SP003	6.7	-18.8	0.39	0.29	0.45	①黒褐色+地山+砂粒	底部を2段に分れる
SP249	SP003	12.5	-19.1	0.13	0.28	0.19	①茶褐色②茶褐色+砂粒③黒褐色	
SP250	SP001	13.0	-19.1	0.29	0.27	0.13	①茶褐色②茶褐色+砂粒③地山	
SP251	SP004	13.0	-19.1	0.29	0.27	0.13	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP252	SP004	15.4	-18.0	0.53	0.37	0.09	①茶褐色②茶褐色+地山ブロック	
SP253	SP004	16.7	-17.3	0.38	0.35	0.14	①茶褐色②茶褐色	SP257を切る
SP254	SP004	16.8	-17.5	0.23	0.19	0.10	①茶褐色②茶褐色	SP258に切られる
SP255	SP004	19.6	-17.0	0.38	0.34	0.11	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP256	SP003	6.6	-18.7	0.40	0.35	0.28	①茶褐色②茶褐色	飛石あり
SP257	SP003	6.5	-20.5	0.42	0.41	0.21	①茶褐色+地山ブロック②黒褐色+砂粒	SP258を切る 相石あり 石径0.05厚さ0.27
SP258	SP004	8.4	-20.5	0.59	0.35	0.36	①黒褐色②茶褐色+地山ブロック	SP262を切る
SP259	SP003	8.7	-20.5	0.44	0.37	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒	SP263に切られる
SP260	SP004	10.5	-19.7	0.89	0.52	0.10	①茶褐色②茶褐色+砂粒	柱頭部径0.15
SP261	SP004	11.3	-18.3	0.32	0.28	0.18	①茶褐色②茶褐色	
SP262	SP004	11.3	-20.6	0.38	0.31	0.20	①茶褐色+地山ブロック②茶褐色	SP268に切られる ピット底部に柱を支える石あり
SP263	SP004	11.3	-20.4	0.31	0.29	0.27	①茶褐色+地山ブロック②茶褐色	SP262を切る
SP264	SP004	11.3	-20.4	0.39	0.33	0.08	①茶褐色②茶褐色+砂粒	SP263に切られる
SP265	SP004	12.3	-20.1	0.38	0.37	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒③黒褐色	
SP266	SP004	12.3	-20.7	0.61	0.36	0.23	茶褐色	ピット底部に柱を支える石あり
SP267	SP004	12.3	-20.7	0.61	0.36	0.23	茶褐色	
SP268	SP004	12.3	-20.7	0.61	0.36	0.23	茶褐色	
SP269	SP004	12.3	-20.7	0.61	0.36	0.23	茶褐色	
SP270	SP004	12.3	-20.7	0.61	0.36	0.23	茶褐色	
SP271	SA01	12.3	-20.1	0.38	0.37	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒③黒褐色	
SP272	SP004	12.3	-19.0	0.48	0.20	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP273	SP004	12.3	-19.6	0.54	0.44	0.13	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP274	SP004	13.1	-20.3	0.34	0.30	0.26	①茶褐色	
SP275	SP004	14.6	-20.6	0.44	0.32	0.33	①茶褐色+地山ブロック	右端0.074厚0.055 右4脚
SP276	SP004	17.2	-18.7	0.56	0.54	0.19	①茶褐色+地山ブロック②黒褐色+地山ブロック	右7点
SP277	SP004	17.4	-19.1	0.57	0.51	0.19	茶褐色	
SP278	SP004	17.8	-18.6	0.67	0.59	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒③黒褐色	
SP279	SP004	18.3	-18.9	0.39	0.46	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP280	SP004	18.3	-19.0	0.39	0.46	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP281	SP004	18.3	-19.6	0.39	0.46	0.16	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP282	SP004	18.3	-19.6	0.50	0.49	0.17	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP283	SP004	18.3	-19.6	0.50	0.49	0.17	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP284	SP004	18.3	-19.6	0.51	0.49	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP285	SP004	18.3	-19.6	0.51	0.49	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP286	SP004	18.3	-19.6	0.51	0.49	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP287	SP004	18.3	-19.6	0.51	0.49	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP288	SP004	18.3	-19.6	0.51	0.49	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	
SP289	SP004	18.3	-19.6	0.51	0.49	0.18	①茶褐色②茶褐色+砂粒	

別表 8 のつづき

(単位:m)

測点	鉛直	横幅	高さ	厚さ(c)	厚さ(a)	地質	備考(切り合ひ等)
SP290	7.7	-23.1	0.41	0.30	0.16	①黒褐色+茶褐色+砂粒	
SP291	9.4	-21.9	0.63	0.51	0.13	無褐色+地山ブロック	
SP292	SB06	11.2	-22.5	0.38	0.32	0.18	無褐色+地山ブロック
SP293		11.7	-21.9	0.32	0.29	0.05	①黒褐色+茶褐色
SP294	SB02	11.5	-21.5	0.24	0.19	0.12	①黒褐色+茶褐色
SP295	SB04	11.6	-22.5	0.34	0.32	0.14	①黒褐色+茶褐色+砂粒
SP296	SB02	11.7	-23.9	0.26	0.26	0.08	①黒褐色+茶褐色
SP297	SA01	12.7	-22.2	0.44	0.39	0.09	①黒褐色+茶褐色+砂粒
SP298	SA01	12.8	-24.0	0.50	0.29	0.07	②無褐色
SP299	SB04	13.3	-22.5	0.35	0.29	0.19	無褐色+地山ブロック
SP300	SB08	14.0	-20.7	0.47	0.37	0.17	②茶褐色+砂粒+茶褐色
SP301	SA04	4.4	-25.4	0.41	0.41	0.46	③茶褐色+砂粒+茶褐色
SP302	SB08	8.3	-24.3	0.32	0.30	0.45	④茶褐色+地山ブロック+茶褐色
SP303	SB03	6.3	-25.3	0.39	0.36	0.34	⑤茶褐色+地山ブロック+茶褐色+砂質
SP307		9.4	-24.3	0.65	0.60	0.18	茶褐色
SP308		10.0	-25.1	0.38	0.34	0.31	茶褐色+地山ブロック
SP309	SB08	11.1	-20.4	0.35	0.34	0.30	茶褐色+砂質
SP310	SB08	11.2	-24.2	0.45	0.34	0.38	①茶褐色+黄褐色+無褐色+地山ブロック+砂質
SP311	SB04	11.6	-24.7	0.34	0.30	0.13	茶褐色+茶褐色
SP312		12.1	-25.4	0.41	0.16	0.26	無褐色+茶褐色
SP313	SB04	13.8	-24.6	0.34	0.28	0.22	茶褐色
SP314	SB06	14.0	-24.5	0.46	0.40	0.30	茶褐色
SP315	SB06	15.0	-20.1	0.39	0.33	0.19	茶褐色+黄褐色
SP316		15.5	-24.5	0.31	0.28	0.14	茶褐色+茶褐色
SP317	SB05	4.5	-26.9	0.45	0.36	0.36	レット底面に柱を支える石あり
SP318		5.0	-26.0	0.38	0.31	0.15	茶褐色+茶褐色
SP319		5.2	-28.0	0.28	0.19	0.04	茶褐色+砂質
SP320		5.2	-28.0	0.28	0.19	0.09	茶褐色+地山ブロック
SP321		5.6	-26.8	0.14	0.11	0.12	茶褐色+砂質
SP322	SB05	5.6	-26.0	0.24	0.28	0.13	①茶褐色+砂粒+茶褐色+砂質+茶褐色
SP323		5.7	-26.0	0.14	0.11	0.13	茶褐色+茶褐色
SP324		8.5	-29.3	0.19	0.17	0.04	茶褐色+茶褐色
SP325		8.8	-28.8	0.20	0.20	0.19	茶褐色+地山ブロック
SP326		9.7	-26.4	0.32	0.11	0.24	茶褐色+茶褐色
SP327	SA02	11.8	-26.3	0.20	0.29	0.16	茶褐色+茶褐色+地山ブロック
SP328	SB04	11.8	-26.7	0.73	0.34	0.13	茶褐色+砂質
SP329	SA02	12.0	-23.5	0.74	0.30	0.13	無褐色+地山ブロック+砂質
SP330	SB04	12.6	-29.0	0.31	0.28	0.18	茶褐色+砂粒+砂質+砂質
SP331	SA01	12.7	-26.0	0.42	0.28	0.16	茶褐色+地山ブロック+茶褐色
SP332	SA01	12.8	-27.9	0.38	0.29	0.19	茶褐色+砂質+砂質
SP333	SB04	13.5	-26.7	0.30	0.28	0.15	①茶褐色+茶褐色
SP334		13.7	-26.0	0.24	0.21	0.16	茶褐色+茶褐色
SP335		16.0	-28.6	0.25	0.24	0.08	茶褐色+茶褐色+砂粒+砂質
SP336	SB04	16.2	-28.7	0.21	0.23	0.07	茶褐色+地山ブロック+砂粒+砂質
SP337		16.5	-26.2	0.49	0.49	0.13	茶褐色+砂粒+砂質+砂質
SP342		19.8	-26.5	0.52	0.51	0.04	前回調査
SP343	SA01	20.2	-21.3	0.34	0.30	0.32	茶褐色+砂粒+茶褐色
SP346		3.6	-30.1	0.28	0.28	0.05	前回調査
SP347		4.0	-27.1	0.27	0.26	0.07	茶褐色+砂粒
SP348		5.4	-26.2	0.34	0.16	0.05	前回調査
SP350		6.3	-28.2	0.20	0.16	0.12	茶褐色+茶褐色+砂粒+砂質
SP351		6.3	-31.2	0.22	0.22	0.10	①茶褐色+茶褐色+砂粒+砂質
SP352		9.0	-29.3	0.26	0.24	0.12	茶褐色+茶褐色+砂質
SP353		9.1	-29.6	0.34	0.21	0.16	茶褐色+砂質
SP354		9.3	-29.0	0.27	0.25	0.06	前回調査
SP355		9.9	-25.0	0.58	0.38	0.07	茶褐色+砂質
SP356		10.0	-29.3	0.38	0.18	0.59	茶褐色+地山ブロック
SP357		10.2	-29.6	0.34	0.25	0.06	茶褐色+砂粒+砂質
SP358		12.0	-29.8	0.36	0.31	0.10	①茶褐色+砂粒+茶褐色+砂粒+砂質
SP359	SA02	12.1	-30.9	0.23	0.22	0.13	茶褐色+地山ブロック+砂質
SP360	SB04	12.0	-31.1	0.32	0.31	0.13	①茶褐色+茶褐色+茶褐色+砂粒+砂質
SP361	SA01	12.9	-29.9	0.31	0.30	0.19	茶褐色+砂粒+砂質
SP362		14.0	-29.2	0.30	0.25	0.22	茶褐色+砂粒+砂質
SP363	SB04	12.8	-31.0	0.35	0.28	0.14	SP361を切る
SP364		14.1	-30.7	0.40	0.25	0.21	②茶褐色+砂質
SP365		14.4	-30.2	0.41	0.22	0.14	茶褐色+砂粒+砂質
SP366		14.9	-31.1	0.26	0.23	0.09	茶褐色+砂質
SP367		14.5	-29.6	0.23	0.17	0.13	茶褐色+地山ブロック+砂粒+砂質
SP368		15.3	-29.7	0.25	0.20	0.08	茶褐色+茶褐色+茶褐色+砂粒+砂質
SP369	SB04	16.2	-29.6	0.31	0.31	0.09	茶褐色+地山ブロック+砂粒+砂質

別表 8 のつづき

(単位: m)

番号	地名	標高	SE(n)	SE(s)	SE(r)	理土	結果(切り台なし)
SP270		15.7-29.7	0.20	0.18	0.17	茶褐色、砂質	柱根鉄筋径0.07、盤厚0.06
SP271		4.1-31.9	0.39	0.27	0.20		SP271、SP272に切る、前回調査
SP276		3.9-32.3	0.41	0.27	0.21		柱根鉄筋径0.13、盤厚0.14、前回調査
SP277		4.6-32.1	0.29	0.25	0.19	茶褐色+砂粒、砂質	SP273に切られる
SP278		4.4-31.6	0.14	0.13	0.04	茶褐色+砂粒、砂質	
SP279		5.6-30.7	0.24	0.17	0.09	茶褐色+砂粒、砂質	
SP280		10.0-31.3	0.43	0.30	0.14	茶褐色+塊状ブロック	
SP281		17.4-35.3	0.51	0.44	0.11	茶褐色+砂粒、砂質	
SP282	SB041	12.7-33.2	0.35	0.28	0.07	茶褐色+砂粒、砂質	SP283に切られる
SP283	SA002	12.3-38.2	0.23	0.19	0.09	0.09、茶褐色+砂粒	SP282を切る
SP284		2.6-32.8	0.24	0.16	0.09	茶褐色	
SP285	SA01	12.9-31.9	0.30	0.29	0.18	①茶褐色+黒褐色+砂粒、砂質	SP286を切る
SP286		12.6-31.8	0.24	0.20	0.10	茶褐色+砂粒、砂質	
SP287		14.0-32.3	0.23	0.20	0.11	茶褐色、砂質	SP288を切る
SP288		14.2-33.4	0.56	0.47	0.10	茶褐色	SP287に切られる
SP289		15.5-32.6	0.17	0.16	0.09	茶褐色+砂粒、砂質	柱根軸径0.09
SP290	SB04	15.9-38.0	0.28	0.25	0.08	茶褐色	
SP291		15.6-31.9	0.49	0.38	0.09	茶褐色+砂粒、砂質	
SP292		14.9-33.0	0.13	0.12	0.11	茶褐色+砂粒、砂質	
SP293		15.3-32.8	0.35	0.34	0.13	茶褐色、砂質	
SP294	SB041	14.4-33.0	0.12	0.10	0.09	茶褐色+砂粒、砂質	
SP295		17.8-31.8	0.33	0.17	0.12	茶褐色、砂質	
SP296		17.5-33.1	0.23	0.18	0.10	茶褐色+砂粒、砂質	
SP297		15.8-34.2	0.23	0.16	0.10	茶褐色、砂質	
SP298		4.1-34.6	0.21	0.17	0.07		前回調査
SP299		4.2-34.7	0.21	0.20	0.06	茶褐色、砂質	
SP300		29.0-34.7	0.27	0.37	0.06	茶褐色、砂質	SP304に切られる
SP301		29.1-34.9	0.22	0.31	0.19	茶褐色+砂粒、砂質	SP305を切る
SP302		29.2-35.1	0.26	0.26	0.13	茶褐色+砂粒、砂質	
SP303	SA002	12.4-35.6	0.23	0.27	0.21	單褐色	
SP304		12.8-35.9	0.31	0.28	0.09	茶褐色、砂質	SP304に切られる
SP305		12.8-35.9	0.27	0.26	0.13	茶褐色+砂色、砂質	SP305を切る
SP306	SM01	0-35.8	0.46	0.38	0.11	茶褐色、砂質	壁に切られる
SP307	SM01	0-35.8	0.46	0.38	0.11	茶褐色、砂質	柱根軸径0.19、盤厚0.12
SP308	SM01	0-35.8	0.46	0.38	0.11	茶褐色、砂質	壁に切られる
SP309	SM01	12.0-35.9	0.27	0.26	0.13	茶褐色+茶褐色、砂質	壁に切られる
SP310	SM01	0-35.8	0.46	0.38	0.11	茶褐色、砂質	壁に切られる
SP311		14.4-34.6	0.42	0.27	0.22	茶褐色、砂質	
SP312		22.3-32.9	0.23	0.15	0.11	茶褐色+砂粒	
SP313		22.7-34.9	0.37	0.31	0.19	茶褐色+砂粒	
SP314		22.9-34.3	0.20	0.19	0.10	茶褐色	
SP315		24.2-34.9	0.26	0.24	0.14	茶褐色+砂粒	
SP316		24.5-34.9	0.25	0.18	0.07	茶褐色+砂粒	
SP317		25.8-34.6	0.33	0.27	0.12	茶褐色	
SP318		27.1-34.8	0.39	0.28	0.13	①茶褐色+砂粒②茶褐色+砂粒	
SP319		28.8-35.6	0.42	0.27	0.14	茶褐色+砂粒	SP333に切られる
SP320		29.1-35.5	0.23	0.17	0.12	茶褐色	SP343を切る
SP321		29.2-36.0	0.33	0.18	0.06	茶褐色	SP322に切られる
SP322		29.7-34.2	0.44	0.30	0.09	茶褐色	
SP323		30.1-35.5	0.23	0.22	0.14	茶褐色	SP334を切る
SP324		30.3-34.7	0.44	0.28	0.28	茶褐色+砂粒	
SP325		32.0-34.0	0.27	0.17	0.12	茶褐色	SP333に切られる
SP326		31.2-35.7	0.26	0.24	0.08	茶褐色	
SP327		33.9-35.6	0.22	0.20	0.07	茶褐色	SP432に切る
SP328		34.2-35.4	0.51	0.47	0.15	茶褐色	SP431に切られる
SP329		34.8-35.8	0.70	0.37	0.07	茶褐色+砂粒	
SP330		34.2-35.6	0.36	0.36	0.35	茶褐色+砂粒	
SP331		34.2-35.6	0.36	0.29	0.14	茶褐色+砂粒	
SP332		34.2-35.6	0.31	0.23	0.14	茶褐色+砂粒	
SP333		36.3-36.0	0.25	0.24	0.22	茶褐色+砂粒	
SP334		37.2-37.0	0.32	0.32	0.09	茶褐色+砂粒	
SP335		38.4-35.8	0.37	0.39	0.11	茶褐色+砂粒	
SP336		38.5-37.8	0.36	0.39	0.13	茶褐色+砂粒	
SP337		38.5-37.8	0.24	0.24	0.11	茶褐色	
SP338		39.0-37.2	0.78	0.53	0.09	茶褐色+砂粒	SP379に切られる
SP339		39.1-36.8	0.41	0.20	0.12	茶褐色	
SP340		39.6-37.8	0.27	0.24	0.08	茶褐色	
SP341		40.0-37.1	0.27	0.23	0.13	茶褐色+砂粒	
SP342		39.9-37.4	0.45	0.21	0.11	茶褐色+砂粒	
SP343		39.8-37.0	0.35	0.33	0.19	茶褐色	
SP344		39.8-38.3	0.54	0.39	0.15	茶褐色	
SP345		39.5-37.7	0.20	0.17	0.10	茶褐色	
SP346		39.5-37.8	0.24	0.24	0.11	茶褐色	
SP347		39.9-37.2	0.78	0.53	0.09	茶褐色+砂粒	
SP348		39.0-36.8	0.32	0.29	0.09	茶褐色	
SP349		39.1-36.3	0.32	0.28	0.18	茶褐色+砂粒	
SP350		39.6-37.9	0.22	0.20	0.09	茶褐色	
SP351		39.6-37.1	0.32	0.20	0.09	茶褐色	
SP352		39.6-37.1	0.32	0.20	0.09	茶褐色+砂粒	
SP353		39.6-37.0	0.27	0.17	0.09	茶褐色	
SP354		39.6-37.4	0.35	0.32	0.14	茶褐色+砂粒	
SP355		39.6-37.4	0.35	0.32	0.14	茶褐色+砂粒	
SP356		39.6-37.4	0.35	0.32	0.14	茶褐色	
SP357		39.6-37.4	0.35	0.32	0.14	茶褐色+砂粒	

別表8 のつづき

(単位: m)

番号	東N	北E	高さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	埋土	備考(切り合い等)
SP458	55.6	-17.0	0.23	0.20	0.06	無褐色	
SP459	56.6	-18.2	0.42	0.28	0.15	無褐色	
SP460	37.3	-17.0	0.19	0.16	0.07	茶褐色	
SP461	58.4	-16.9	0.28	0.21	0.07	茶褐色	
SP462	58.7	-17.61	0.31	0.27	0.12	茶褐色	
SP463	21.5	-18.7	0.29	0.38	0.25	無褐色	SP653に切られる SP781を切る
SP464	22.5	-18.4	0.54	0.52	0.16	茶褐色+砂粒	
SP465	23.4	-19.2	0.36	0.33	0.21	無褐色+砂粒	SP782を切る
SP466	25.0	-18.0	0.50	0.38	0.19	無褐色+砂粒	
SP467	26.2	-19.2	0.27	0.23	0.19	無褐色	SK52を切る
SP468	28.5	-18.5	0.22	0.32	0.16	無褐色+砂粒	
SP469	29.3	-18.3	0.51	0.55	0.10		
SP471	37.2	-18.51	0.39	0.28	0.10	茶褐色+黄褐色	SK53を切る SK52を切る
SP472	24.51	-19.51	0.42	0.23	0.13	無褐色+地山ブロック	
SP473	24.41	-20.2	0.41	0.39	0.18	無褐色	
SP474	26.61	-19.8	0.27	0.26	0.20	無褐色	
SP475	26.71	-20.5	0.24	0.23	0.12	茶褐色+砂粒	
SP476	27.51	-19.7	0.64	0.28	0.01	無褐色+砂粒	
SP477	27.91	-19.8	0.21	0.17	0.05	茶褐色+砂粒	
SP478	28.01	-19.7	0.30	0.26	0.06	無褐色+砂粒	SK53, SP475を切る SK53を切る SP477に切られる 杖痕跡 幅0.11
SP479	28.7	-20.11	0.33	0.31	0.21	茶褐色	SK53を切る SP480に切られる
SP480	28.7	-20.31	0.28	0.22	0.47	無褐色	SK53を切る SP479を切る
SP481	29.81	-19.6	0.27	0.22	0.24	茶褐色+砂粒	SK53を切る
SP482	29.4	-20.2	0.26	0.24	0.12	茶褐色	
SP483	30.0	-20.0	0.24	0.24	0.10	茶褐色	
SP484	31.4	-19.5	0.27	0.22	0.06	茶褐色	
SP485	31.5	-19.8	0.37	0.32	0.12	茶褐色	
SP486	32.2	-20.1	0.39	0.35	0.18	茶褐色	
SP487	34.1	-19.5	0.25	0.24	0.16	茶褐色+砂粒	
SP488	34.9	-19.6	0.26	0.24	0.06	茶褐色+砂粒	
SP489	34.4	-19.8	0.27	0.26	0.08	茶褐色+地山ブロック	テラス
SP490	37.1	-19.6	0.17	0.15	0.01	茶褐色+砂粒	
SP491	38.5	-19.7	0.26	0.20	0.06	茶褐色+砂粒	
SP492	20.2	-19.7	0.81	0.26	0.12	茶褐色+砂粒	
SP493	23.2	-20.4	0.37	0.29	0.12	茶褐色+黄褐色②茶褐色+砂粒	
SP494	28.5	-21.5	0.9	0.32	0.09	茶褐色+砂粒	
SP495	24.4	-21.8	0.9	0.24	0.04	茶褐色	
SP496	24.51	-21.7	0.9	0.26	0.10	茶褐色	
SP497	25.81	-21.5	0.8	0.27	0.04	茶褐色	
SP498	26.8	-21.7	0.5	0.35	0.11	茶褐色+砂粒	SP852を切る
SP499	24.6	-22.8	0.31	0.30	0.12	茶褐色+砂粒	
SP500	24.7	-23.5	0.31	0.29	0.19	茶褐色	
SP501	25.9	-23.2	0.30	0.23	0.17	茶褐色	SP902を切る SP864に切られる
SP502	26.1	-23.3	0.4	0.26	0.12	茶褐色	杖痕跡0.11
SP504	26.7	-23.4	0.54	0.52	0.15	茶褐色	
SP505	29.2	-21.1	0.56	0.37	0.10	茶褐色	
SP506	28.6	-22.3	0.15	0.16	0.10	茶褐色	
SP508	28.9	-22.3	0.20	0.18	0.13	茶褐色	
SP509	29.0	-23.5	0.32	0.27	0.05	茶褐色	SP880-892を切る
SP510	31.4	-21.3	0.28	0.27	0.17	茶褐色	
SP511	32.3	-21.5	0.47	0.42	0.18	茶褐色	杖痕跡0.22
SP512	34.5	-21.3	0.29	0.28	0.15	茶褐色	SP694に切られる
SP513	35.0	-21.8	0.19	0.16	0.03	茶褐色	
SP514	36.6	-21.5	0.27	0.25	0.28	茶褐色+砂粒	
SP515	38.9	-21.2	0.32	0.28	0.06	茶褐色	SP781に切られる
SP516	39.5	-21.4	0.59	0.26	0.15	茶褐色	
SP517	26.2	-24.0	0.27	0.24	0.16	茶褐色+茶褐色	
SP519	31.8	-24.0	0.24	0.24	0.93	茶褐色	
SP520	27.8	-23.5	0.24	0.23	0.97	茶褐色	
SP521	24.61	-25.1	0.36	0.35	0.27	茶褐色+茶褐色	
SP522	26.7	-24.2	0.29	0.26	0.14	茶褐色	
SP523	26.4	-24.8	0.26	0.22	0.07	茶褐色	SP524に切られる
SP524	26.7	-25.0	0.9	0.38	0.35	茶褐色	SP523に切る
SP525	26.2	-25.6	0.25	0.26	0.12	茶褐色	
SP526	27.0	-26.0	0.30	0.25	0.16		
SP527	27.3	-25.7	0.32	0.28	0.10	茶褐色	
SP528	27.7	-25.0	0.25	0.29	0.06	茶褐色	
SP529	29.0	-26.0	0.36	0.74	0.10	茶褐色	
SP530	29.4	-23.9	0.23	0.18	0.32	茶褐色	
SP531	29.9	-26	0.31	0.20	0.05	茶褐色	SP534に切る
SP533	29.1	-27	0.37	0.35	0.05	茶褐色	
SP534	29.8	-25	0.47	0.38	0.16	茶褐色	SP531に切られる

### 別表8 のつづき

(单位: m)

標名	略名	学名	原産地	花期	花色	葉	備考(切り台なし)
SP535		29.7-30.6	6.0-22	5.14-5.20	0.05	茶褐色	
SP536	SP501	31.4-32.3	9.0-19	5.13-5.18	0.16	黑色	
SP537		31.3-32.5	9.0-22	5.20-5.29	0.16	黑色	
SP538		32.1-33.7	9.4-14	5.27-5.37	0.21	黑色	
SP539		33.2-34.8	9.29	5.28	0.09	黑色	
SP540		33.1-34.7	9.18	5.16	0.03	黑色	
SP541		33.1-34.6	9.05	5.23	0.07	黑色	
SP542	SP501	33.7-35.1	9.0-21	5.04-5.37	0.13	茶褐色	
SP543		33.9-35.0	9.0-14	5.13	0.07	茶褐色	
SP544		36.0-36.6	9.0-31	5.18	0.07	茶褐色	
SP545		38.6-38.6	9.0-22	5.20	0.17	無葉色	
SP546		39.7-42.2	9.0-32	5.19	0.03	茶褐色+黃褐色	
SP547		39.9-40.5	9.0-36	5.14	0.08	茶褐色	
SP548		39.9-40.5	9.0-36	5.14	0.08	茶褐色	
SP549		39.9-40.5	9.0-36	5.14	0.08	茶褐色	
SP550		39.8-41.1	9.0-23	5.21	0.13	茶褐色	
SP551		39.8-41.1	9.0-32	5.30	0.11	茶褐色+黃褐色	
SP552		40.1-41.1	9.0-32	5.30	0.11	茶褐色+黃褐色	
SP553		40.3-41.7	9.0-24	5.20	0.06	茶褐色	
SP554		40.3-41.7	9.0-24	5.20	0.06	茶褐色	
SP555		40.3-41.7	9.0-24	5.20	0.06	茶褐色	
SP556	SP501	41.1-41.5	9.0-32	5.30	0.13	茶褐色	
SP557	SP501	41.5-42.0	9.0-32	5.30	0.13	茶褐色	
SP558		42.0-42.6	9.0-32	5.24	0.19	茶褐色	
SP559		42.2-42.6	9.0-28	5.26	0.08	茶褐色	
SP560	SP501	33.7-37.7	27.3	5.41	0.40	0.06	
SP561		34.4-37.5	9.0-24	5.23	0.09	茶褐色	
SP562	SP501	36.0-37.3	9.0-24	5.24	0.07	茶褐色	
SP563	SP501	34.8-37.0	9.0-24	5.23	0.11	無葉色	
SP564	SP501	36.8-39.6	9.0-22	5.20	0.20	茶褐色+黃褐色	
SP565	SP501	36.8-39.6	9.0-22	5.20	0.20	茶褐色+黃褐色	
SP566		36.6-39.5	9.0-15	5.28			SP595に切られる
SP567		37.1-39.7	9.0-21	5.27	0.10	茶褐色+黃褐色	SP597を切る
SP568		37.8-39.8	9.0-24	5.24	0.12	茶褐色	
SP569		38.6-39.9	9.0-20	5.23	0.11	茶褐色	
SP570		38.6-39.9	9.0-20	5.23	0.11	茶褐色	
SP571		38.6-39.9	9.0-20	5.23	0.11	茶褐色	
SP572		38.1-39.2	9.0-16	5.15	0.09	茶褐色	
SP573	SP501	31.4-32.6	9.0-21	5.20	0.11	茶褐色	
SP574	SP501	31.4-32.6	9.0-21	5.20	0.11	茶褐色	
SP575	SP501	31.7-32.6	9.0-21	5.20	0.11	茶褐色	
SP576	SP501	31.7-32.6	9.0-21	5.20	0.11	茶褐色	
SP577	SP501	31.7-32.6	9.0-21	5.20	0.11	茶褐色	
SP578	SP501	32.5-32.9	9.0-21	5.20	0.17	茶褐色	
SP579	SP501	32.6-33.0	9.0-20	5.17	0.13	茶褐色	
SP580	SP501	31.0-31.9	9.0-31	5.24	0.19	三種色	
SP581	SP501	32.6-33.6	9.0-52	5.20	0.05	茶褐色	
SP582	SP501	35.5-35.7	9.1-37	5.32	0.19	茶褐色	
SP583	SP501	32.1-33.1	9.0-14	5.13	0.10	茶褐色	
SP584		32.0-32.1	9.0-26	5.28	0.09	茶褐色	
SP585		33.4-32.9	9.0-23	5.20	0.09	茶褐色	
SP586		33.4-32.9	9.0-23	5.20	0.09	茶褐色	
SP587		35.1-35.7	9.0-22	5.20	0.15	茶褐色	
SP588		37.6-38.1	9.0-16	5.14	0.09	茶褐色	
SP589		37.9-38.1	9.0-14	5.13	0.07	茶褐色	
SP590		35.1-35.7	9.0-22	5.20	0.15	茶褐色	
SP591		37.6-38.1	9.0-16	5.14	0.09	茶褐色	
SP592		37.9-38.1	9.0-14	5.13	0.07	茶褐色	
SP593		37.9-38.1	9.0-14	5.13	0.07	茶褐色	
SP594		39.2-36.0	9.0-45	5.44	0.18	①無葉色+茶褐色+茶褐色	茎に切られる
SP595		10.2-36.0	0.01-65	0.36	0.23	①無葉色+茶褐色+茶褐色	茎に切られる
SP596		20.9-34.5	9.0-28	5.26	0.29	②茶褐色+茶褐色	
SP597		21.7-34.2	9.0-41	5.36	0.64	③茶褐色+茶褐色+茶山ブロック	SP553を切る
SP598		21.7-34.6	9.0-23	5.23	0.29	④茶褐色+茶褐色+茶褐色+茶山ブロック	
SP599		23.1-25.5	9.0-27	5.26	0.11	⑤茶褐色+茶褐色+茶褐色+茶褐色	梗の方に社根跡の下、社根跡後9.13
SP600		22.3-33.2	9.0-34	5.26	0.14	⑥茶褐色+茶褐色	
SP601		22.6-33.2	9.0-60	5.12	0.14	⑦茶褐色+茶褐色	
SP602		22.3-33.6	9.0-38	5.23	0.09		
SP603		-10.3-28.8	9.0-24	5.20	0.16	⑧茶褐色+茶褐色+茶褐色	
SP604		10.5-15.8	9.0-54	5.38	0.40	⑨茶褐色+茶褐色+茶褐色+茶褐色	
SP605		-21.3-13.4	9.0-35	5.22	0.16	⑩茶褐色+茶褐色	
SP606		-13.3-17.6	9.0-30	5.20	0.12	⑪茶褐色+茶褐色	
SP607	SP501	-13.6-24.8	9.0-24	5.20	0.12	⑫茶褐色+茶褐色	
SP608		26.6-22.7	9.0-29	5.26	0.17		
SP609		24.5-14.8	9.0-49	5.26	0.20		
SP610		24.5-14.9	9.0-44	5.19	0.16		
SP611		-15.5-18.2	9.0-49	5.25	0.09		
SP612		-16.6-18.5	9.0-39	5.20	0.09		
SP613		-16.6-18.5	9.0-39	5.20	0.09		
SP614		-17.3-18.6	9.0-30	5.20	0.09		
SP615		-17.3-18.6	9.0-30	5.20	0.09		
SP616		-11.3-11.6	9.0-30	5.10	0.05		
SP617		-11.3-11.6	9.0-30	5.10	0.05		
SP618		-11.3-11.6	9.0-30	5.10	0.05		
SP619		-11.3-11.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP620		-11.3-11.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP621		-11.3-11.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP622		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP623		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP624		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP625		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP626		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP627		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP628		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP629		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP630		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP631		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP632		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP633		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP634		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP635		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP636		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP637		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP638		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP639		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP640		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP641		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP642		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP643		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP644		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP645		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP646		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP647		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP648		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP649		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP650		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP651		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP652		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP653		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP654		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP655		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP656		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP657		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP658		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP659		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP660		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP661		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP662		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP663		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP664		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP665		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP666		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP667		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP668		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP669		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP670		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP671		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP672		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP673		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP674		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP675		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP676		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP677		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP678		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP679		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP680		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP681		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP682		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP683		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP684		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP685		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP686		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP687		-11-20.1	9.0-31	5.23	0.14		
SP688		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP689		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP690		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP691		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP692		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP693		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP694		-11-17.6	9.0-30	5.10			
SP695		-11-17.6	9.0-31	5.20	0.05		
SP696		-11-17.6	9.0-31	5.23	0.14		
SP697		-10-24.5	9.0-39	5.26	0.25	①②茶褐色	
SP698		-9-24.5	9.0-28	5.25	0.27	①②茶褐色	
SP699		8.0-14.9	9.0-24	5.11	0.04	茶褐色	
SP700		4.7-18.9	9.0-53	5.36	0.10	茶褐色	
SP701		9.0-19.5	9.0-27	5.23	0.07	茶褐色	
SP702		12.5-17.7	9.0-26	5.25	0.09	茶褐色	
SP703		-11-17.6	9				

別表 8 のつづき

(単位: m)

番号	地名	X(m)	Y(m)	Z(m)	理	備考(切り合い%)
SP649		3.5 - 24.9	0.40	0.25	0.11	前回測定
SP650		10.7 - 25.6	0.44	0.29	0.05	無褐色+砂粒, 砂質
SP651		3.5 - 26.4	0.54	0.52	0.20	無褐色 砂質
SP652		3.1 - 26.4	0.25	0.27	0.14	無褐色, 砂質
SP653		2.9 - 26.5	0.18	0.17	0.06	無褐色+砂粒
SP654		9.7 - 26.5	0.23	0.22	0.06	無褐色+砂粒, 砂質
SP655		2.8 - 26.8	0.16	0.14	0.10	無褐色, 砂質
SP666		3.1 - 26.9	0.41	0.38	0.15	無褐色, 砂質
SP667		3.7 - 27.0	0.02	0.24	0.09	無褐色+砂粒, 砂質
SP668		11.8 - 28.1	0.47	0.44	0.35	無褐色+砂粒, 砂質
SP669		21.9 - 15.5	0.75	0.50	0.06	SE03に切られる 杜痕跡長径0.18 厚0.12
SP670		22.0 - 17.5	0.24	0.24	0.10	無褐色
SP671		23.6 - 16.8	0.67	0.59	0.12	無褐色+砂粒
SP672		23.7 - 17.6	0.32	0.24	0.11	無褐色+砂粒
SP674		28.2 - 14.0	0.25	0.19	0.06	無褐色+砂粒
SP675		28.8 - 14.0	0.22	0.20	0.11	無褐色+砂粒
SP677		29.1 - 14.3	0.27	0.25	0.11	無褐色+砂粒
SP678		29.2 - 17.1	0.43	0.35	0.05	SP413を切る
SP680		30.8 - 17.8	0.36	0.34	0.11	無褐色+砂粒
SP681		30.2 - 18.5	0.23	0.06	0.12	無褐色+砂粒
SP683		36.0 - 18.4	0.21	0.21	0.13	無褐色+砂粒
SP685		39.5 - 17.6	0.26	0.22	0.08	無褐色+砂粒
SP684		23.7 - 19.5	0.25	0.19	0.05	明茶花色
SP685		26.2 - 21.5	0.50	0.39	0.17	
SP686		23.1 - 23.2	0.17	0.16	0.12	無褐色+砂粒
SP687		26.5 - 23.7	0.16	0.15	0.03	
SP688		27.2 - 21.8	0.34	0.31	0.17	無褐色+砂粒
SP689		27.7 - 21.8	0.45	0.44	0.11	無褐色+砂粒
SP692		31.1 - 23.9	0.31	0.24	0.13	無褐色+砂粒
SP694		34.1 - 21.2	0.35	0.27	0.08	無褐色+砂粒
SP695		36.0 - 23.4	0.22	0.19	0.08	無褐色+砂粒
SP696		38.9 - 22.5	0.28	0.23	0.09	無褐色
SP697		23.8 - 35.0	0.32	0.26	0.04	無褐色
SP700		-1.4 - 20.7	0.56	0.27	0.12	無褐色+焼山ブロック
SP701		1.0 - 24.5	0.86	0.75		特痕跡長径0.12 厚径0.9 延さ0.17
SP702		-0.4 - 23.6	0.79	0.63	0.12	三褐色+砂粒
SP704		-3.3 - 24.1	0.20	0.19	0.22	無褐色
SP706	SH02	-3.1 - 23.9	0.32	0.39	0.34	無褐色
SP710		20.7 - 19.3	0.45	0.35	0.10	無褐色+焼山ブロック+砂粒
SP711		29.9 - 14.6	0.25	0.26	0.07	無褐色+砂粒
SP713		-1.0 - 23.5	0.50	0.86	0.09	SP428を切る
SP714		36.7 - 23.5	0.50	0.50	0.21	無褐色+砂粒
SP715		24.7 - 29.5	0.30	0.24	0.14	無褐色
SP716	SH06	24.0 - 27.5	0.36	0.41	0.14	無褐色
SP717	SH01	24.4 - 27.4	0.30	0.28	0.16	無褐色
SP719		24.1 - 26.0	0.37	0.36	0.17	無褐色
SP722		10.9 - 26.6	0.34	0.27	0.09	無褐色
SP723	SH01	16.1 - 29.2	0.22	0.26	0.07	三褐色
SP724		59.4 - 33.1	0.63	0.45	0.26	無褐色+砂粒
SP725		39.0 - 34.0	0.60	0.38	0.12	三褐色
SP726		30.5 - 33.7	0.54	0.37	0.20	無褐色
SP727		33.7 - 32.8	0.46	0.24	0.16	無褐色
SP728		28.1 - 35.9	0.23	0.20	0.11	無褐色
SP729		29. - 29.7	0.42	0.26	0.05	無褐色
SP730		16.9 - 13.1	0.42	0.24	0.26	
SP731		21.6 - 18.2	0.25	0.17	0.16	無褐色
SP732		23.0 - 19.1	0.50	0.39	0.21	
SP733		23.1 - 19.5	0.47	0.36	0.14	SP465に切られる
SP734		26.3 - 16.3	0.50	0.20	0.06	無褐色+焼
SP736		21.7 - 20.8	0.18	0.13	0.24	SP59を切る
SP738		-2.1 - 13.9	0.26	0.28	0.10	無褐色
SP739		-1.9 - 14.4	0.27	0.26	0.19	①無褐色②無褐色+焼山ブロック
SP740		-1.9 - 14.1	0.35	0.32	0.20	①無褐色②無褐色+焼山ブロック
SP741		0.2 - 15.5	0.28	0.23	0.04	無褐色
SP742		-9.5 - 27.4	0.20	0.18	0.17	無褐色
SP743		-2.9 - 31.5	0.17	0.16	0.06	無褐色
SP744		-13.3 - 31.6	0.26	0.19	0.07	無褐色+焼山ブロック
SP745		-10.9 - 32.8	0.28	0.19	0.10	無褐色
SP746		-2.5 - 36.6	0.16	0.16	0.15	壁に切られる
SP747		1.8 - 36.5	0.78	0.15	0.15	壁に切られる

## 別 表

別表8 のつづき

(単位:m)

機種	鉄筋	横幅	高さ(h)	厚さ(t)	寸法(g)	種類	調査(切り合ひ等)
SP748	1	0.3~36.4	0.77	0.61		黒褐色	機.SD6に切られる
SP749	SMD6	12.4~25.4	0.38	0.27	0.29		
SP750	SMD6	12.5~30.8	0.31	0.28	0.31	①黒褐色+一段粒②茶褐色+砂粒	レット底面にれをえらる石あり
SP751		17.1~31.1	0.27	0.24	0.11	①黒褐色②茶褐色	柱頭部長径0.14,短径0.07
SP752		27.1~14.5	0.26	0.16	0.95		SD40を切る
SP753		34.1~19.8	0.25	0.23	0.18		SD36を切る
SP754		34.7~19.7	0.25	0.17	0.16		SD36を切る
SP755		32.6~21.9	0.31	0.28	0.26		SD36を切る
SP756		35.9~13.5	0.26	0.16	0.07		SD51を切る
SP757		35.3~13.7	0.32	0.29	0.42		SD51を切る
SP758		30.8~14.0	0.37	0.30	0.12		SD51を切る
SP759		27.6~32.1	0.27	0.24	0.08	茶褐色	SD71を切る
SP760		26.8~31.5	0.36	0.28	0.18		SD71を切る
SP761		12.5~12.9	0.46	0.36	0.39		SD71を切る
SP762		6.8~18.6	0.12	0.11	0.64		
SP763		8.8~13.7	0.48	0.32	0.27		
SP764		3.2~17.0	0.49	0.24	0.19		
SP765	SMD3	2.9~16.9	0.29	0.23	0.30		
SP766		3.1~20.5	0.29	0.16	0.09		
SP767		3.7~23.4	0.40	0.38	0.08		
SP768		-10.4~28.4	0.15	0.12	0.17	黒褐色	SP764を切る
SP769	SMD7	-16.0~29.0	0.20	0.16	0.09	茶褐色	壁に切られる
SP770		-16.0~29.6	0.24	0.16	0.09	茶褐色	SP771を切る 壁に切られる
SP771		-15.8~29.8	0.31	0.24	0.15	茶褐色	SP772に切られる
SP772		-15.8~30.5	0.23	0.16	0.09	茶褐色	壁に切られる
SP773		-15.1~31.2	0.24	0.16	0.10	茶褐色	壁に切られる
SP774		-14.4~35.7	0.34	0.21	0.12	茶褐色	壁に切られる
SP775		-9.7~36.2	0.49	0.35	0.15	茶褐色	壁に切られる
SP776		-8.7~36.4	0.40	0.30	0.15	茶褐色	壁に切られる
SP777		-8.8~35.0	0.40	0.30	0.17	茶褐色	SD50を切る SP771に切られる
SP778		-8.0~35.5	0.40	0.30	0.12	茶褐色	SP730を切る
SP779		-6.6~35.0	0.42	0.30	0.12	茶褐色	SD1に切られる
SP780		-5.5~28.6	0.49	0.41	0.19	茶褐色	石柱上
SP781		-6.6~35.5	0.45	0.32	0.15	茶褐色	
SP782		-5.4~25.0	0.44	0.32	0.15	茶褐色	
SP783		-1.2~29.0	0.41	0.30	0.16	茶褐色	SP787を切る
SP784		-1.2~29.9	0.41	0.30	0.16	茶褐色	SP788を切る
SP785		-1.2~29.9	0.41	0.30	0.16	茶褐色	SP785~788に切られる
SP786		-1.2~29.2	0.50	0.32	0.15	茶褐色	SP797を切る SP786に切られる
SP787		-1.2~29.2	0.50	0.32	0.15	茶褐色	SP799を切る
SP788		-1.5~29.2	0.32	0.27	0.09	茶褐色	SP799に切る
SP789		-1.6~29.1	0.20	0.16	0.11	茶褐色	SP798に切れる
SP790		-1.4~29.1	0.63	0.41	0.07	茶褐色	
SP791		-0.2~28.6	0.20	0.16	0.04	茶褐色	
SP792		-1.1~29.9	0.36	0.22	0.08	茶褐色	
SP793		0.5~30.3	0.32	0.20	0.04	茶褐色	
SP794		-7.5~30.0	0.14	0.14	0.04	茶褐色	
SP795		-7.4~30.6	0.25	0.20	0.05	茶褐色	
SP796		18.9~11.1	0.28	0.26			SK32を切る
SP797		18.9~11.8	0.12	0.12	0.33	0.09 黒褐色	柱脚踏み板0.09,短径0.08,底さ0.25
SP798		14.2~15.9	0.32	0.28	0.22	①茶褐色②茶褐色	
SP799		14.5~14.7	0.45	0.14	0.11	黒褐色	
SP800		-4.4~19.2	0.34	0.21	0.11	黒褐色	
SP801		-22.6~38.1	0.37	0.29	0.20	茶褐色+砂粒	SP712を切る
SP802		-22.6~38.1	0.37	0.29	0.20	茶褐色+砂粒	
SP803		-22.6~38.5	0.38	0.38	0.02	明茶褐色	
SP804		-22.1~38.7	0.19	0.25	0.12	茶褐色	
SP805		-21.9~38.3	0.27	0.17	0.08	茶褐色	SP715を切る SP710に切られる
SP806		-25.0~31.9	0.24	0.28	0.19	茶褐色	SP713, SP710~815に切られる
SP807		-24.6~31.9	0.28	0.20	0.15		SP706を切る SP715に切られる
SP808		-14.6~24.8	0.28	0.24	0.24	茶褐色	
SP809		-14.0~23.7	0.49	0.37	0.14	①茶褐色	
SP810		-30.3~15.3	0.24	0.23	0.10		SP811を切る
SP811		-30.3~15.3	0.24	0.23	0.10		SP810を切る
SP812	SMD6	-14.0~23.7	0.49	0.37	0.14	①茶褐色	
SP813		-30.3~15.3	0.24	0.23	0.10		SP811を切る
SP814	SMD1	24.7~31.6	0.42	0.28	0.19	茶褐色	
SP815	SMD1	-6.7~39.0	0.30	0.23	0.16	茶褐色	
SP816		-4.4~29.7	0.31	0.26	0.12	茶褐色	
SP817		-13.3~30.9	0.30	0.28	0.14	茶褐色	
SP818		-6.5~33.2	0.30	0.27	0.15	茶褐色	
SP819		-6.5~33.2	0.30	0.27	0.15	茶褐色	
SP820		-6.1~36.8	0.47	0.34	0.02	茶褐色+地山ブロック	SP721に切られる
SP821		-6.3~35.3	0.10	0.09	0.98	茶褐色	SP720を切る
SP822		-14.0~55.3	0.32	0.20	0.12	茶褐色	
SP823		-11.9~32.6	0.15	0.13	0.04	茶褐色	
SP824		-15.3~34.2	0.33	0.22	0.06	茶褐色	
SP825		-11.6~34.1	0.18	0.14	0.08	茶褐色	
SP826		-10.1~34.8	0.24	0.19	0.16	茶褐色	
SP827		-9.0~35.3	0.72	0.56	0.14	①茶褐色②粉塵	SK30, SP719を切る

別表 8 のつづき

(単位: m)

番号	地番	X(m)	Y(m)	計(c)	計(n)	計(u)	埋土	編号(切り合い等)
SP828	-7.7 -34.2	0.50	0.22	0.12	黒褐色			
SP829	-6.6 -32.7	0.52	0.44	0.17	黒褐色+堆山ブロック			
SP830	-7.7 -35.1	0.55	0.42	0.16	黒褐色			
SP831	1.7 -35.7	0.18	0.15	0.06	黒褐色+堆山ブロック	SP831を切る		
SP832	3.8 -36.2	0.38	0.13	0.09	黒褐色+堆山ブロック	SP830に切られる		
SP833	-8.3 -35.8	0.70	0.58	0.19	黒褐色	壁に切られる		
SP834	-11.7 -36.0	0.40	0.12	0.09	黒褐色	SP830に切られる		
SP835	3.0 -33.5	0.49	0.31	0.08	黒褐色+堆山ブロック	壁に切られる		
SP836	2.5 -36.3	0.93	—	0.06	黒褐色	壁に切られる		
SP837	3.2 -36.6	0.45	—	0.19	〇〇〇 黒褐色+砂粒・砂質	壁に切られる		
SP838	16.5 -13.7	0.20	0.20	0.10	黒褐色	SP230に切られる		
SP839	19.3 -15.6	0.45	0.34	0.18	〇〇〇 黒褐色+砂粒			
SP840	7.5 -12.9	0.35	0.25	0.10	黒褐色	SP299に切られる		
SP841	8.1 -13.7	1.10	0.81	0.18	〇〇〇 黒褐色+系褐色	SP289を切る		
SP842	8.4 -14.1	0.35	0.33	0.13	〇〇〇 黒褐色	柱根純長径 0.09 鋸深 0.07 幅さ 0.22		
SP843	7.3 -15.0	0.46	0.42	0.14	〇〇〇 黒褐色+堆山ブロック〇 黒褐色	柱根純長径 0.09 鋸深 0.07 幅さ 0.22		
SP844	8.0 -11.6	0.24	0.22	0.08	黒褐色			
SP845	11.1 -12.8	0.17	0.16	0.07	黒褐色			
SP846	11.4 -13.0	0.35	0.29	0.10	〇〇〇 黒褐色〇 黒褐色			
SP847 SB04	11.1 -14.0	0.29	0.28	0.16	黒褐色+堆山ブロック	SP847-SP848に切られる		
SP848	12.5 -14.1	0.42	0.26	0.19	〇〇〇 黒褐色〇 黒褐色	SK07-SP847を切る		
SP849 SB04	12.9 -13.5	0.41	0.32	0.18	—	②は柱脚部に堆積		
SP850 SB04	14.0 -26.8	0.32	0.32	0.14	黒褐色+砂粒・砂質			
SP851 SB04	15.8 -22.3	0.38	0.28	0.15	—	SK04を切る		
SP852 SB04	15.5 -20.1	0.45	0.32	0.19	—			
SP853	25.8 -31.5	0.17	0.12	0.13	—	SP497を切る		
SP854	16.0 -29.6	0.24	0.20	0.17	—	SP555を切る		
SP855	15.9 -29.8	0.52	0.55	0.18	—	SP387-SP388に切られる		
SP856	0.51 -15.0	0.16	0.13	—	SK07-SP857を切る			
SP857	0.6 -15.7	0.42	—	0.06	—	SK07-SP856に切られる		
SP858	0.6 -15.6	0.27	0.21	—	SK78-SP857を切る			
SP859	2.5 -13.5	0.35	0.25	0.16	—	SP326に切られる		
SP860	-12.4 -22.2	0.32	0.25	0.10	—	SP116に切られる		
SP861	-8.9 -23.4	0.30	0.25	0.09	—	SP142を切る		
SP862	-11.1 -14.8	0.28	0.24	0.10	—	SK01を切る		
SP863	-11.1 -15.4	0.28	0.16	0.04	—			
SP864	-12.7 -19.6	0.29	0.24	0.13	—			
SP865	-10.8 -21.3	0.20	0.19	—				
SP866	-9.6 -15.2	0.18	—	0.07	—	SE01を切る SP867に切られる		
SP867	-9.3 -18.5	0.20	0.15	0.16	—	SE01, SE065を切る		
SP868	-9.4 -15.5	0.28	0.19	0.31	—	SE01を切る		
SP869	-9.2 -18.3	0.36	0.28	0.14	—	SE01を切る		
SP870	-9.3 -18.3	0.28	0.20	0.23	—	SE01を切る		
SP871	-4.1 -17.9	0.35	0.18	0.08	—			
SP872	-9.2 -22.2	0.26	0.26	0.04	—			
SP873	-1.3 -21.5	0.28	0.24	0.11	—			
SP874	-11.0 -27.2	0.16	0.13	0.11	—			
SP875	0.0 -29.4	0.72	0.28	0.06	—			
SP876	6.5 -20.3	0.16	0.64	0.12	—	SP366に切られる		
SP877	9.7 -27.0	0.16	0.12	0.08	—			
SP878	6.7 -27.3	0.26	0.24	0.09	—	SP323に切られる		
SP879	39.7 -21.0	0.32	0.16	0.14	—	SP15を切る		
SP880	29.2 -54.1	1.42	0.16	—	SP992を切る			
SP881	3.8 -33.2	0.20	0.15	0.09	—	SK10-78を切る		
SP882	-3.0 -27.0	0.60	0.36	0.20	—	SP858を切る		
SP883 SB04	16.1 -26.5	0.39	—	0.11	—	SP853と切り合う		
SP884	15.8 -26.5	0.40	—	0.09	—	SP853と切り合う		
SP885 SB04	13.0 -26.5	0.26	0.19	0.09	—			
SP886	19.3 -16.6	0.23	—	0.06	〇〇〇 黒褐色〇 黒褐色	SP843を切る SP887に切られる		
SP887	15.1 -15.8	0.39	0.27	0.17	無褐色	SP243-SP878を切る チラスあり		
SP888	12.9 -24.1	0.30	0.30	0.09	無褐色	SP798に切られる		
SP889	12.9 -26.0	0.25	—	0.09	—	SP331に切られる		
SP890	6.2 -26.0	0.23	—	0.09	黒褐色+砂粒	SP122に切られる		
SP891	33.5 -37.0	0.25	0.20	0.17	—	SP581に切られる		
SP892	29.2 -24.0	0.23	0.20	0.30	—	SP509-SP801に切られる		
SP893	-1.7 -27.0	0.44	0.24	—	—			
SP894	-15.8 -21.8	0.26	0.20	0.12	—	壁に切られる		
SP895	-16.0 -27.0	0.25	0.14	—	壁に切られる			
SP896	7.3 -33.1	0.29	0.23	0.07	—			

別表9 圖池地区地表上の主要な景石石材観察表

別表10 圖池地区トレンチ内検出の景石・礫・石材観察表

No.	骨董物 (ca)	高さ (cm)	横幅 (cm)	厚さ (cm)	個考		備考	箇所
					断面形状	後世の変換により5-7に分類		
1	79	92	65	45	圓柱形	立石	1	18
2	123	111	71	45	圓柱形	立石	2	19
3	113	102	24	24	圓柱形	土中に埋没	3	40
4	124	52	25	25	圓柱形	土中に埋没	4	15
5	30	20	3	3	圓柱形	土中に埋没	5	13
6	46	20	3	3	圓柱形	土中に埋没	6	25
7	83	28	15	15	圓柱形	土中に埋没	7	32
8	97	66	25	25	圓柱形	土中に埋没	8	51
9	113	104	01	01	圓柱形	土中に埋没	9	41
10	220	95	102	60	圓柱形	圓柱形	10	27
11	122	69	91	45	圓柱形	圓柱形	11	31
12	63	62	38	38	圓柱形	圓柱形	12	18
13	114	46	65	45	圓柱形	圓柱形	13	48
14	142	79	19	19	圓柱形	圓柱形	14	32
15	183	68	46	46	圓柱形	圓柱形	15	27
16	180	50	10	10	圓柱形	圓柱形	16	15
17	12	35	20	20	9.5×11.5×7.5	9.5×11.5×7.5	17	32
18	115	60	30	30	圓柱形	圓柱形	18	17
19	132	50	13	13	圓柱形	圓柱形	19	10
20	129	53	41	41	圓柱形	圓柱形	20	19
21	127	56	40	40	圓柱形	圓柱形	21	21
22	59	55	55	55	圓柱形	圓柱形	22	95
23	77	42	38	38	圓柱形	圓柱形	23	78
24	129	99	76	76	圓柱形	圓柱形	24	140
25	107	64	62	62	圓柱形	後世の破壊により4つに分断	25	27
26	125	88	64	64	圓柱形	後世の破壊により4つに分断	26	19
27	91	49	54	54	圓柱形	圓柱形	27	46
28	55	33	15	15	圓柱形	圓柱形	28	34
29	95	70	20	20	圓柱形	圓柱形	29	27
30	110	90	51	51	圓柱形	後世の變換により4つに分断	30	47
31	70	27	36	36	圓柱形	後世の變換により4つに分断	31	20
32	77	57	65	65	圓柱形	後世の變換により4つに分断	32	35
33	80	37	13	13	圓柱形	後世の變換により4つに分断	33	27
34	46	30	20	20	圓柱形	後世の變換により4つに分断	34	15
35	40	23	16	16	圓柱形	後世の變換により4つに分断	35	35
36	53	15	3	3	圓柱形	後世の變換により4つに分断	36	64
37	57	25	17	17	圓柱形	後世の變換により4つに分断	37	49
38	63	40	15	15	圓柱形	後世の變換により4つに分断	38	60
39	35	17	6	6	圓柱形	後世の變換により4つに分断	39	23
40	25	13	6	6	圓柱形	後世の變換により4つに分断	40	23
41	70	33	21	21	圓柱形	後世の變換により4つに分断	41	30
42	20	12	10	10	圓柱形	後世の變換により4つに分断	42	12
43	120	60	30	30	圓柱形	後世の變換により4つに分断	43	12

別表10のつづき

No.	長さ(m)	幅(cm)	高さ(cm)	使用石材	備考	No.	長さ(m)	幅(cm)	高さ(cm)	使用石材	備考
42	40	31	26	モルンフェルス 花崗岩		62	65	53	23	17	花崗岩
43	70	27	65	モルンフェルス 花崗岩		63	35	20	12	花崗岩	
44	77	57	65	モルンフェルス 花崗岩		64	24	22	21	モルンフェルス 花崗岩	
45	77	19	7	モルンフェルス 花崗岩		65	22	14	モルンフェルス 花崗岩		
46	67	23	14	モルンフェルス 花崗岩		66	19	9	5	その他	
47	26	18	5	モルンフェルス 花崗岩		67	46	16	2	モルンフェルス 花崗岩	
48	20	10	5	モルンフェルス 花崗岩		68	36	22	21	モルンフェルス 花崗岩	
49	34	35	22	モルンフェルス 花崗岩		69	29	12	21	モルンフェルス 花崗岩	
50	31	45	20	モルンフェルス 花崗岩		70	25	15	8	モルンフェルス 花崗岩	
51	18	8	6	モルンフェルス 花崗岩	上りに階段	71	30	7	9	モルンフェルス 花崗岩	後台が崩れ
52	35	24	11	モルンフェルス 花崗岩		72	92	12	5	モルンフェルス 花崗岩	突出部上
53	26	26	21	モルンフェルス 花崗岩		73	93	20	21	モルンフェルス 花崗岩	
54	23	19	14	モルンフェルス 花崗岩		74	94	22	22	モルンフェルス 花崗岩	
55	19	19	8	モルンフェルス 花崗岩		75	42	19	15	モルンフェルス 花崗岩	
56	24	15	6	モルンフェルス 花崗岩		76	32	23	10	モルンフェルス 花崗岩	
57	16	16	6	モルンフェルス 花崗岩		77	18	11	3	モルンフェルス 花崗岩	
58	53	33	16	モルンフェルス 花崗岩		78	42	24	39	モルンフェルス 花崗岩	後台を支える
59	33	20	16	モルンフェルス 花崗岩		79	61	56	40	モルンフェルス 花崗岩	後台の傾斜により分割
60	46	21	18	モルンフェルス 花崗岩		80	16	16	14	モルンフェルス 花崗岩	移動している
61	34	33	15	モルンフェルス 花崗岩		81	31	31	13	モルンフェルス 花崗岩	
62	32	46	19	モルンフェルス 花崗岩	後台の傾斜により立つ	82	105	49	44	モルンフェルス 花崗岩	
63	12	9	6	モルンフェルス 花崗岩		83	25	9	8	モルンフェルス 花崗岩	
64	18	16	12	モルンフェルス 花崗岩		84	43	43	14	モルンフェルス 花崗岩	
65	28	25	5	モルンフェルス 花崗岩		85	42	12	9	モルンフェルス 花崗岩	
66	122	60	51	モルンフェルス 花崗岩	窓口の飾石	86	97	22	9	モルンフェルス 花崗岩	突出部上
67	13	10	9	モルンフェルス 花崗岩	上中に階段	87	21	19	13	モルンフェルス 花崗岩	
68	34	12	5	モルンフェルス 花崗岩	上中に階段	88	92	14	9	モルンフェルス 花崗岩	
69	15	12	5	モルンフェルス 花崗岩	上中に階段	89	59	55	3	モルンフェルス 花崗岩	
70	15	11	6	モルンフェルス 花崗岩		90	10	23	16	モルンフェルス 花崗岩	
71	32	15	11	モルンフェルス 花崗岩	上中に階段	91	20	29	6	モルンフェルス 花崗岩	
72	89	60	21	モルンフェルス 花崗岩	土中に階段	92	22	26	11	モルンフェルス 花崗岩	
73	63	62	58	モルンフェルス 花崗岩		93	51	27	20	モルンフェルス 花崗岩	
74	78	9	72	モルンフェルス 花崗岩	75から分離した破片	94	53	27	15	モルンフェルス 花崗岩	
75	15	8	6	モルンフェルス 花崗岩	土中に階段	95	17	9	3	モルンフェルス 花崗岩	土中に階段
76	134	16	65	モルンフェルス 花崗岩		96	25	17	6	モルンフェルス 花崗岩	
77	86	58	53	モルンフェルス 花崗岩		97	35	31	15	モルンフェルス 花崗岩	
78	25	15	13	モルンフェルス 花崗岩	透かし彫りでいる	98	17	8	2	モルンフェルス 花崗岩	土中に階段
79	31	10	23	モルンフェルス 花崗岩	透かし彫りでいる	99	23	2	6	モルンフェルス 花崗岩	土中に階段
80	38	20	20	モルンフェルス 花崗岩	透かし彫りでいる	100	77	42	36	モルンフェルス 花崗岩	後壁の堅度により立つ
81	59	40	26	モルンフェルス 花崗岩	透かし彫りでいる	101	120	90	76	モルンフェルス 花崗岩	後壁の堅度により立つ

別表10のつづき

No.	標長軸(cm)	標短軸(cm)	高さ(cm)	標用石種	端寸	標長軸(cm)	標短軸(cm)	高さ(cm)	標用石種	端寸	
122	70	30	38	新津花崗岩	圓原板石	62	16	16	カルンフェルス	西原板石	
123	29	24	38	ホルンフェルス	圓原板石	63	14	19	カルンフェルス	西原板石	
124	107	64	62	新津花崗岩	風化が進む	64	28	16	カルンフェルス	西原板石	
125	70	17	20	新津花崗岩	12kgから分離した破片	65	39	15	カルンフェルス	西原板石	
126	19	12	4	その他	同原板石	66	25	18	カルンフェルス	西原板石	
127	91	49	34	新津花崗岩	新津花崗岩より剥離した石質	67	38	29	カルンフェルス	西原板石	
128	125	65	64	その他	新津花崗岩より剥離した石質	68	39	14	カルンフェルス	西原板石	
129	68	68	34	その他	新津花崗岩より剥離した石質	69	35	23	カルンフェルス	西原板石	
130	73	56	56	新津花崗岩	同上	70	16	14	カルンフェルス	西原板石	
131	110	70	25	新津花崗岩	土中に埋没	71	18	—	カルンフェルス	西原板石	
132	34	20	23	カルンフェルス	同原板石	72	27	18	カルンフェルス	西原板石	
133	—	34	43	99	新津花崗岩	—	73	16	4	カルンフェルス	西原板石
134	—	32	20	5	カルンフェルス	同原板石	74	29	10	カルンフェルス	西原板石
135	—	220	96	135	新津花崗岩	窓口の要り、圓原板人の姿石	75	14	11	カルンフェルス	西原板石
136	—	113	104	61	新津花崗岩	窓口の姿石	76	20	—	カルンフェルス	西原板石
137	—	49	38	23	新津花崗岩	—	77	18	—	カルンフェルス	西原板石
138	—	87	73	32	新津花崗岩	—	78	16	—	カルンフェルス	西原板石
139	—	36	22	9	新津花崗岩	—	79	13	—	カルンフェルス	西原板石
140	—	27	28	26	新津花崗岩	—	80	—	—	カルンフェルス	西原板石
141	—	35	49	24	新津花崗岩	—	81	—	—	カルンフェルス	西原板石
142	—	53	63	45	新津花崗岩	同原板石	82	—	—	カルンフェルス	西原板石
143	—	28	11	9	その他	同原板石	83	—	—	カルンフェルス	西原板石
144	—	18	14	—	カルンフェルス	—	84	—	—	カルンフェルス	西原板石
145	—	16	10	10	カルンフェルス	同原板石	85	—	—	カルンフェルス	西原板石
146	—	20	15	6	新津花崗岩	同原板石	86	—	—	カルンフェルス	西原板石
147	—	16	16	7	新津花崗岩	同原板石	87	—	—	カルンフェルス	西原板石
148	—	33	26	11	その他	同原板石	88	—	—	カルンフェルス	西原板石
149	—	27	19	14	その他	同原板石	89	—	—	カルンフェルス	西原板石
150	—	12	8	4	新津花崗岩	同原板石	90	—	—	カルンフェルス	西原板石
151	—	97	86	25	新津花崗岩	—	91	—	—	カルンフェルス	西原板石
152	—	20	19	16	新津花崗岩	—	92	—	—	カルンフェルス	西原板石
153	—	82	27	8	新津花崗岩	—	93	—	—	カルンフェルス	西原板石
154	—	45	25	10	新津花崗岩	—	94	—	—	カルンフェルス	西原板石
155	—	50	20	9	新津花崗岩	—	95	—	—	カルンフェルス	西原板石
156	—	23	21	—	カルンフェルス	同原板石	96	—	—	カルンフェルス	西原板石
157	—	22	15	9	カルンフェルス	同原板石	97	—	—	カルンフェルス	西原板石
158	—	20	9	5	新津花崗岩	—	98	—	—	カルンフェルス	西原板石
159	—	22	12	8	新津花崗岩	—	99	—	—	カルンフェルス	西原板石
160	—	39	30	20	新津花崗岩	—	100	—	—	カルンフェルス	西原板石
161	—	36	13	15	新津花崗岩	—	101	—	—	カルンフェルス	西原板石

別表11 「門前地区出土遺物計測表

(法量単位: cm)										
番号	X	Y	遺物	用途	レベル	種類	器高	口径	器底直径	側面
57-1	-6.65	-23.82	SP142	陶土	454.574	金屬製品	金剛鉄	8.0	0.07	淡褐色
-2	25.57	-27.55	S401	陶土	454.408	金屬製品	金剛鉄	41.0	0.13	淡褐色
-3	25.30	-27.33	S401	陶土	454.420	陶瓶	すり鉢	41.0	0.13	淡褐色IV期後半
-4	25.57	-27.18	S401	陶土	454.422	陶瓶	すり鉢	50.0	0.63	淡褐色IV期後半 他に72枚片が同 瓶体
-5	25.48	-27.74	S401	陶土	454.463	金屬製品	釘	—	—	長2.5cm 頂下の幅0.5cm
-6	25.64	-27.85	S401	陶土	454.463	金屬製品	釘	—	—	長4.8cm 頂下の幅0.4cm
58-7	25.72	-27.41	S401	陶土	454.443	石器	打型石斧	—	—	縫灰岩 全長3.7cm 全幅0.6cm 厚0.7cm
-8	-10.40	-14.27	S401	陶土	454.741	鍍鉄土器	鍍鉄	21.0	0.04	後期前葉
-9	-0.19	-15.85	S406	陶土	454.773	土器	土器	11.0	1.7	後期前葉
-10	-3.49	-27.55	S410	陶土	454.643	土器	土器	11.0	1.5	後期前葉
-11	-3.81	-25.15	S410	陶土	454.887	鍍鉄土器	丸皿	11.0	0.10	後期前葉
-12	35.59	-13.61	S411	陶土	452.716	鍍鉄土器	深鉢	—	—	大室第3~4期 手作
-13	27.66	-34.97	S473	陶土	454.352	土器	土器	11.0	0.06	中期前葉
-14	26.77	-31.84	S473	陶土	454.338	土器	土器	11.0	0.05	灰白色
-15	25.54	-31.49	S473	陶土	454.321	土器	土器	11.0	0.05	灰白色
-16	25.53	-31.33	S473	陶土	454.265	土器	土器	12.0	0.02	灰白色
-17	26.89	-31.24	S473	陶土	454.378	土器	土器	13.0	0.06	灰白色
-18	26.63	-33.60	S473	陶土	454.320	土器	土器	8.0	0.05	灰白色
-19	26.85	-31.50	S473	陶土	454.357	土器	土器	8.0	1.1	灰白色
-20	27.15	-33.94	S473	陶土	454.408	鍍鉄土器	折縁深盤	24.0	0.01	淡褐色
-21	26.20	-31.98	S473	陶土	454.272	陶瓶	すり鉢	30.0	0.16	淡褐色III期
-22	25.92	-33.39	S473	陶土	454.214	陶瓶	すり鉢	30.0	0.09	淡褐色IV期前葉
-23	28.83	-30.65	S473	陶土	454.404	陶瓶	すり鉢	35.0	0.06	淡褐色IV期後半
59-24	25.97	-30.84	S473	陶土	454.324	土器	すり鉢	30.0	0.16	淡褐色IV期
-24	25.73	-32.25	S473	陶土	454.241	陶瓶	すり鉢	30.0	0.16	淡褐色IV期
-25	26.77	-32.82	S473	陶土	454.224	陶瓶	すり鉢	—	—	淡褐色IV期
-26	25.90	-31.28	S473	陶土	454.352	鍍鉄製品	釘	—	—	長2.5cm 頂下の幅0.5cm
-27	25.51	-31.38	S473	陶土	454.378	鍍鉄製品	釘	—	—	長2.8cm 頂下の幅0.4cm
-28	25.15	-31.09	S473	陶土	454.250	鍍鉄製品	釘	—	—	長3.0cm 頂下の幅0.2cm
-29	25.61	-32.32	S473	陶土	454.317	鍍鉄製品	釘	—	—	長3.8cm 頂下の幅0.5cm
-30	25.75	-31.69	S473	陶土	454.322	鍍鉄製品	釘	—	—	長4.2cm 頂下の幅0.7cm
-31	25.45	-31.10	S473	陶土	454.323	鍍鉄製品	釘	—	—	長5.5cm 頂下の幅0.4cm

(法量単位: cm)

別表11のつづき									
番号	X	Y	Z	遺跡	層位	レペル	種類	器種	口座
-33	16.83	-35.17	SP77	埋土	154.512 鉄製品	リ子			1
-34	-0.26	-15.66	SP76	埋土	154.737 土陶器	皿	14.0		0.06 1 T-6頭か1-7頭
-35	-3.29	-23.83	SP79	埋土	154.859 磁口美濃	天目系碗	11.0		1 大室第3小頭 銀和 磁口 磁口
-36	5102			埋土	154.813 手鉢	皿	9.0	1.0	0.06 1 1頭か1-2頭
-37	1.86	-15.90	SP32	埋土	154.755 鐵紋土器	火鉢			1
-38	-0.16	-21.73	SP125	埋土	154.513 磁口土器	深鉢	20.0		0.04 1
-39	18.25	-24.70	SP281	埋土	154.553 石器	深鉢	24.0		0.04 1
-40	9.40	-24.21	SP307	埋土	154.539 石器	石器			1 中期初頭 磁口3.0cm 深幅1.6cm 厚0.3cm
-41	14.15	-37.80	SP411	埋土	154.539 土陶器	皿	10.0		0.10 1 T-1頭
-42	2.1	-24.04	-14.51	SP149	埋土	154.429 錠製品	釦		1 長3.2cm 幅0.5cm
-43	31.27	-25.80	SP537	埋土	154.156 石製品	石臼			1 長3.2cm 幅2.5cm
-44				SP782	154.738 土的透	皿	13.0		0.04 1 1頭
-45	-0.62	-16.25		遺構面上	154.875 土的透	皿			0.05 1 1頭
-46	-0.43	-15.64		遺構面上	154.508 土的透	皿	12.0		0.06 1 T-4頭か1-7頭
-47	14.22	-17.55		遺構面上	155.081 磁口美濃	丸皿	11.0		0.05 1 大室第3小頭 銀和
-48	28.25	-35.13	0-0 sec11		154.527 青磁	片		3.0	1 内面に夏魚文
-49				日耕作土	154.527 青磁	碗	11.0		1 亂身彫刻
-50				日耕作土	154.527 土的透	皿	12.0		0.10 1 乱身彫刻
-51				日耕作土	153.544 磁口美濃	志野丸皿	13.0	2.6	0.06 1 T-6頭か1-7頭
-52	-3.69	-28.75	SD1	埋土	153.544 純製品	打瓶石斧			1 大室第10小頭 長持石頭
-53	-6.80	-18.09	SD1	埋土	154.915 石器	打瓶石斧			1 長4.2cm 幅0.9cm 厚2.5cm

丹波土遺物計測表の作成に関して、年代観についてでは以下の分類及び新年にもとづいた。

土陣昌三：1994年銀行の土陣画分類

貿易陶器：国立歴史民俗博物館集成の分類（国立歴史民俗博物館1993）

泡吹美濃：藤井編年（藤井1986, 1991a）

丸皿：吉岡編年（吉岡1994）

五方：1994年度報告の丸器分類

別表12 園池地区出土遺物計測表

番号	X	Y	遺物	層位	レベリ	種類	口径	器高	底径	側壁	底盤	(法量単位: cm)			
												片	土師器皿の分類	片	
60-54	-55.95	19.34	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	11.0		0.05	1.1~1.4	黄白色			
-55	-33.95	18.55	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.05	1.1~1.5	黄白色			
56	-35.41	18.55	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.05	1.1~1.5	黄白色			
-57	-35.91	18.99	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.03	1.1~6.6	黄白色			
-58	-35.70	19.69	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	15.0		0.07	1.1~6.6	黄白色			
-59	-34.83	18.93	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	30.0		0.04	1	能登燒口鉢 連縫井文			
-60	-50	-	青瓦	6394調査区底土	6394調査区底土	青瓦	面	12.0		0.07	1	染付皿形罐			
-61	-25.18	19.66	57	6394調査区底土	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.06	1	浅黃褐色			
61-62	-25.32	17.81	37	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	8.0		0.05	1.1~5.5	浅黃褐色			
-63	-19.15	17.15	37	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	9.0		0.09	1.1~5.5	橙色	タール付器		
-64	-19.15	17.15	37	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	9.0	1.8	0.06	1.1~6.6	黄白色			
65	-25.65	26.82	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	10.0		0.04	1.1~6.6	灰白色			
-66	-23.87	19.19	17	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	10.0		0.07	1.1~6.6	灰白色			
-67	-27.64	19.71	57	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	10.0		0.05	1.1~6.6	浅黃褐色			
68	-27.25	13.09	47	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	10.0		0.09	1.1~6.6	浅黃褐色			
-69	-23.82	10.02	17	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	11.0		0.07	1.1~6.6	橙色			
-70	-24.32	26.80	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	11.0	2.2	0.33	1.1~6.6	(P)浅黃褐色	タール付器		
-71	-28.50	19.62	57	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.02	1.1~2.5	苦褐色			
-72	-28.42	19.80	57	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.06	1.1~6.6	苦褐色			
-73	-24.44	25.37	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	11.0	1.7	0.04	1.1~2.5	灰白色			
-74	-23.18	28.47	23	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	11.0	1.4	0.06	1.1~6.6	黄白色		
-75	-24.36	27.23	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.06	1.1~6.6	黄白色			
-76	-24.14	29.02	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.09	1.1~6.6	浅黃褐色	タール付器		
-77	-25.89	19.07	47	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.03	1.1~6.6	灰褐色			
-78	-23.33	9.58	17	土壤質土	6394調査区底土	土師器	面	12.0		0.07	1.1~6.6	灰褐色	二次焼熱		
-79	-23.94	9.58	17	土壤質土	6394調査区底土	土師器	面	14.0		2	1~5	黄褐色			
-79	-27.98	19.73	57	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	14.0		0.06	1.1~5	浅黃褐色	タール付器		
-80	-21.96	17.87	N区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	10.0		0.03	1	浅黃褐色			
-81	-27.45	19.07	47	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	10.0		0.07	1	大室第2小間	反軸 二次燒熱		
-82	-25.27	20.17	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	14.0				骨物			
-83	-24.29	28.69	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	16.0		0.04	1	石V類			
-84	-29.38	19.51	57	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	16.0		0.11	1				
-85	-23.72	9.56	17	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	14.0				長4.8cm 底下の幅0.7cm			
-86	-24.87	30.60	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	45.5	65.3	45.5	66.5	トイゴの羽口	3		
-87	-24.85	30.69	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面	45.5	73.1	45.5	73.1	打製石斧	1		
-87	-25.32	30.70	E区	堆積層	6394調査区底土	土師器	面					器底径 全長2.7cm 金屬10.2cm 厚2.8cm			

# EMA CASTLE SITE II

## A REPORT OF THE EXCAVATION OF FIFTEENTH CENTURY SQUARE CASTLE SITE IN NORTHERN GIFU, JAPAN

BY  
TAKAO UNO  
MICHIIRO KOJIMA  
AIKO OHIRA  
KAKUYA NAKATA  
MASAKO KAIDO  
SHINTARO TANAKA  
MASAKAZU NAKATANI  
YOSHIHITO NAKAJIMA  
AKIHIRO HURUYA  
SIGERU MATSUMOTO

### CONTENTS

- CHAPTER I Progress of research work  
II Geographical and historical environment  
III Excavation of Ema Castle site  
IV Discussion and Conclusion  
V Natural scientific studies

THE BOARD OF EDUCATION OF KAMIOKA TOWN  
FACULTY OF HUMANITIES, TOYAMA UNIVERSITY

MARCH, 1996



# English Summary

## Introduction

This is a second report of archaeological excavation at the Ema Castle site in northern Gifu prefecture, the central part of Japan. Ema Castle site is famous as the medieval square castle of warrior aristocracy, especially for its marvelous rock garden and pond. Ema clan was descended from Hojo clan who ruled eastern Japan at earlier medieval period or from Izu Ema Clan. And Ema clan expanded their sphere of influence at the 15th and 16th century in northern Hida region. And Ema Castle site was the home base of Ema clan at 15th century.

## Excavation

The excavation was carried out from 19th September to 11th August 1995 by the staff of Kamioka Town Board of Education and the Department of Archaeology at Toyama University. We chose the front area of the castle gate and the pond to research. And by our survey, following important points are clarified:

- (1) Many posthole buildings including a stable were built at the front area of the castle gate.
- (2) The building activity started at the later 13th century and decreased at the 16th century.
- (3) The pond was created at the end of 14th century side by side with constructing the castle.

## Conclusion

Now we can recognize three phases of the Ema Castle site.

I phase (from the later 13th century to the mid 14th century): Ema clan started their activity at the Tono terrace (Tono means king). We excavated a large Sohashira type posthole building attached well and cooking hearth. And the residents used high-quality Chinese porcelain.

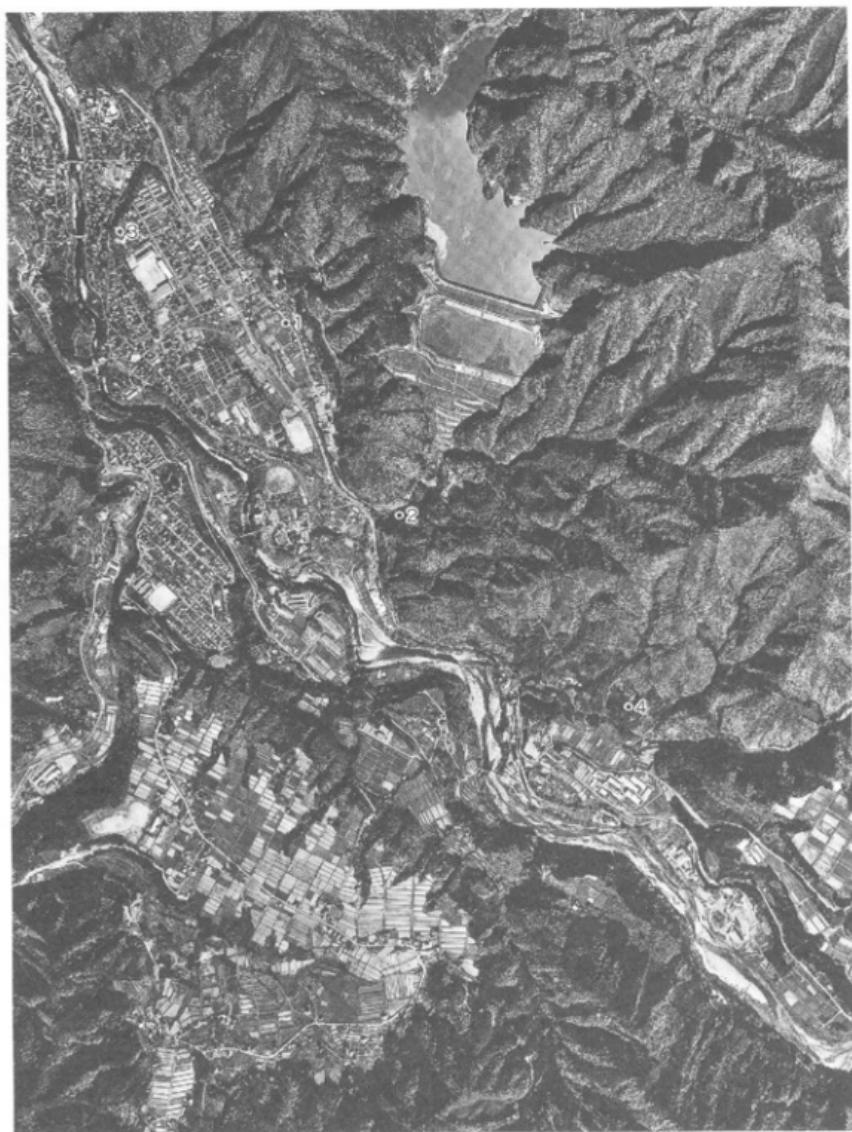
IIA phase (from the end of 14th century to the earlier 15th century): Ema clan constructed their fortified castle and they enforced a urban planning at this region. In the moated square area they built large post-hole buildings with foundation stones and rock garden with pond. And out of the moated area they constructed smaller Gawashira type post-hole buildings.

IIB phase (from the later 15th century to the beginning of 16th century): Ema clan rebuilt whole of their buildings. And the direction of buildings changed at this phase. The front area of castle gate became to an open space and a stable was constructed. This area may be a riding ground at this time.

We suppose Ema clan moved to Kamioka Castle at the 16th century. And they defeated by Miki clan at the end of 16th century.

The site of Ema clan shows us the typical history of medieval warrior aristocracy in Japanese Islands.

# 図 版



1 江馬氏下館跡 2 高原諏訪城跡 3 東町城跡 4 洞城跡

(上が北、縮尺：約1/35,000)



(上が北)

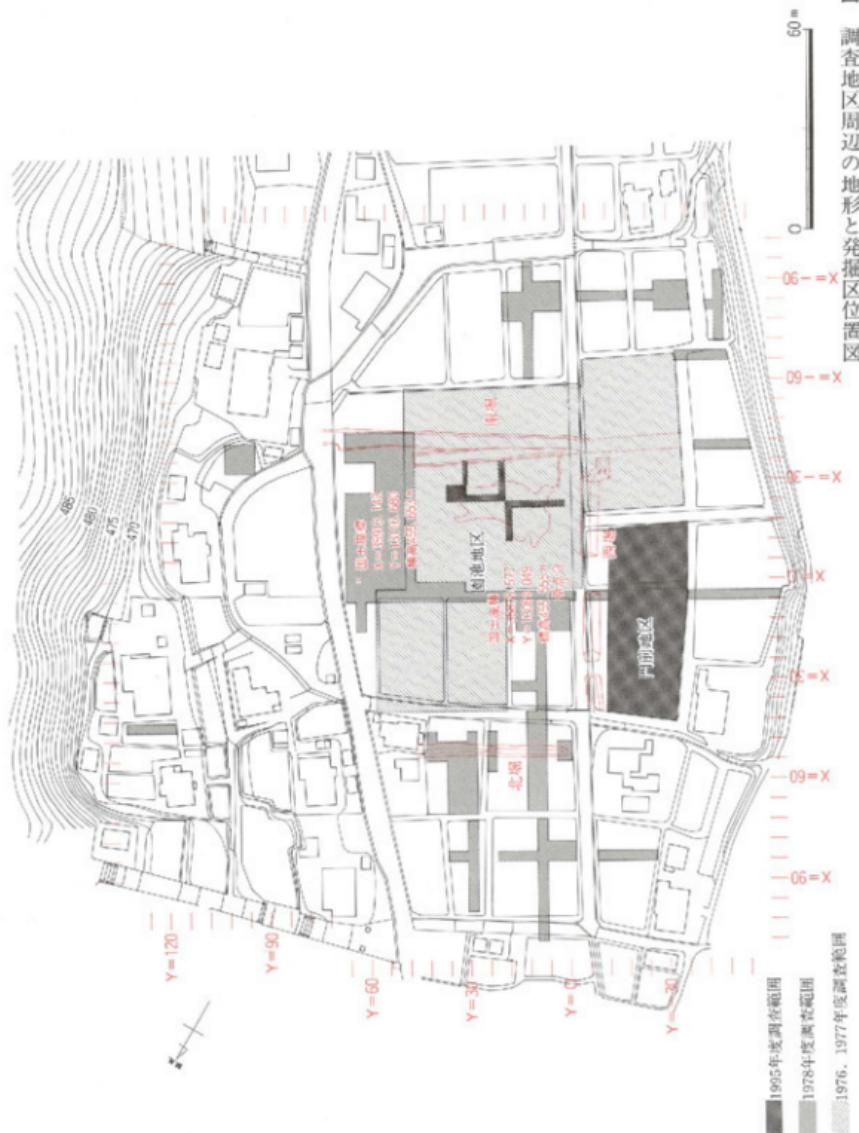


1 神岡町遠景写真（北から）



2 調査地区遠景写真：1978年度調査時（西から）

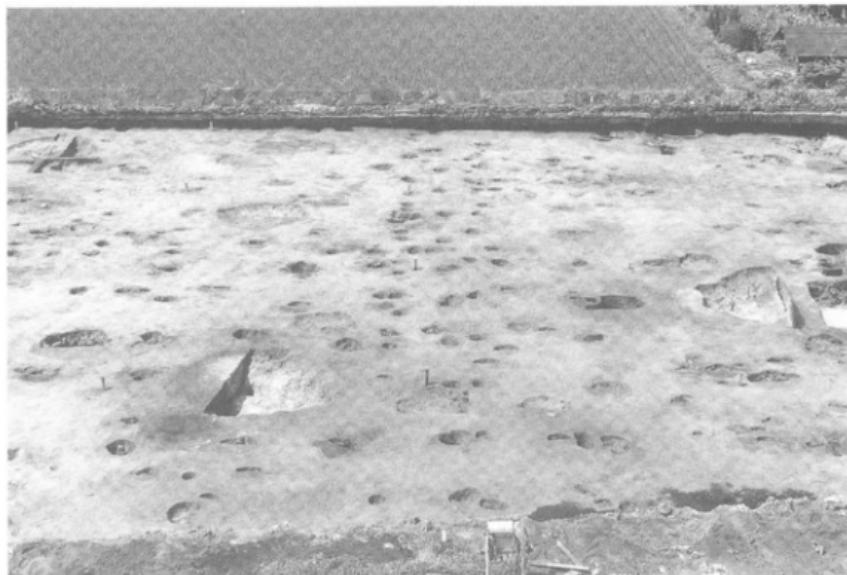
## 図版四 調査地区周辺の地形と発掘位置図



### 1 調査地区地形図（縮尺1/1680）



1 門前地区発掘後全景写真（調査地区北部、東南から）



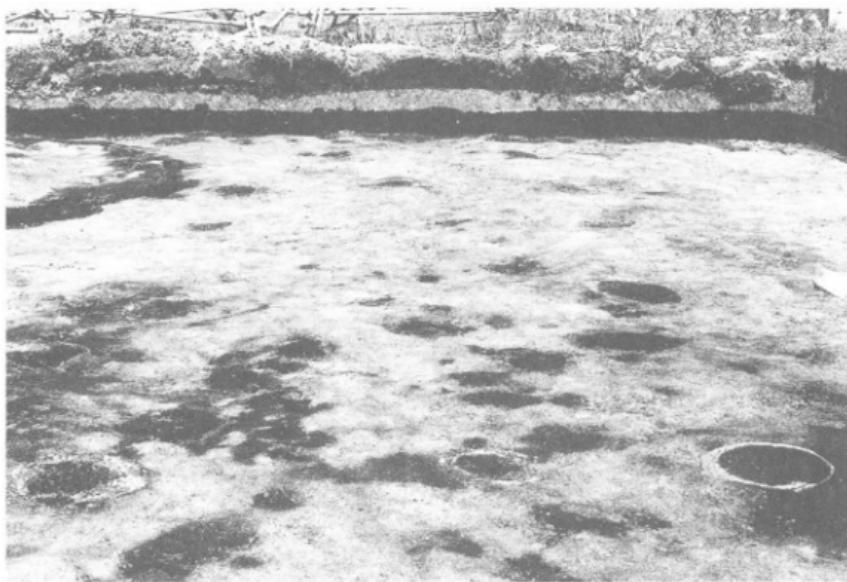
2 門前地区発掘後全景写真（調査地区中央部、東から）



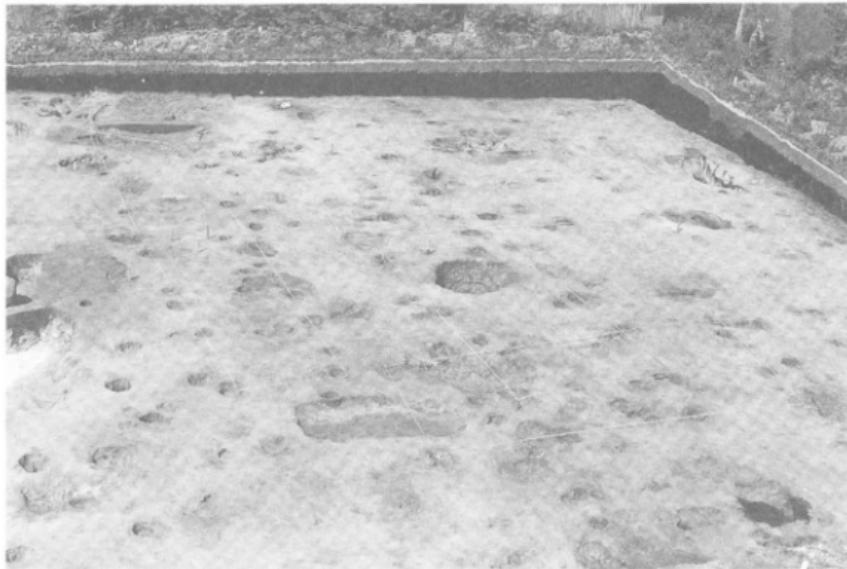
1 門前地区発掘後全景写真（調査地区南部、東北から）



2 園池地区発掘後全景写真（西から）



1 門前地区南部建物検出写真（西から）

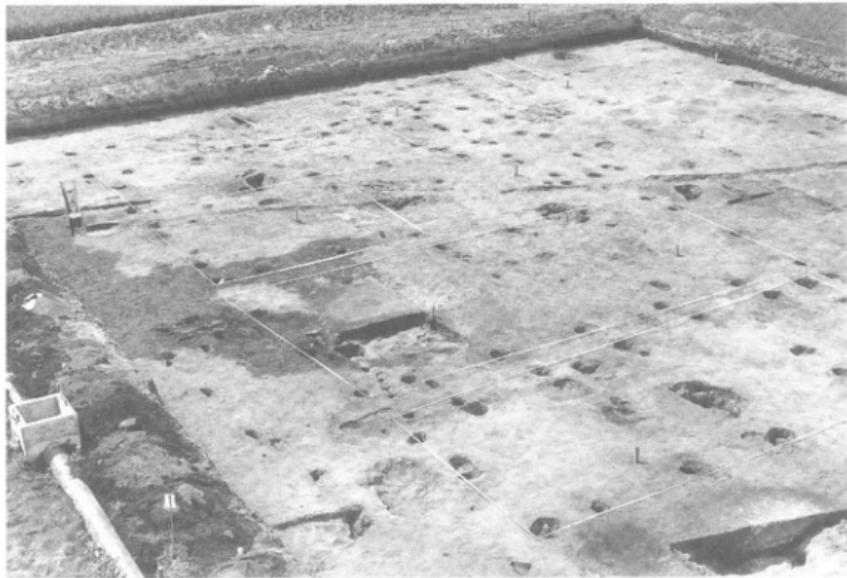


2 門前地区北部建物写真（東南から）

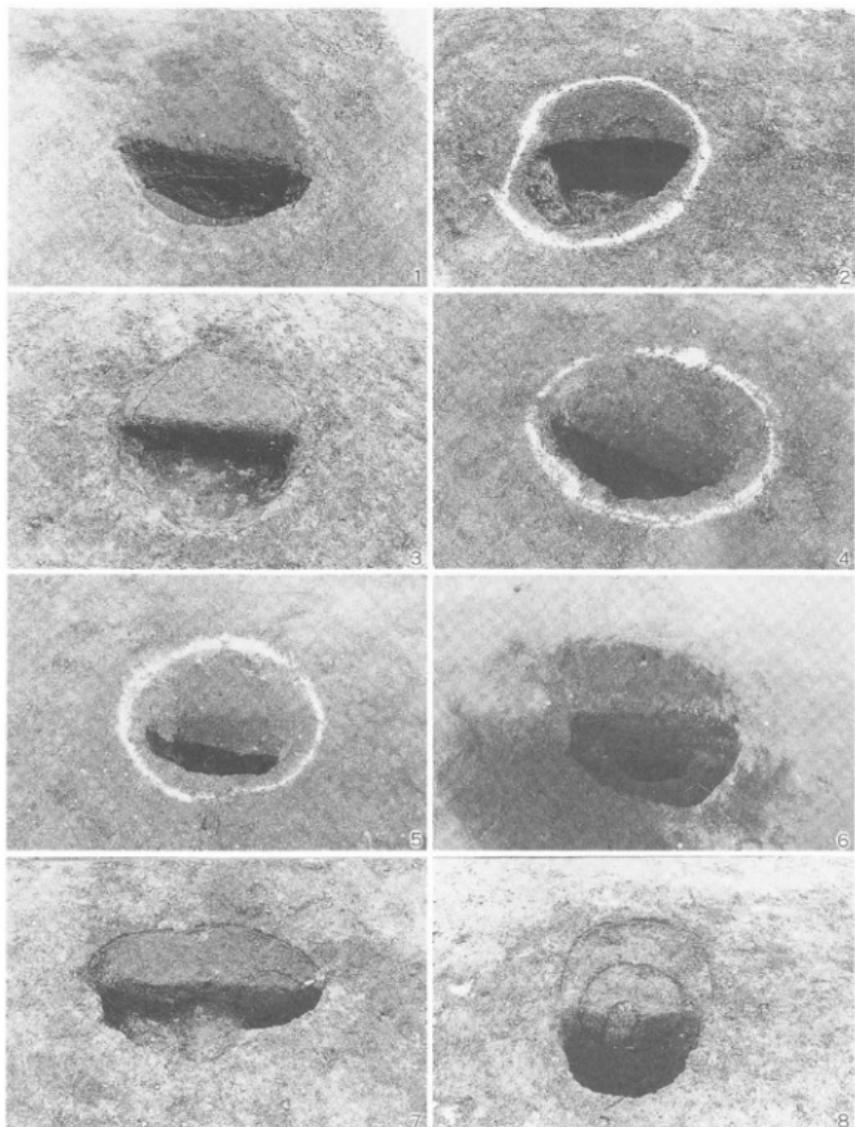
図版八 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(四)



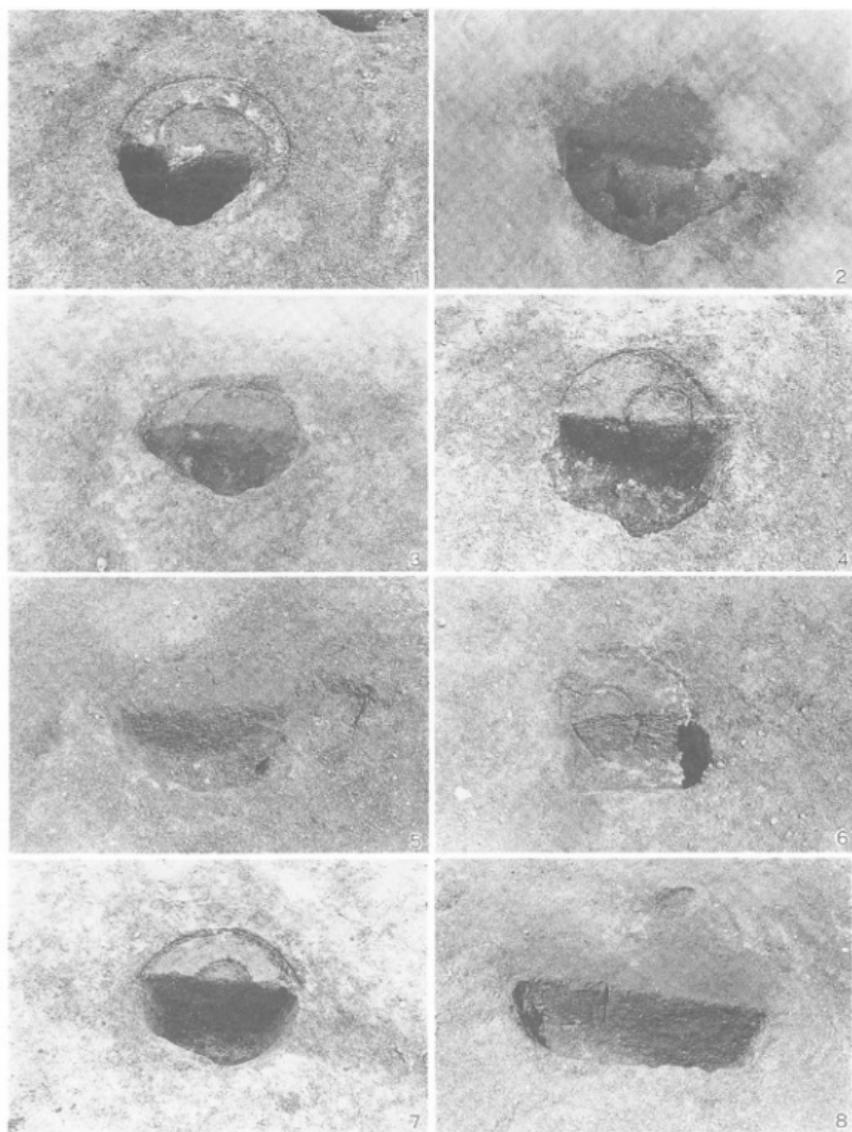
1 門前地区中央部建物写真（東から）



2 門前地区南部建物写真（東北から）

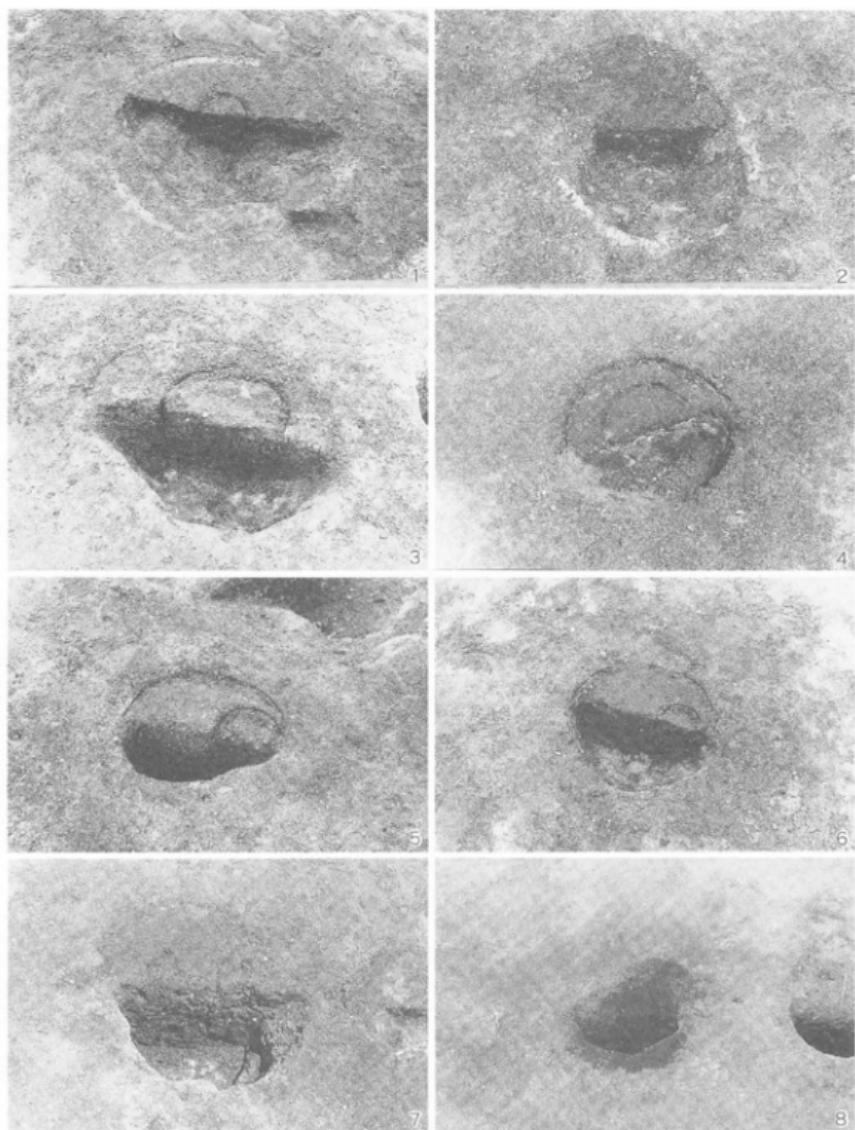


1 S P524 (S B01, 西から) 2 S P536 (S B01, 西から) 3 S P542 (S B01, 南から)  
4 S P575 (S B01, 南から) 5 S P582 (S B01, 西から) 6 S P798 (西から)  
7 S P155 (西から) 8 S P157 (西から)



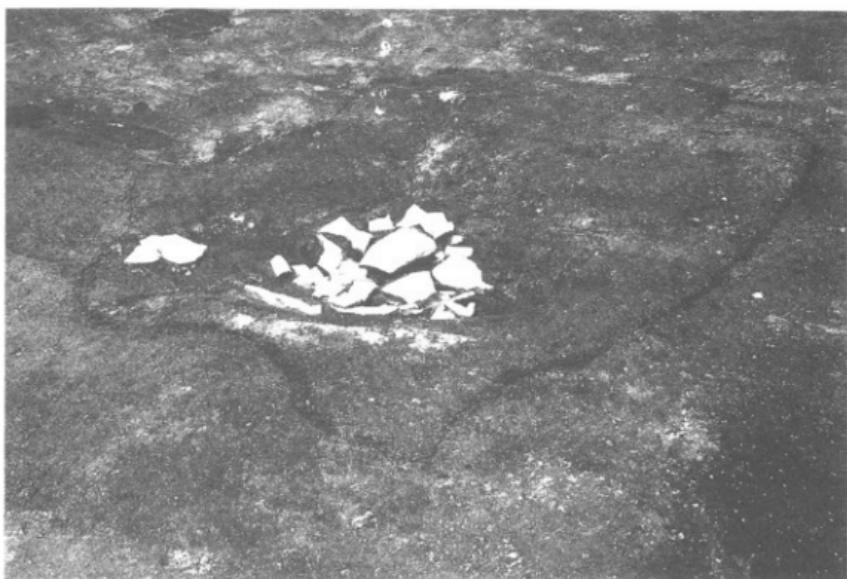
1 SP169 (西から) 2 SP843 (西から) 3 SP322 (西から) 4 SP419 (西から)  
5 SP420 (西から) 6 SP427 (西から) 7 SP457 (西から) 8 SP463 (西から)

図版一一 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(七)

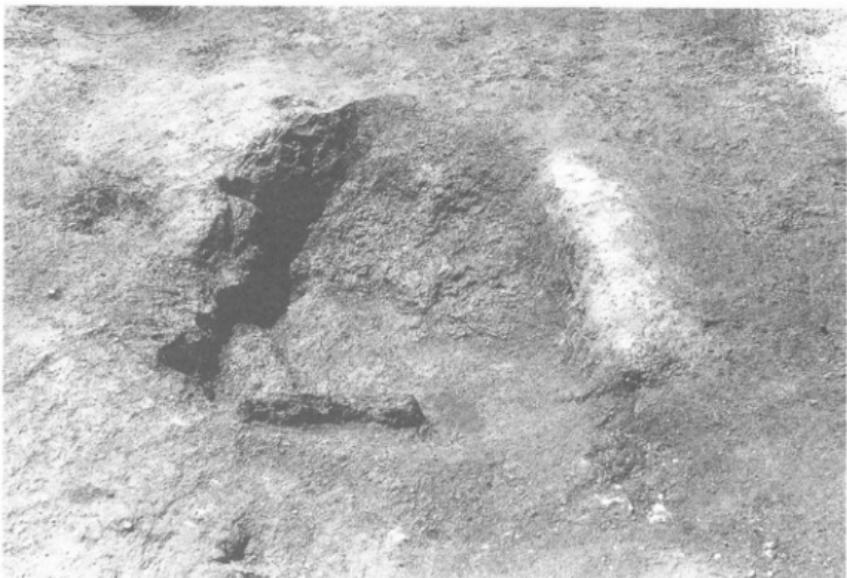


1 SP504 (西から) 2 SP505 (西から) 3 SP511 (西から) 4 SP604 (西から)  
5 SP617 (西から) 6 SP618 (南から) 7 SP619 (西から) 8 SP640 (西から)

図版一二 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(八)

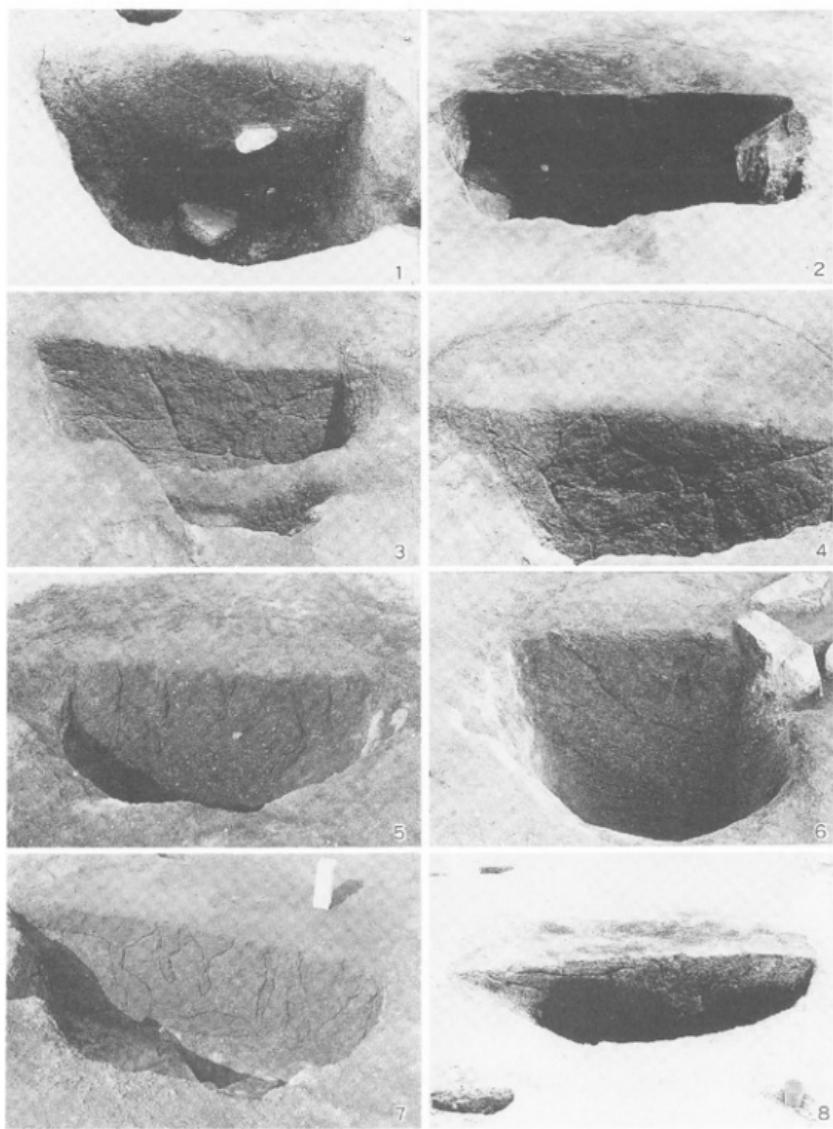


1 竈S X01 検出写真（西から）



2 竈S X01 発掘後写真（北から）

図版一三 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(九)

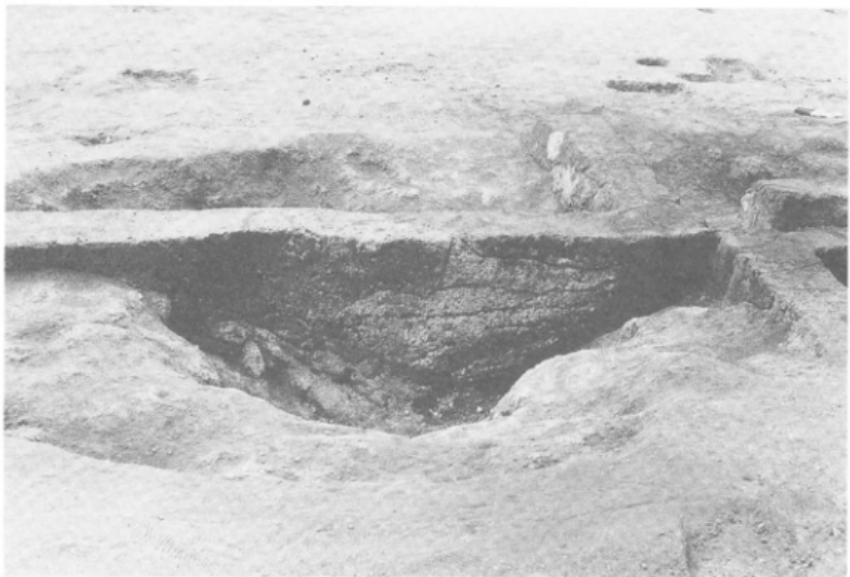


1 SE01 (西から) 2 SE02 (西から) 3 SE03 (西から) 4 SE06 (西から)  
5 SE07 (西から) 6 SE08 (北から) 7 SE09 (西から) 8 SE10 (西から)

図版一四 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(一〇)

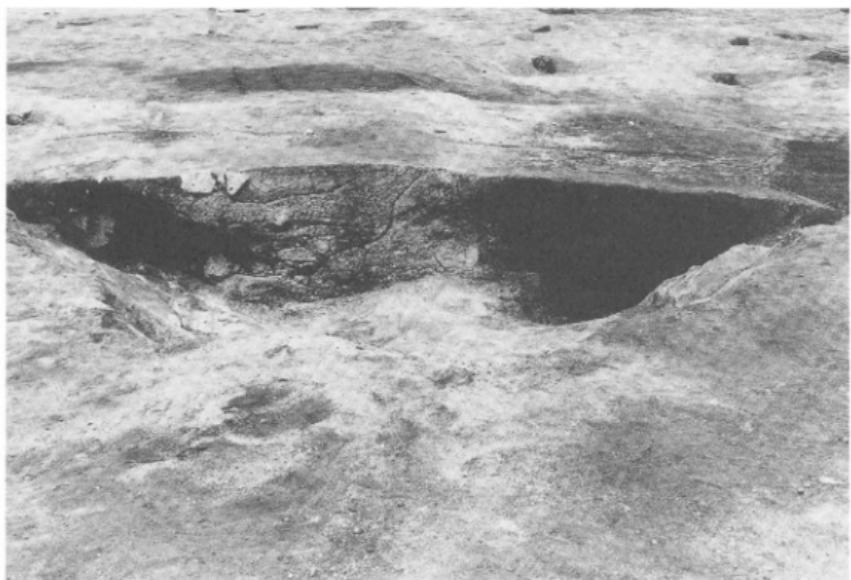


1 SK02 半截断面写真（南西から）

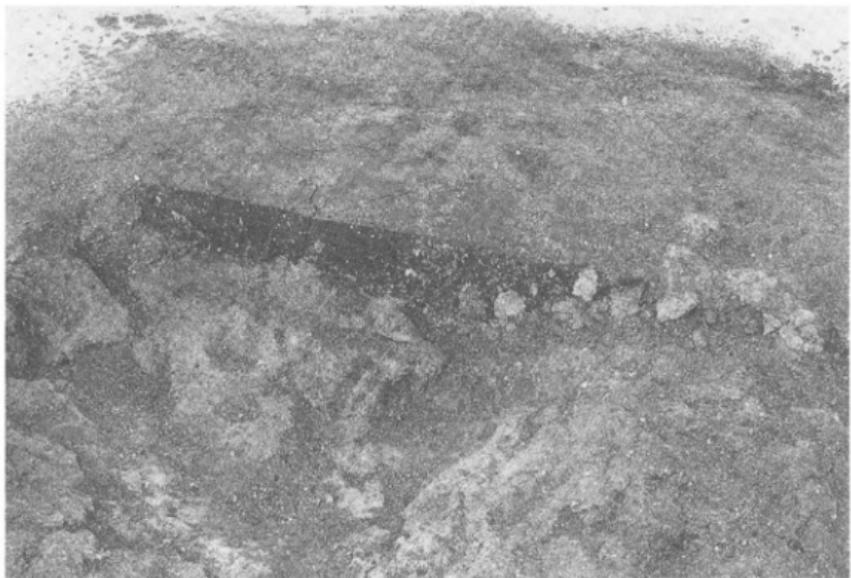


2 SK24 半截断面写真（南から）

圖版一五 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構（一一）

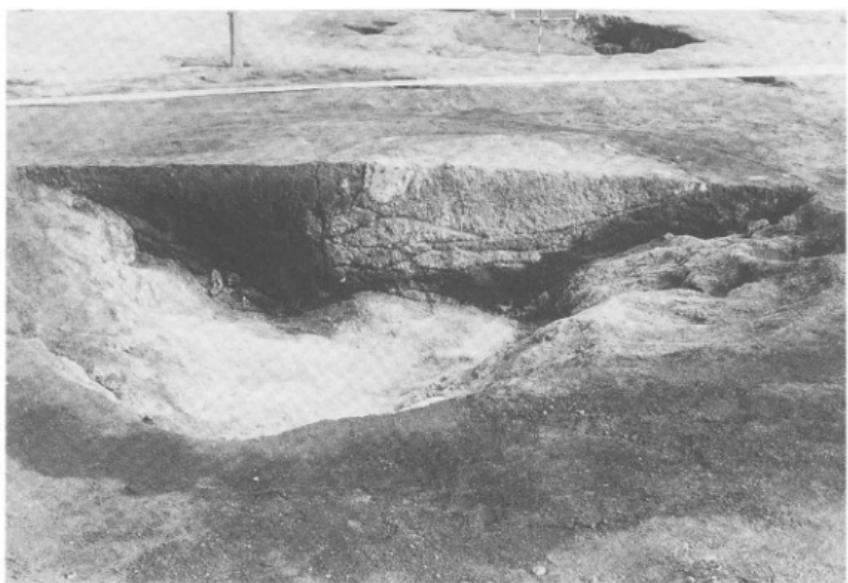


1 SK59・60 半裁断面写真（南から）



2 SK38 半裁断面写真（西から）

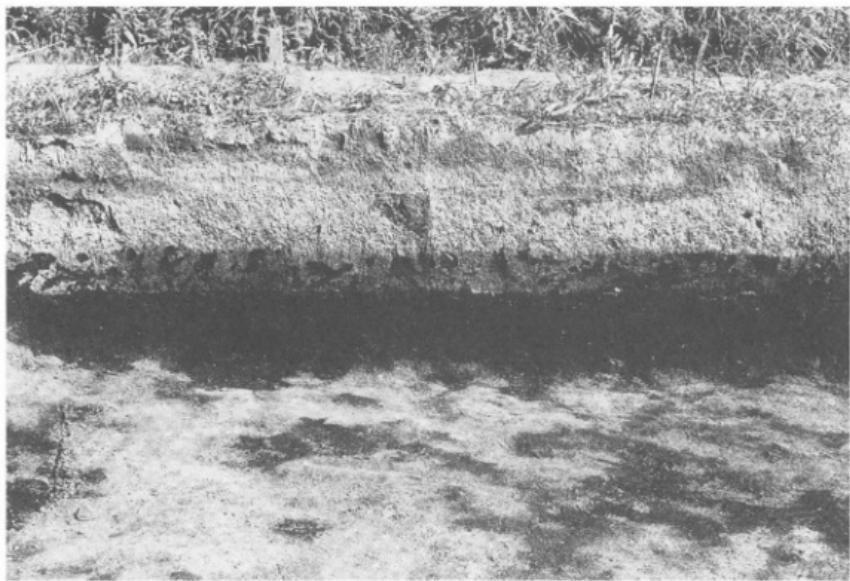
図版一六 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(一一)



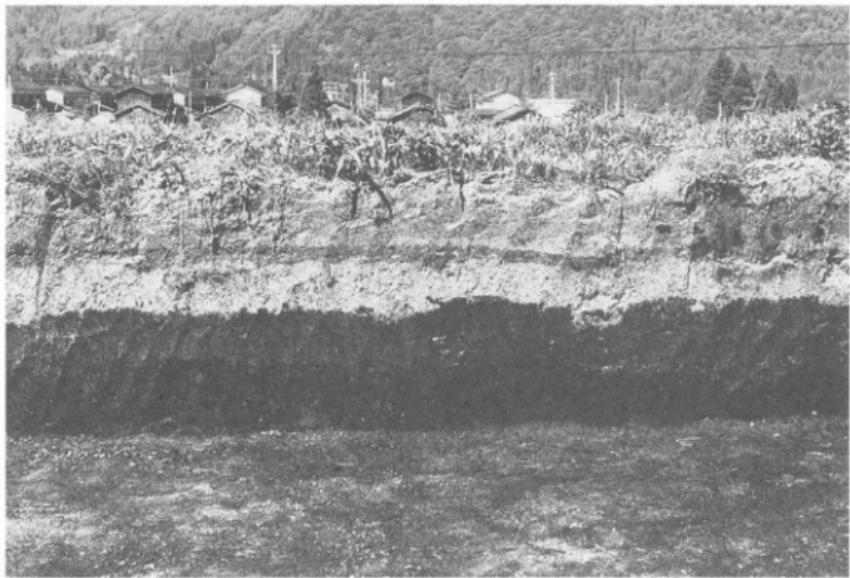
1 SK25 半截断面写真（北から）



2 SK77 完掘状態写真（東から）



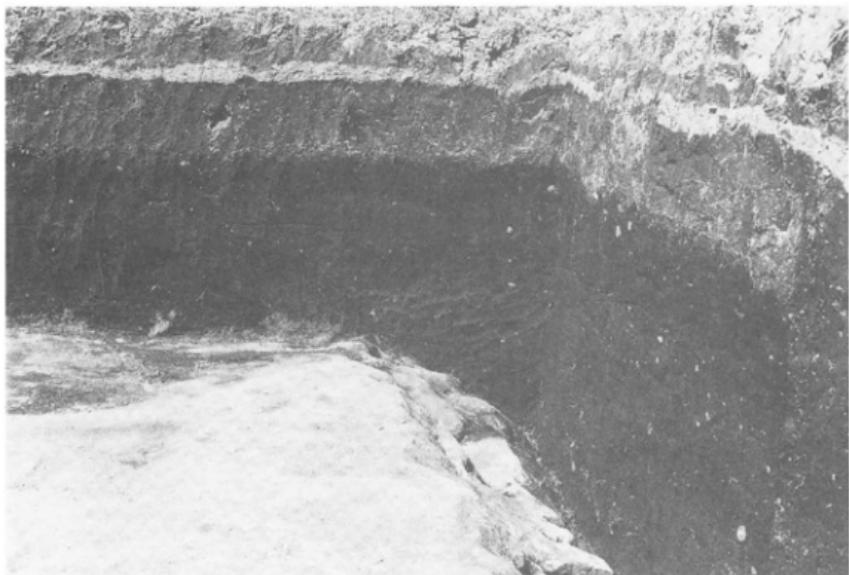
1 門前地区南壁層位写真（東寄り、北から）



2 門前地区西壁層位写真（南寄り、東から）



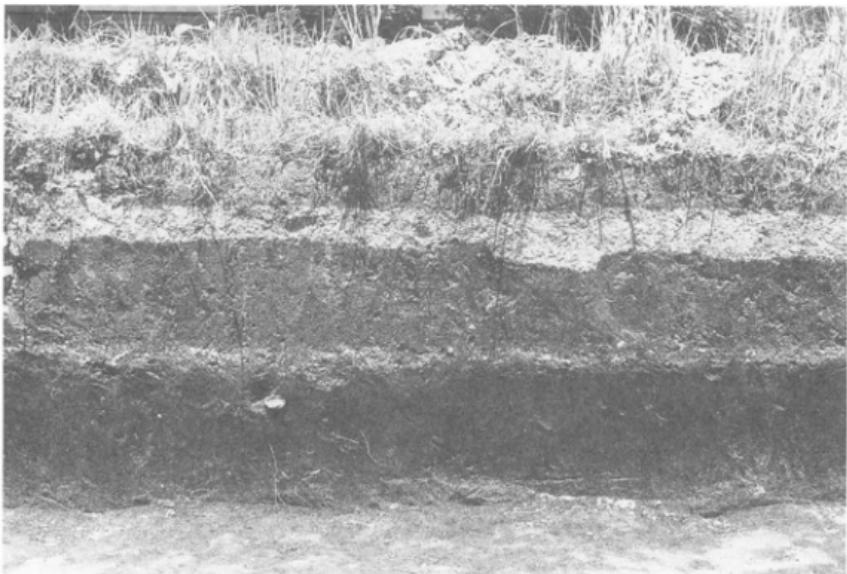
1 門前地区西壁層位写真（中央部、東から）



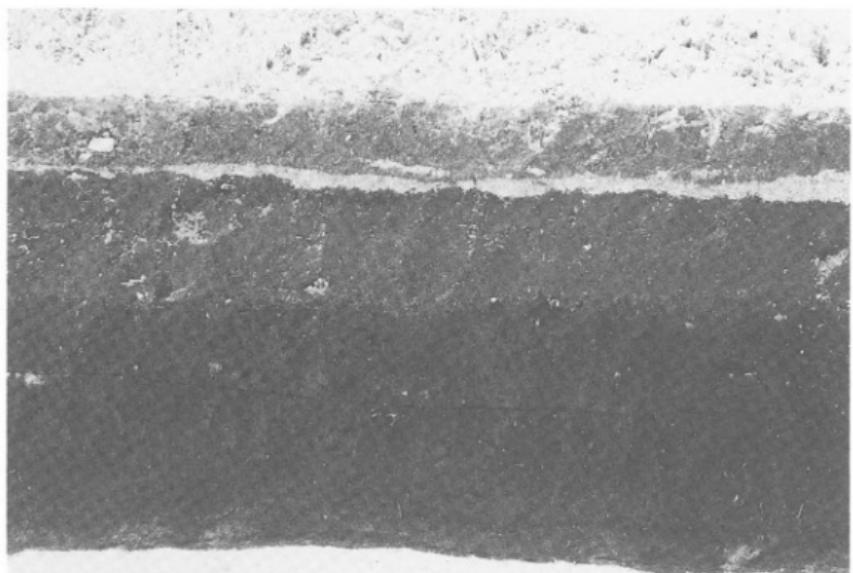
2 門前地区西壁層位写真（北寄り、東から）



1 門前地区北壁層位写真（西寄り、南から）



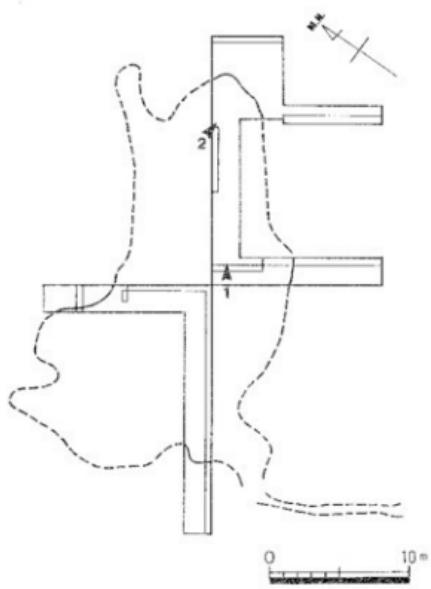
2 門前地区北壁層位写真（東寄り、南から）



1 門前地区西壁層位写真（北寄り、東から）



2 門前地区西壁層位写真（南寄り、東から）



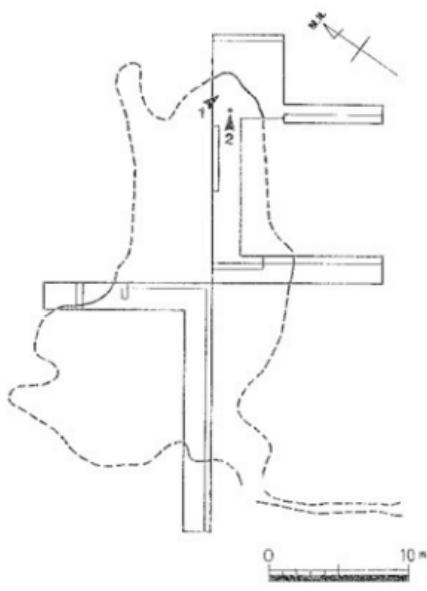
図版二一 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(一七)



1 園池地区E区全景写真（西から）



2 園池地区E区濠口写真（西から）

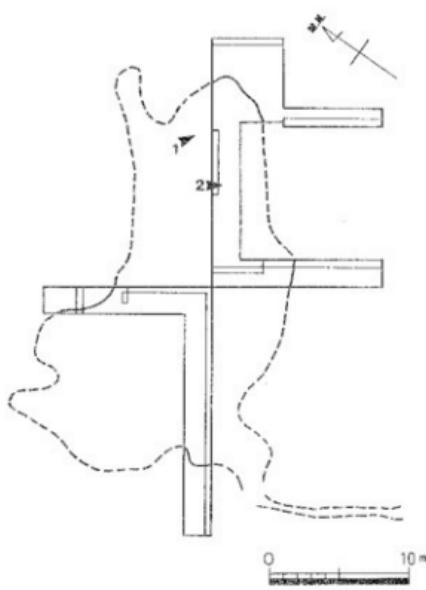




1 圏池地区E区汀線写真（北西から）



2 圏池地区E区汀線羽口出土状態写真（西から）

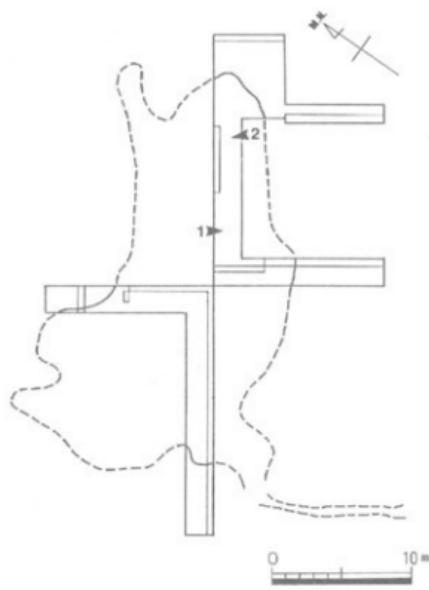


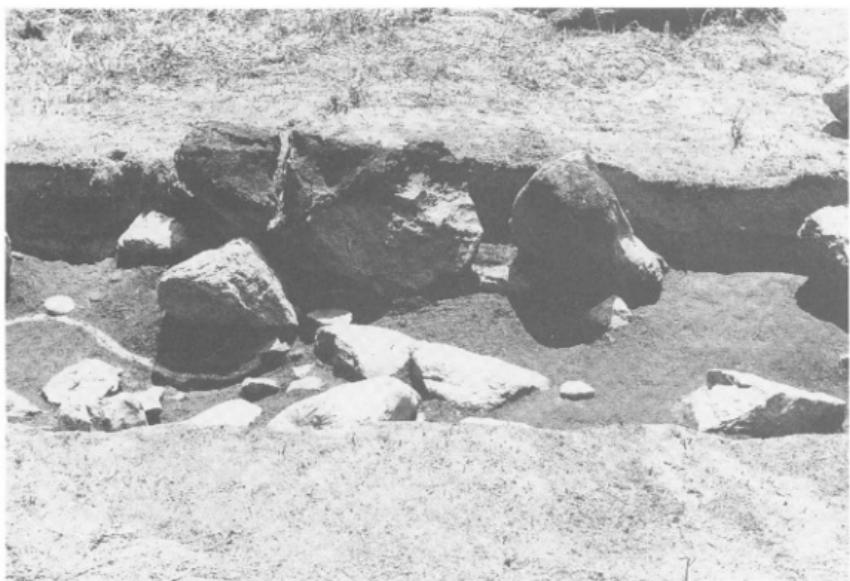


1 園池地区E区景石写真（東寄り、北から）

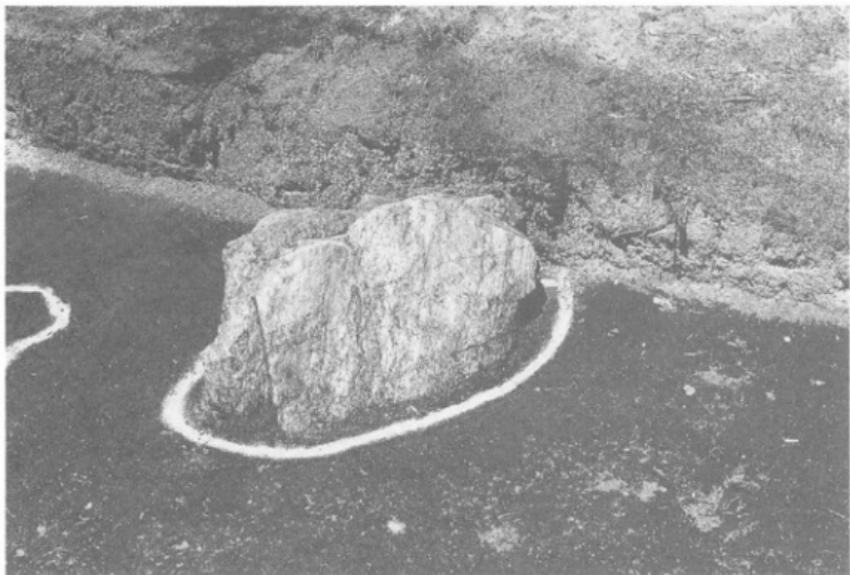


2 園池地区E区景石写真（中央部、北から）

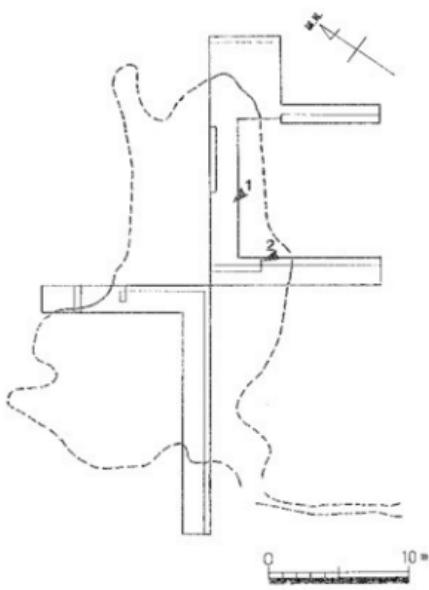




1 園池地区E区景石写真（西寄り、北から）



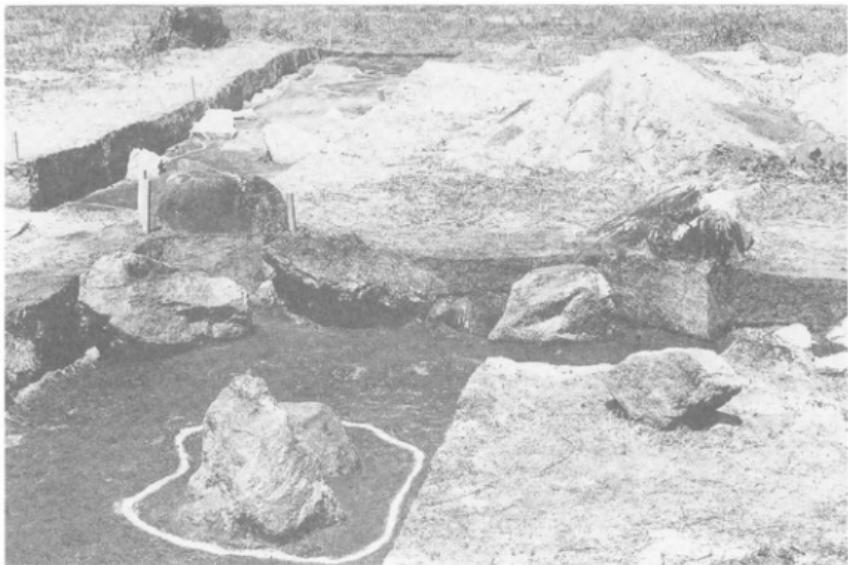
2 園池地区E区景石写真（東寄り、南から）



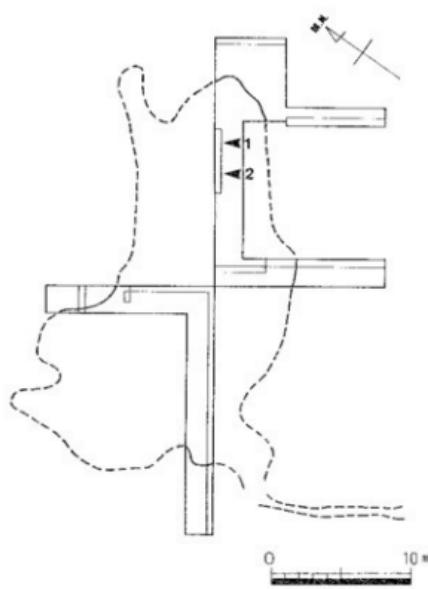
0 10

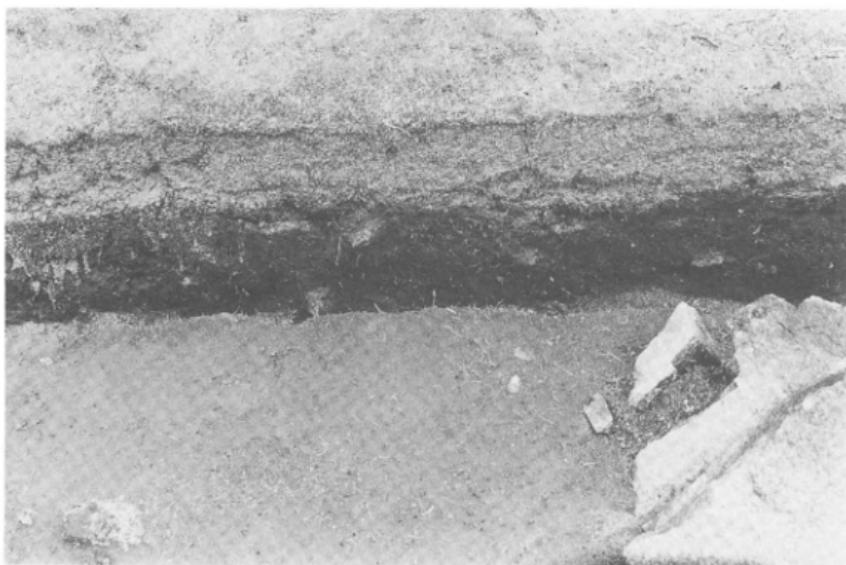


1 園池地区E区景石写真（中央部、南から）

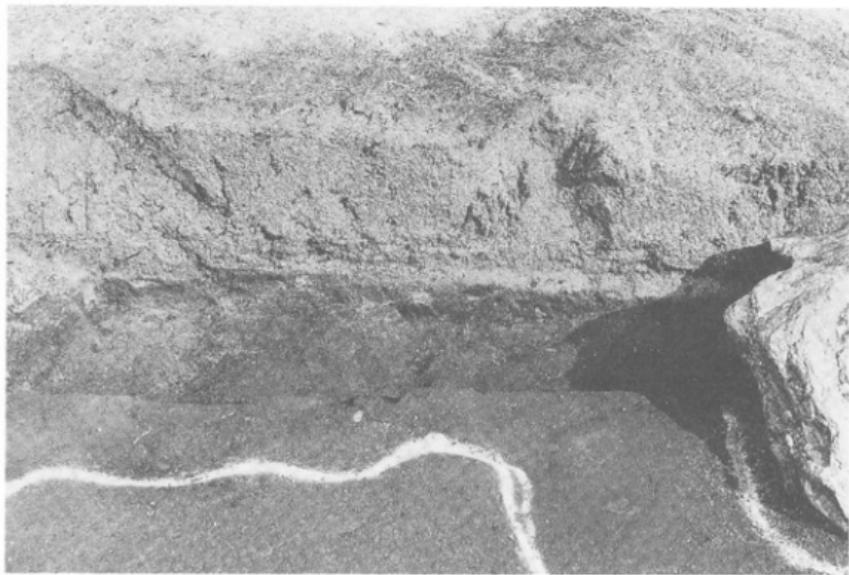


2 園池地区E区景石写真（西寄り、南から）

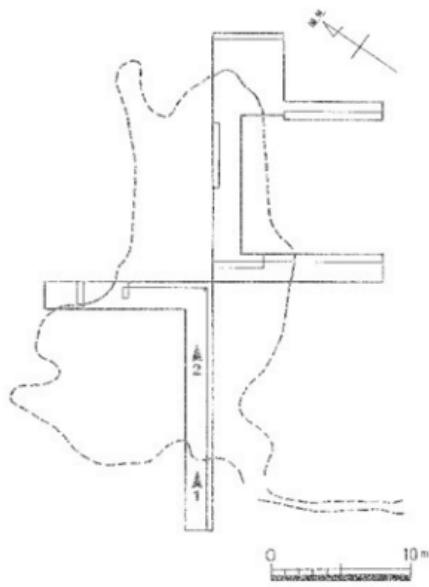




1 園池地区 E 区 - 6 T 北壁層位写真（東寄り、南から）

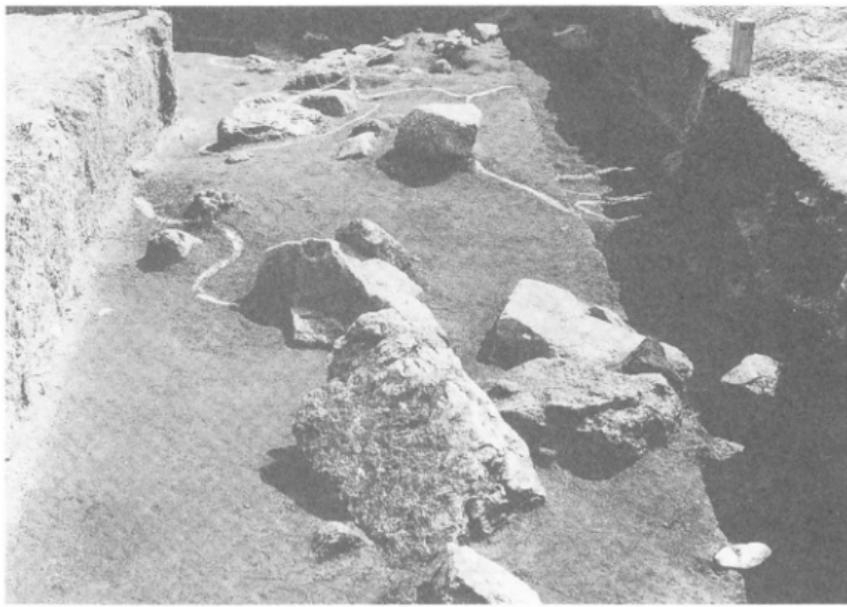


2 園池地区 E 区 - 6 T 北壁層位写真（西寄り、南から）

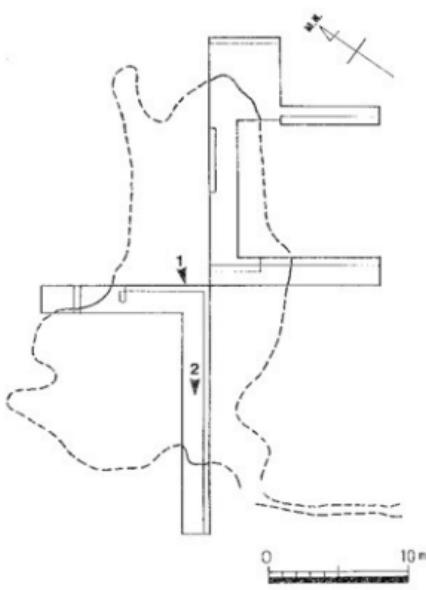


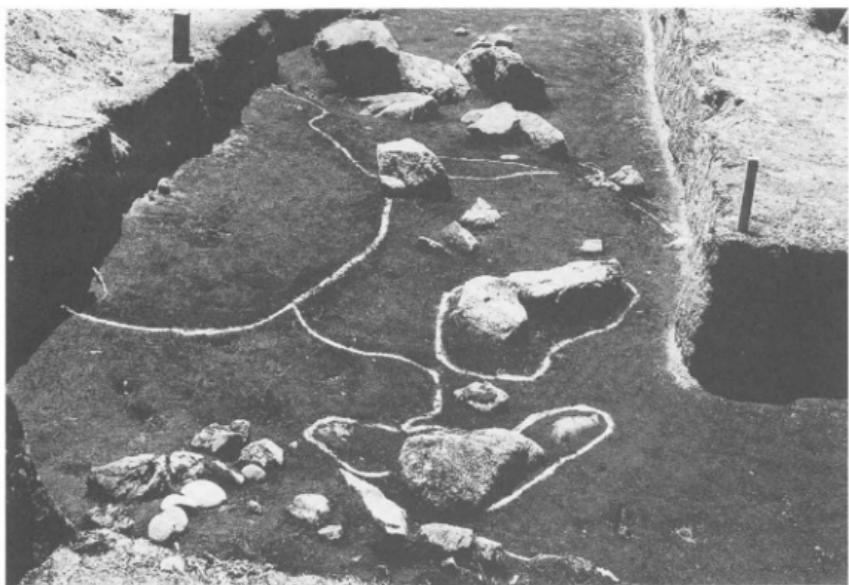


1 園池地区W区全景写真（西から）

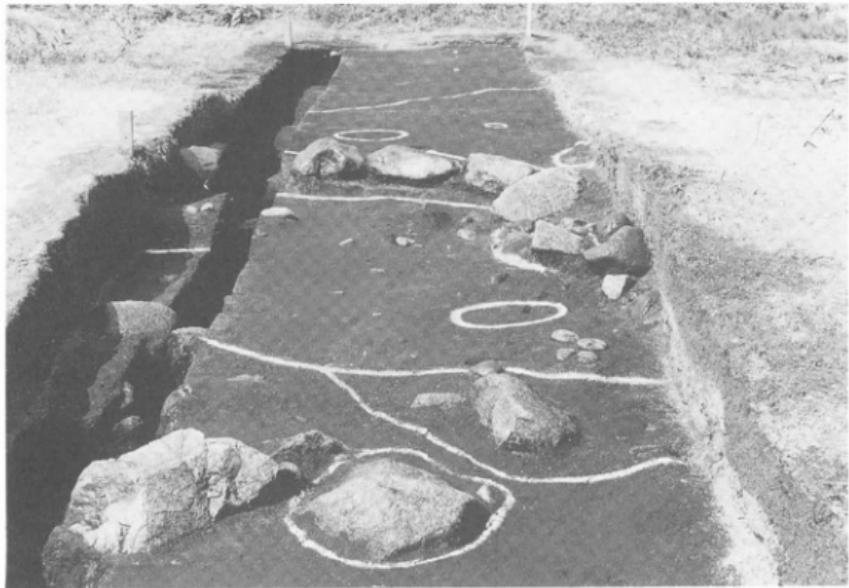


2 園池地区W区中島写真（西から）

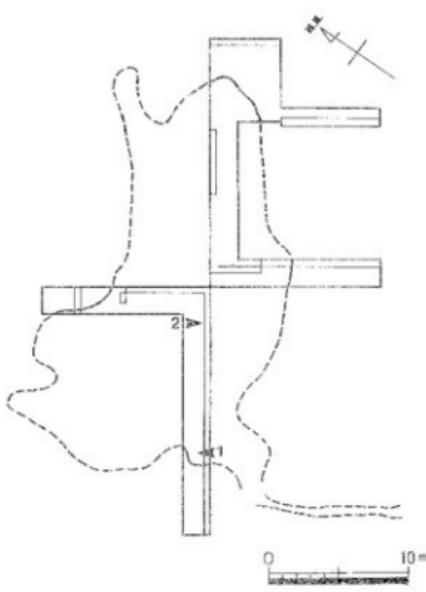




1 園池地区W区中島写真（東から）

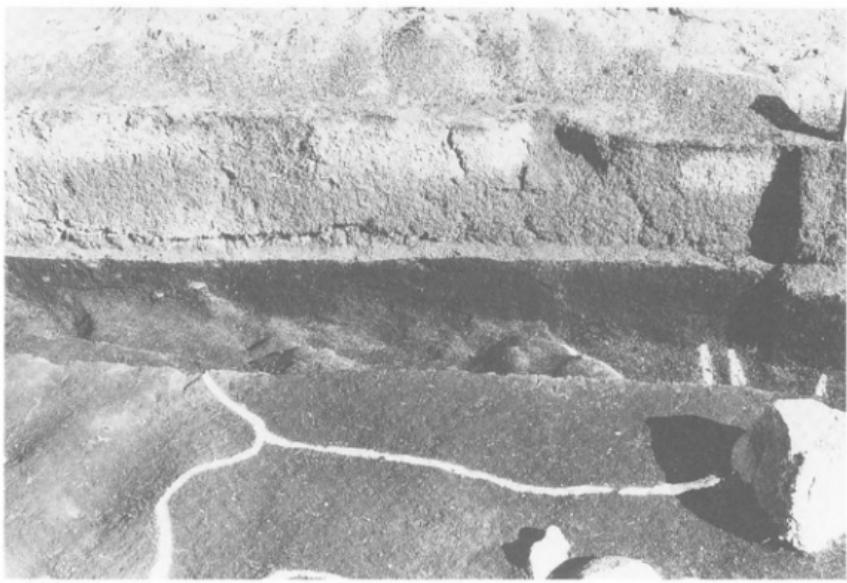


2 園池地区W区汀線写真（東から）

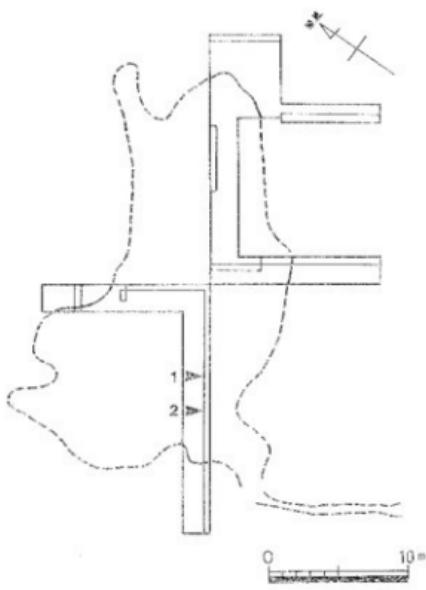


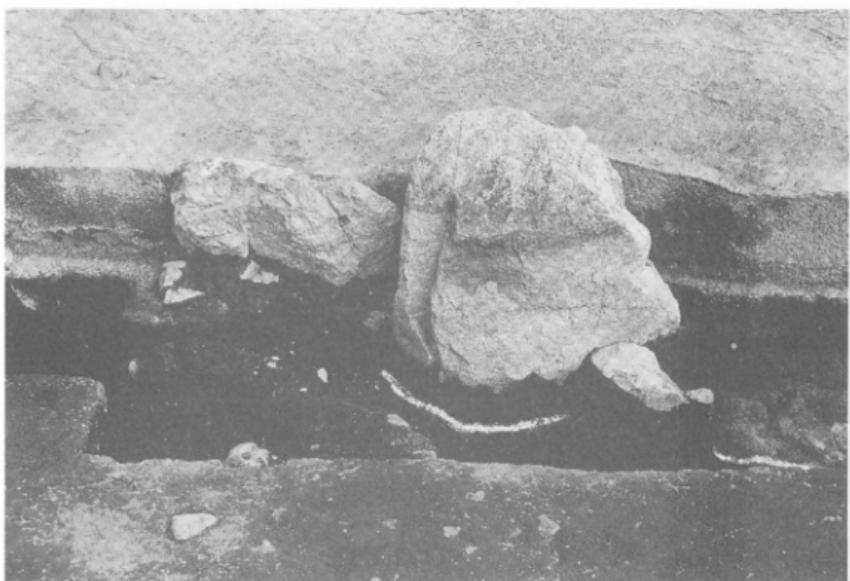


1 園池地区W区根石写真（南から）

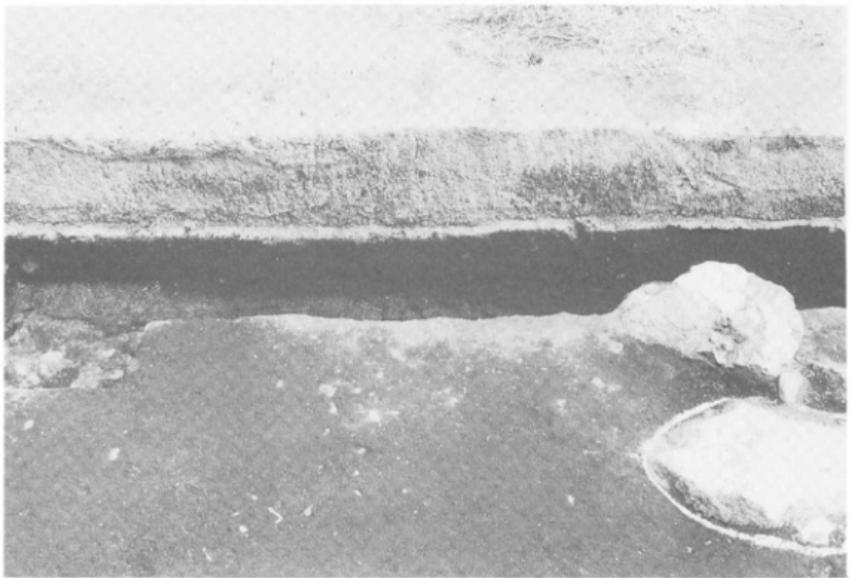


2 園池地区W区-1 T南壁層位写真（中島部分、北から）

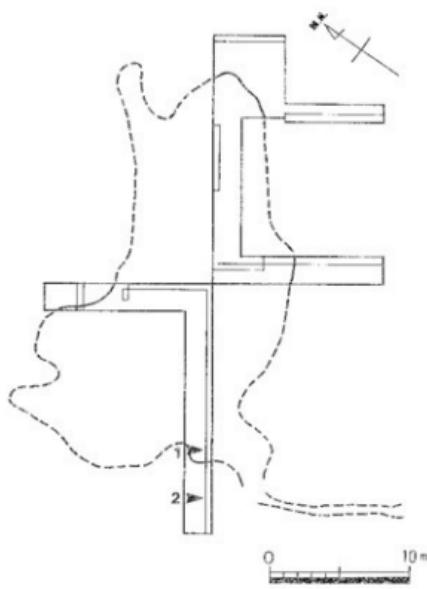




1 園池地区W区-1 T南壁層位写真（東寄り、北から）

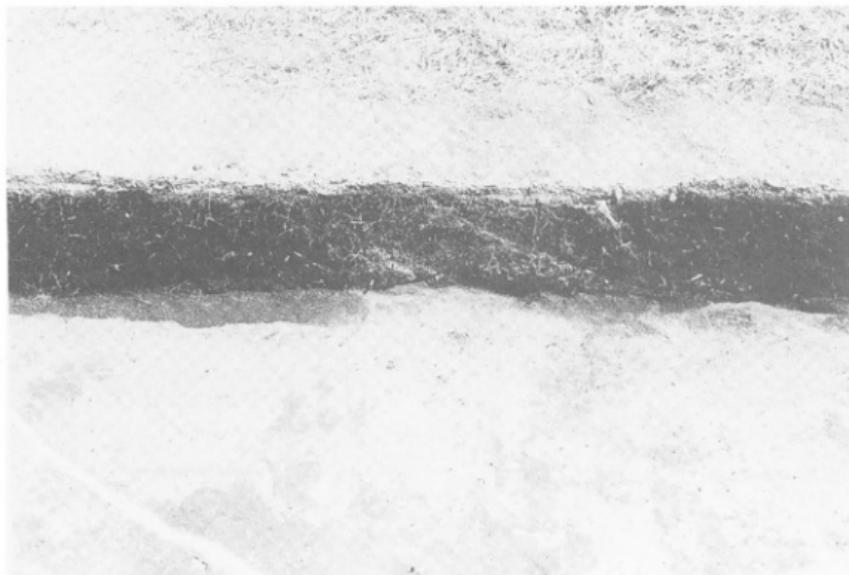


2 園池地区W区-1 T南壁層位写真（中央部、北から）

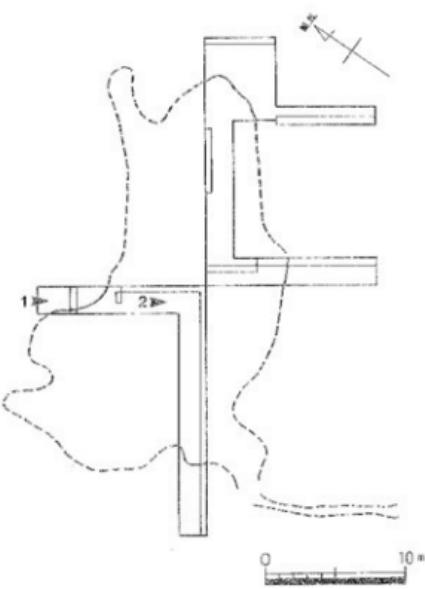




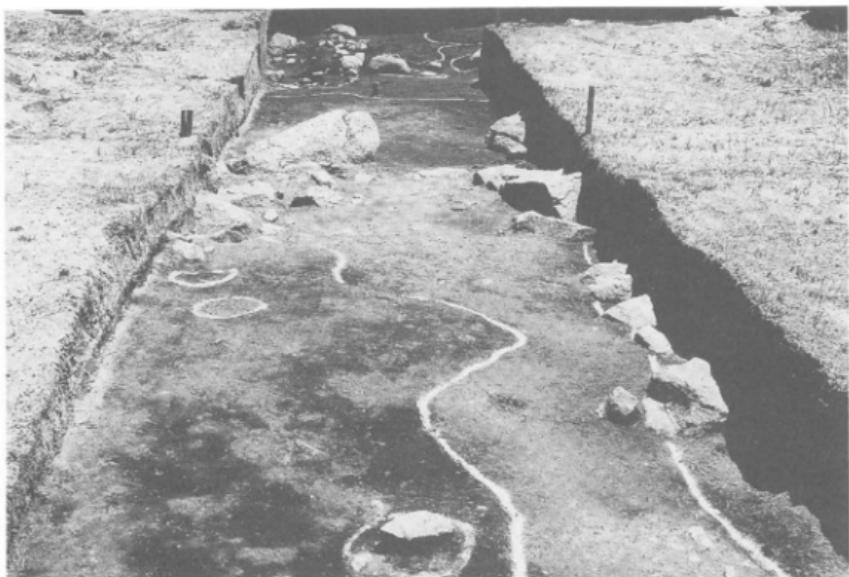
1 園池地区W区-1 T南壁層位写真（池肩部、北から）



2 園池地区W区-1 T南壁層位写真（西寄り、北から）



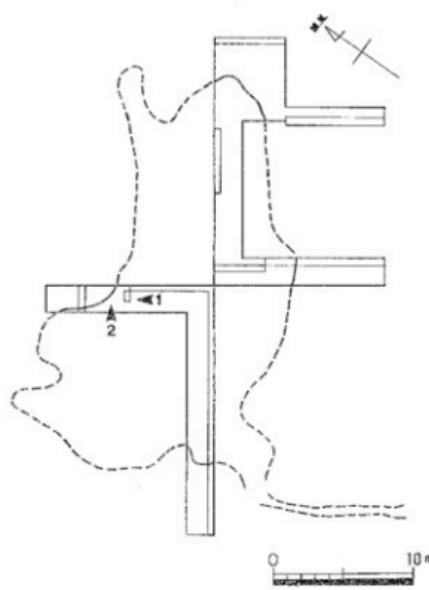
圖版三二 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(二八)



1 圈池地区N区全景写真（北から）



2 圈池地区N区中島写真（北から）



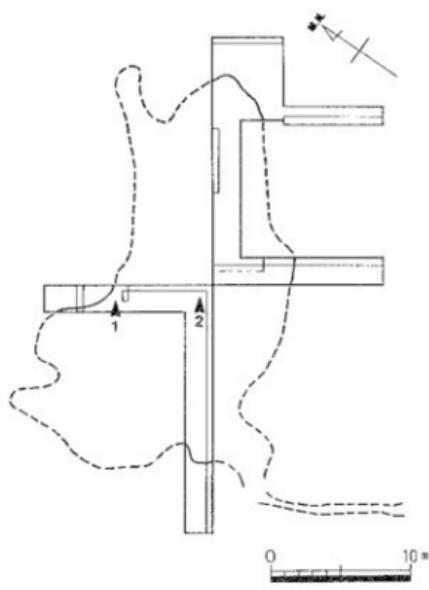
図版三三 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(一九)



1 圏池地区N区汀線写真（南から）

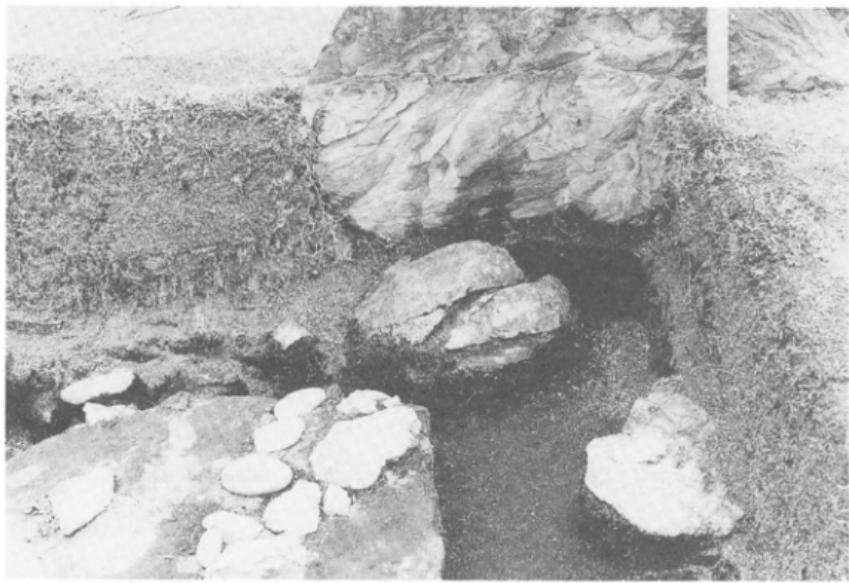


2 圏池地区N区根石写真（西から）

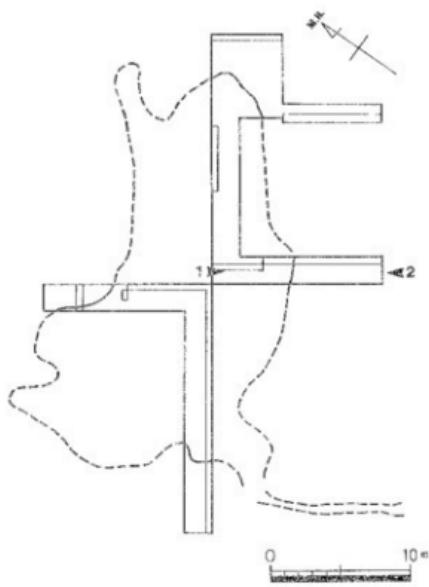




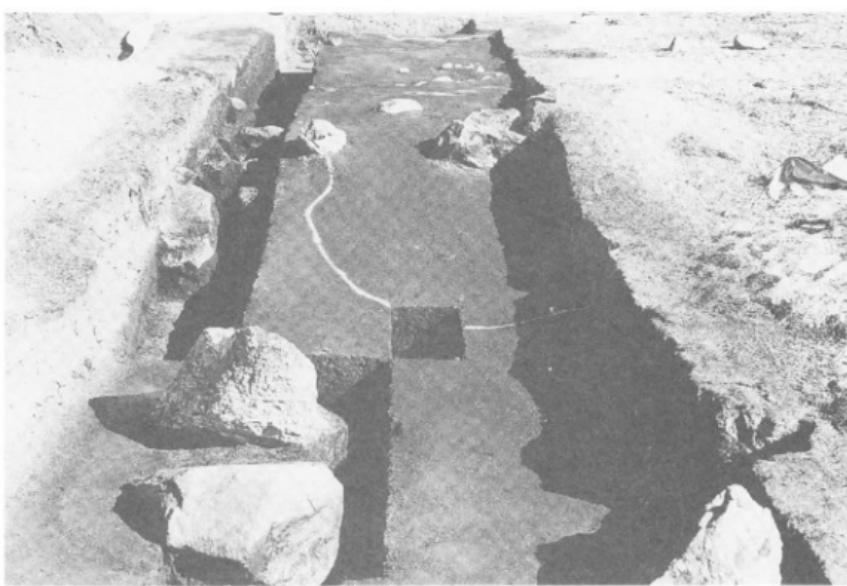
1 園池地区N区東壁層位写真（汀線、西から）



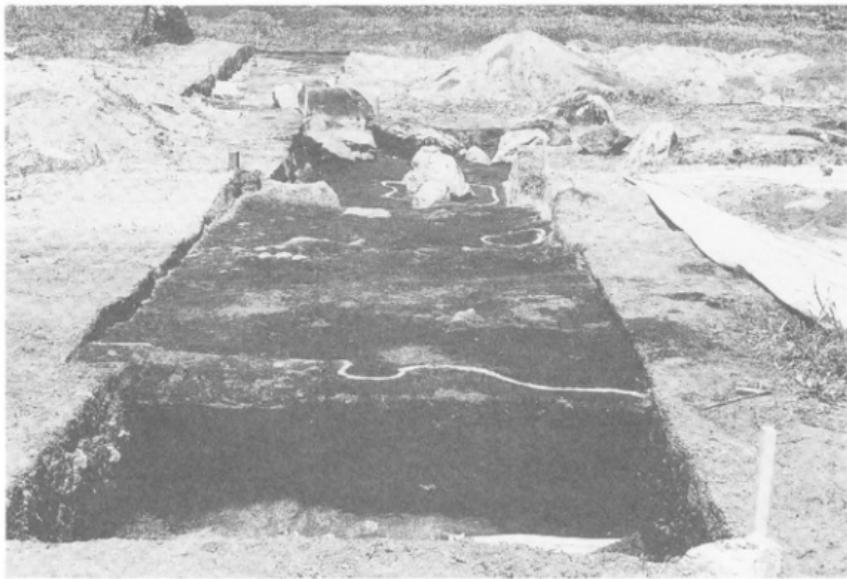
2 園池地区N区-2 T 東壁層位写真（南寄り、西から）



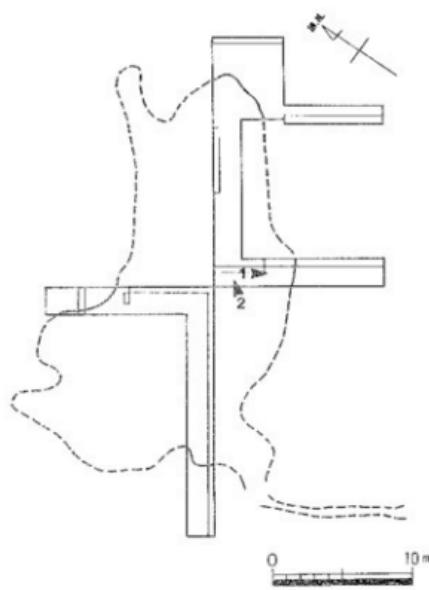
図版三五 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(三)



1 園池地区 S 区全景写真（北から）



2 園池地区 S 区全景写真（南から）

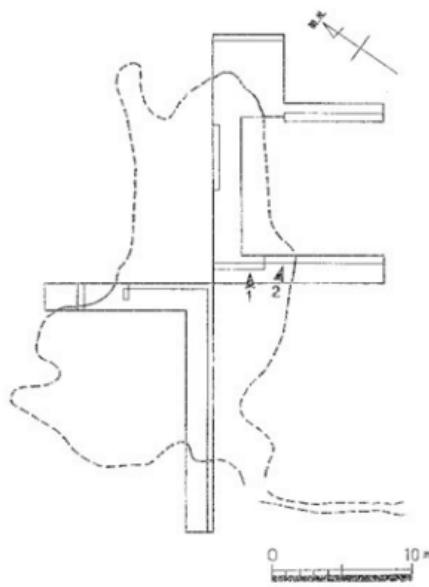




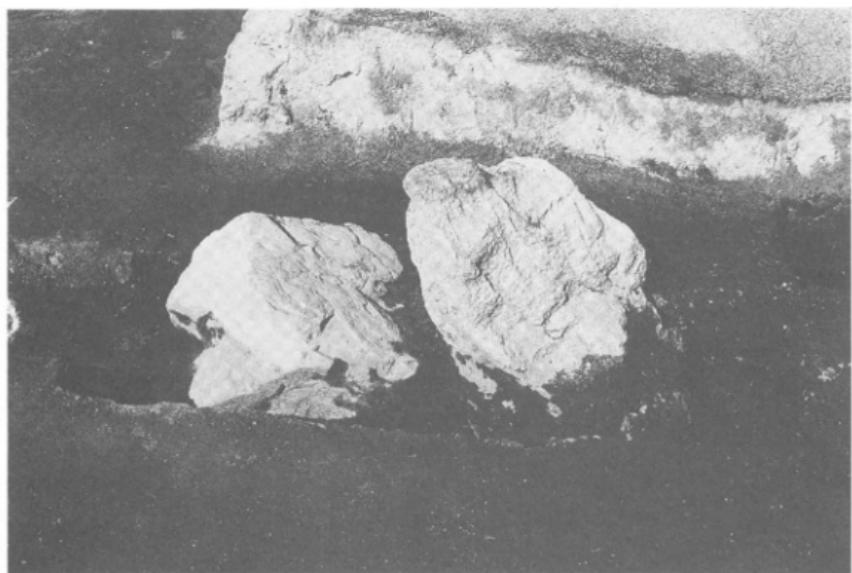
1 園池地区 S 区汀線写真（北から）



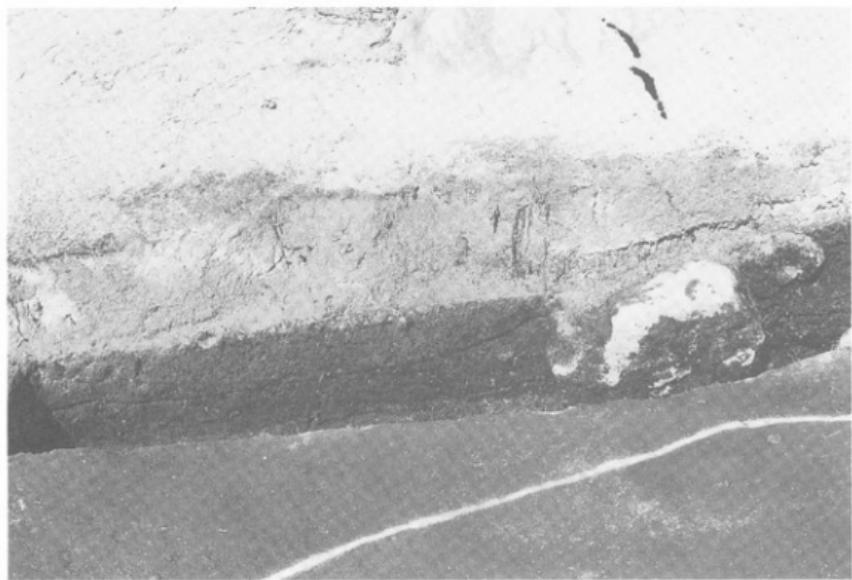
2 園池地区 S 区 - 4 T 東壁層位写真（北寄り、西から）



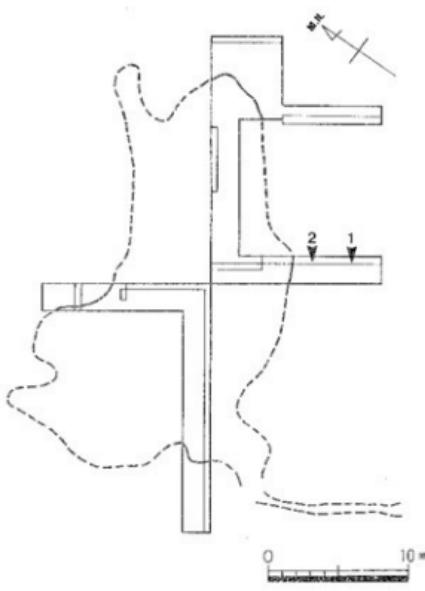
図版三七 江馬氏下館跡一九九五年度調査地区遺構(一一一)



1 園池地区 S 区 - 4 T 東壁層位・景石撮影写真（中央部、西から）



2 園池地区 S 区 - 5 T 東壁層位写真（汀線、西から）

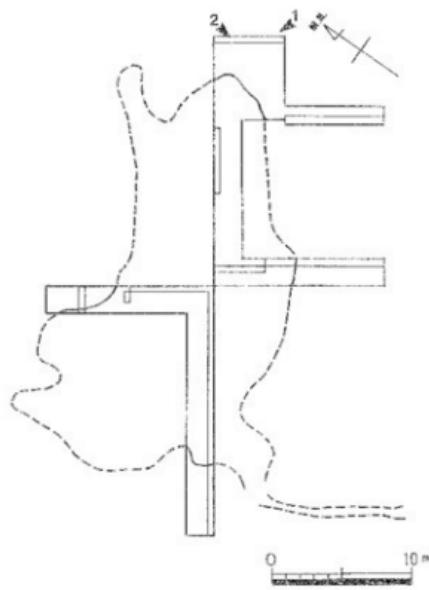




1 園池地区 S区 - 5 T 西壁層位写真（土壘南寄り部分、東から）

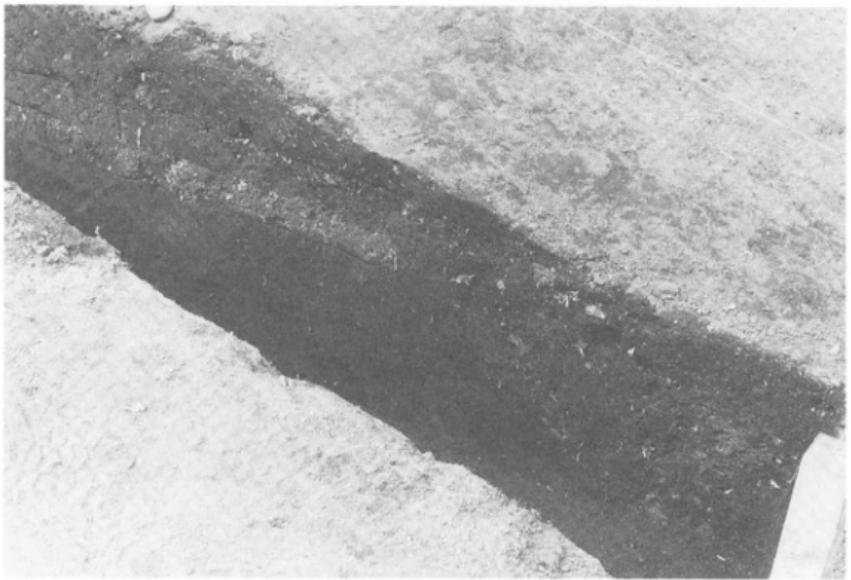


2 園池地区 S区 - 5 T 西壁層位写真（土壘北寄り部分、東から）

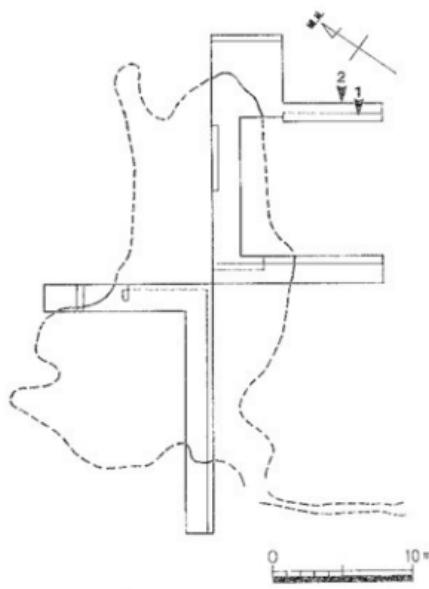


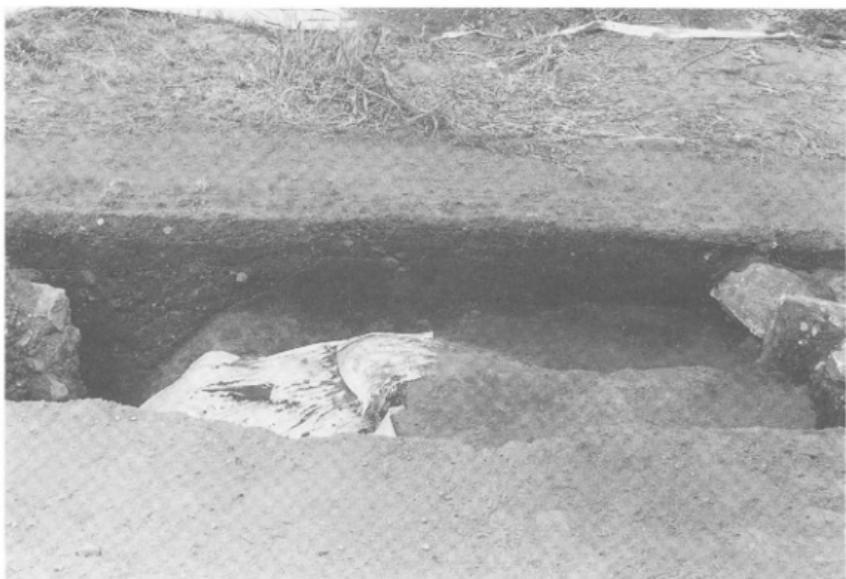


1 圈池地区擴張区-8 T西壁層位写真(東南から)



2 圈池地区擴張区-8 T西壁層位写真(東北から)

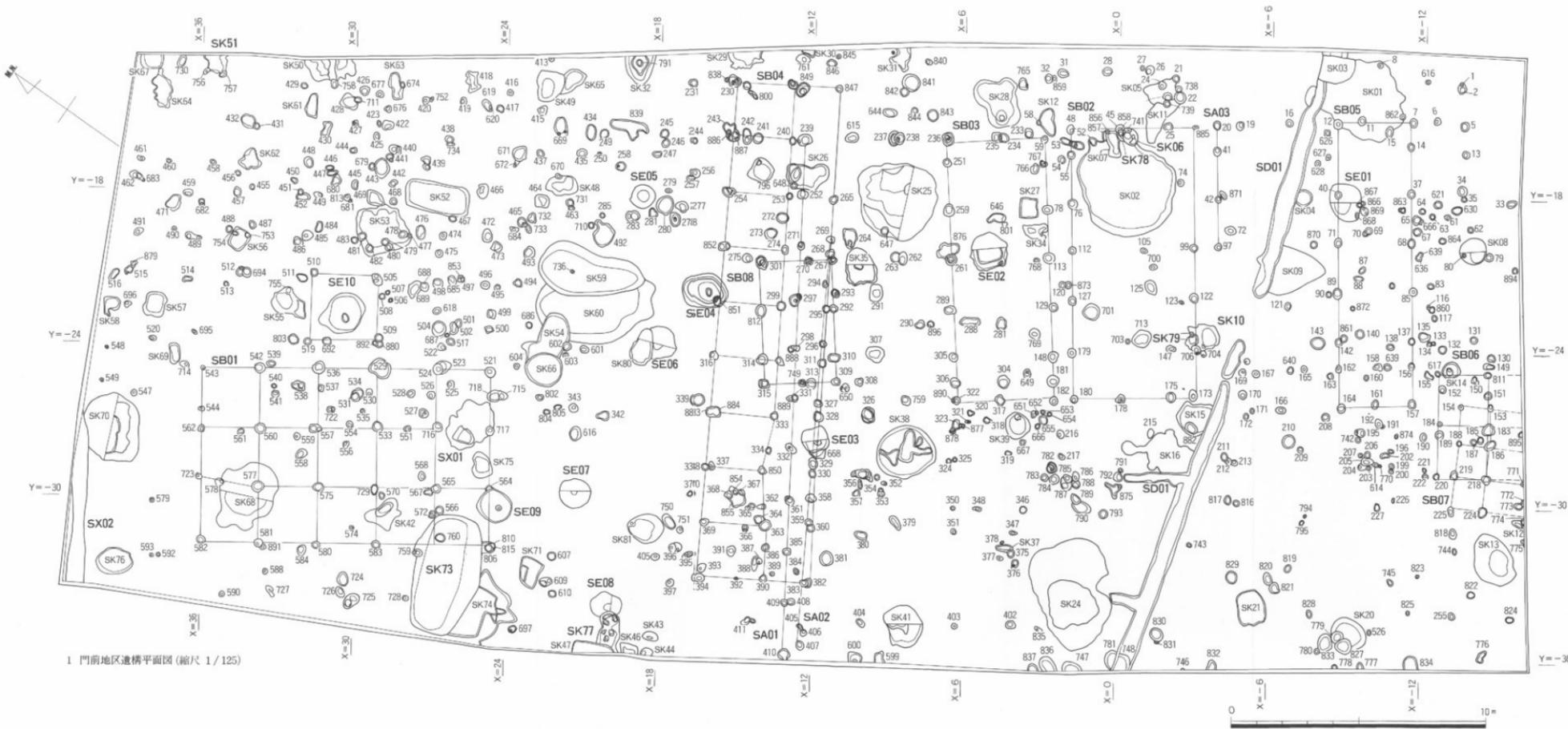


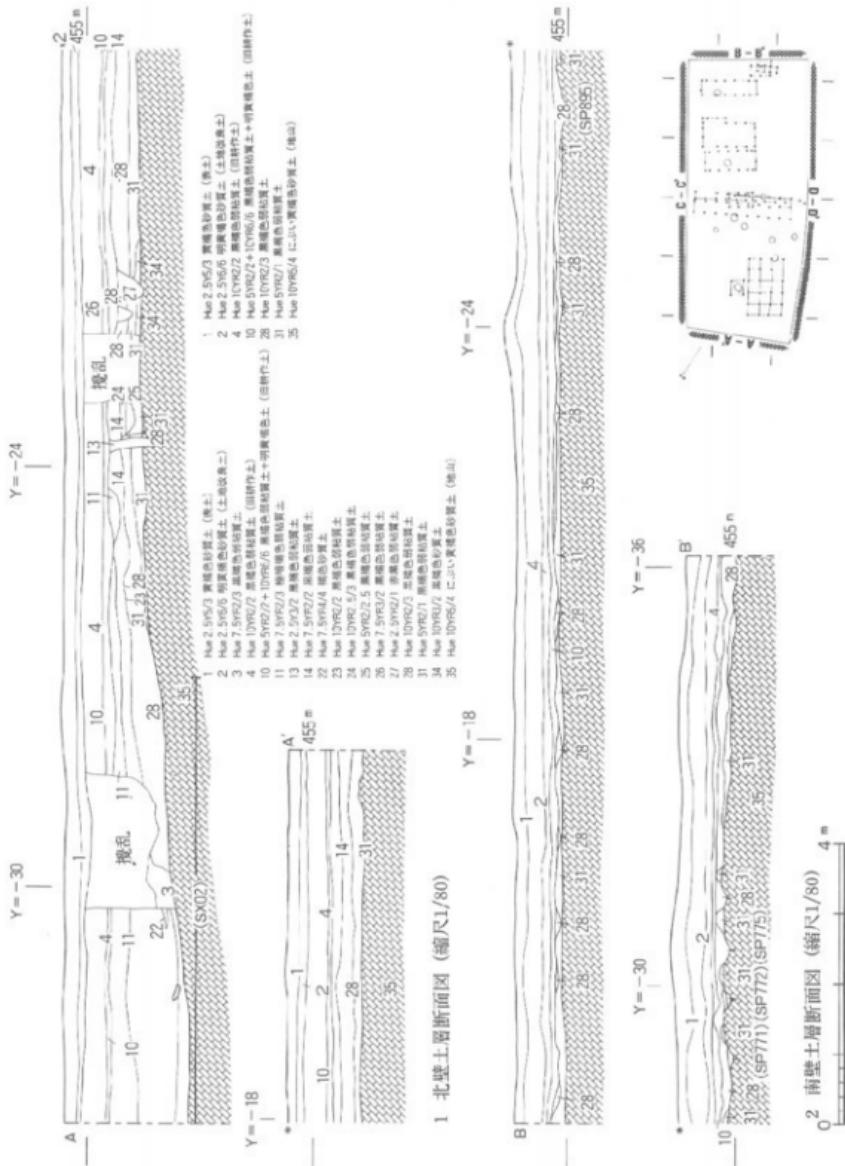


1 圈池地区拡張区-7 T西壁層位写真（東から）

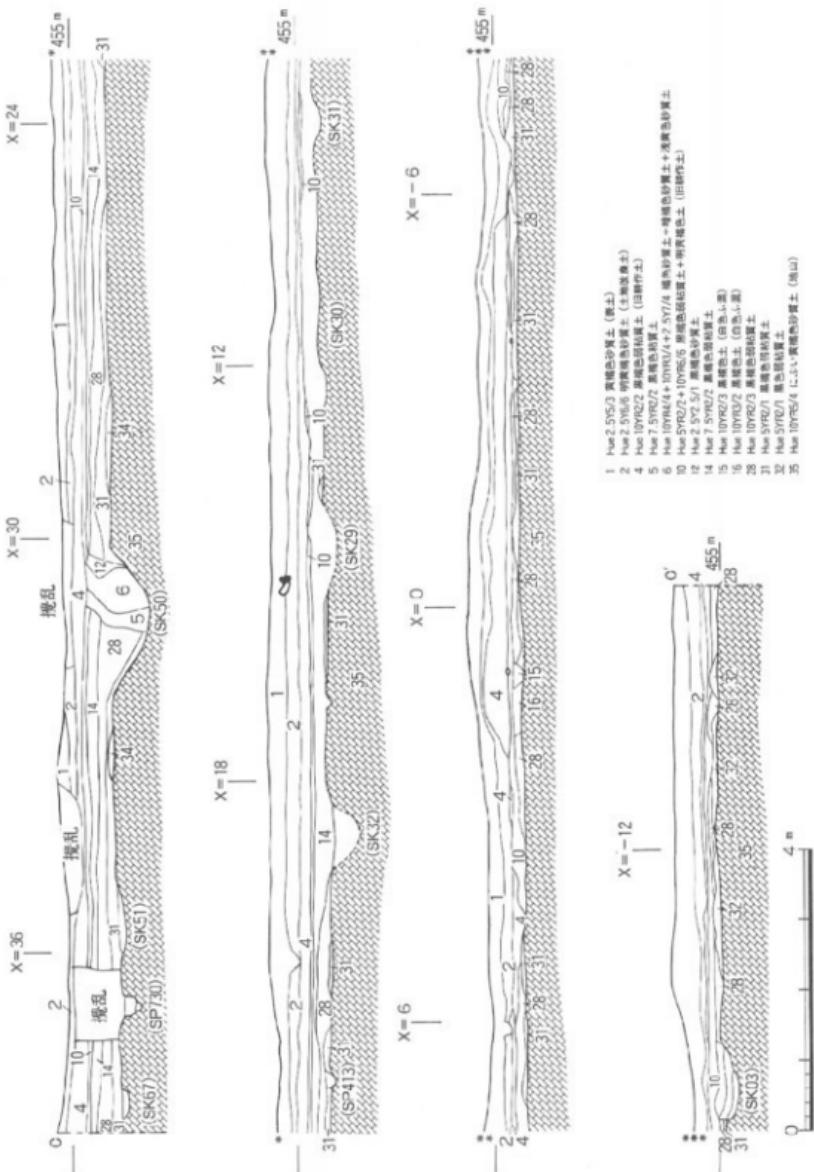


2 圈池地区拡張区石組写真（東から）





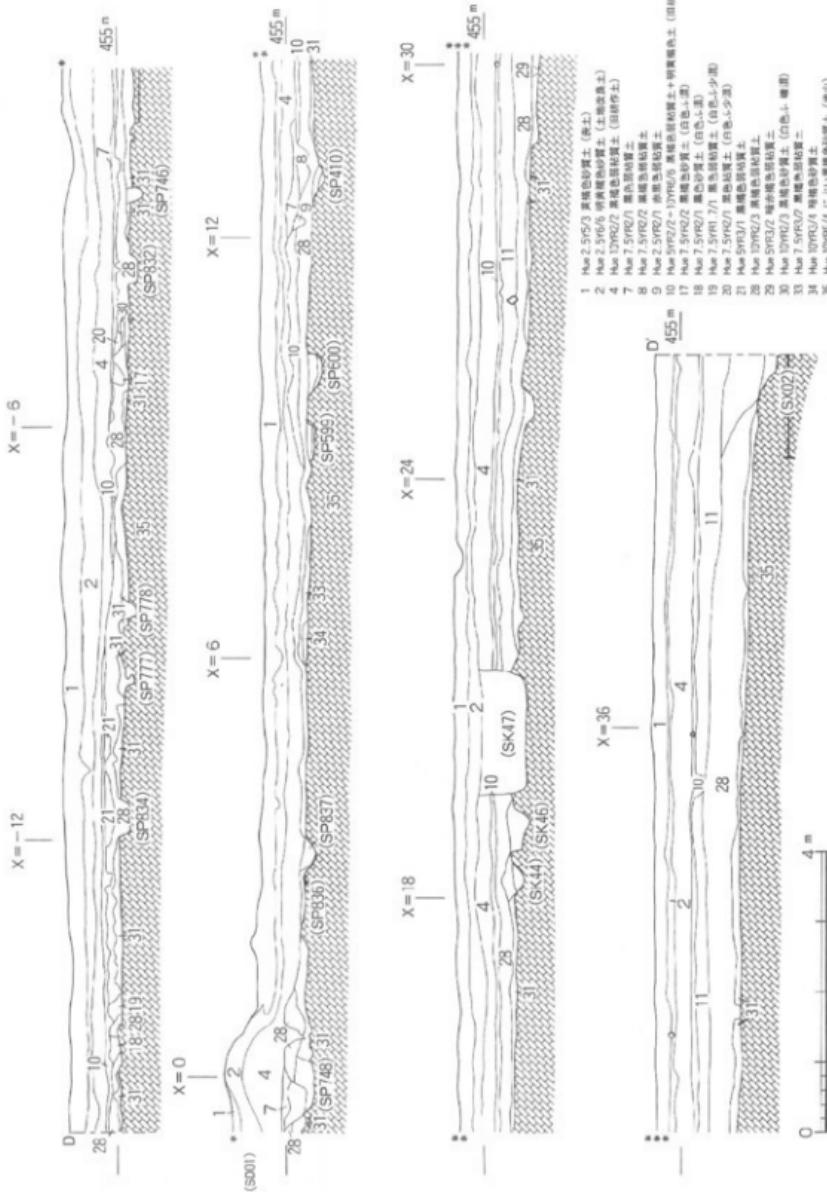
圖版四三 江馬氏下館跡一九九五年度調查門前地區遺構實測圖 (III)

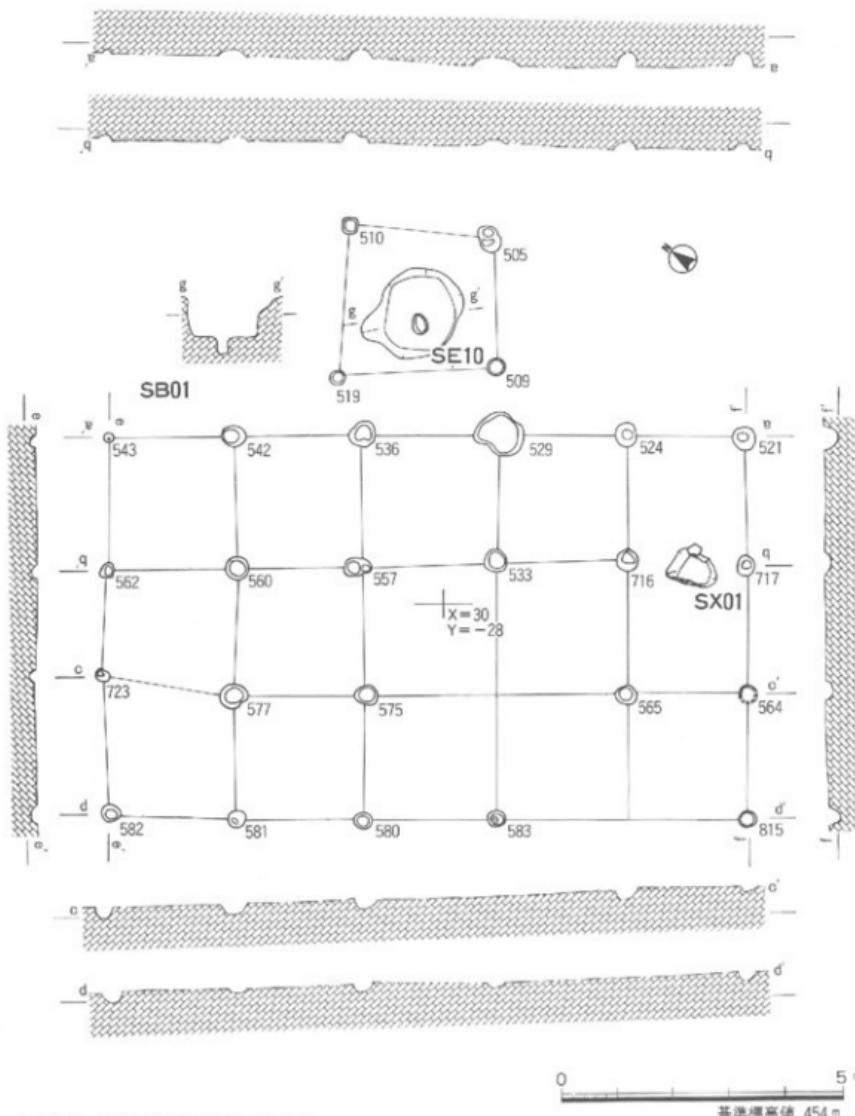


1 東壁土層斷面圖 (縮尺1/80)

図版四四 江馬氏下館跡一九九五年度調査門前地区遺構実測図(四)

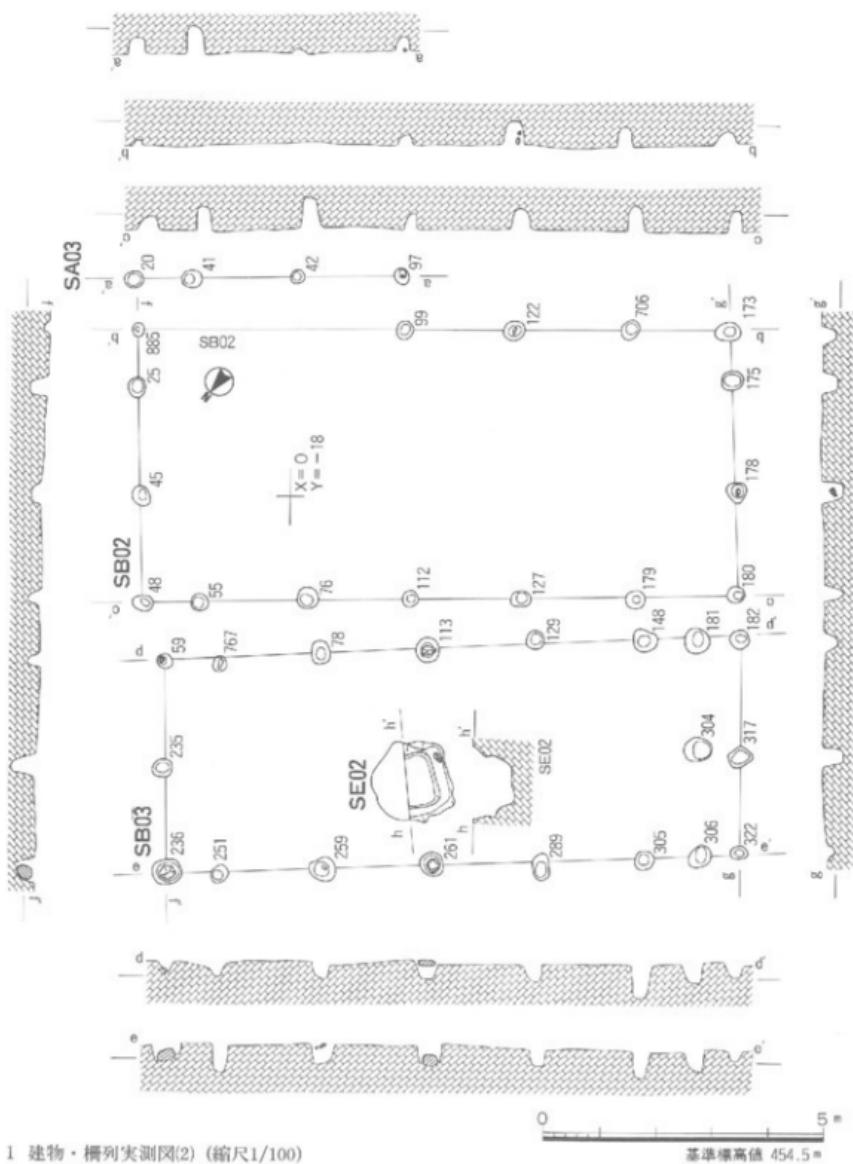
1 西壁土層断面図 (縮尺1/80)





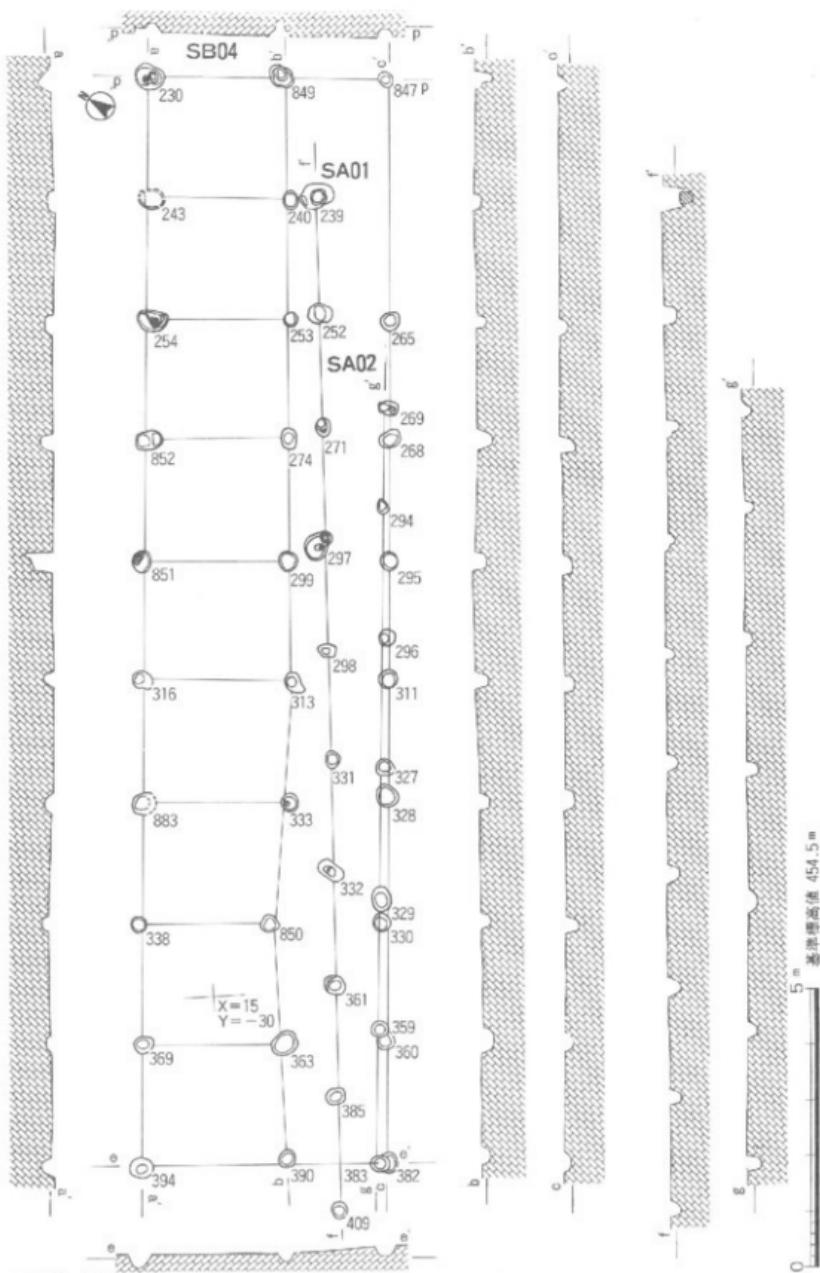
1 建物・柵列実測図(1) (縮尺1/100)

図版四六 江馬氏下館跡一九九五年度調査門前地区遺構実測図(六)

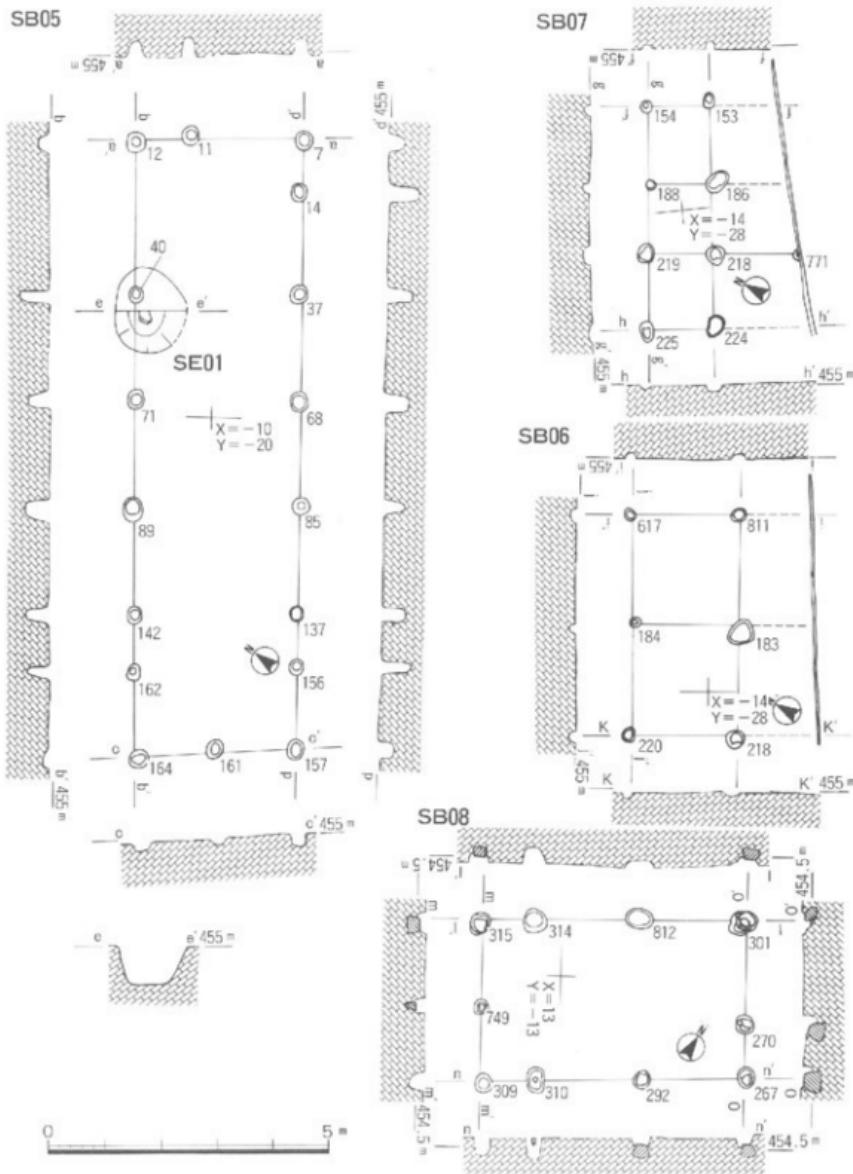


1 建物・構造実測図(2) (縮尺1/100)

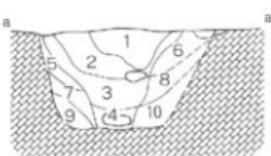
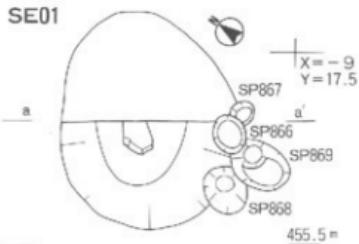
図版四七 江馬氏下館跡一九九五年度調査門前地区遺構実測図(七)



1 建物・構造実測図(3) (縮尺1/100)

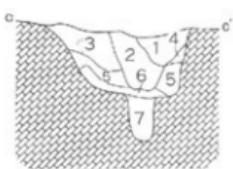
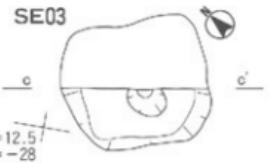
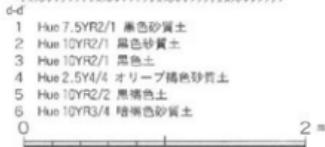
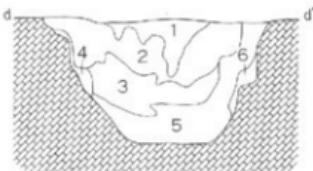
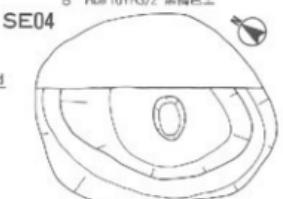
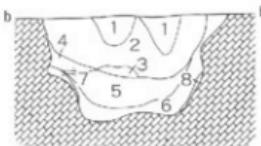


1 建物・構列実測図(4) (縮尺1/100)



b-b'

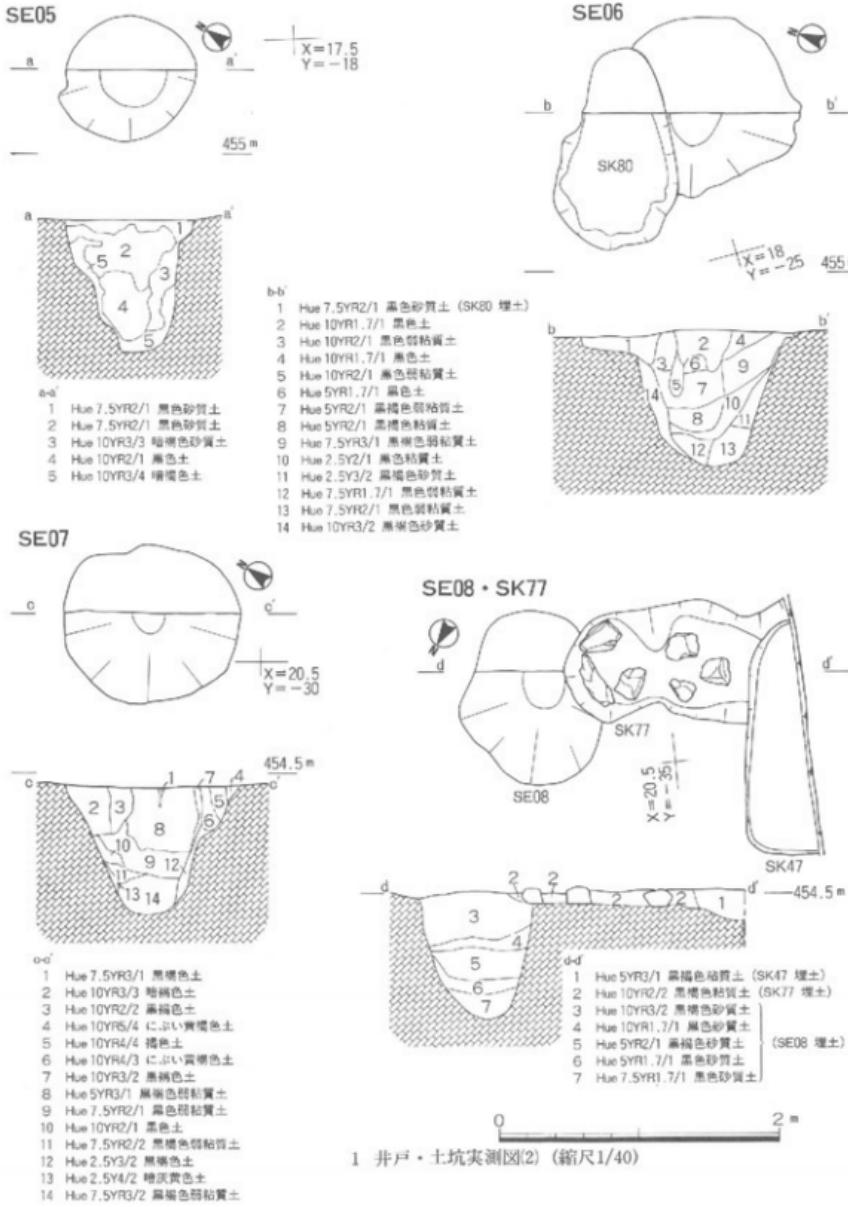
1 Hue 7.5YR2/1 黑色砂質土  
2 Hue 7.5YR3/1 黑褐色砂質土  
3 Hue 2.5Y3/2 黑褐色砂質土  
4 Hue 10YR2/1 黑色砂質土  
5 Hue 10YR3/3 暗褐色砂質土  
6 Hue 10YR3/2 暗褐色砂質土  
7 Hue 10YR2/3 黑褐色砂質土  
8 Hue 10YR2/2 黑褐色砂質土



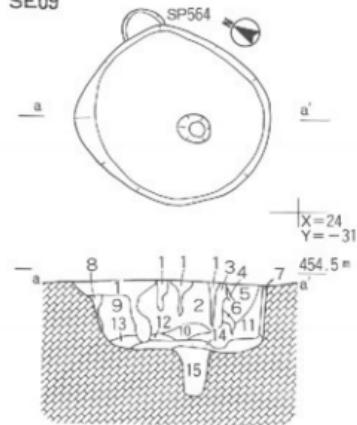
c-c'

1 Hue 7.5YR2/1 黑色土  
2 Hue 10YR2/1 黑色砂質土  
3 Hue 7.5YR1.7/1 黑色砂質土  
4 Hue 7.5YR1.7/1 黑色砂質土  
5 Hue 10YR2/1 黑色砂質土  
6 Hue 2.5Y2/1 黑色砂質土  
7 Hue 10YR3/2 黑褐色砂質土

1 井戸・土坑実測図(1) (縮尺1/40)

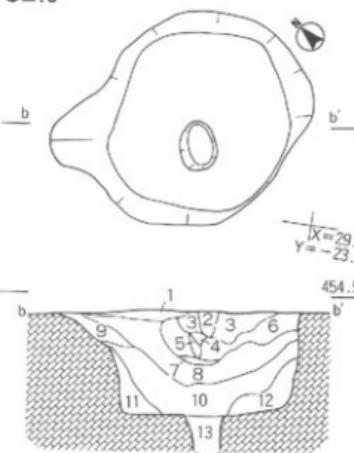


SE09



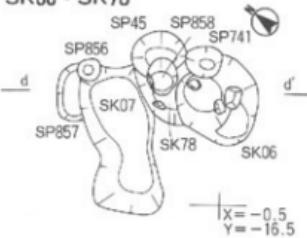
- 1 Hue SYR3/1 黒褐色砂粘質土
- 2 Hue SYR2/1 黒褐色粘質土
- 3 Hue 7.5YR3/1 黑褐色粘質土
- 4 Hue 7.SYR2/1 黑褐色粘質土
- 5 Hue 10YR2/2 黑褐色粘質土
- 6 Hue 7.SYR2/2 黑褐色粘質土
- 7 Hue 10YR3/2 黑褐色粘質土
- 8 Hue 10YR3/2 黑褐色粘質土
- 9 Hue SYR2/2 黑褐色粘質土
- 10 Hue 7.SYR2/2 黑褐色粘質土
- 11 Hue 10YR2/3 黑褐色粘質土
- 12 Hue 7.5YR2/3 黑褐色粘質土
- 13 Hue 2.5YR3/1 塗赤色粘質土
- 14 Hue 2.5Y3/2 黑褐色砂質土
- 15 Hue 2.5Y3/3 喀オリーブ褐色砂質土

SE10

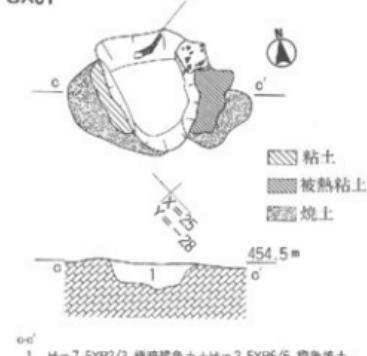


- 1 Hue 10YR2/3 黑褐色砂質土
- 2 Hue 10YR2/3 黑褐色砂粘質土
- 3 Hue 7.5YR2.5/3 喀液色土
- 4 Hue 7.SYR2.5/3 喀液色粘質土
- 5 Hue 7.SYR2/3 稜暗褐色土
- 6 Hue SYR2/2 黑褐色砂粘質土
- 7 Hue 7.SYR2/1 黑褐色粘質土
- 8 Hue 10YR2/2 黑褐色砂質土
- 9 Hue 10YR2/2 黑褐色砂粘質土
- 10 Hue 10YR2/2 黑褐色粘質土
- 11 Hue 7.5YR2/2 黑褐色砂質土
- 12 Hue 2.5YR2/6 オリーブ褐色砂質土
- + Hue 7.SYR2/2 黑褐色砂質土
- 13 Hue 10YR5/8 黃褐色粘質土

SK06・SK78



SX01



- 1 Hue 7.SYR2/3 喀液褐色土+Hue 2.5YR6/6 橙色燒土

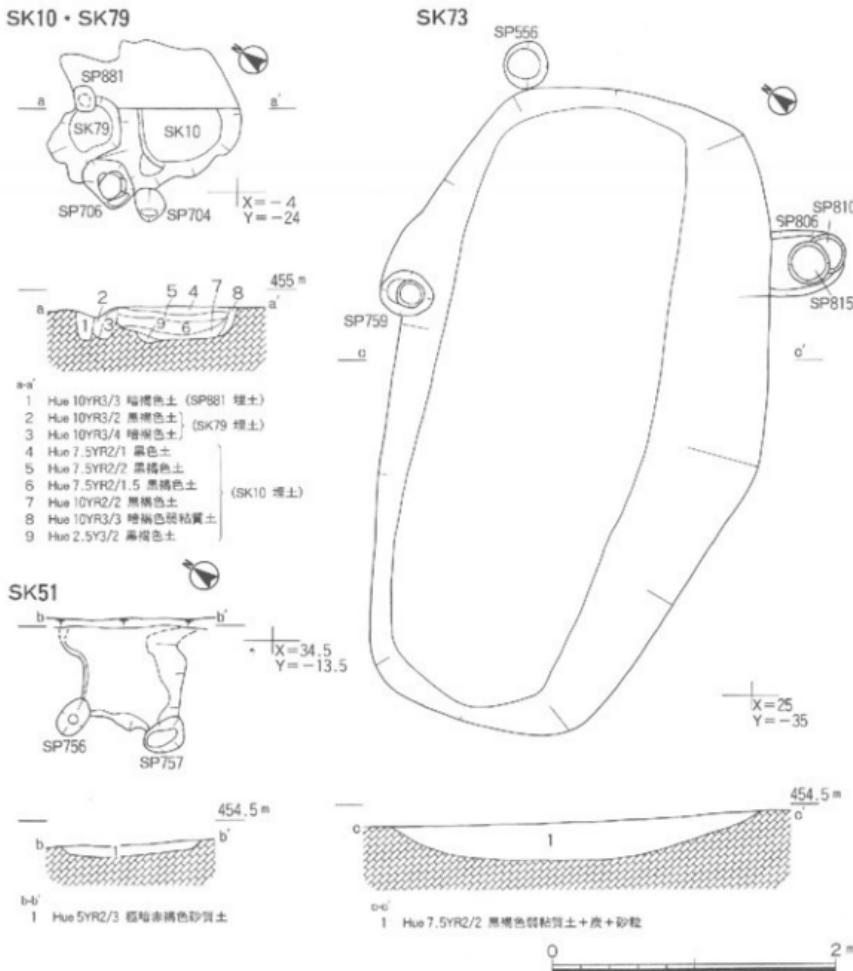
1 井戸・土坑実測図(3) (縮尺1/40)



- 1 Hue 10YR2/2 黑褐色砂粘質土 (SK07 墓土)
- 2 Hue 10YR2/2 黑褐色土
- 3 Hue 10YR3/3 喀液褐色土 (SP856 墓土)
- 4 Hue 10YR3/2 黑褐色土
- 5 Hue 10YR3/3 喀液褐色土 (SK05 墓土)
- 6 Hue 10YR3/2 黑褐色土 (SK78 墓土)

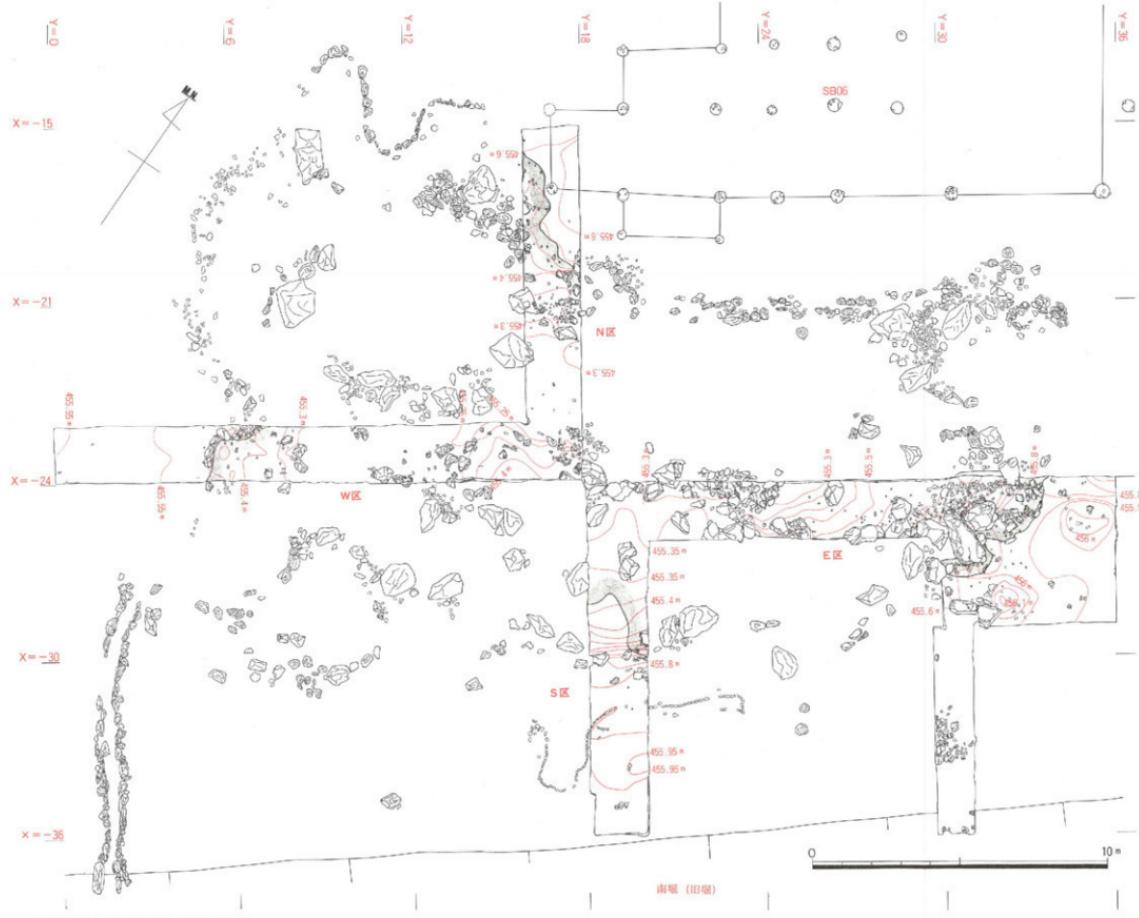
0 2 m

図版五二 江馬氏下館跡一九九五年度調査門前地区遺構実測図(一一)



1 井戸・土坑実測図(4) (縮尺1/40)

図版五三 江馬氏下館跡一九九五年度調査園池地区遺構実測図(二)

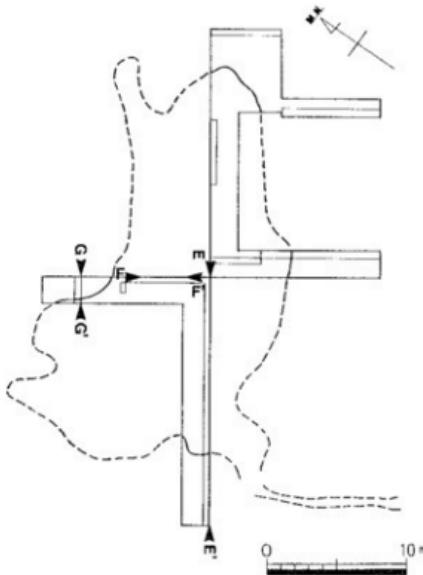


E-E'

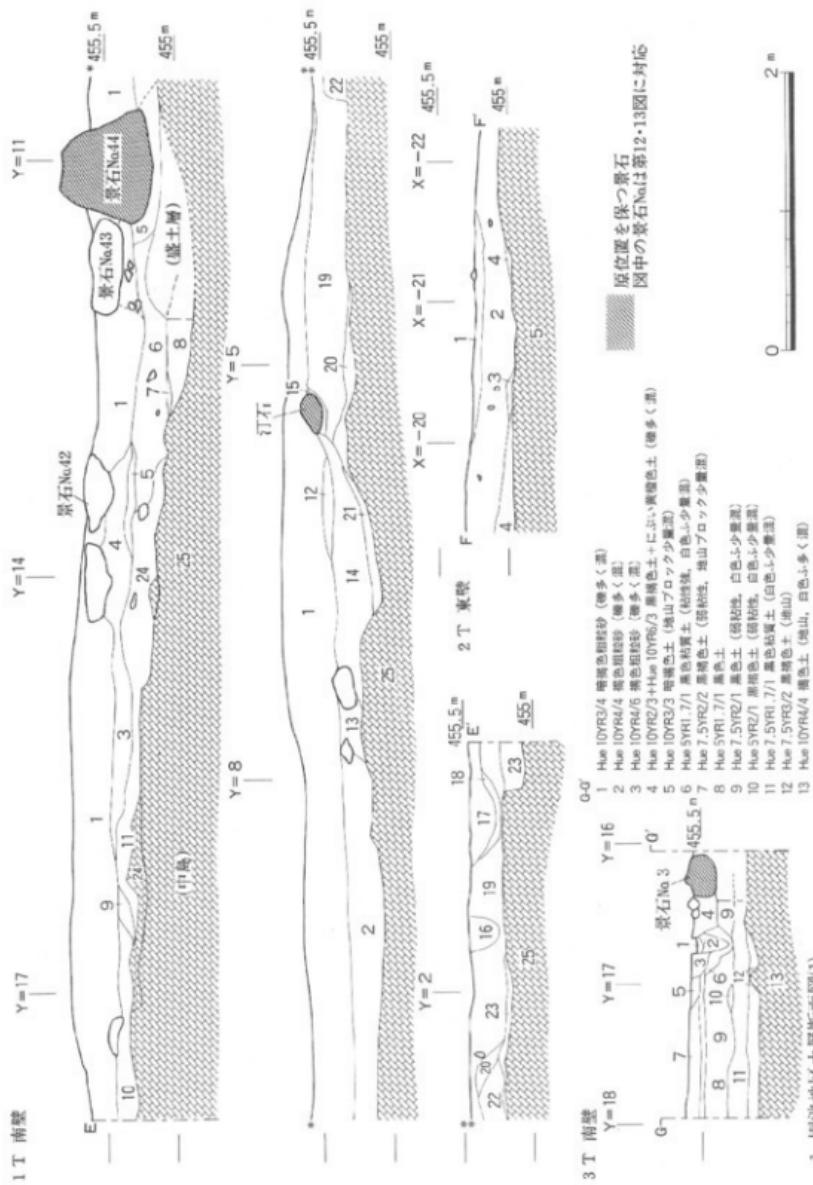
- 1 Hue 10YR7/1 反白色粗粒砂（礫多く混）
- 2 Hue 7.5YR2/2 黒褐色土（礫、地山ブロック少量混）
- 3 Hue 2.5Y2/1 黒色土（シルト質、白色ふ、地山ブロック少量混）
- 4 Hue 7.5YR3/2 黒褐色土（弱粘性）
- 5 Hue 10YR3/3 増粘土（礫多く混）
- 6 Hue 10YR2/2 黑褐色土（礫、地山ブロック少量混）
- 7 Hue 2.5Y2.5/1 黑色中粒砂（白色ふ、礫多く混）
- 8 Hue 10YR1.7/1 黑色松質土（弱粘性、白色ふ、地山ブロック少量混）
- 9 Hue 10YR1.7/1 黑色土（シルト質、白色ふ、地山ブロック少量混）
- 10 Hue 7.5YR1.7/1 黑色粘質土（弱粘性、白色ふ、地山ブロック少量混）
- 11 Hue 10YR2/1 黑色土（シルト質、白色ふ、地山ブロック少量混）
- 12 Hue 5YR3/2 増粘褐色土（礫、小石多く混）
- 13 Hue 10YR2/2 黑褐色土（地山ブロック多く混）
- 14 Hue 10YR3/3 增粘褐色土（地山ブロック少量混）
- 15 Hue 7.5YR2/2 黑色土（シルト質、白色ふ少量混）
- 16 Hue 2.5Y4/3 オリーブ褐色土（白色ふ多く混、礫少量混）
- 17 Hue 10YR2/3 黑褐色土（白色ふ多く混、礫少量混）
- 18 Hue 10YR5/2 底葉褐色粗粒砂（礫多く混）
- 19 Hue 5YR2/2 黑色土（白色ふ少量混）
- 20 Hue 2.5Y3/2 黑褐色土1（白色ふ少量混、地山土多く混）
- 21 Hue 2.5Y3/2 黑褐色土2（白色ふ少量混、地山土多く混）
- 22 Hue 2.5Y3/2 増オリーブ褐色土（白色ふ少量混、地山土多く混）
- 23 Hue 10YR2/2.5 增褐色土（白色ふ少量混）
- 24 Hue 7.5YR3/2 黑褐色土（地山、白色ふ多く混）
- 25 Hue 10YR2/3 黑褐色土（地山、白色ふ多く混）

F-F'

- 1 Hue 5YR3.5/1 粘赤色土（壤化、鉄分含む[20%]）
- 2 Hue 7.5YR2/2 黑褐色土（礫、地山ブロック少量混）
- 3 Hue 7.5YR3/2 黑褐色腐粘質土（礫少量混）
- 4 Hue 5YR2/2 黑褐色腐粘質土
- 5 Hue 10YR6/4 にふい黄褐色土（地山、白色ふ少量混）



図版五四 江馬氏下館跡一九九五年度調査園池地区遺構実測図(二)



H'

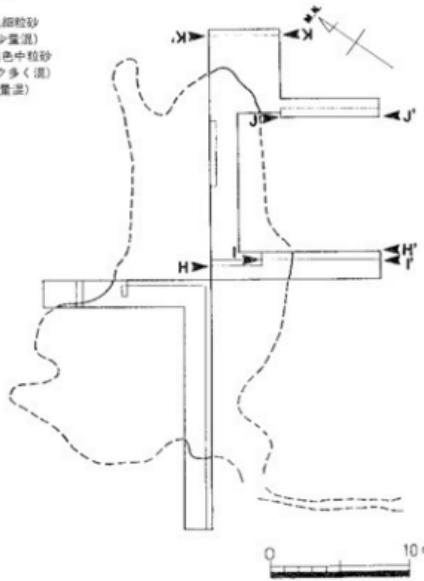
- 1 Hue 7.5YR2/1 黒色土
- 2 Hue 7.5YR2/1 黒色土
- 3 Hue 10YR3/2 黒褐色土 (黒多く混)
- 4 Hue 10YR3/3 増褐色土 (黒多く混)
- 5 Hue 7.5YR3/2 黒褐色土
- 6 Hue 10YR2/2.5 増褐色土 (白色ふ少し混)
- 7 Hue 10YR4/2 灰黄褐色土 (粒砂)
- 8 Hue 10YR2/3 黑褐色土 (白色ふ、穂、地山ブロック混)
- 9 Hue 10YR2/2+Hue 10YR3/3 黑褐色土+増褐色中粒砂
- 10 Hue 7.5YR2/2 黒褐色土 (穂、地山ブロック少量混)
- 11 Hue 7.5YR2/2 増褐色土 (弱粘性、白色ふ少量混)
- 12 Hue 10YR2/1 黑色土 (弱粘性)
- 13 Hue 5YR1.7/1 黑色土 (弱粘性)
- 14 Hue 10YR2/1 黑色土 (弱粘性、白色ふ少量混)
- 15 Hue 10YR3/4 增褐色土 (地山、白色ふ多く混)

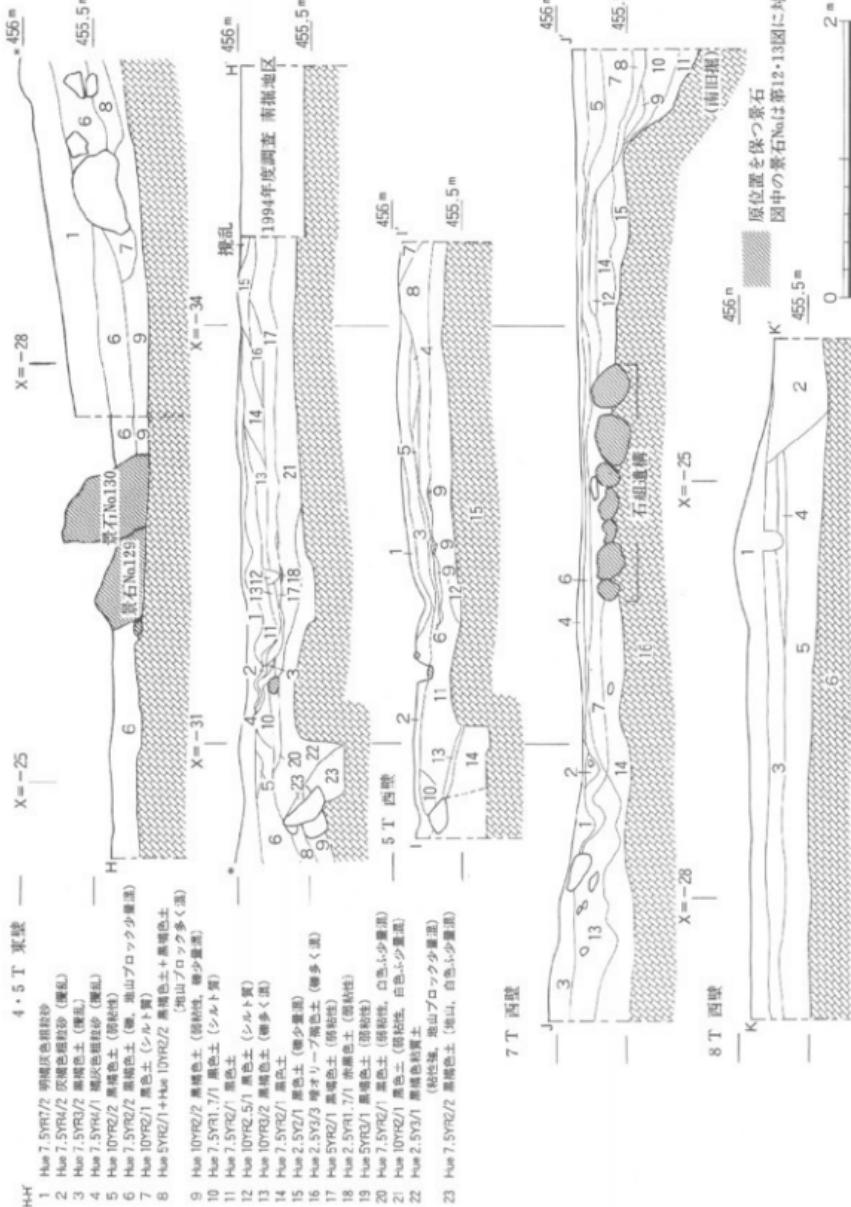
J-J'

- 1 Hue 10YR6/1 福灰色粗粒砂
- 2 Hue 10YR4/1 福灰色粒砂
- 3 Hue 10YR5/2 灰黄褐色粗粒砂
- 4 Hue 7.5YR4/2 增褐色土 (穂、地山ブロック少量混)
- 5 Hue 10YR3/4 増褐色砂質土 (穂少量混)
- 6 Hue 7.5YR3/2 黑褐色土 (穂少量混)
- 7 Hue 2.5YR3.5/3 オリーブ褐色砂質土 (穂、地山ブロック多く混)
- 8 Hue 10YR3.5/3 增褐色土 (地山ブロック少量混)
- 9 Hue 2.5YR3/2 黑褐色砂質土
- 10 Hue 10YR3/2 黑褐色砂質土 (穂多く混)
- 11 Hue 10YR2/3 黑褐色砂質土 (穂多く混)
- 12 Hue 5YR2/2 黑褐色土
- 13 Hue 10YR2/1 黑色土 (白色ふ、穂、地山ブロック少量混)
- 14 Hue 10YR2/2 增褐色土 (白色ふ少量混)
- 15 Hue 10YR3/4 増褐色土 (白色ふ少量混)
- 16 Hue 10YR4/3 にふい黄褐色土 (地山、白色ふ多く混)

K-K'

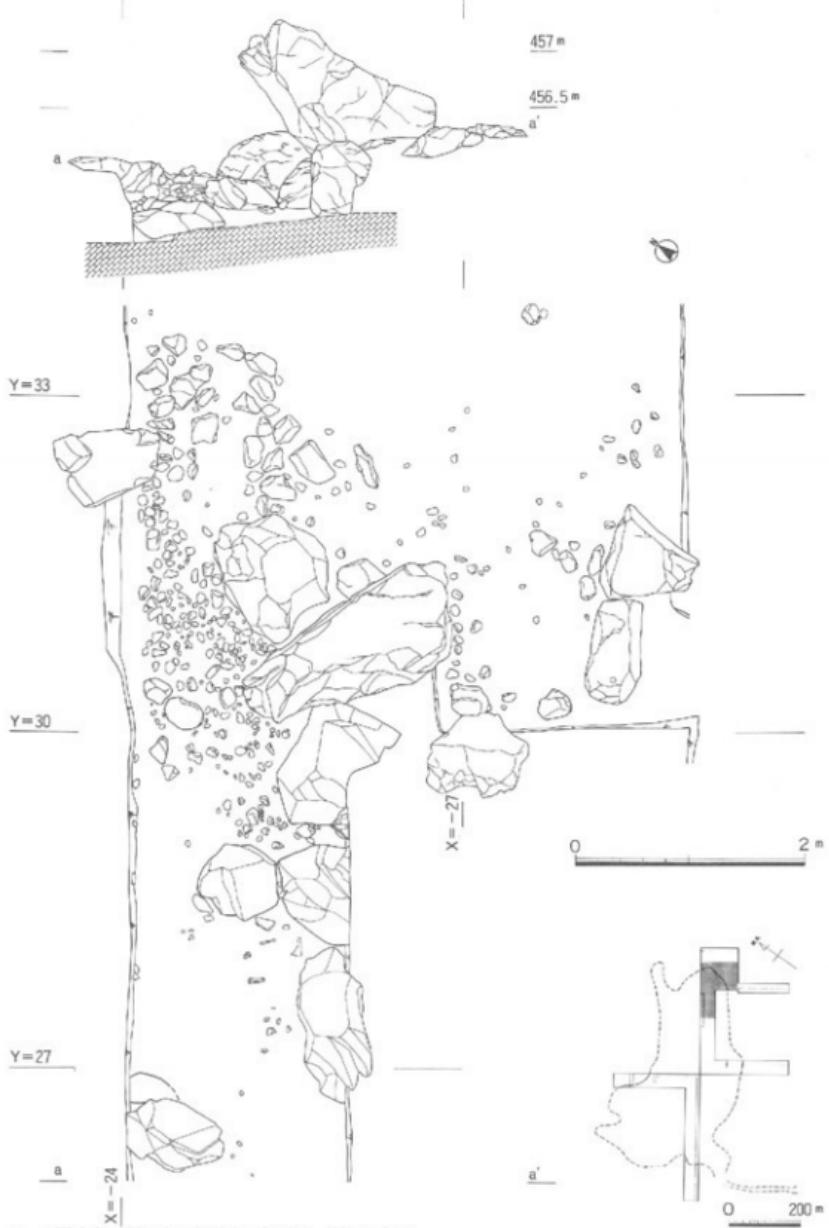
- 1 Hue 5YR2/1+Hue 5YR3/2 黑褐色細粒砂+増褐色細粒砂  
(穂、地山ブロック少量混)
- 2 Hue 7.5YR2/2+Hue 7.5YR3/3 増褐色細粒砂+增褐色中粒砂  
(白色ふ、穂、地山ブロック少量混)
- 3 Hue 7.5YR3/2 増褐色土 (白色ふ、地山ブロック少量混)
- 4 Hue 7.5YR3/3 增褐色土 (穂少量混)
- 5 Hue 5YR1.7/1 黑色土 (白色ふ少量混)
- 6 Hue 7.5YR2/2 黑褐色土 (地山、白色ふ少量混)





11 園泡地区土層断面図(2) (縮尺1/40)

圖版五六  
江馬氏下館跡一九九五年度調査園池地区遺構実測図(四)



1 E区東部(淹口) 平面図・立面図(縮尺1/50)

圖版五七 江馬氏下館跡一九九五年度調査出土遺物実測図(二)

門前地区

SP142 (SB05)



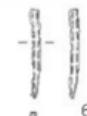
SX01



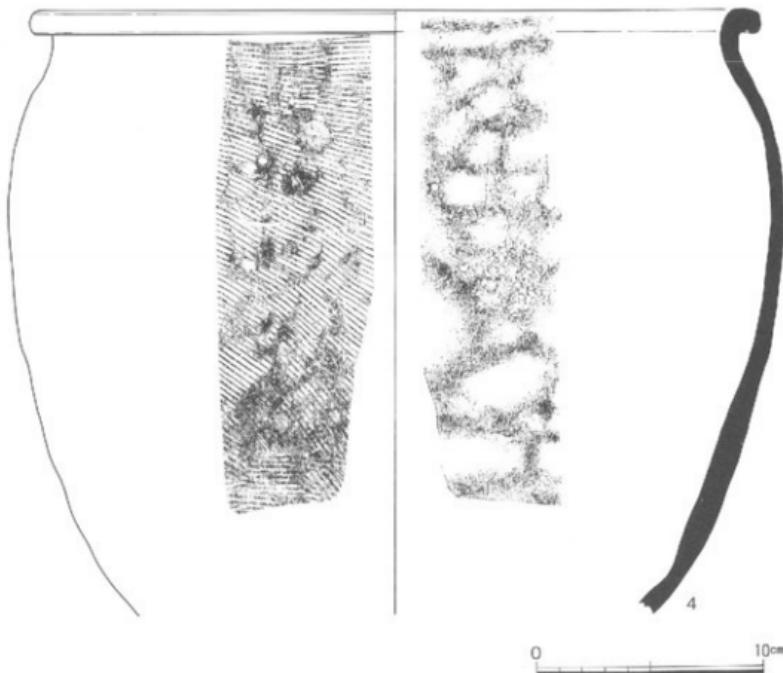
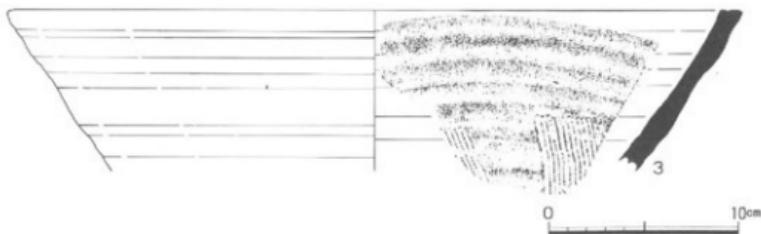
2



5

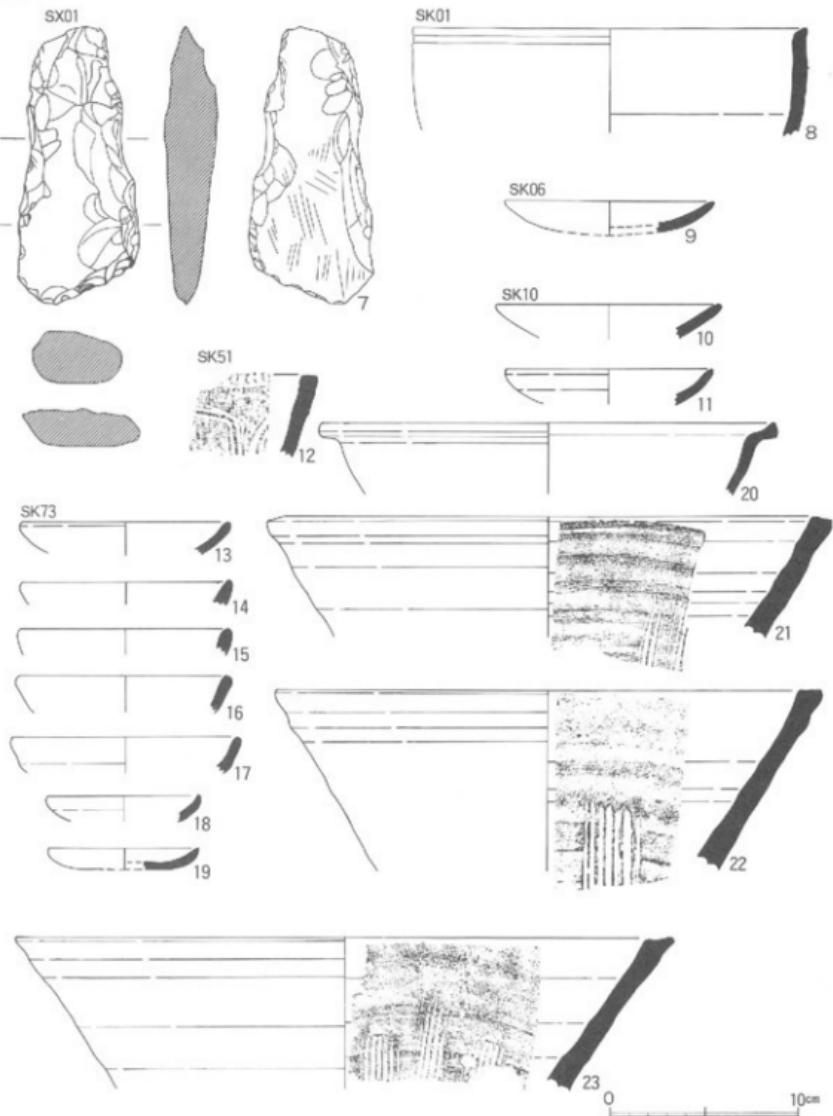


6



(縮尺1/3, ただし1は縮尺2/3, 4は1/5)

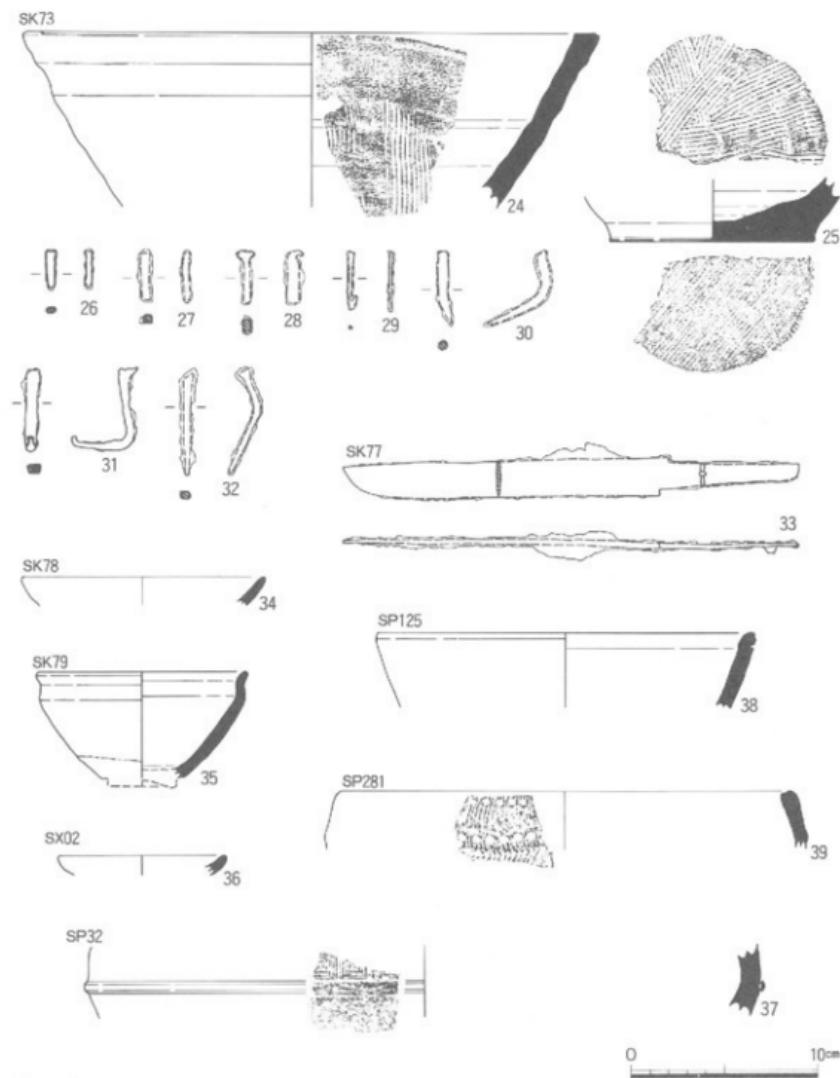
門前地区



(縮尺1/3)

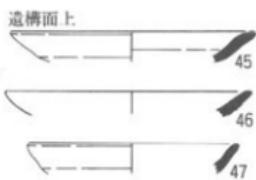
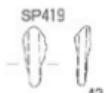
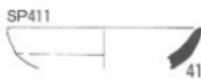
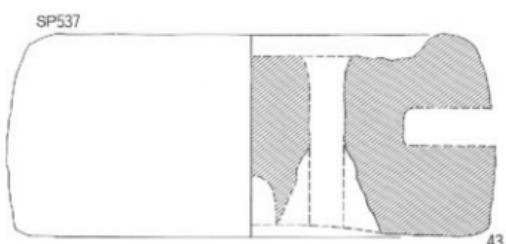
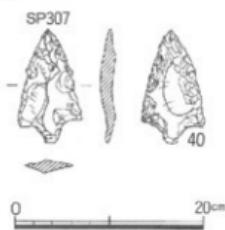
0 10cm

門前地区

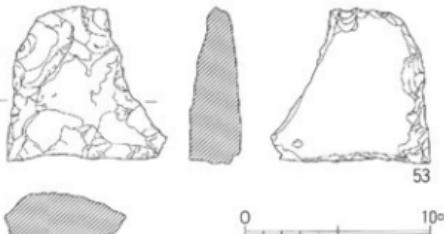
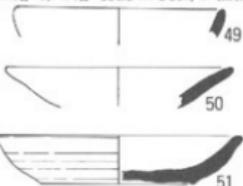


(縮尺1/3)

門前地区

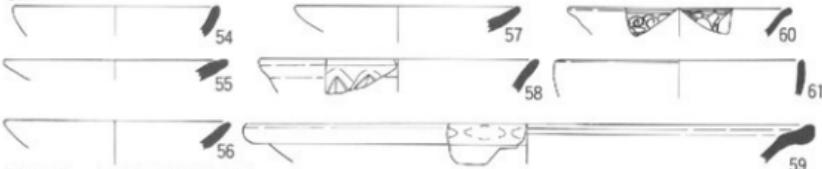


旧耕作土層 第3層 Hue 10YR2/2 黒褐色弱粘質土



圓池地区

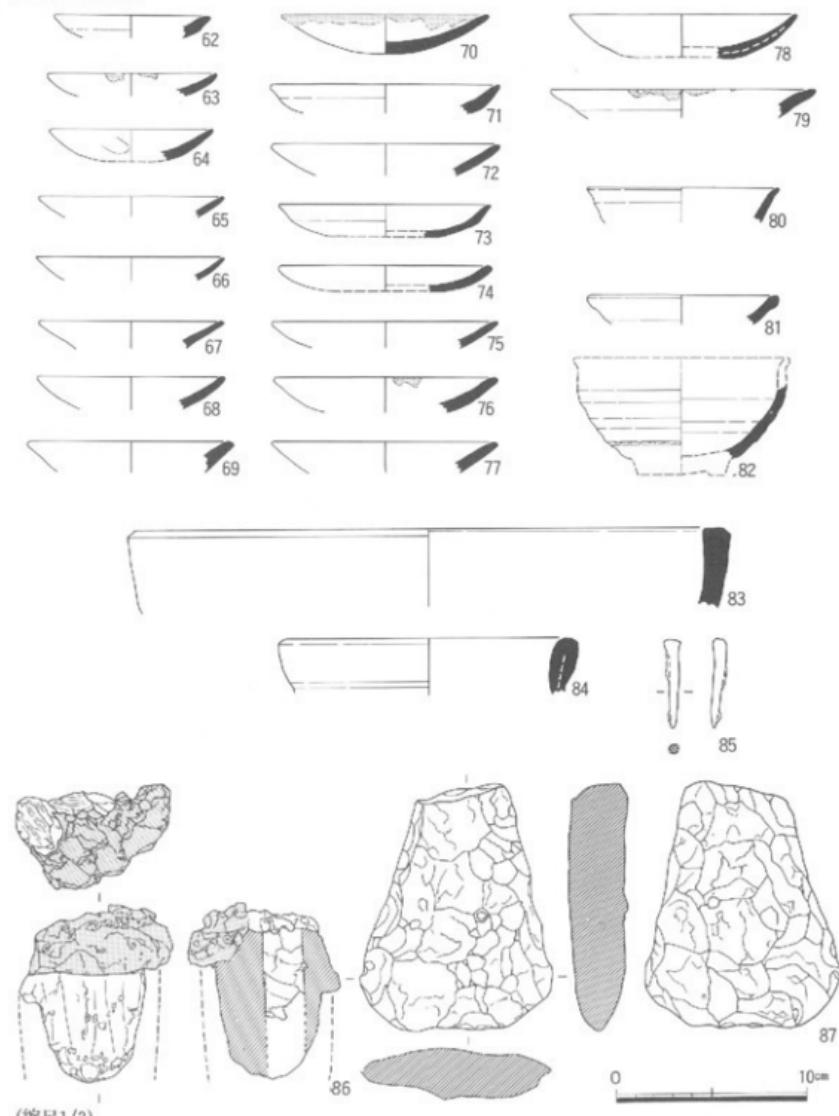
表土



(縮尺1/3, ただし40は縮尺2/3)

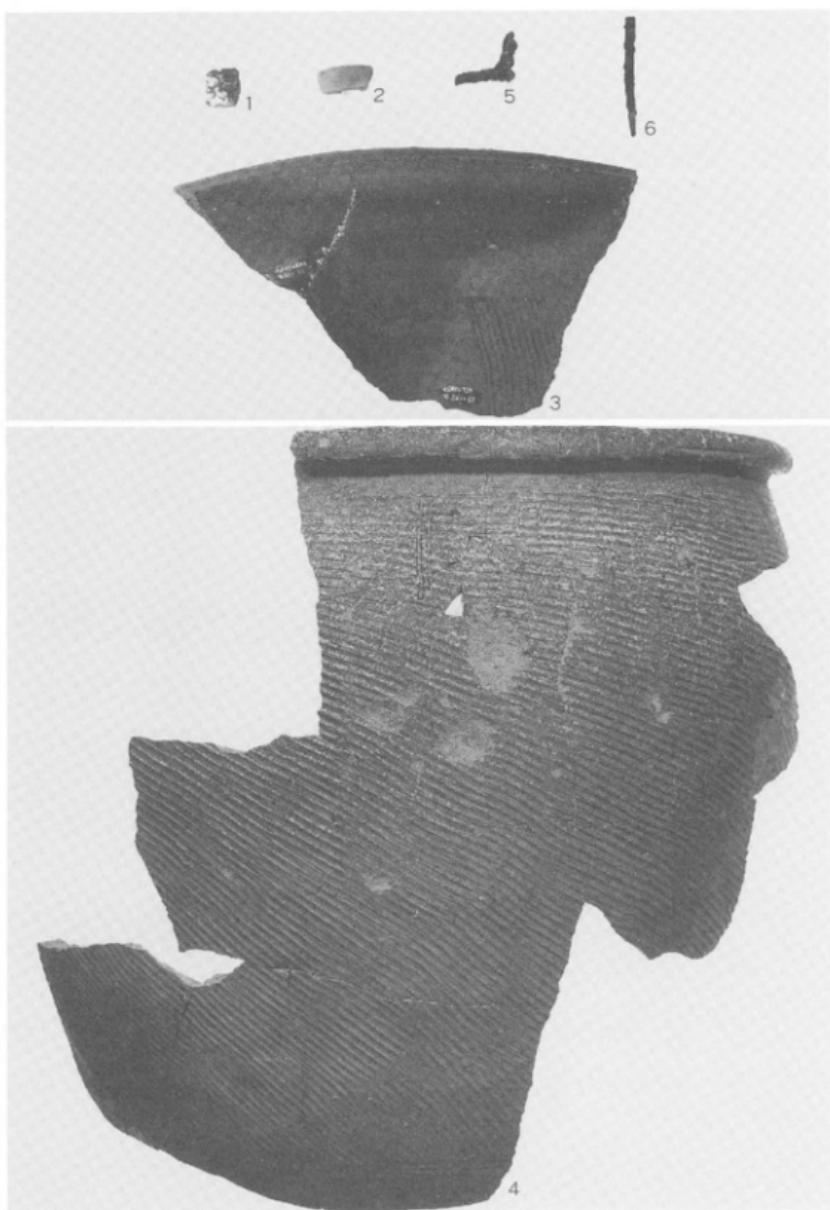
図版六一 江馬氏下館跡一九九五年度調査出土遺物実測図(五)

園池地区  
サフトレンチ出土



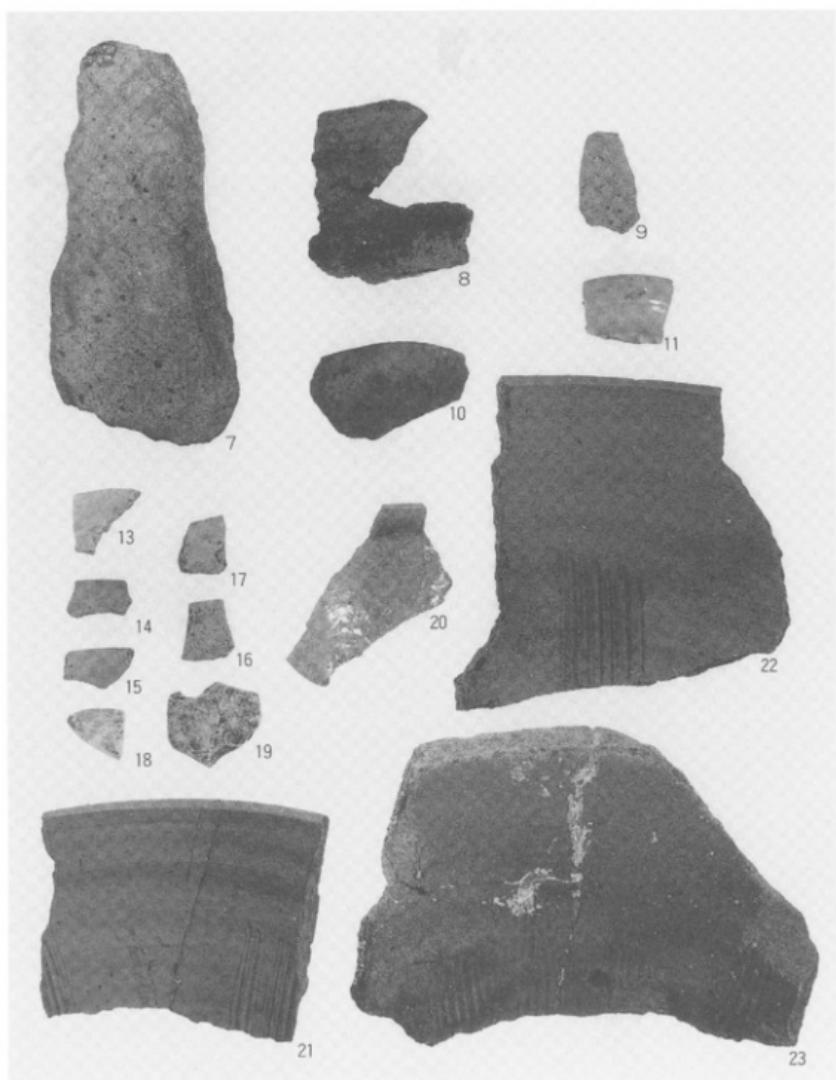
(縮尺1/3)

圖版六二 江馬氏下館跡一九九五年度調查出土遺物寫真(二)



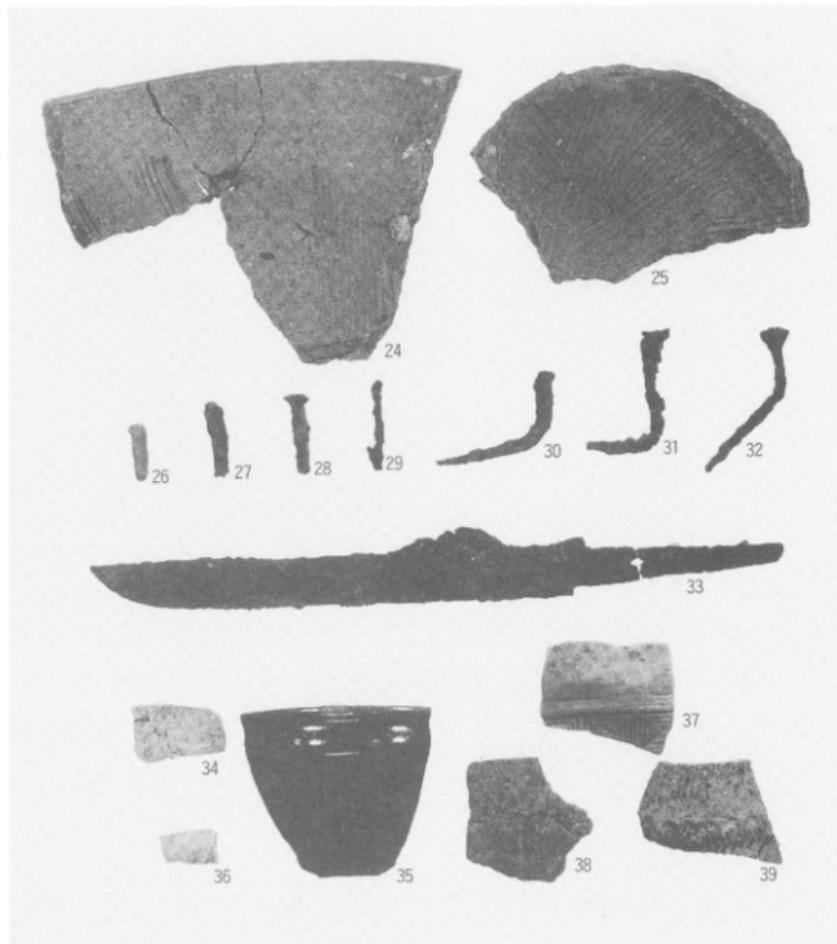
門前地區：SB05（1金銅板），SX01（2土師器，3·4珠洲，5·6鐵釘）

圖版六三 江馬氏下館跡一九九五年度調査出土遺物写真(二)



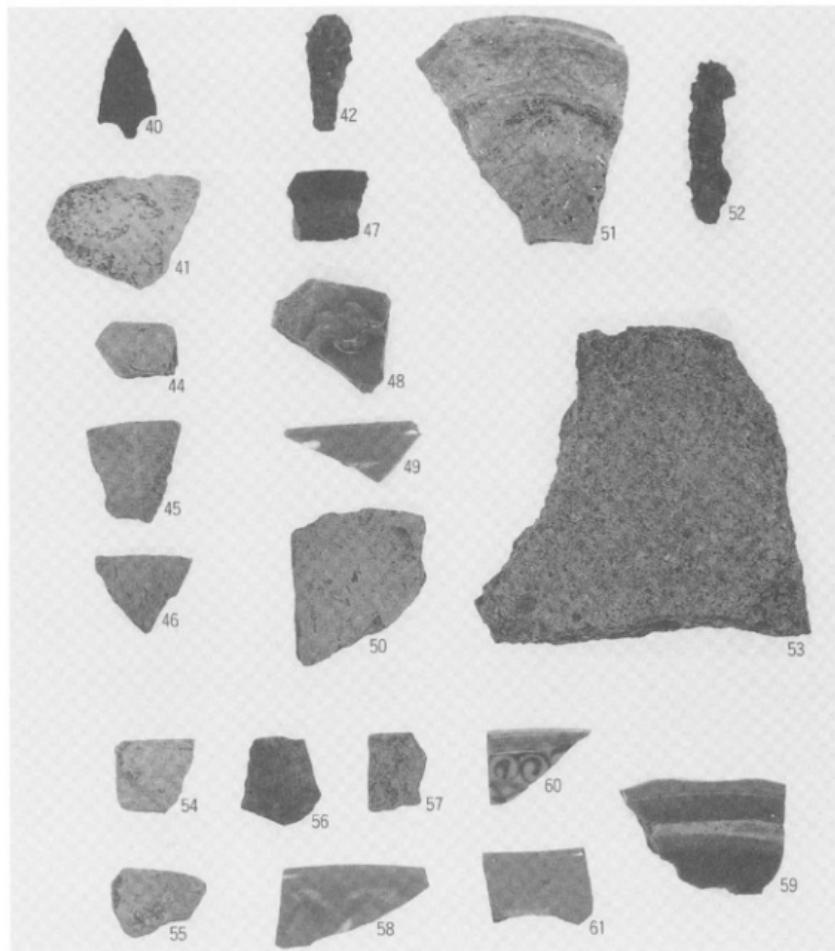
門前地区 : SX01 (7 打製石斧), SK01 (8 糙文土器), SK06 (9 土師器)  
SK10 (10 土師器, 11瀬戸美濃), SK51 (12 糙文土器)  
SK73 (13~19 土師器, 20瀬戸美濃, 21~23珠洲)

圖版六四 江馬氏下館跡一九九五年度調查出土遺物寫真(三)



門前地区：SK73（24・25珠洲，26～32鐵釘），SK77（33鐵刀子），SK78（34土師器）  
SK79（35漬戸美濃），SX02（36土師器），SP32（37J器）  
SP125（38繩文土器），SP281（39繩文土器）

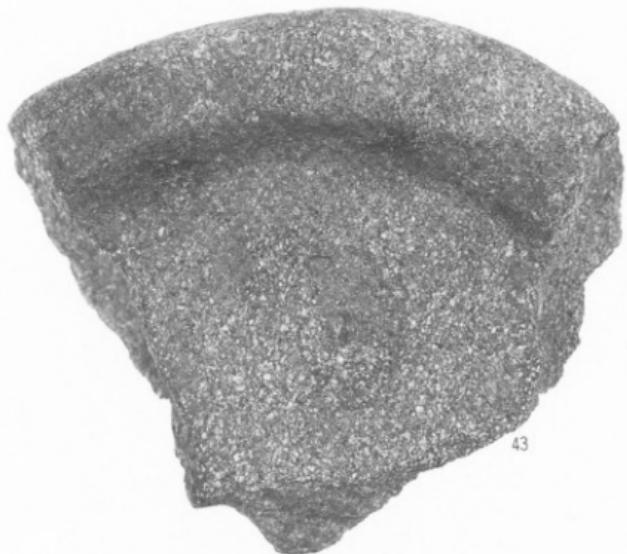
圖版六五 江馬氏下館跡一九九五年度調查出土遺物寫真(四)



門前地区：SP307（40石鏃），SP411（41土師器），SP419（42鐵釘），SP782（44土師器）  
造構面上（45・46土師器，47瀬戸美濃，48青磁）

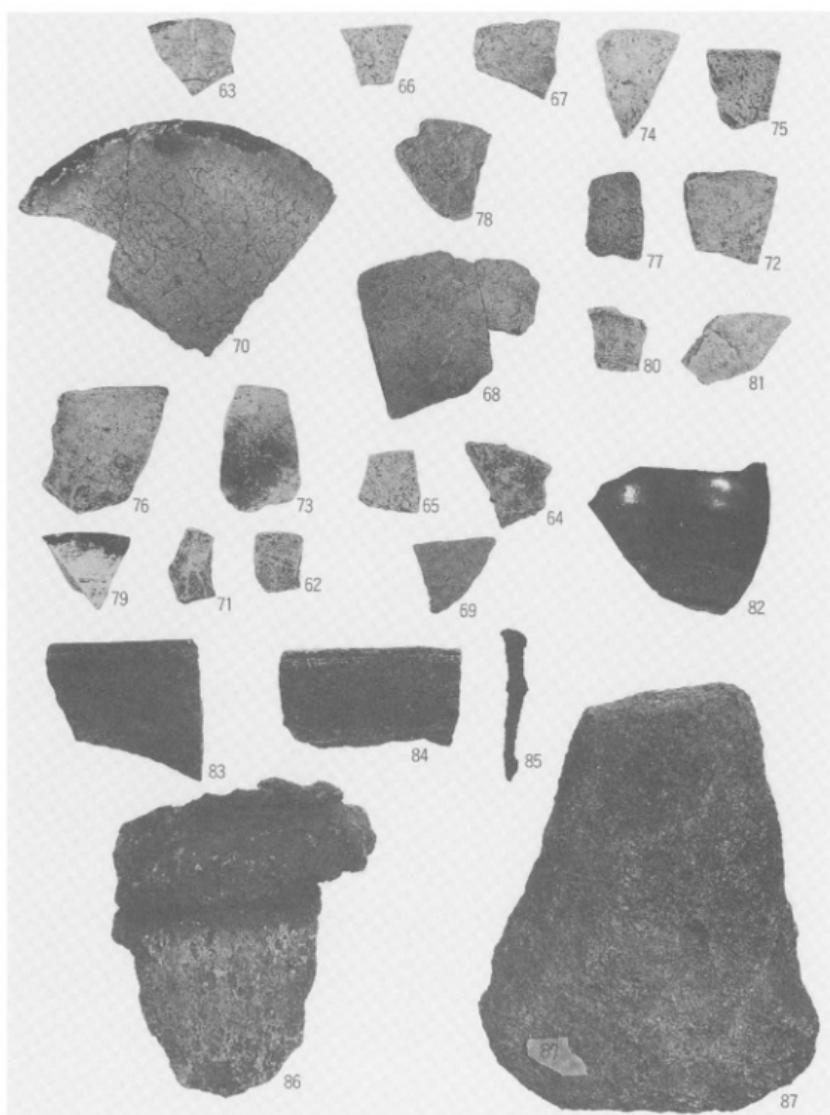
旧耕作上層（49青磁，50土師器，51瀬戸美濃，52鐵釘，53打製石斧）  
園池地区：表土（54～57土師器，58・59青磁，60青花，61近世陶器）

圖版六六 江馬氏下館跡一九九五年度調查出土遺物寫真(五)



門前地区：SP537 (43石臼)

圖版六七 江馬氏下館跡一九九五年度調查出土遺物寫真(六)



閑池地区：サブトレンチ出土 (62～80土師器, 81・82瀬戸美濃, 83瓦器, 84壺器系陶器, 85鉄釘, 86フイゴ羽口, 87打製石斧)

1996年3月25日 印刷

1996年3月31日 発行

## 江馬氏城館跡Ⅱ

—下館跡門前地区と庭園の調査—

編集・発行

神岡町教育委員会

〒506-11 福井県吉越郡神岡町大字東町378 ☎0778(2)1271

富山大学人文学部考古学研究室

〒930 富山県富山市五橋3190 ☎0761(4)1271

印 刷

ヨシダ印刷株式会社

〒939 富山県富山市根坂町611 ☎0764(9)3321

# 江馬氏城館跡 II

—下館跡門前地区と庭園の調査—

付図 1. 江馬氏下館跡遺構平面図

付図一 江馬氏下館跡遺構平面図



